
エンカンタリア

水島佳頼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンカンタリア

【Nコード】

N5213E

【作者名】

水島佳頼

【あらすじ】

ことし十八になる何でも屋のヴィヴィアンは、街の中ではそこそこ強い魔道士。適当に依頼をこなしながらその日暮らしをしていたヴィヴィアンの元に、ある日風変わりな客がやってきて……？　そうこうしているうちに、世界には次第に暗雲が渦巻きはじめる。果たしてヴィヴィアンは、侵食を止められるのか？　新米師弟が織り成す異世界ファンタジー。

第一話

或る昼の悪夢

今日も街の大時計の音で目を覚ました。時計塔のある中心部からは少し外れているのだが、この店にも時計の音はしっかり聞こえてくる。耳を塞ぎ、あくびしながら少し身を丸める。

街の中央にある市長の屋敷なんかは、きっともつと煩いに違いはない。絶対に中央には住めないとヴィヴィアンは思う。

小さい頃から何度も練習しているが、防音の魔法だけではどうにも上手く習得できない。使えないこともないが、それは一時的なものだ。長い間かけ続けていると疲れるので、実用性がないのである。

この国の魔術師は大体が基礎呪文集や初歩の魔道書で魔術を勉強するため、本にない知識は持っていない者が多い。ヴィヴィアンは三歳で初めて魔道書に触れ、それから十八になる今日まで魔法の魅力にとりつかれていた。実際、力も強くなった。

誰でも使えるわけではないこの力は、伸ばそうとしなければすぐに枯れてしまうものなのだと聞いた。面倒くさがりなヴィヴィアンも、魔法だけは真面目に取り組んで色々な呪文を習得していった。今では多分、この街の中なら最強だといえるくらいの力は持っていると思う。人口の半分は魔道士だが、メルチスの街はそんなに大きくないのだ。

そんな、この街の魔道士の頭領みたいなポジションにいるヴィヴィアンでも、防音魔法には苦戦している。防音魔法が載っている文献が少なすぎるので、どうしても短時間しか持たないような魔法しか勉強できないのだ。だからこのところ、ヴィヴィアンは毎日あの時計の音で起きている気がする。

大きく二度目のあくびをして、埃まみれのソファの上で四肢をぐっと伸ばした。今日も一日が始まる。いや、始まってから大分たっている。今鳴っていたのは、昼の十二時を告げる鐘だ。

ソファの近くに積みあげた魔道書の上に放置していた眼鏡を掴み、

それをかけながらヴィヴィアンはゆっくりと起き上がった。最近、ベッドで寝ないせいで毎朝色んなところが痛い。ソファはそんなに大きくないため、ひよろ長いヴィヴィアンはよくここから転げ落ちたりもする。ベッドで寝ないのは、寝室まで行くのが面倒だからだ。寝違えた首は一昨日から痛みを発し続けているし、今日は右腕が痺れて動かなくなっているという豪華なおまけつき。無論、そんなおまけがあったところで嬉しさは微塵も感じない。

あらためて見ると、呪文集や紙、インクの瓶が転がったこの空間は、まるで強盗に入られたかのように見える。しかしこれは、すべりもののぐさのヴィヴィアンがやったのであり、普段はもう少し片付いている。ここは小さいが一応店なので、ヴィヴィアンは客に与える印象を良くするために時々ちゃんと掃除をするのだ。……半月に一度程度だけれど。

「ふああ…… 依頼あるかな」

寝起きでふらふらする頭を抱えながら洗面所に行き、とりあえず髪を整える。肩に少しかかる程度の赤毛は色が濃いため、陽の光の下で見てようやく暗い赤に見える。こんな風に薄暗い屋内だと、黒髪に見えるため、時々髪の色を頼りにしてやってきた客に「ヴィヴィアン||リリエンスールはいますか」と訊ねられる。眼鏡の奥の瞳は濃緑で、これも髪と同様に薄暗い屋内では色がわからないらしい。下に行くほどボリウムが抑えられ、首筋に沿うように伸びる赤毛。最近の美容師はカットの技術が向上しているから、こんなすっきりしたヘアスタイルだって頼めば簡単にやってくれる。鏡を見ながらヴィヴィアンは少し苦笑した。ちょっと寝癖がついていたのだ。寝癖がついた髪を引っ張り、水をつけて整える。完全には直っていないけれど、まあいいか。

ちなみに美容師に頼めば寝癖がつかない魔法をかけてもらえるが、割高だし同じ魔道士として人に頼るのはどうかと思うのでかけてもなかったことはない。

仕事の前に部屋を片付けるかどうか真剣に迷ってから、ヴィヴィ

アンは散らかった部屋は放置することにして店の入り口に向かった。ヴィヴィアンの仕事は、言うならば何でも屋だ。世話好きの両親がはじめた仕事だが、その両親が税の安い土地へ引っ越したいと言いつ出したため、二人だけ引っ越させてヴィヴィアンが仕事をついだ。両親は今北の国で農業をやっている。ヴィヴィアンのいる国とは違う王様のもとで、二人は気ままに作物を育てているらしい。

遊びに来いという手紙が時々くるが、その手紙を両親がどうやってここに送りつけてきているのかは解らない。おそらく魔法だろうが、彼らのことだから伝書鳩なんていう突拍子もない手段を使ったりしていたりもしそうだ。それが二人らしくて面白いといえば面白いのだけれど。

暮らしやすく気候も穏やかで、王宮騎士団に店を荒らされたりもしない。こんな場所から離れるのが少し勿体無いと思ったから、面倒だったが店を継いだ。

他の土地へ移れば、王宮騎士団の検問を受けなければならない。昔から奴らはいけ好かないので、ヴィヴィアンとしてはそれを避けたかった。

王の名のもとに、騎士団の連中は異常なまでに厳しく人を見張る。騎士団は全て貴族の出身だから、立場の弱い市民たちを見下し、ないがしろにすることだってある。しかし王宮のある首都には遠いから、この街には王宮騎士団が一人常駐しているだけだ。それがこの街の良いところだった。

足元だけ仕事用の靴で、部屋着のままヴィヴィアンは店から出た。眩しい日差しは真上から照りつけてくる。昼時の活気が遠くに聞こえ、店の正面にある酒場ではこんな昼間から楽しそうな声が聞こえる。

遠くに見える白い尖塔が時計塔で、その周りに聳えるレンガ造りの建物は全て街の役人や富豪たちの邸宅だ。中でも立派なのが灰色の石造りの大きな屋敷で、それがこの街の市長の家だった。

ヴィヴィアンは店の前にしゃがみこみ、木箱の蓋を開けた。留守

だったり寝ていたりする場合は、店の前に置いた木箱に依頼を書いた紙を入れてもらうことになっている。常連は昼を過ぎればヴィヴィアンが起きていることを知っているので、わざとその時間を狙って来たりもするのだが。

「お。今日はついてるな、仕事ちゃんときてる」

木箱の底に、上質な紙を発見した。拾い上げてしげしげと眺めてみる。宛名はヴィヴィアン・リリエンスール、それは良い。しかし、依頼主の名前がない。内容はこうだ。

「息子を一日泊めてやって下さい。十二時半にそちらへ行きます。報酬は金貨十二枚？ 何これ、うち託児所じゃねえんだけど。面倒くさ……」

毒づくが、ここ最近の仕事に恵まれていなかったので食料のストックがもうない。金貨が十二枚あれば、パンとリングとスープがある普通の生活が一年は送れると思う。もともと質素が好きなので、食事はあまり豪華にしないのがヴィヴィアンだ。こんな大金を貰ったら新しい魔道書も買える。好条件だし引き受けるしかないが、どうにも気が進まない。

とりあえず店に入ろうとすると、正面に誰かがぶつかった。

「って」

「すみません…… ヴィヴィアン・リリエンスールさんはどちらに？ 眼鏡をかけた赤毛で、目は翡翠色の人で、凄腕の魔道士の。この辺に住んでるって聞いたんですが」

無礼もいいところだ。ぶつかった謝罪とものを尋ねることわりとを、一つにまとめるなんて。

無礼な男はヴィヴィアンより少し背が低い、黒髪の妙な髪型の男だった。外国人とのハーフなのか、この国にはあまり馴染まない彫りの浅い顔立ちをしている。しかし肌の色はヴィヴィアンと似たような白色人種の色だったし、目の色は鮮やかな青だった。年齢はヴィヴィアンと同じくらいか、少し幼く見える。

男は黒髪を後頭部でまとめ、黒くて細長い棒を二、三本使って止

めていた。ただの黒い棒切れに見えるあの棒で、どうやって髪を纏めていたのだろうか。少しの後れ毛と、額のやや左側で分けられた長い前髪が妙に異国情緒あふれた感じである。

「……あの、この店『コモディン』であってます？」

「ヴィヴィアンって俺のことだけだ。依頼なら中でどうぞ」

自分のことを指しながら言ってみる。初めてこの店に来る客なのだ、彼が自分のことを知らなくても無理はないかもしれない。ましてや外国人なら、余計にそうだろう。そう思いながら、ヴィヴィアンは相手の着ている変わった衣服を眺めた。

この国では見たことがない、変な形をした濃紺の衣服。裾へ近くほど淡い藍色になるようなグラデーションに染められていて、一見するとそれは、身体に袖がついた布を巻いて、それを腰に巻いた帯で留めているだけの簡素な衣類だった。一体どうやって着ているのだろう。もしかしたら中に特別な細工をしてあるのかもしれないが、よくこんな簡素なやりかたで布が落ちずに止まっていると思う。丈は中途半端で、足の付け根から膝までの長さの半分ほどだ。よく見たら裾をたくしあげているようだが、元の長さは解らない。袖はゆったりしているが、穿いている黒いズボンはレギンスのようにタイトだった。

履物も風変わりで、見た感じ草で編んだものに見える。裸足に直接履いているその履物は、親指と人差し指の間にある紐のようなもので引っ掛けて履くものらしい。

色々気になるが、とっとと用件を聞いて帰そう。ヴィヴィアンはそう思った。しかし黒髪の男は首を捻り、怪訝そうに言う。

「え？ 女の子じゃない？ ヴィヴィアンなんて名前だし俺」

あまり触れないようにしているが、ヴィヴィアンが依頼人に最もよく言われるのがこれだ。ヴィヴィアンは自分の名前が大嫌いである。ヴィヴィアンはれっきとした男であり、顔立ちや体格でなら女に間違われたことは一度もないのだ。名前や容姿の特徴だけを頼りにしてきた客によく言われるのだが、誰が女だ。

腹が立ったので小さく呪文を唱え、目の前の空間に左手の人指し指を使って小さな魔法陣を描いた。術に必要な魔力を込めて円や呪文を描けば、それは淡く発光しながら空間にとどまるのだ。意外とこれが出来る魔道士は少ないらしい。

男はきょとんとしていたが、ヴィヴィアンが魔法を発動した瞬間に全身を硬直させ、白い石畳に倒れこむ。

「った！ 何すんだいきなり……」

「黙れクソガキ。俺は好きでこんな名前なんじゃねえんだよ。しかもヴィヴィアンはれっきとした男性名だ。覚えとけ」

声色をいつもより三段階くらい低くしながら、倒れた男を睨みつける。男はひっと息をのみ、もしも身体を動かすことができるのなら土下座でもしそうな勢いで謝ってきた。

「ごっ、ごめんなさいっ。すみません、許してください」

「で、俺に何の用？」

面倒くさいが依頼を聞いておこう。仕事があるならば、やらなければ報酬がもらえない。金欠だから、仕事など選んでいられないのだ。

石畳に倒れた男は、人好きのする無邪気な笑みを浮かべる。怪訝そうに見てやれば、男は倒れたまま言った。

「実は金貨十二枚でヴィヴィアンに引き取ってもらえって言われて来たんだけど」

一瞬、目の前がくらむ。引き取る？　つまり、家に置けということとだろうか。

「……頭打ったせいかな、こいつ」

そうだということを祈りたい。大体、話が違うじゃないか。あの上質な紙に書いてあった依頼内容は、一日泊めてやれということだけだったはずだ。

「違うって、本当だって！　とりあえず魔法をといってくれ！」

「あー、もうとづくに動けるはずだけど」

「あ、本当だ」

石畳から起き上がった男は、服についた埃を払いながらため息をついた。そうして、頼みもしないのにペラペラと喋り始める。

「引き取ってもらえて、まあつまり弟子入りして来いって意味で言われたんだけどね。俺、最初嫌がったんだよ。女の子から何か教えてもらうとか絶対」

睨みつけてやった。

「ごめんなさいすみません許してくださいもう二度と言いません」
そこまで一気に言い、それきり男は黙った。

「弟子なんか俺、取る気ないんだけど」

継るような目でこちらを見ている彼を見ながら、ヴィヴィアンは少し呆れていた。このご時世、魔道士の需要が高まっているのはわかる。何においても、魔法があれば職に困ることもない。（自分は好んで収入の安定しない何でも屋をやっているが）

それに社会的地位だって、国王軍の兵士か王宮騎士団くらいのレベルではあるのだ。魔道士になれる人間は限られているから、世間の待遇はかなりいい。けれど、だからといってこんなまだ成人してもない自分に師匠になれたなんて。馬鹿げた話だと思う。

「そんな。俺、魔道士にならないと祖国に帰れないんだよ！ 魔物倒すのって、魔法使わないと無理なんだろう？ 俺を引き取るようにって、あの手紙を届けてくれたのは村に唯一の魔道士で、でもその人もう歳だから後継者が必要なんだ。でも、魔道士になれそうな奴なんて他にいないし…… 魔物が襲ってきたらどうすんの？ 誰が皆を守るんだよっ」

「たとえそういう理由があったとしても、俺は認めない」

「……冷たい奴」

「勝手に言ってる」

男はまだ引き下がろうとしなかった。けれど、何を言えばヴィヴィアンが納得するのかを考えあぐねている様子だった。そんな彼を

見て必死な奴だという感想を抱いたが、それ以上何をしようとも思わなかった。

面倒くさい。

「じゃあ、俺に素質があるかないかだけ見極めて。素質あるんだったら、他の人をあたって頑張ってみる。ないんだったら諦めてこの金貨十二枚持って旅するから。『依頼』を受けて一日泊めてくれるっていうならこれ全部渡すし、もし弟子にしてくれるなら俺ちゃんと働いて自分の分は自分で稼ぐから。お願い！ 本当、お願いしますって！」

「解った煩い。黙ってそこに立ってろ」

このままぐたぐたと御託を並べられるのも面倒くさい。ヴィヴィアンは面倒なことが大嫌いだ。そもそもヴィヴィアンにとって、人と関わるのが既にそれだけで面倒くさいことなのだ。

人と関われば色々と同情だったり友情だったり時には恋情だったりするような感情が芽生えて、そこからさらに面倒くさい方向に進むことになるのだから。まあ、男相手に恋情は絶対にありえないが。

きょんとしたままこちらを向いている男を見ながら、宙に複雑な魔法陣を描く。大きさは、直径が肘から中指までの長さになるように。そんなに強い魔力を込めずに、せいぜい家を空けるときに毎日使う鍵の魔法くらいの強さで、ヴィヴィアンは魔法を構成していた。ヴィヴィアンが描く魔法陣は、空中で青白い光を放ちながら徐々に完成していく。

ただ単純に、攻撃魔法だ。この男が魔法を使えるタイプの人間であることは、もう空気の中に感じる魔力でわかった。それでも彼が素質の有無を確かめたいと言ってくるので、言葉で説明するのが面倒くさいから直接魔法をかけてやろうと思った。

使うのは、対非魔族用の燃焼の魔法。つまりは、魔法が使えない人にしかきかない魔法なのである。あとは呪文を唱えれば終わり。彼が黒焦げにならないことは、ちゃんと彼の魔力を感じるから解っている。

「跳ね返せ」

「え」

まだ何が起っているのかわかっていない男に、ヴィヴィアンは魔法を発動した。紅蓮の焰が魔法陣から渦巻くように吹きだし、男の身体をつつむ。けれども、彼の体はどこも焦がしていない。

「うわああ！」

闇雲に両手を動かして焰を払おうとする男に、ヴィヴィアンは苦笑した。焰は常に男の身体から一定の距離を保ち、燃やすものがないおかげで徐々に弱まり、もう消えていこうとしているのに。

「はあ。お前、見ててすっげー間抜け」

魔法陣を左手で掻き消すと、弱まっていた焰はもう完全に消滅した。

「……あれ？ 燃えてない。何で」

「そこから教えないといけないのか…… やっぱ無理だ。俺にはそういう教育者のないのは無理。向いてない。めんどくさい」

部屋着の中で最も気に入っているズボンのポケットに手を突っ込んで、ヴィヴィアンは小さくため息をついた。

これから先が思いやられる。とつと彼を追い返して、平和な生活に戻ろう。それが一番賢明だ。

第一話

或る昼の悪夢（後書き）

あらずじでヴィヴィアンが女の子だと思って飛んできた方、本当にすみません。

水島佳頼の新連載『エンタリ（略称）』は、面倒くさい性格の面倒くさがりが主人公です。可愛い女の子ではなく、かなりの長身の眼鏡男子。

序盤からファンタジックな話なので、前作の魔幻よりはファンタジー要素が盛り込まれていると思います。

序盤から最後まで、作品全体を通して楽しんでいただければ幸いです。

第二話

厄介の種、増殖

常々思っているのだが、感情的で活発な人間は苦手だ。ヴィヴィアンにとつて一番かかわりたくない人間というのが、まさしくこの男のような面倒くさい奴にあたる。

「ヴィヴィアンすげー！　これが本当の魔法かあ、俺見たことなかったんだよ魔法とか！　すっげえ」

一人で興奮している彼は、果たしてヴィヴィアンの話をどこまで真面目に聞いたのだろうか。ため息をつく。

「なれなれしく呼ぶな」

「じゃあ師匠」

「弟子取る気なんかないって言ったろ、しつこい」

もう早速面倒くさがさがピークに達している。早く店に入ろう。そう思っていたけれど、タイミングの悪いことに石畳の向こうから厄介な奴らがやってくるのが見えてしまった。

「げっ」

……終わった。

確信した。奴らはヴィヴィアンが店に入っても、中まで絶対追いかけてくる。貴重な魔道書を読み散らかして床に放置している今、奴らを店にあげたくない。大切な本を不要な古本だと思われて捨てられたなんて事が、前にも二度ほどあったのだ。

「ヴィヴィアン！」

走ってくるハイテンションなほうが姉。

「こんにちは、ヴィヴィアン」

小走りで姉を追ってくる、姉に比べたら大分おしとやかな方が妹。ことしで十六、ヴィヴィアンよりふたつ年下だ。ちなみに姉のほうは十八で、ヴィヴィアンと同年である。

二人は近所に住んでいて、同年代だったために学生時代からの長いつきあいがある。彼女らは厄介で面倒くさい奴ら（特に姉）だが、

一応はヴィヴィアンの数少ない友人だ。

長い金髪をなびかせながら走ってきて、姉・ナタリアはヴィヴィアンに勢いよく飛び掛ってくる。

綺麗な言い方をすれば、抱きついてきたという風にとっても間違いはない。だがヴィヴィアンにしてみれば、百七十センチちかい身長で助走つきで抱きついてこられたら技でもかけられているのかと思ってしまう。

割と長身で百八十九センチもあるヴィヴィアンだが、ナタリアはヒールの高い靴で元々高い身長を更に高くしているので身長差は十センチ程度にまで縮まってしまうのだ。

ナタリアはすらっとした細身で、出るところは出て締まるところは締まった、綺麗な体型をしている。この性格さえなければほぼ完璧なのに、ナタリアは『格好良い男の子』に目がない。ヴィヴィアンもその枠に入れられているようで、何だかよく抱きつかれたり腰に腕を回されたりする。その過剰なスキンシップのせいで周囲からカップル扱いされ、面倒くさいことになって怒ったこともしばしばある。

「久しぶりな気がするわ、昨日来たら寝てたんだもん！ 鍵の魔法なかったら圧死させてたわよ上から乗って」

笑いながら言われても、冗談に聞こえない。

「……鍵、強化する」

「何よヴィヴィアン、あたしが来るの不満？」

「不満。めんどくさい。離れる暑苦しい」

「あんたっていつもそればっか！」

「ナタリア、そろそろ離れてあげたほうが」

妹・ローザの優しい忠告でぎゅっと抱きついていて腕を放し、ナタリアは長い髪を翻して背後を振り返る。ヴィヴィアンは彼女の圧迫から解放され、密かに深呼吸した。

背後を向いた彼女の正面はつまりヴィヴィアンの正面でもあり、そこにはあの男がいる。ああ、面倒くさいことになる。

「あら？ この子、お友達？」

「違う。俺に弟子入りたいんだとき。面倒くさくて頭足りない奴。お前んとこの塾で何とかできない？ 知識さえ教えてやれば、素質はあるから」

とたんに、正面にいた厄介な外国人の表情がぱっと明るくなる。

「素質ある？ やった！ 俺はユキノⅡサクライ。よろしくヴィヴィアン、そっちの子は？」

そういえば名前を聞いていなかったことを、名乗られてから思い出した。特に気にもしていなかったが、聞いてみて名前も変な奴だと思った。外国人であることは外見からわかるが、顔立ちやこの語感から考えて、ユキノの出身地はおそらく東のイリナギ王国あたりだと思う。

「あたしはナタリアよ、よろしくユキノ。……あら、ヴィヴィアン。この子あんたと同じだわ」

「何がだよどの辺がだよ」

変な共通点を見つけられては困る。ユキノは絶対に楽しそうな笑いを浮かべつつ、共通点があるから弟子にはもってこいだとか、そんなことを言うだろうから。

「名前よ」

早速変な共通点を見つけられてしまったようで困った。名前？ 語感もイニシャルも全然違うではないか。ナタリアは一体何を言っているのだろう。

彼女はユキノに向き直り、にこりと笑った。ユキノは一瞬驚いたような顔をしたが、すぐに真顔に戻る。

「あんたもよく女の子に間違われるでしょ。ユキノって、一般的に女性名だから」

「え、当たり前。よく解ったな」

ちよっと笑うユキノに、ナタリアはとびきりのスマイルを送っている。間違いない、この瞬間ナタリアの『格好良い男の子』データの中に、ユキノの存在もインプットされた。彼女がはじけるような

笑みを浮かべた後は、必ず「ヴィヴィアン今の男の子は誰！ 住所調べて！」と、遂行不可能な（というより遂行したくない）依頼をされる。

「それにしても…… 変わった髪形ね。どこからきたの？」

「イリナギ。髪型なんて、あっちではこれが普通だよ。もとは女がやる髪型だったらしいけど、手軽にできるからって長髪の男はみんなやるようになった。勿論、女と男でアレンジの仕方はかなり違うんだけど」

「このアクセサリーは？ 黒い棒みたいなの」

「かんざしって言うんだ。髪まとめるのに使う。一本でも留められないことはないけど、俺よく動くからズレないように三本使ってる。女はこれに花とかガラス球とかいっぴいつけて、とにかく派手にしようとするんだよね」

「へえー、ユキノの国にはおしゃれさんが多いのね」

「短髪でもアレンジの仕方は独特だからな。まあ、異人からしてみれば俺たちの髪型は奇妙に映るんだろうけど」

二人の話が髪型の談議にうつったところで、ローザがそつとヴィアニンの服の袖を引いた。彼女は姉と反対に内向的な性格で、髪の長さも肩に届かないほど短い。比べるのも可哀想だが、ナタリアに比べれば身長も胸もない。

「何だ、ローザ」

「依頼、受けてほしいの」

それでも彼女の素朴な可愛さはヴィヴィアンも認めている美点だ。この姉妹はでこぼこだからこそ、一緒にいて楽しいと思えるのかもしれない。それぞれ違った方向に面倒くさい性格であることは間違いないのだが。

「どんな依頼？」

訊ねると、ユキノと話していたナタリアがぐっとこちらを振り返って会話に首をつっこんできた。

「魔物退治よヴィヴィアン！ 血が騒ぐと思わない？」

「思わない。めんどくさい。でも金は要るから依頼は受ける」

「つまらないわね。もつと『可愛いナタリアのために俺頑張るよ』とか言ってくれないわけ？ 怖くて夜も眠れないのよ？」

「いわねえよアホ。どんな状況だよそれ。つつーか、お前なら蹴り一発で魔物くらい倒せるんじゃないかねえの？ 魔物隣にいても熟睡してそうだし」

「ひっどい！ だからモテないのよ。……場所はうちの裏庭から森へ続く道。十時にきてちょうだい」

ああ面倒くさい。そういおうと思ったが踏みとどまった。ユキノがこちらを見ていたからだった。澄んだ空色の目が自分をじっと見ているので、何だか妙な感覚を覚えて何もいえなくなる。何とか、ユキノに真顔で見つめられると黙らなければならぬ気がするのだ。

「今、魔物って言った？」

ヴィヴィアンに張り詰めていた緊張感が、その一言で一気に解ける。彼は口を開けば煩くて面倒くさい奴になるが、黙っていれば無駄に真剣で、接しているこちらは無駄に緊張してしまう。

「ああ。この近くの森には魔物が潜んでる。時々、っていうか最近増えてきたけど、森から出てきて人間を食らったりするような獰猛なやつ。大きいになれば熊くらいにもなるけど、その形質の特徴は総じて黄色い目をしているということだけだ。奴らは常に何かに擬態してる」

ユキノは感心したように頷いた。続けてくれといわれたから、まだ知っている魔物についての知識を教えてやる。

「光を嫌う傾向があって、朝はそんなに出ないけど夜になると急に色んなところから出てくる。だから黒いやつが多いけど、稀に黒じゃないのもいる。血のにおいに敏感で、ほんのちよつとでも怪我するとにおいを頼りに追ってくる」

魔道書に書いてある、魔物の定義を教えてやった。ユキノはぱちりした青い眼をしばたかせ、何かを考え込むように黙る。

世界中で、魔物はどんどん増え続けている。新聞には毎日のように魔物による人間への被害が報じられているし、それはこの国をも侵食しつつあるようだった。事実、最近ではナタリアたちだけでなく方々から魔物退治の依頼を受けるようになった。倒しても倒しても魔物が出てくるのは、薄気味悪いことでもある。一体どうやって増殖しているのか解らないが、この増え方は異常だと思う。ヴィヴィアンの住んでいるこの街は平和だが、それもいつ壊れるか解らない。

「俺のいる国では、いままで魔物なんか出なかった。でも最近になって近隣の国から渡ってくる魔物が増えたから、村を守るために俺が魔道士にならないといけないんだ。俺、まだ魔物見たことないんだけどさ。でも、魔道士にならないと退治できないって聞いて」

「そうだ。言ったら、形質の特徴は黄色い目をしてることだけだ。素人目にはどれが魔物かなんかすぐには解らない。魔物は低級だけど魔法で攻撃をしてくるから、王宮騎士団とかいても殆ど意味ないのが現状だし」

ふうんとナタリアが言う。ナタリアもこの辺の知識については詳しくないらしく、今はじっと黙ったまま立っているローザも時々意外そうに小さな声をあげていた。

「ヴィヴィアンは倒せる？ 魔物」

ユキノに訊ねられた。頷いた。

もういちいち、馴れ馴れしく呼ぶなど注意する気も失せてきた。

面倒くさいから勝手に呼ばせておこう。

「勿論」

「俺にはできるかな」

これには頷けなかった。素質はあるといえど、魔法を使いこなせるかどうかは本人の技量にかかっている。ちゃんと魔道士の素質があるとしても、今のユキノだったら即座に魔物の餌食になるということだけは確信できた。

「なんともいえない。お前、何か武術とかやってる？」

「剣術なら。けど、入国管理の騎士に選りすぐりの逸品を取られた」
「へえ。剣ねえ」

意外だったし、興味が無いわけではなかった。ちょっと見て見たいと思った。本の世界に出てくる東の剣士は、細い串のような剣を使った王国騎士団の洒落た連中よりも何倍も強そうだったし、ヴィアンとしてはこちらのほうが好きなのだ。東国出身のユキノだから、きっと剣術も東国流だろう。だとすれば、やっぱりちょっとユキノの剣術を見てみたい。

「この国で、刀売ってるとこない？」

言いながらユキノは辺りを見回す。金物屋はこの近くにあるが、本格的な刀剣が欲しいなら街の中央に近い商店街に向かわなければならぬ。

「あるけど高いよ。金貨五枚くらい」

「そっか…… 入国管理の奴を襲撃して取り返そうかな」

「おいおい、冗談でも言うなそういうのは。どこで誰が聞いているか解んねえよ」

真剣に考え込みはじめるユキノに苦笑してみせれば、ユキノは襟の合わせ目から懷に手を入れた。中から出てきたのは一本の小刀だ。黒い漆塗りの鞘に納まったそれを、ヴィアンが見るのは初めてだった。

「これだけは死守した。方法は秘密」

「それ、お前の？」

「うん。父さんが…… あ、里親のほうな。一生懸命働いて、誕生日に買ってくれたんだ」

ユキノは黒い鞘を左手で掴み、柄を右で握ったまま鞘を外した。きらりと光を跳ね返す白刃に目を奪われる。切れ味の良さそうな刀だということは、素人目にもすぐわかった。

「それ実戦でも使えるのか？」

「勿論。金ないから裏山行って、猪とか熊狩ったりしてたしな」

「サバイバーなのね」

ナタリアが楽しそうに笑う。彼女は常に前向きで楽しそうだから、きっと悩み事なんて何も無いんじゃないかとヴィヴィアンは思っている。

「まあな。じゃ、調子に乗って実演もしちゃう」

ユキノは照れ笑いして刀を鞘に戻し、ヴィヴィアンやユキノのいる場所から少し離れて地面に膝をついた。そして、目を閉じて小さく深呼吸する。そして目を開けた刹那、目の前の何もない空間を、ユキノは刀を鞘から出す勢いで切り裂いた。ひゅん、というような空気を裂く音。太刀筋は真一文字。一点のぶれもない。

更にその刀を振り上げると、垂直に振り下ろすユキノ。一連の動作には何の迷いもなく、そのうえ寸分の狂いもなかった。

ナタリアから歓声が、ローザからは怯えたような声が聞こえる。ユキノはなめらかな動作で刀を鞘に収め、膝を払いながら立ち上がった。

「怖がらせちゃったかな。ごめんね」

焦ったように言い、ユキノはローザの目線にあわせて屈む。ローザは驚いたようにナタリアの服の裾に縋りつき、それを見たユキノはちよつとシヨックを受けたような顔をした。

「ヴィヴィアン！　どーしよつ？　俺嫌われちゃった？」

「そんなこと俺に聞くな。ローザは人見知り激しいからそつとしいてやれ」

普段はこんなに頼りない男なのに、刀を握らせると豹変するらしい。素直に感心するが、魔物退治は魔法を使わないと困難だ。ユキノの意外な特技を目にしても、彼が魔物と戦ってすぐに食われそうだという印象は拭えなかった。

「物理的攻撃で魔物を倒すのは一匹でもキツイからな。お前のその刀が魔法で保護されてるとかいいうなら話は別だけど、そうでもない限り食われるぞ」

「これは緊急用の短刀だから、長いのが欲しいんだよ。長刀だったらどんな動物だって一撃必殺だ。剣術の腕は村一番だったから」

この細身で？　そう思うが口にはしない。真顔の彼が何となく緊張感を相手に持たせるのは、この剣術によるものなのかもしれないとちらりと思う。

「お前、魔道士やめて剣士になればいいだろ。その方が向いてるんじゃないねえの」

「嫌だ。人は斬りたくない。剣士になれば人殺しの依頼だって来るようになるって、父さんが死ぬ前言ってたから」

ふうんと相槌を打って、ヴィヴィアンは左のこめかみの辺りを軽くかいた。

「そうか。お前の家族面倒くさい構成になってるな」

「弟子にしてくれるなら全部話すよ」

「面倒くさいからいい」

斬り捨てると、ユキノはちょっと悲しそうにした。そんな彼を見ためざといナタリアは、ヴィヴィアンを見て眉根を寄せる。感情が顔に出やすい彼女だから、これからどんなことを言うかは大体予想がついた。多分、怒られるだろうと思う。

「ひどいわねヴィヴィアン、貴方の力を認めてくれてるってことでしょ？　どうして面倒くさいとか言うのよ」

「面倒くさいもんは面倒くさいの。教育するってことはその今の将来に責任持たなきゃならないってことで、もし魔道士として不適合な奴に育てちまったらそれ俺の責任になって、面倒くさいことになっ
て」

「いいじゃない。面倒くさい反面楽しめるのよ、こういうのは」

「じゃあお前がやれよナタリア」

簡単に言うが、人間を育てるとはそう簡単なことではない。自分は面倒くさがりで放任主義だから弟子なんか責任を持って育てられない。それは確実だ。

第三話

誘惑を絶て

ナタリアは微笑を浮かべながら首を横に振り、ずいっと身を乗り出してくる。

「あたしには力がないもの。ヴィヴィアンにしかできないのよ、これは」

駄目押しとばかりに、ユキノも身を乗り出してくる。

「俺面倒くさい奴かもしれないけど、結構まめに色んなことできるよ？ 例えば部屋の掃除とか！」

ぴくりと反応してしまう。ナタリアが声を上げて笑い、ローザはくすくすと静かに笑った。二人とも、ヴィヴィアンの部屋の汚さはよく知っている。ローザは時々、散らかりすぎた部屋を掃除しにくてくれることだってある。

「大工仕事もできるし、洗濯だって炊飯だって全部やれる。俺のライフスタイルは、基本自給自足だから」

「ヴィヴィアン、良いじゃない。こないだ『家政婦欲しい』とか言ってたでしょ？」

弟子なんて永久に要らない。そんな手間のかかる面倒くさいものなんか要らない。そう思う一方で、ユキノの持つ異文化が気になるし、掃除をしてくれるというのは結構美味しいと思っている。どうするべきか。

「なあー、そんなに嫌？ 俺言ったじゃん、仕事もやるよって」

「ローザの意見聞きたい」

もう既にこの状況が面倒くさいことになってきている。早く終わらせたい。そこで、ローザを呼んだ。彼女はちらりと顔を上げ、優しく笑った。

「ユキノさんを弟子にしてあげるべきだと思う。だってヴィヴィアン、ものぐさの貴方が一人でこれからも店を続けていくのは大変でしょう」

「う」

たまに言われるからこそ、ローザの意見は的を射ていて心にぐさりと刺さる。ものぐさ、確かにそうだし自分でもそう思う。ダメージを受けたヴィヴィアンを見て、ナタリアは遠慮なく笑い飛ばした。「決まりねヴィヴィアン、ユキノ。師弟っていうよりお友達だけど」

「おい、本気かよ」

「やったああ！」

ユキノが嬉しそうに笑い、変な衣類の袖をひらひらさせながらバンザイをした。

「師匠！ 俺が最初にやるべきことは？」

三人分の視線が刺さる。ヴィヴィアンはこめかみに手をやりながら、ぼそりと呟いた。

「……なあ、やっぱり帰れ。俺はそんな器じゃない」

ナタリアが愕然とし、ローザが不安げにユキノの方を見た。これ以上この場に留まっていたくなくて、ヴィヴィアンはユキノから目をそらして店に帰った。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよヴィヴィアンっ！」

ナタリアの声も無視し、ヴィヴィアンは扉に鍵をかけて窓にカーテンを引いた。

きつと悪い夢だ、寝ればなんとかなる。そう思いたかった。何かの冗談か嫌がらせに違いない。ヴィヴィアンはまだ十八の、それもまだ誕生日が来ていないから厳密に言えば十七の若手魔道士だ。人に何か指導できるほどの技量もなければ、精神力もない。

二階の寝室に上がって窓の外を見ると、がっくりと肩を落としたユキノにナタリアが何か声をかけていた。少し良心が痛んだ。けれど、俯いていたローザが不意に顔を上げたので、まずいと思って窓から離れる。一瞬だけ見えた彼女の顔はひどく悲しそうで、ヴィヴィアンを責めるような目で見ていた。

「関係ない、俺には何も」

依頼を受けるか受けないかは自分が決めることだ。報酬も受け取

っていない。依頼は承諾していない。いくら生活が苦しいからといって、大金欲しさに彼を引き受けることはできない。彼の文化が気になるからとか、彼の行動が気になるからとか、剣術を見たいとか、そういう生半可な気持ちで一生モノの面倒くさを抱え込むなんて馬鹿げている。

ベッドの上でごろごろしてみる。一度おきてしまえばもうあまり眠くもならなかった。昼時で腹が減っているのもある。どうしようか。一階に下りて食事にしようか。

階段を降りる。店先にまだナタリア達がいる気配があった。まだいるのか。

「……逃げ帰るなんて嫌だし」

「そうよね」

ナタリアとユキノの声が聞こえる。すぐ近くで会話をしているようだ。

「命かかってるんだ、俺じゃなくて村の皆の」

「聞かせてよユキノ、貴方の村の話」

ナタリアは玄関扉を背もたれにして座っているらしい。がたと扉が揺れた。玄関にはひさしがあるから、日陰になっているはずだ。だから彼女がそこにいるのかもしれないし、もしかしたら単にヴィヴィアンへの嫌がらせかもしれない。

「俺の村ではね、長老が魔法使いなんだ」

「へえ、一人だけ？」

「あとは皆ふつうの人。俺は目の色が変わって、妖怪扱いされて」

「妖怪？ 何よそれ」

「魔物みたいなものなんだ」

ユキノの昔話が始まった。なるべく耳に入れないようにしながらヴィヴィアンは木箱の中にあつたリングの最後のひとつを手にとった。こんな風に暑いと、冷暗所を確保するのが難しい。だから魔法陣を書いて冷却効果を持たせた箱を用意して、そこに食料を保管しておくのだ。

「でも、剣術強いからいじめられたりはしなかった。同じように目の色が茶色じゃない奴が一人いて、そいつが俺の親友でね。剣術の道場にいたところからずっと一緒なんだ」

「じゃあ、その親友を置いてきちゃったの？」

「そう。一人前になってから戻ってくるって約束で。剣は俺と互角くらいの腕だから、あいつならきつと村の人たちを守ってくれる。……あいつしか戦えるような奴はいない村なんだけどな」

「危ないじゃない！　なおさら諦めちゃだめよ。ヴィヴィアンはこころじゃ一番強いわ。首都に行けばもっと強い人たちがいるかもしれないけど、そんな遠くまで歩いていくなんて絶対無理よ」

「足腰は強い方だけどな」

「とにかく、あたしも協力するわ。ヴィヴィアンを説得してやりましょ！　ねえユキノ、お腹すいたでしょ」

「……実はここ数日食ってない」

「だからひよろひよろなのよ！　いいわ、うちに来て。どうせヴィヴィアンは、今頃さみしくリングゴでも食べてるわよ」

うるせえ、と小声で毒づく。向こうは気づいていないようだ。

「あたしたちは豪華にしましょ。ローザ、今日のお昼まだよね？」

「もともとヴィヴィアンをお昼に誘おうと思ってここにきたんですよ」

「あら、そういうばそうだったわ」

明らかにわざとらしい声だ。ヴィヴィアンは小さくため息をついて、リングゴの最後のひとかけを口に放り込んだ。これだけで足りるはずがない。だが、ここで金を使ってしまったら、夜に食べる分が買えなくなる。げんなりした。

「ヴィヴィアーン、そこにいるかしら？」

「何」

「ここ開けて」

渋っても仕方ないし、ナタリアがドアを蹴破って入ってくる恐ろしい可能性も考え、ヴィヴィアンは大人しく扉を開けた。ローザが

気まずそうにこちらを見た。ユキノがナタリアの背後からヴィヴィアンの様子を窺っている。牽制モードに入りながら、ナタリアを見下ろす。

「何」

再び問いかける。ナタリアは最上級に可愛らしい笑みを浮かべた。

「お腹すいてるでしょ」

「最近ろくに食ってないからな」

「ご飯そこで作っていいかしら」

「……え」

まさか。食事に誘われるのかとちょっと期待していたのに。

「家に帰るの面倒になったわ。どうせそろそろ食べるものもなくなつたでしょ」

「お前ら何しに來たんだよ……」

「ヴィヴィアンにご飯作るためよ。こっちに誘っても良かったけどもうお父さんたち先に食べちゃったと思うから」

「暇な奴ら」

「悪かったわね暇で。そんなこというなら今夜の依頼ただ働きにするわよ」

冗談だと解ってはいたけれど、本当にただ働きにされたらたまったものではない。

「それは勘弁して」

「ふふ、解ってるわ」

ナタリアはヴィヴィアンの自宅に上がりこみ、上がりこむなり素っ頓狂な声を上げた。

「なあによこの部屋っ！ 本当にここ店なわけ？ 何で片付けられないのよ」

「面倒くさい」

「はあー…… ローズ、まず片付けるわよ。ユキノはお昼ご飯の材料買ってきて」

ナタリアはユキノに銀貨を何枚か渡し、ひらひらと手を振った。

ユキノは少し迷ったが、頷いて店を出て行った。なじみのメンバーだけがここに残る。ユキノが出て行ってからしばらくの間は、誰も何も言わなかった。

「考え直してあげる気はないの？」

沈黙を破ったのはローザだった。彼女は困っている人を放っておけない優しい人だ。たぶんユキノに同情しているのだろう。

「そりゃあ、ちょっとは気になるけど。でも、弟子って重いぞ存在が」

「ヴィヴィアンならできるわよ」

ナタリアは勢い込んで言うが、弟子を取る気なんて一向にわいてこない。

「出来ない、面倒くさい」

「ユキノは自分のことちゃんと自分でやるわ。いて助かることの方が絶対多いわよ。足手まといになるほど弱くもないし」

「もうその話は終り」

「どうしてそんなに頑固になるのよ」

色々反論したかったが全て面倒くさくなり、ヴィヴィアンは小さくため息をついてキッチンへ向かった。ナタリアの視線を背中中で痛いくらいに感じる。

「かわすは一時の面倒くささ、引き受けるは一生の面倒くささだから」

「いくらことわざっぽく言っても、ただ面倒くさいって言ってるようにしか聞こえないわ」

「まあな」

「認めないでよ、大体ねえ……」

彼女の言うことを聞き流しながら、ヴィヴィアンは台所のシンクを見下ろした。シャワールームやシンクが揃っている家はなかなかない。水道の技術がまだあまり進んでいないから、二階まで水が上がらないとか、大掛かりな工事を必要とするとか、そういう理由だ。リリエンソール家では、家を魔法で改造しまくって水道管を整備

し、庭の井戸から水を引いてこられるようにしてある。不純物を取り去って水を綺麗にする魔法を蛇口にかけてあるので、いつでも綺麗で美味しい水が飲める。ちなみに、これらの魔法をかけたのはすべて父と母だ。二人は何かと細かくて凄い魔法を使えたから、親子揃っての生活は豊かでとても楽しいものだった。

「ちょっとヴィヴィアン、真面目に聞きなさい」

「何で。結論はもう出てるだろ。俺には無理、以上」

言い切れば、複雑そうな顔でローザがヴィヴィアンを見上げる。

「依頼すら受けてあげないの？」

「一晩泊めるのに金貨十二枚もふんだくるつもりはないから」

「じゃあいいじゃない、妥当な料金で泊めてあげれば」

なおも食い下がるナタリアに、面倒臭さを隠し切れない声で応じる。

「うちは民宿じゃねえ」

「空き部屋くらいあるでしょ？」

「……ないこともないけど」

不毛な言い争いだ。ヴィヴィアンはもう話すもの面倒くさくなってきた、頭をかく。

「今日の依頼、延ばしていいよ」

「え？」

振り返ると、ローザがこちらを見ていた。わかりやすい失意の表情を顔に浮かべ、明らかにヴィヴィアンに幻滅しているようだった。

「ユキノさんの問題が解決するまで、私たち待ってるから」

「おい、それじゃ今夜襲われたりしたら」

「そう思うなら早めに問題を解決して」

ローザにしては珍しい冷たい言動に、ヴィヴィアンはもう黙るしかなかった。

「……わかった」

それきり、ユキノの話は出なかった。ナタリアとローザは二人で一階を掃除してくれて、見違えるほど綺麗になった店内にユキノが

戻ってくる頃には、ヴィヴィアンは暇をもてあまして若干の睡魔に襲われていた。

「遅かったじゃない」

テーブルから顔を上げると、ナタリアが両手を腰に当ててユキノに小言を言っているところだった。

「ごめんごめん、ちょっと混んでて。ナタリア、イリナギ料理って食べたことある？」

「ないわ、本で読んだ程度よ」

「一緒に作ってみよ？ 絶対気に入るから！」

ナタリアとユキノはなにやら楽しそうに料理を始めた。その間にローザは、今まで溜めてきた依頼書を整理するという、アルバイトまがいのことをやってくれた。ヴィヴィアンも手伝ったが、ローザのほうが効率が良かったので結局任せてしまう。

第四話

更なる誘惑

遅い来る睡魔をかわしつつ、ローザの作業を眺めていた。ローザは真剣に作業をしているので、ヴィヴィアンの視線には全く気づいていないようだ。

「ヴィヴィアーン！ 味見して！」

しばらくして楽しそうに呼ばれ、のろのろとキッチンへ向かう。

湯気をあげる鍋の中には、見慣れない色をしたスープが入っている。

「あたしこんなの初めてよ！ お味噌汁っていうんだって」

はしゃぐナタリアにせかされて、小皿に注がれた味噌汁に口をつける。悪くはない味だが、風味が独特で不思議な感覚だ。

「美味しい？」

「まあまあ」

「じゃ、こっち。肉じゃが」

ヴィヴィアンは言われるがまま、小皿に盛られたじゃがいも料理を食べてみる。じゃがいもや野菜、豚肉を砂糖や醤油などを使って煮たものらしい。風味がよかったが、じゃがいもが少し硬い。

「じゃがいも火が通ってない」

「マジ？ 味はこれくらいでいい？ もっと濃いほうがいい？」

「このままでいい」

ローザの作業をぼんやり眺めつつ、ヴィヴィアンは台所でなにやら楽しそうに料理を続けている二人の会話を聞いていた。焼き魚のいい匂いが漂ってくる。空腹を呼び覚ます匂いだ。

「……腹減った」

呟くと、ローザが困ったように微笑んでこちらを見た。

「ヴィヴィアン、仕事ほかにないの？ もう終わったよ」

「玄関の木箱見てきて」

「わかった」

軽い足取りで店の外へ向かっていくローザの背中を、テーブルに

頬をべったりつけた格好で見送る。すると、背後からナタリアの喝が飛んだ。

「ちょっとヴィヴィアン、ローザをパシるんじゃないわよ！」

「ローザー、ありがとおー」

ひらひらと手を振ってやれば、ローザはしかたないなあと言いたげに手を振り返してくる。

「まったく、ローザもローザよ。何で黙ってパシられてるのよ」

「ナタリアは働いてるのに私は何もしないなんて嫌なの」

笑顔で答えるローザに、ナタリアは大きなため息をついてみせる。

「あんたって子は。代わりなさい、あたし二階を片付けてくるわ」

勝手に使っていたヴィヴィアンのエプロン（母が置いていったものだ）を脱ぎ、ローザに渡しながらナタリアは微笑する。ローザはいわれたとおり代わることにしたのか、エプロンに腕を通し始める。ナタリアは髪を後ろで束ね、ヴィヴィアンの服についていた飾り紐を勝手に抜き取って使った。

「おい」

言ってみたものの、もう疲れて面倒くさい。あとでちゃんと通してくれるだろうから、やりたいようにさせておくことにした。

「見られちゃまずいものでもあるなら同伴してよ」

「別に…… ないと思う多分」

しいていうなら、室内の魔法陣を汚れと間違われて消されないかどうか心配だったが、また描けば良いので面倒くさくなってヴィヴィアンはまた顔を伏せる。

「本当かしら。じゃ、ローザ。あとはお願いね」

ローザはユキノの隣に立ち、ひどく硬い動きで料理をしていた。ユキノが優しくローザに料理の手順を教える声が、耳に心地よい。眠くなってくる。

「ヴィヴィアン！ 洗濯しとくわよ！」

上から聞こえてきた声で意識が呼び戻される。あくびをこらえながら、階段の方を見上げる。

「お前、魔法使えないだろ？」

この家の洗濯は、一般家庭で洗濯板を使って洗濯物をするのとは訳が違う。風呂場の床に書いた魔法陣の上に木製の樽を載せ、その中に洗濯物と水を入れて魔法を発動させて洗濯しているのだ。

洗濯物はかなり綺麗になるし、汚れが酷い時は分解の呪文で綺麗に落とすことも可能だ。時々、この洗濯機を使いたいという依頼もくる。

「問題ないじゃない、洗濯くらい」

「言い方変える。お前は俺んちの洗濯機、使えないだろ？」

ナタリアは魔法を使えないはずだが、手洗いで洗ってくれるのだろうか。そこまで世話をかけられない。たしか、かなり洗濯物が溜まっているはずなのだ。

「魔法陣を発動させるぐらいならできるわよ。あんたの書いたものじゃなきゃ動かないけどね」

ああ、忘れていた。頭がぼうつとしていて、すっかり働いていなかった。ナタリアは確かに魔法を使う事ができないのだが、何故か例外的にヴィヴィアンの魔法陣でなら魔法を発動できるのだ。不可思議な現象だが、未だにこの現象についてかかれた魔道書を読んだことがない。

「じゃあ頼んだ」

返事をすれば、しばらくナタリアからの返答はなかった。しかし、なにやら大きな物音がして、ナタリアが大きなため息をついているので顔を上げる。

「もう、その辺りにパンツ脱ぎっぱなしにしとくのやめなさいよね」

「……っ！ お前には関係ないだろ」

そういえば昨夜あたり、暑苦しくてシャワールームに適当に服を脱ぎ散らかしてそのままだった。いつもは下着くらいは樽に投げ入れておくが、本当に面倒くさいとそれすらなくなる。ちょっと恥ずかしくなった。いくら友人とはいえ、女の子にそういう面倒をかけるとは。

「紳士としての常識よ！ だからモテないのよ、あんたはっ」

最後の『あんたは』の部分でちよっと力んでいる様子があったということは、脱ぎっぱなしの衣類がかなり多かったということだろう。おおかた、ナタリアはその大量の衣類を樽に一生懸命詰め込んでいるのだろう。

もう日常の風景として見慣れているので、シャワールームの床に服があってもヴィヴィアンは気にしないことが多い。

「本当にだらしがないんだから」

まとめていた髪を下ろしながら、ナタリアは階段をおりてくる。

「いいだろ家人中くらい」

「度が過ぎてるわ」

そういいつつも何だか楽しそうなナタリアだ。彼女は基本的に掃除や洗濯などの家事全般が好きだから、面倒臭がりのヴィヴィアンにとってはかなり重宝する人材である。

「きゃっ」

「わ、大丈夫かっ」

またぼんやりしかけたところで台所の方から激しい物音がして、ヴィヴィアンは驚いて振り向く。ローザがまな板をシンクへと落としたらしかった。

ユキノは血相を変えてローザの手を掴むと、水道の栓を開いて水を出し、強引にその手を洗う。それから手際よく懷に手を差し入れ、紺色の布を取り出して彼女の指先にきつく巻きつける。

どうやらローザは怪我をしたようだ。まな板を落とした際、一緒に包丁も落としたのだろう。

「ごめんな、俺ちゃんと見てなかった」

「う、ううん、平気」

「ローザっ、大丈夫!？」

ナタリアが妹のもとへ飛んでいき、ヴィヴィアンも彼女の様子が気になって席を立つ。ユキノが巻いた紺色の布に、赤黒い染みが出ていた。

「おいで」

声をかけると、ローザが呆然とした顔をこちらへ向けた。自分の血を見て固まっているローザに、全然平気じゃないだろうと内心で突っ込む。

ローザは昔から、血が極端に苦手だ。前にヴィヴィアンがガラスに腕を突っ込んで血塗れになったとき、彼女はその光景を見て失神してしまった。おかげでナタリアに怒られ、父母には呆れられ、散々な思いをした。

苦い思い出をふりかえりつつ、真っ青なローザを覗き込む。傷は少し深いようで、血が止まらない。

「どっ、どうしよう……」

「どうしよう！ 俺のせいだ、ヴィヴィアンっ！」

今にも気絶しそうな蒼白なローザの様子に、ユキノが慌て始める。ヴィヴィアンはユキノを一言で黙らせると、ローザの震える手をとって、魔法陣を描いて呪文を囁いた。柔らかなオレンジ色の光が、紺の布に集まっていく。

「はい、治った」

光が消える頃に布を取ってやれば、白く細い、可愛らしい指が姿をあらわす。傷口がどこにあったかすら解らないような治癒力に、自分でも感心する。治癒の魔法は本来あまり使わないが、今回は特別だ。

「わ、あの、ありがとう」

「いいって。さっきバイトしてくれたし、お互い様」

この光景をユキノは嬉々としてみていた。肉じゃがというらしい煮物が入った鍋を片手でかき回しながら、きらきらした目でこちらを見ている。

「すげえ！ ヴィヴィアンすげえ！」

「お前にはやってやらないぞ、怪我すんなよ」

ヴィヴィアンの小言はそっちのけで、ユキノはローザの指を長いこと眺め回している。居心地が悪そうに身を竦めたローザは、手に

しっかり握っていた紺色の布に目を落とし、ユキノにくるりと背を向けた。ローザは人見知りが激しいから、ユキノの不躰な視線をかなり不快に感じたに違いない。

「これ、洗濯機入れてくるね」

しかし、今にも逃げたそうなローザをナタリアが止めた。

「あたしが行くわ。ローザ、大丈夫？」

「平気、ヴィヴィアンが治してくれたから」

「本当に綺麗に治ったのね。よかったわ」

この姉妹はでこぼこだが、とても仲が良い。お互いに気遣いと優しさを忘れない二人なので、喧嘩などはあまりしているところを見たことがない。傍から見れば、この二人は姉妹というより仲の良い友達だ。

「料理そろそろ仕上げだから、その酒とって」

声をかけられ、キッチンに突っ立ったままだったヴィヴィアンは条件反射で近くにあった酒瓶を手渡していた。

「酒？ お前こんなの買ってきたのか」

「料理酒だよヴィヴィアン。風味もよくなるし、食材がほどよく柔らかくなる」

透明な瓶に入った酒を鍋の中に流し入れ、蓋をしてユキノは笑う。彼は料理に詳しいようだ。

「得意なのか？ こういうの」

「基本自給自足だからさ、自分で作らなきゃ誰も用意してくれないんだ。みんな忙しいから、炊事は俺が担当してた。風呂掃除はキシチ。あ、義理の弟な」

「ふうん……」

気づいたら食事を用意されていて、食後の片付けも誰かがやってくれていて、食材をストックしている木箱には、常に野菜や果物が入っていた。そんな生活が当たり前だったヴィヴィアンは、一人暮らしを始めてからはアイアランド姉妹に食事の世話を焼いてもらうことがかなり多かった。

ユキノはそれを、ひとりでやっていたのだろうか。親と死別し、里親に貰われ、きつと肩身の狭い思いだっただけだったことがあっただろう。なのにこの真っ直ぐさは、いったいどこから生まれたのか。

「お前、一人でやっていけるだろ」

「無理。だって働くところないし」

「お前の腕だったら料理番の見習いとかできるだろ。市長の家行ってみろ」

「じゃあ最悪の場合はそこで住まわせてもらいながらここに通うよ。俺、きつとちゃんとエンカンタリア料理も作れるから。調理法さえわかれば」

では小手調べに頼んでみようか、と思ったところで、彼がヴィヴィアン専属のシェフなどではなく、弟子志望の剣士だったことを思い出した。返事をどうすべきか悩み始めた途端、二階からナタリアの声がする。

「ヴィヴィアン、洗濯物干すところはいつもの場所でいい？」

「ああ、そうしといて」

ユキノはヴィヴィアンからの返答がなかったことを、特に気に留めていないようだった。玉じゃくしで煮物の汁をすくい、小皿にかけてユキノはヴィヴィアンに差し出す。

「はい、味見して」

「あ？ ああ」

言われるまま小皿を受け取り、煮物の汁をすする。じゃがいもをひとくち齧ってみれば、汁の甘味とじゃがいもの相性が素晴らしく良いものであることに気づく。馴染みのない味であるはずなのに、どこか懐かしい気がした。

目の前の男はかなり期待の籠った目でこちらを窺っている。コメントなしでは許されない空気だ。

「……うまいと思う」

正直に言ってやるのは少し癪な気もしたのだが、確かに文句のつけようもなかった。このたった一言で、ユキノはまるで子供のよう

に喜ぶ。

「やったあ！ ローザ、ごはんよそって！」

「わかった」

ローザは暖炉につるされた鉄製の容器を火から下ろした。

エンカンタリアでは火を使う料理を台所の暖炉で調理するので、真夏の料理はきつい。けれど、このリリエンソール家では暖炉の外に漏れ出す熱を魔法で集め、流しのすぐ隣に送っている。そこに置いた大理石に描かれた魔法陣に、熱が集まる仕組みになっているのだ。

なので、暖炉に立たなくてもお湯を沸かすくらいのことではできし、こうしてユキノがやっているように鍋を大理石の上において調理ができる。

一般家庭では料理用に改良した暖炉やかまどを使うが、ヴィヴィアンの家では魔法陣を描いた石の上で料理を作る。魔法は本当に生活を便利にしてくれる。

「ヴィヴィアンは座っててよ。面倒くさいでしょ」

ユキノは笑った。

「ああ」

「ああって何よヴィヴィアン！ 手伝いなさいよね」

ぎくりとして振り返ればナタリアが髪をほつきながらこちらに歩み寄ってくる。

「後でその服貸して。紐通すわ」

「面倒臭い」

「じゃあそこに立っててちょうだい」

ローザとユキノの邪魔にならないところまでヴィヴィアンを引っ張ってくると、ナタリアは髪からヘアピンを抜いて、その先端にさきほど奪ったヴィヴィアンの服の紐を挟む。ヘアピンを紐通しがわりにして、ナタリアは実に器用に服から抜き取った飾り紐を元のよう直してくれた。

「使うなら言えよな」

小言を垂れば、ナタリアはいたずらっぽく笑う。

「適当に目についたのがあんたの服だったのよ」

「じゃお前、適当に目についたのがこいつのコレでも抜き取って使うのか？」

ユキノの髪に挿してある棒状のヘアアクセサリーを指差して言えば、ナタリアは首を横に振る。

「ダメよ、かんざしのつけ方知らないもの」

「ナタリアは似合うと思うよ。今度教えるから」

「本当に？ 嬉しいわ」

「ヴィヴィアンは全部上げるには長さが足りないから、部分的にアレンジできそう」

「いいよいつでも」

アクセサリーは面倒くさい。ヘアアレンジも面倒くさい。どうせやったところで夜には解いて風呂場行きなのだ。

そう考えると、このユキノという東洋人が日々をかなりの気合で過ごしているような気がしてきた。毎日こんな髪型で、面倒くさそうな衣類を纏って、自炊するのだ。ヴィヴィアンには到底できないと思う。

「ヴィヴィアン、ご飯どれくらい食べる？」

「とりあえず少な目で」

「わかった」

ローザと会話してテーブルに着けば、ナタリアに台拭きを渡される。

「何だよ」

「何だよじゃないわよ、働いてないのあんただけなのよ。テーブルくらい綺麗にしないよね」

まあ、確かにそうだ。納得し、面倒くさいと思いながらもテーブルを片付ける。

第五話

意地っ張り一点張り

筆記用具や依頼書を適当に棚の上に載せれば、もともとアイアランド姉妹に片付けてもらってあったテーブルの上には何もなくなつた。適当にテーブルの上を拭けば、なんだかとても仕事をしたような気になる。

「ふう」

「ヴィヴィアンどいてー」

背後からユキノに言われ、さっとよけるとテーブルの中央に煮物を入れた器が置かれた。そして、人数分の焼き魚と、味噌汁というらしいスープが置かれた。ローザとナタリアがスープ用の小鉢にご飯を入れて持ってきて、食事のセッティングは終わった。視覚と嗅覚をダイレクトにさらっていった料理を前にし、一気に食欲が倍増する。

「……普通そういうのって皿にいけないか？」

「俺の国では茶碗を使うんだ。持ってきたかったけど割れちゃうからやめといた。さてと、箸は……」

「箸？」

「うん、箸。どこ？」

耳慣れない単語だ。ヴィヴィアンは首を捻り、とりあえずリピートしてみる。

「箸って何？」

「え」

豪華な食事を目の前にして何も食べられない状況にそろそろ耐えられなくなってきたので、ヴィヴィアンは正面に座るナタリアの背後を指差した。

「ナタリア、二段目の引き出し」

「もう、自分で動きなさいよ」

ナタリアはヴィヴィアンを横目でみつつも、食器棚の引き出しか

ら人数分のナイフとフォークを出してくる。

「えええっ。嘘、この家って箸ないの？」

「だから箸ってなんだよ」

もう反応するのも面倒くさいと思い始めたヴィヴィアンに、ユキノは懷から何か取り出してみせる。

「何って、普通みんな家に箸あるだろ？」

麻で出来ているらしい布の中から現れたのは、長い二本の棒だった。それはユキノが髪に挿しているかんざしによく似ている。

「イリナギ人って本当に細長い棒が好きなんだな。刀も棒っぽいし」
思ったとおりのことを言ってみると、ユキノはフォークを握ったヴィヴィアンを不思議そうに見つめる。

「エンカンタリアでは食事にナイフとフォークを使うんだな……
初めて知った。ナイフとフォークを使ってるのは首都だけで、あとはみんな箸なんだと思ってた」

意外に博識なのか、ユキノはナイフとフォークの存在は知っていたらしい。箸の存在を知らなかったヴィヴィアンとは大きな違いだ。
「でも、お箸使ってるユキノってカッコいいわよ。イリナギは不思議な魅力のある国ね」

「本当に？　ありがとナタリア」

「ユキノさん」

ためらいがちに声をかけるローザに、ユキノがきよんとする。

珍しい言動だ。ヴィヴィアンも食事の手を止め、ローザを注視する。

「何でさん付け？」

……そうきたか。ヴィヴィアンは呆れるが、ローザが黙ってしまったのを見て、面倒くさいと思いつつも助け舟を出す。

「言ったら、ローザは人見知りが激しいんだ。お前はまだまだこいつにとっては他人なんだよ」

「えー、結構仲良くなったと思ったのに……」

がっかりするユキノの肩を、ナタリアが嬉しそうにぽんと叩く。
「でも珍しいのよ、会って一日も経ってない人にローザから話しか

けるなんて。ほら、どうしたのローザ。言ってみなさいよ」

ローザは姉にそう言われたら、ほぼ逆らわずに言葉をつむぐ。強制されているというよりは、ナタリアがいればローザは安心できるのだろうとヴィヴィアンは思う。

「あのね、私、お箸売ってるお店知ってるの。着物はなかったけど、今ユキノさんが履いてるわらじとか、下駄もあったよ。学校の課題で、外国の研究をしているときに偶然みつけたの」

「え、本当か！？ 助かるなそれ、連れてってくれるか？」

「うん。今度案内するね」

「やった！ ありがとローザ！」

時々会話に混ざりながら、ユキノの料理を食べる。空腹のために通常より早く多く平らげたので、食事はすぐに終わった。空腹は満たされ、雰囲気はかなり和やかだ。

「ごちそうさま」

「どうだった？」

「普通にいける」

ユキノは嬉しそうにした。そして、懐からまたも細長い物体を取り出す。竹の棒をいくつかまとめ、上半分くらいに渋い色合いの紙を張ったものだ。エンカンタリアでも王妃や姫が使っている扇に似ているが、王妃たちの扇はもっと色鮮やかで羽や絹糸の豪華な刺繍が施してある。ユキノはそれで首筋あたりを仰ぎ、小さくためいきをついた。

「暑いなあ」

「氷飴があるわよ。食べる？」

ナタリアはポケットから可愛らしい半透明の包みを出し、ユキノに渡した。

氷飴はイリナギの素朴な甘味のある飴に、魔法で細工をしたものだ。飴はイリナギの職人が作り、細工はエンカンタリアの魔導士たちがする。なかなか噛めない氷を口に含んでいる感覚だが、独特の甘味がするのだ。

「懐かしい！ 飴なんか何年ぶりだろう？」

ユキノは包みを解いて、大粒の赤い飴を口に入れる。

「……ん？」

「冷たいでしょ。魔法で冷やしているのよ。包み紙は少しすると溶けて空気に戻る仕組みなの。便利よね」

「へー、ありがと！」

氷飴にかける魔法ならヴィヴィアンもわかる。時々ナタリアたちに頼まれて作ってやることもある。飴を作ることはできないが、氷飴にするための手順はそこまで難しいものではない。

「ヴィヴィアンも手伝いなさい」

「えー」

ユキノは席を立ち、ナタリアとローザを手伝いに行った。

「ほら早くしなさいよっ」

「うっ、頭痛くなってきた」

言ってみたものの、ローザの白けた視線を受けてすぐ立ち上がる。

「……わりい」

彼女なりのからかいのつもりだったらしく、ローザはふっと小さく吹き出した。可愛らしい行動だとは思ったが、あの白けた視線は本当に痛かった。

「いいよ、休んでいても。だって久しぶりのご飯だったもんね」

「でも動かないと太るわよー」

ローザの優しい言葉に続けてナタリアにそう言われ、ヴィヴィアンは渋々立ち上がる。確かに、食後にすぐ休むのはよくない。特に今はまともに食べ物を摂っていなかった身体にいきなり養分が流れ込んだのだから、脂肪への変換率が高くなっているはずだ。……友人の一人がそういつていた。

数ヵ月後くらいに脇腹の肉が気になりだす自分を想像し、それは嫌だと全力で思う。

「喜んで働かせていただきましょう、はいはい」

「可愛くないわね」

からかうようなナタリアの声に、ヴィヴィアンはテーブルの食器を持ち上げながら少しむっとする。

「じゃあどうすりゃいいんだよ？」

「その素敵なプロポーションを心配して言ってあげてるのよ？ ……何よその目。いいじゃない褒められてるんだから。もう少し嬉しそうにしたら？」

「何言ってるんだよ馬鹿。てめえただ俺をからかいたいだけじゃねえか」

「そんな照れ隠ししなくていいのよ。ヴィヴィアンはあたしのこと大好きなんだもの」

ナタリアはヴィヴィアンをからかうとき、本当に楽しそうにする。

「その根拠のない過剰な自信は一体どこからくるんだよ」

「ヴィヴィアンあたしのこと嫌い？」

「嫌いじゃない」

真っ直ぐに見つめられたら本当のことを言うしかない。こういう時に嘘をつくことほど、無駄なことはないのだ。

「ほら！」

ナタリアは嬉しそうに駆け寄ってきて、ヴィヴィアンの頬をつつく。思わず仰け反ろうとして、食器棚の扉に激突する。背中痛み顔をしめると、ナタリアはヴィヴィアンを見つめながら実に楽しそうに笑った。

「あんたは絶対嫌いって言わないの、あたしのこと。嫌いじゃないイコール好きってことじゃない！ これを根拠といわずになんていうのよ」

「果てしなく面倒くさい思考回路だ。何だその理論……嫌いじゃないけど好きでもないってこともあるかもしれないって可能性は寸分も考えないのか？」

「ナタリア暴走してるよー」

ローザの一言でナタリアは仕方なさそうな笑みを浮かべ、食器洗いに参戦する。持っていた食器をユキノにパスし、ヴィヴィアンも

台拭きを片手にテーブルに戻る。片付けは四人で共同すればあっという間に終わった。

「じゃあ私たち、帰るね」

ローザはそういつて店の外に一步踏み出したが、ひさしの下ですぐに足を止めた。見れば、街には小雨が降り始めている。

「あつ、雨じゃない！ ヴィヴィアン、傘借りるわよ」

「いいけど、穴あいてるかも」

夏の天候は変わりやすい。この雨も数時間、いや数分でやむかもしれないし、明日まで延々と降り続けるかもしれない。

ローザは傘立ての中から、前にヴィヴィアンの母が使っていた傘を取り出した。ナタリアはヴィヴィアンの傘を使うようだ。二つとも微妙に穴があいていたが、ごく小さいものだった。もしも酷いようだったら魔法で直してやろうかとも思っていたが、必要なさそう
だ。

「じゃ、明日にでも返しにくるわ！」

ヴィヴィアンに向かって大きく手を振って、ナタリアは弾むような足取りで石畳を歩いていった。その後を、ローザが追いかけていく。雨はだんだん強くなってきていた。

「……どうせ毎日のようにうちに来るだろお前らは」

遅れて呟いた声は、姉妹には届いていないだろうが。

「で、お前はどうするんだ」

隣で姉妹を見送って手を振っていたユキノに目をやれば、ユキノはヴィヴィアンを真っ直ぐに見つめて口を開く。

「ここに」

いたい、と言うであろう彼の言葉を、ヴィヴィアンはぶち切った。「うちにいたって、もうやることないぞ」

「だって俺」

「言ったら、俺は面倒臭いことが嫌いなんだ」

弟子を取るならば責任を持って一人前にしてやりたい。完璧にやらなければいけないから面倒臭いのだ。適当でいいならこれほど美

味しい依頼はないが。

そういえば、依頼主に断る旨を伝えなければいけない。ヴィヴィアンは頭一つ分くらい下にあるユキノの顔を見下ろした。

「依頼主と、今連絡つくのか」

力なく首を横に振るユキノに、ヴィヴィアンは少し困る。

「じゃあどうするんだよ。これじゃ了承も拒否もできない」

「……わかんない。旅費は片道分しかないし」

ユキノの青い瞳は不安げに曇っていた。少し可哀想になったが、もしもこれからずっと一緒に暮らしていくことになったらと思うと、優しい言葉のひとつもかけてやれなかった。

「持ってきた金貨、使えばいいだろ」

「ヴィヴィアンとナタリアとローザは、俺のこと気持ち悪いって言わなかった」

「は？」

いきなりずれたことを言い出すユキノに、ヴィヴィアンは思わず不信感をあらわにした反応をしてしまった。ユキノは少しだけ笑った。苦し紛れの笑みだった。

「ちょっと嬉しかったんだけどな。俺のこと認めてくれる人が、こんな遠い異国で見つかるなんて思ってたから」

そう言って店の奥に引込むユキノを目で追えば、彼は自分の荷物をまとめていた。胸の奥で何かつかえるものを感じるが、ヴィヴィアンは彼を止めることができなかった。

「ありがとう」

ユキノは荷物を抱えたまま、ヴィヴィアンに向き直って深々と礼をした。ヴィヴィアンは何も言えず、ただ気まづくなる。良心が疼く。

こんな冷たい雨の降りしきる中、彼を追いつ出すという自分は心の狭い人間だ。

「また俺みたいな弟子入り志願者が来たら、そのときはもっと優しくしてやってね。お世話になりました」

そう言い置くと、ユキノは激しくなってきた雨の中を駆け出していった。

行くあてなんて、どこにもないくせに。帰る場所は果てしなく遠い異国で、そこにすら戻る手立てがないくせに。彼は持参した金貨も置いていってしまったのだ。

「おい、ユキノ！ 待て！」

叫んだ声は絶対に彼に届いているはずだったのに、彼は止まらずに走り続けていった。ヴィヴィアンはどうしようもなくもやもやした気持ちを抱え、玄関前に座り込む。

仕事がらみでここまで後味の悪い思いをしたのは初めてだった。

第六話

雨音

暫くの間、ヴィヴィアンはユキノの消えていった方を見つめていた。もしかしたら戻ってくるかもしれないと思ったのだ。自分でも何故待とうとしているのかと、馬鹿げた気分になった。

自分が追い出したのだ。冷たい態度で弟子入りを断り、雨の中を駆けていく彼を追いもしなかった。それに今更戻ってこられても、また弟子入りを渋ることは間違いない。

それでも、なんとも情けないことに、ヴィヴィアンは彼を見捨てるという行為をきっぱりと為せなかった。だから面倒なのだ、少しでも人と関われば情がうつってしまう。

立ち上がって依頼用の箱の中身をチェックし、一枚の紙切れを拾い上げて店に戻る。依頼は近所の配管工からだ。工事の手伝いを頼みたいということなので、仕事着に着替えて出かけることにした。

残っていたのはヴィヴィアンの父が使っていた傘だ。開いた傘には大きな穴が幾つも開いていたので、面倒臭いと思いながら修復の呪文を唱える。防水性もなくなってきていたので、撥水の呪文もプラスしておいた。魔法は上手くかかり、傘は新品より性能がよくなった。しかし、それでもヴィヴィアンの心はあまり弾まない。

仕事着の上着は二種類あるが、あまり悩まずにジャケットタイプの方を選び取った。黒無地のシンプルなジャケットだが、右肩に「comodin」という、店名の刺繍がしてある。流れるような筆記体の刺繍は、ヴィヴィアンの母が魔法でやった。軽いし袖をめくってボタンで留められるようになっていたので、こういう夏期の作業では便利だ。

もう一つあるのは外套で、これは本当に魔力を必要とする大掛かりな依頼が来た時にしか着ないものだ。配管工の手伝いなら前にも何度かしたが、特に大掛かりな魔法は使わずに済むことが多いので、外套は使わなくて良いと判断した。

「……変かな」

鏡の前で呟いた。上と下のバランスが良くないので、ズボンを変えたほうが良さそうだ。どうせ地下に行くのだし、ズボンなど気にも留められないだろうが、一応仕事をしに行くので気になってしまふ。

ズボンを白のスキニーに変えてくると、先ほどよりは見栄えが良くなった。傘を差して店を出て、魔法陣を描いて施錠魔法をかけてから指定の場所に行く。

「やあヴィヴィアン、依頼に気づいたんだね。降りて」

配管工は気さくな笑みを浮かべ、ヴィヴィアンを地下水路に招き入れた。くしゃくしゃした白髪混じりの茶髪を掻きながら、配管工はこちらを手招いている。そのタータンチェックのシャツとアイボリーのつりズボンには、かなりの泥汚れが付着している。彼はずるいことや誤魔化しが嫌いで、真面目に働く人だ。だからこうして時々は何でも屋の手を借りながらも、与えられた仕事を十分にこなす。はしごを一段一段降りていけば、特有のよどみきった臭気に気持ちが悪くなった。持っていた傘は路上に放置するわけにもいかず、とりあえずはしごに引っ掛ける。

「相変わらず最悪な職場だ」

思わず呟くと、配管工は笑った。地下水路の壁には等間隔で燭台が設置してあるが、蠟燭の明かりは弱弱しいものだから、足元がよく見えなくて危ない。

「今日も上司がサボりだからね。帰ったら上へはこの依頼料の倍請求してやるよ。そうしないとやってられん」

配管工は足元で何かやり、唐突に明かりをかざしてきた。どうやら足元にランタンがあったらしいが、ヴィヴィアンは暗所での視力が特に悪いので気づかなかった。明かりに照らされた水路に流れる水は濁り、よどんでどろどろしていた。じめじめした空気と臭いに耐え切れなくなり、ヴィヴィアンは呪文を唱えて空気を清浄化してみた。

「あ、今回の報酬いくらですか」

「銀貨二枚でどうだね？　これだけしかやれなくて悪いな」

銀貨二枚あれば数日は凌げる。後は他の仕事を見つければ問題はないから、ヴィヴィアンは頷こうとした。しかし、仕事を見つけれない可能性も考えて、少しだけ要求を高くしてみる。

「んー、じゃあ少しだけランクアップしてください。銀貨三枚にして、後で上からふんだくる分を増やすっていうのは？」

「ふむ、いいアイデアだ。君はいつも良く働いてくれるから、文句はないよ」

「じゃあ、取り掛かりましょうか」

大概の場合、ランクアップの申請は認められる。ヴィヴィアンはポケットから領収書として使っている上質な紙と愛用の万年筆を取り出し、小さく魔法陣を書きこんで自分の名前を描いた。そして、万年筆を配管工に渡す。

「誓約書にサインを。後ほど領収書に変化します」

「毎回その瞬間が楽しみなんだ。魔道士は本当に面白い」

配管工は上機嫌でサインし、支払い金額を記入した上でヴィヴィアンに紙とペンを返した。それをジャケットの内ポケットにしまうと、ヴィヴィアンは配管工に続いて地下水路を遡っていった。

「今日はね、水路の分岐点を増やす魔法をかけてもらいたいんだ」
彼に案内された場所は、チョークで大きくバツ印が描いてある壁だった。

「この壁を掘り進んで金物屋の路地裏まで水路を引きたいんだ」

「とすると、結構長くなるな……　全体図はありますか？　距離までわかるもつといいんですが」

ヴィヴィアンは配管工に渡された地下水路の全体図を元に、空中に大きな魔法陣を描きすすめていく。魔法陣は淡い黄色に発光しながらその場に留まり、ヴィヴィアンの命令を待っていた。配管工は楽しそうに魔法陣が形成されていく様子を眺めている。

やがて距離や深さのイメージが終わると、魔法陣は完成する。ヴ

イヴィアンは、今度は右手の人差し指を今描いたばかりの魔法陣の縁にくっつけながら呪文を紡ぐ。

「……ティアロ・ヴィル・レウツ」

方向指定もあったので、長い長い呪文になった。二十の単語による、掘削の呪文だ。掘削の呪文単体なら簡単なほうに分類されるが、深さや距離に指定をつけるとなると途端に長くて難しい呪文に変貌してしまう。

ひとときわ明るく光った魔方陣は、壁に焦げ付いた。そして、じわじわと壁を崩し、石造りの壁が削げたところで勢いよく掘削を始めた。

掘った時に出た土は、全て森の奥に積み上げることが命令してある。森の奥に拓けた場所があるので、そこに積んでおけば問題はない。

「そろそろ止まるかな」

「……ヴィヴィアン、お前は本当にすごいな」

「これくらいの呪文だったら街のほかの魔道士でもできますよ。まあ、正確な場所を掘れるのはごく少数でしょうけど」

やがて掘削の音が止まった。しかし、舗装していない地下水路は、水を吸ってしまつて水路の役割を果たしていない。

「ここからはこれから来る仲間と共同でやるよ。本当に世話になったね」

望みがあれば料金を割り増ししてこの先の作業をやってもよかったが、たぶん配管工には割り増しできるほどの所持金がないだろうという予想がついた。

「報酬の銀貨三枚だ。ありがとさん」

配管工は財布から銀貨を三枚取り出し、ヴィヴィアンに渡した。ちらりと見えた財布の中身には、銀貨が四枚しか入っていなかった。

「確かに受け取りました。領収書になります」

ヴィヴィアンは持っていた契約書を配管工に渡した。配管工の手の中で、ヴィヴィアンが書いた文字は流れるように変化していつて、

最終的には契約書から領収書に文面がチェンジした。その最後の瞬間まで、配管工は食い入るように見入っていた。

「今日も楽しいものを見せてくれてありがとうな。また頼むから」

「ありがとうございます。それじゃあ」

ヴィヴィアンは薄暗い地下水路を歩き、傘が引っ掛けてあるはしごまで一人で歩いていった。水路から出ると大雨で、地下で作業する配管工が心配になってきたので、こっそり魔法を使って水路の入り口に真空の蓋をしておいた。これで地下水路に浸水して配管工が溺れることはないだろう。簡単な呪文だから、たぶん彼の仲間が入ってくる時には破れてしまうだろうが。

店に帰って、まずはユキノがそこらで様子を窺っていないかどうかを確認した。それらしき姿はどこにも見えない。びしょ濡れの身体で酒屋に駆け込んでいく若者が一人見えた以外は、まず人の姿がなかったのだ。

鍵の呪文を解除し、傘を畳んで傘立てに入れた。依頼受けには何も入っていなかった。ジャケットを脱ぎながら、報酬の銀貨を使って何を買うか考えた。夕飯は何にしよう。

しばらく食卓に伏せていたが、やがて眠くなってきてソファに移動した。銀貨をつまみ上げ、手に握りこんで目を閉じる。起きたら夕飯を買いに行こう。

ソファに寝転がって目を閉じ、しばらく虚ろな感覚を彷徨っていた。やがて、誰かが来たという合図の呼び鈴で深淵から浮上する。

「はい、どんな御用でしょう」

起き上がって髪を整えながら、一度は脱いだジャケットを再び羽織る。上がってこないところを見ると、どうやらまた依頼人らしい。そう思って玄関まで出て行くと、見知った顔にヴィヴィアンは思わずため息をついた。

「何だ、ローザか」

どうやら傘を返しに来たらしい。傘を口実に明日もナタリアが飛び込んでくることを予想していたので、少し意外と言えば意外だっ

た。

まあ、どうせナタリアは傘があっても無くてもここに来ただろうとは思うが。

「夕飯の買出しをした帰りなの。傘も借りてたし、ユキノさんが心配で来ちゃった。うまくやってる？」

ローザは自分のものらしいライムグリーンの傘を差ししていた。そして、ヴィヴィアンに二本の傘を差し出し、にこりと笑う。

その真っ直ぐな笑顔を見ると、嘘はつけなかった。けれど、嘘をつくと同じくらい、本当のことを言うのも嫌になった。

傘を受け取りながら、なるべく自然にローザから目をそらす。

「……あいつなら出て行った」

「えっ」

「一応引き止めたけど、行っちゃった」

顔を見なくても、ローザがどんな表情で固まっているかはだいたい解っていた。

「行っちゃってどこに？ ユキノさん、泊まるどころなんて」

「あいつ金も置いてった。つか、てっきりお前んちにいるんだと……」

しばらく返答はなかった。不安になってローザを見ると、彼女はちよっと泣きそうな目をしていた。

「ヴィヴィアンがあんな冷たい態度ばかりとるからだよ」

わかってはいた。けれど、実際にそう言われると刺さるものがあった。ヴィヴィアンは暗い赤色の髪をかき上げ、言い訳を探す。ちらりとさえ、もっともらしいことが浮かばない。

「しょうがないだろ」

かろうじてそれだけ言い返した。ローザはヴィヴィアンを不信感たっぷりに見つめ、ライムグリーンの傘の柄を指の色が変わるほどきつく握り締めていた。どうやらヴィヴィアンは今の一言で、温和で優しいローザをとことん怒らせてしまったようだ。

「何がしょうがないの？ 遠い国から、わざわざヴィヴィアンだけ

を頼ってきてくれたのに。中途半端な気持ちでヴィヴィアンに会ったんじゃないのにつ」

徹底的にユキノの肩を持つローザに、何だか居心地が悪くなる。いつだって中立の立場でいてくれた彼女に、裏切られた気分になった。そうだ、思ってみれば彼女は、今までだってこうやっていざこざが起きたときに誰の肩も持たなかったはずだ。

「あいつの言い分がそうなら、俺だって同じことが言える。俺も中途半端な気持ちであいつを弟子にすることはできなかった」

本心だが、言わなければ良かったと思った。ローザは俯いて、齒がゆそうに表情をゆがめる。傷つけたことは明白だった。感情的になりすぎたのだ。

「……そろそろ魔物が出る頃だぞ。送ってく」

ローザは黙って頷いた。そして、ヴィヴィアンが施錠魔法をかけて歩き始めるまで、じっと挙動を窺っていた。

歩き始めてからも彼女はずっと無言だった。雨の音だけが空しく響く。本格的に気まずくなった空気をどうしたらいいのか途方にくれているうちに、アイアランド家まであと少しになった。角を曲がって少し歩けばもう彼女の家だ。

「気をつけろよ。何かあったら手紙よこせ」

何か言わなければいけないと思い、話しかけてみた。ローザはこくりと頷いた。ここだという手紙とは、ヴィヴィアンに依頼をするための紙だ。魔法陣が描いてある紙で、送り主が手紙を放り投げて飛ばせばヴィヴィアンの元にたどりつくようになっている。

「十時でよかったか、依頼」

「……うん」

家の前についた。ローザは玄関のドアを開け、小さくヴィヴィアンに礼を言って手を振った。ヴィヴィアンも手を振り返し、家に戻らずに商店街へ向かった。

パンを買ったが、その他にはもう食材が殆ど売り切れていたので、家にあるバターをつけて食べることにする。幸い昼食が豪勢だった

から、ヴィヴィアンはさほど空腹を感じていなかった。

雨はどんどんひどくなっていた。雷も鳴り始めた。店に入つてすぐ、ヴィヴィアンはテーブルの燭台に魔法で火を灯した。本来なら蝋燭がある位置に、火だけが留まって揺れている。こうすれば蝋燭が切れる心配はないし、勝手に消えて困ることもない。

しばらく燭台の火を見つめ、物思いにふける。屋根や窓に叩きつけるような雨の音を聞きながら、買ってきたパンを食べるか食べないかで迷う。

「ヴィヴィアン」

後ろから名前を呼ばれた気がして振り返る。振り返っても窓があるだけで、特に誰がいるわけでもない。一応窓に歩み寄ってみたが、何も変わった様子はなかった。

「……何か調子狂う」

それでなくとも、ローザとあんな空気になってしまった後なのだ。ヴィヴィアンは深く思考の渦にはまっていく。魔道書でも読もうかと席を立ち、本棚を探っていると、聴覚に何か叫び声を捕らえた。魔物の吠え声だ。

時刻は九時で、アイアランド家からの依頼の時間はまだ一時間も先だった。けれど無性に不安に駆られ、ヴィヴィアンは仕事用の外套を羽織った。防水呪文をかけて、雨の中でも傘を差さずに戦う用意を整える。眼鏡にも防水呪文をかけ、ヴィヴィアンは家を出てすぐに施錠魔法をかけた。

第七話

雨夜

ローザが返しにきてくれたおかげでまた三本になった傘の中から自分のものを選んでみると、足元で黒い影が躍る。即座に電撃を放つ。子ネズミほどの大きさがなかった黒い影は、その場で焦げ付いて消滅した。傘を片手に夜の街へ踏み出せば、雨音の中にブーツの足音が異質に響く。

酒屋は明るい。もともと扉が無いに等しいほどの仕様だし、ここには毎晩色々な人が集まるのだ。流れ者から街の政治家まで、本当にあらゆる人があの酒屋で酒を買っていく。酒屋の中に酒場も入っているのです、そこで酒を飲み交わして酔っ払い、ヴィヴィアンに道を尋ねてくる人も多い。酔って支離滅裂なことを言った上に、そのまま玄関で寝てしまうとか。

「ん？」

酒屋は明るい、その他は漆黒の闇だった。隣の花屋は早々に店を閉めていたし、斜め向かいの帆布店はもとそんなに明るくはない。それでもいつもは、もう少しだけ明るいはずなのだ。

「あ、街灯が消えてるのか。どうりで良く出るわけだ」

魔物は闇夜を好む。常識だ。付近の街灯は街の整備課の人たちが毎晩蝋燭に明かりを灯すというだけの簡単な仕組みなので、風や雨の強い日はほぼ意味がない。

ヴィヴィアンは家の付近の街灯を全てともしなおすことにした。魔物は光を嫌うため、閃光で攻撃すれば一発で消滅する。だから閃光とまではいかなくとも、魔物の好きな闇を少しでも減らそうと思っただのだ。

酒屋の前の街灯を魔法で灯し、にぎわう店内を少し覗いてみた。この中の気楽な連中は、誰も魔物の心配などしていなさそうだった。ヴィヴィアンの家の付近で魔物があまり出ないのは、この賑やかさと酒屋の明るさが幸いしているのかもしれない。

自宅の門灯はどうだろうと思い、振り返る。二階建て屋根裏つきの、深緑色の屋根をした家。なるべく魔物の被害を避けたいので、魔物避けの結界呪文を庭から門まで全てに張ってある。今のところ、どこにも異常は見られない。

ナタリアとローザは無事だろうか。雨の日には水を嫌う魔物が出なくなるから、大丈夫だと思いたい。そう思いながら、ふと自宅と隣の家の間にある細い路地に目を移すと、人の脚らしきものが見えてぎょっとした。

まさか魔物にやられて死んだのだろうか。ヴィヴィアンは水溜りを避けもせず、倒れている人物に駆け寄った。近くまで寄ると、その足が見覚えのある変な履物を履いていることに気づく。

全身を見なくても、その変わった履物や衣類の裾を確認しただけでヴィヴィアンにはこれが誰か解った。

「……ユキノ」

倒れたユキノの全身はずぶ濡れで、濡れた黒髪が白い頬に張り付いている。息はしているように見えたが、浅く速く上下する胸以外の部位はぴくりとも動かない。ヴィヴィアンは息を呑んだ。

そのときユキノの背中あたりに小さな魔物が忍び寄っているのに気づき、ヴィヴィアンはとりあえず呪文を唱えて炎を起こした。炎の明るさで、路地の魔物たちは消滅するか、あるいは怯んで近寄らなくなった。

「おい、起きろ」

声をかけて、少しためらってからその首筋に手を差し入れて上半身を起こしてやる。濡れた衣類はずっしりと重く、おまけに冷えきっていた。しかし、対照的に衣類に包まれたユキノの身体は驚くほど熱かった。

「ユキノ、しっかりしろ」

「……、だ」

少し焦って彼を揺すってみると、薄目を開けてうわ言のように何か呟いた。激しい雨の音で掻き消え、何を言っているかは聞き取れ

なかった。

「何だ、もう一回言ってみろ」

「ばかだ、俺」

「意識あるじゃねえか……」

ヴィヴィアンはユキノの右腕を掴み、肩に背負うようにしてその身体を持ち上げた。ユキノはつま先で地面をこするような形でヴィヴィアンに引きずり上げられているが、全く何の抵抗も示さなかった。

施錠の魔法を解いて家に入り、内側から施錠呪文をかけてユキノをとりあえず床に降ろす。仕事着の外套を脱いでコート掛けに引っ掛け、ヴィヴィアンは空中に魔法陣を描いた。ユキノは床に伏せたまま起き上がろうとしない。

ヴィヴィアンは、雨水を全て流しに移す魔法をかけた。水を蒸発させても良かったが、そうするとユキノが熱さでひどく苦しむことになる。

びしょ濡れのユキノは、すぐにもとの濡れていない状態に戻った。ヴィヴィアンは再び彼を背負い上げ、ソファに寝かせた。

「待ってろ」

高熱で苦しんでいるユキノを見ていたたまれなくなってきた。ヴィヴィアンは小さなタオルを濡らしてきて額に乗せてやった。衣類が二、三枚ほど重なっているように見える襟元を少しあけてやり、腹は冷やさないようにブランケットをかけてやる。人を看病するのなんて初めてだが、幼い頃母にやってもらったやり方を真似てみた。

ヴィヴィアンは二階に上り、自室のドアを開けた。机の上にくっつか小瓶があるのを見て、その中から一種類だけ選び取る。これは前に、友人から貰ったものだ。中には植物の種子が数粒入っている。解熱に有効な薬草の種らしいが、詳しい名称は忘れた。

「……ヴィヴィアン」

階段を降りると、ソファの上で苦しそうにしているユキノがこち

らを向いていた。虚ろな青い目に見つめられ、一瞬だけ体の動きが止まるのを感じた。

「何」

「俺、帰る」

「アホか。どこに帰るつもりだよ、寝てろ」

小瓶の蓋を開けながら、そういえばナタリアとローザの依頼の間を過ぎていることに気がついた。ヴィヴィアンは小さめの魔法陣をテーブルに描き、描いた魔法陣のふちに指を這わせて呪文を囁く。「ナタリア、ローザ。俺だけど」

呪文が完了してすぐに喋りかけてみた。これと同じ魔法陣がナタリアとローザの部屋にも描いてあって、呪文をかければ二つが通じる仕組みになっているのだ。家に行き来することはできないが、音や匂いや振動ならばこの魔方陣でやりとりできる。

「……おい」

「用件は何よ」

「何怒ってんだよ」

原因なんて一つしか見当たらない。ローザのことだから、姉にヴィヴィアンがユキノに対してどれほど酷い仕打ちをしたかなんて、洗いざらいぶちまけているに違いないのだ。

「ユキノを追い出したんですってね。失望したわ」

「そのことで話がある。うちと花屋の間の路地あるだろ、そこにあいつが倒れてて」

ソファでだるそうに目を閉じていたユキノが、少しだけ反応する。

「……えっ。ユキノ、大丈夫なの？」

「とりあえず拾ってきたけど、凄まじい熱で寝込んでる」

「よかった、雨の中放置したりしなかったのね」

「当たり前だろ、魔物に食われる」

あの時、ユキノの存在に気づいて本当によかったと思う。もしも明日の朝、家を出てすぐに路地裏のユキノの死体を発見してしまっただろうなっただろう。少なくともヴィヴィアンは、追い出してよ

かったとか、これでもう弟子入りを志願されなくて済むなどと笑い飛ばせる非情さは持ち合わせていない。

「今ユキノは話せるかしら」

ナタリアの声に、ソファに横たわるユキノをちらりと一瞥する。

ユキノは薄目を開けて虚ろに天井を眺めていたが、ヴィヴィアンの視線に気づくことはなかった。

「無理っぽい、起き上がれないから。あ、依頼なんだけど」

「いいわ、ユキノの看病で忙しいでしょ？ 雨の日は水が苦手な魔物があんまりでなくなるし、明るくしておけば大丈夫よね」

言いたかったことはナタリアがすべて解っていた。ヴィヴィアンはほっとして、肩の荷が下りたような気になる。

「こいつを置いて俺だけ店を離れるわけには行かないからな」

もつともらしい理由は簡単に思いついたが、こうしてユキノを介抱しているのは割り切れない感情での判断に従った部分が大きかった。それは、ヴィヴィアンの中でもうユキノを見捨てたくないという気持ちが固まってきているからなのかもしれない。

自分が一度放り捨てたおかげで、今ユキノは苦しんでいる。その様子をまざまざと見せ付けられたわけだから、ヴィヴィアンもかなり参っていた。クライアントを楽にしてやるのが何でも屋の仕事なのだ。

自分が関わった人々が魔法のおかげで笑顔になることを、ヴィヴィアンはきつと深く望んでいた。おそらくそれが、ヴィヴィアンが何でも店をやりたいと思う理由なのだ。

「ちゃんといっていてあげるのよ。明日あたしたちお見舞いに行くけど、もしこじらせたりしてたら」

「解ってるって、心配すんな」

この言葉には、長らく返事が返ってこなかった。魔法陣の向こうの方で微妙に何か言いあっている雰囲気はあるから、ヴィヴィアンはナタリアかローザの声が聞こえてくるまで待った。

「あ、あのね」

ローザの声だ。ほら早く言っちゃいなさいよ、などとナタリアが後ろで急かす声も聞こえた。急かしているというより、からかっているような声色だ。

「えっと、ヴィヴィアン。さっきはごめんなさい。私、ひどいこと言った」

「別に、何も気にしてない。俺も大分感情的だったし」

「よかった。もう許してくれないかと思った」

どこまで気の小さい子なのだろうとヴィヴィアンは少し笑った。ヴィヴィアンがローザを切り捨てようとするはずはない。色々な不満を抱きつつも、ヴィヴィアンはそれなりにこの姉妹とは上手くやっているのだ。

「ユキノさんに、早く元気になってって伝えてくれる？」

「ああ。言っとく」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみヴィヴィアン！」

ナタリアの元気の良い声を聞いて、ヴィヴィアンは繋がりを解除する呪文を呟いた。

ソファに寝たままのユキノは相変わらず苦しげに呼吸を続けていたから、ヴィヴィアンはその額に乗せたタオルをもう少しだけ冷やす魔法をかけた。一向に止まらない雨の音を聞きながら、ヴィヴィアンは買ってきたパンを半分に割る。この雨はなかなか止みそうにない。

第八話

疲弊の果てに

翌朝、ヴィヴィアンは激しい首の痛みには呻きながら顔を上げた。夜通しユキノの看病をしていたため、二階の自室に行かず食卓で寝ていたのだ。

解熱剤となる薬草を魔法で発芽させたものの、上手く育てられなくて苦戦した。結局、植物に関する魔法を扱った魔道書を探したりする手間もかかり、ヴィヴィアンはあまり寝ていなかった。

「痛たた……」

百八十九センチの長身にジャストフィットするわけではない食卓だから、ヴィヴィアンはかなり首や腰に負担をかけて寝ていた。身体を起こして首を鳴らしていると、ソファの上のユキノがもぞりと動く。

「おい、解熱剤は効いたか」

起きたのだらうと思って声をかけると、ユキノはしばらくソファの上で動かなかった。しかし、数秒していきなり跳ね起きた。その行動にヴィヴィアンは驚き、思わず魔法をかける構えをしてしまった。

「あれ…… 何でヴィヴィアンがここにいるの」

印を結んだ指をユキノに向けているヴィヴィアンを、向けられている本人は呆けた目で見ていた。そして、ヴィヴィアンから目をそらしてブランケットを持ち上げてみたり、乱れた衣類を直したりする。

「ここ、俺んちだけど」

手を下ろしながら言ってやれば、ユキノは目を見開く。

「え、俺、ちゃんと出てったのに。絶対出てったって。だって俺、最後に」

「その路地裏でぶっ倒れてたのを拾ってきてやったんだ、ありがたく思え」

ちょっと焦り始めたユキノにぴしゃりと言ってやれば、彼はまだ腑に落ちないような表情で黙り込んだ。そして、かんざしで結った髪を解いて再び結いなおし始める。

「昨日微妙に会話したけど、何も覚えてないのか？」

「全然」

確かに朦朧としていた彼だから、意識は鮮明ではないだろうという気はしていた。ヴィヴィアンはコップに水を汲み、ユキノに手渡してから自分の分も汲みに行く。

「熱は下がったのか」

魔法で冷やした水で喉を潤し、ヴィヴィアンはそのままキッチンから背後を振り返って問う。ユキノはソファに座って姿勢良く水を飲んでいたが、ヴィヴィアンの視線に気づいて頷いた。

「大丈夫っぽい。まだ何かだるいけど」

「もう少し寝てろ。たぶん朝一番でナタリアたちが来るから、何か持ってきてくれると思う。昨日何も食ってないだろ？ パンが半分しかないけど、食うか」

テーブルに置きっぱなしだったパンは微妙に乾いていたが、食べるのに支障はないだろう。昨日は慣れない看病のおかげで忙しく、疲れきっていたので食事をする気力すらなかった。半分は朝食にとっておいたパンだが、今のヴィヴィアンはあまり食欲がない。

「いいよ、ヴィヴィアンの分だろ」

「病人尻目に自分だけ飯食えるほどあさましくない」

「……じゃあもう」

ユキノは素直にパンを半分受け取った。そして、もう食べ始めた。万全ではないが、ちゃんと回復はしたようだ。少しでも安心した。

「朝のうちに行かないと食料なくなるから、ちょっと市場行ってくる。絶対そこから動くな。帰ってきたときちょっとでも物が動いてたらまた追い出すぞ」

ユキノが家を荒らすことはあまり考えられなかったが、一応そう釘を刺しておいた。ユキノはパンを口に含んだまま頷き、空いた手

を振った。

「それから、ローザが早く元気になれって」

ふと思いついて言い忘れていたことを告げれば、ユキノは急いでパンを飲み込もうとして少し咽た。

「……行ってくる」

「げほっ、いてら、っしやい」

大丈夫かこいつ、と思いつながら、ヴィヴィアンは家を後にした。

施錠魔法は解かずにおいたので、出る分には良いが入れない仕組みだ。短時間の外出なら、いちいち魔法をかけなおさなくても効力は保てる。

依頼受けには何も入っていない。ヴィヴィアンはそういえば外出するのにだらしない部屋着でいることに思い至った。

昨夜は薬草の生長に二度ほど失敗し、服が汚れたので二度ほど着替えている。ナタリアが干しておいてくれた洗濯物の中から適当に手に触れたものを選んで着たので、上下のバランスというものがまるでない。上はぱりっとした黒いシャツだが、下はだぼだぼのジーンズだ。ちょっと可笑しいが、今更引き返すのも面倒だ。

市場は街の中央の広場と、海寄りの町の外れの二箇所で行われることが多い。海よりとはいえエンカンタリアは広いので、この街は海に面してはいない。ここから海までは、歩いて五日くらいかかると予想される。

ヴィヴィアンは中央の広場を目指した。

「いらっしやい！ 久々だねヴィヴィアン、活きの良いのが入ってるよ！」

「魚か…… 暫く食ってないな」

「らっしやいらっしやい！ 朝摘みの日和草だよ！」

「サラダにはもってこいだろうな」

色とりどりの魚が並ぶ魚市を通り過ぎ、八百屋の市場を通り過ぎる。日和草はエンカンタリア原産ではないが、様々な料理に合うことからたくさんの農家によって作られている野菜だ。この辺りの家

庭では、ほぼ必需といっても過言ではない。

「生みたて卵はどうだね？　大きさも味も一級品だ！」

「ランチには腸詰にしないか？」

「桃が入りましたよー、さあさあどうです？　この香りにこの色。

食欲をそそるじゃありませんか！」

「牛乳いかがですか！　絞りましたですよー」

「早くこないと売り切れちゃうよ！　菜摘孔雀の腿肉が銀貨たったの二枚だ！」

菜摘孔雀は富豪層の食べ物なので、ヴィヴィアンはスルーしておく。ちなみにこの菜摘孔雀というのは、非常に贅沢で、放し飼いにしてもえさとなる日和草以外の雑草は絶対に食べないことから菜摘孔雀という名がついたらしい。エンカンタリアでは、わがままで偏食の激しい人のことを侮蔑して菜摘孔雀と呼んだりもする。

今のヴィヴィアンの手持ちは、銀貨一枚と銅貨がやたらとたくさんだ。この状態では、一切れの腿肉すら手に入らない。菜摘孔雀は偏食が激しくて飼育費がかさむため、かなり高価なのだ。銀貨二枚でも安いと思えるのだから相当だろう。

朝市は食材が安いので嬉しい。いつも昼まで寝ているから、朝市の安売りにいけないことが多いのだ。今日は何故か早く起きられたから、ヴィヴィアンは少しだけ食費を節約できる。

「リング二つ」

青果店の赤いリングを二つ手に入れ、ヴィヴィアンはおまけで貰った手編みの籠に入れて市場を歩く。

「その魚くれ。赤いやつ」

「はいよ！」

澄んだ目の綺麗な魚だ。赤い体には黄色の斑点がある。名前は知らないが、魚といえぱりリエンスール家ではこれだ。焼くのは勿論のこと、煮物にしても良いし刺身でも美味しい。

ヴィヴィアンはさばいたことがないが、帰ったらユキノに頼もうと思う。もし彼でも無理だったら魔法でなんとかしよう。

「鶏肉買っていかないかい？」

「とりあえず魚にしとくんで、また」

「山菜は身体に良いわよ！　どうかしら」

「あー、山菜。どれがどんな味だか忘れるくらい長いこと食ってないなあ」

市場を抜け、ヴィヴィアンは家路についた。依頼箱の中身は相変わらず空だった。

家に入ると、暇そうに髪を結いなおしていたユキノが顔を上げた。「おかえりヴィヴィアン。市場どうだった？」

良く見ると、微妙に服装が変わっている。レギンスのようにタイトな黒いズボンは綺麗に畳まれてソファの上に置かれ、衣類の裾は彼のくるぶし辺りまで伸ばされていた。

「魚買ってきた。さばけるか」

籠を軽く持ち上げて見せれば、ユキノはソファから降りて駆け寄ってくる。

「俺にやらせてくれるの？」

目を輝かすユキノに、ヴィヴィアンは籠を渡した。

「やったことないから」

言いながら、ユキノの手に渡った籠の中からリンゴを一つ取り出した。歩いたら微妙に空腹になったので、間食しようという魂胆だ。「よし、任せろ！　米は残ってるかなあ。あ、ヴィヴィアン、俺の荷物どこか知らない？」

「多分路地にあると思う。まず行ってこい、花屋とうちの間だから」「行ってくる！」

ユキノはソファの上に籠を放置し、駆け出した。ヴィヴィアンは籠の中のもう一つのリンゴを、キッチンの簡易冷暗所として使っている箱に入れておいた。冷やしておいた方が美味しいだろう。これは何となく、ユキノも食べるかと思って買ってきてしまった分だ。

しばらくしてユキノは飛び込んできた。簡素な布で包まれた包みは雨を含んで随分重そうだった。

「あつた！ 良かった、魔物に荒らされてもいない。ヴィヴィアン、これ洗濯したいんだけど」

「貸せ。これ全部か？」

「あ、待って」

ユキノは荷物を開き、かんざしの予備らしきものを取り出して懷に仕舞いこんだ。他にもいくつか小物を取り出し、それらはソファの上に並べてユキノはぬれた衣類を畳み始めた。もともと畳んでいたものもあつたが、いちいち畳みなおしている。衣類のほかにも用途不明な白い長い布や、タオルほどの大きさの平織りの布などが何枚ずつあるのが見えた。

「おい、どうせ洗濯するんだから」

「ごめん、こういうの気になるんだよ……」

ユキノは畳み終えた衣類の上に、包んであつた布を畳んでおいた。

「洗濯したらすぐ乾かすから」

「えっ、いいよ魔法使うんだろ？」

「食事できたら今後について話し合うつもりでいるから。場合によつてはまた出てってもらうことになるし」

「……うん」

少し冷たい物言いになったことをまずいと思わなかったわけではなかった。けれどヴィヴィアンは濡れて重たくなった衣類を抱え、逃げるように階段を上った。樽の中には昨日入れておいた自分の衣類もあつたから、一緒に洗ってしまうことにした。

洗濯機の魔法陣を作動させ、植物由来の香料が入った洗濯用石鹼をかけながら樽に水を入れる。しばらくぼんやり窓辺に佇んでいたが、洗濯機の中の泡が床にまで漏れ出してきたのを見て慌てて呪文をかけかえた。水を入れ替える呪文だ。

おそらくナタリアは昨日、わざわざ手作業で水を入れ替えてすすぎと脱水をしたのだろう。

「ヴィヴィアーン！ 塩どこ？」

ユキノの声が聞こえた。ヴィヴィアンは樽の中から水を抜きなが

ら、階段に向かって大声を上げる。

「食器棚の引き出し！」

礼を言うユキノの声には答えず、ヴィヴィアンは水の抜けきった樽に再び呪文を唱える。樽の中の水を蒸発させる呪文だ。そうして服を取り出してみれば、からっと乾いていた。しかし何となく、畳むのが面倒なのもあってヴィヴィアンは自室に乾いた服を干してき

た。

昨日のナタリアは、時間の制限もあってか浴室と洗濯機近辺だけで掃除を断念したようなので、ヴィヴィアンの部屋は相変わらず散らかったままだった。

洗濯したユキノの私物を一式すべて持って階段を降りると、もう魚はおろされていた。

「炊けるまで時間あるから、魚まだ焼かないでおくよ」

「いいよ別に、やりたいようにやれ」

ヴィヴィアンはソファに腰掛けた。ユキノの私物は整理されてソファの前においてある小テーブルに載せられていたから、ヴィヴィアンは広いソファを悠々と一人で使っていた。

「……あとどれくらい？」

「三十分くらいかなあ」

「解った、じゃあ三十分で話をつけよう」

ヴィヴィアンは食卓に移動し、ユキノを促して正面に座らせた。今後どうするかは、今朝じゅうに話し合って決めておきたいのだ。

ユキノは急に真顔になって、姿勢を正す。それまでは平紐をサスペンダーのように使って、長くてゆったりした袖を捲り上げて固定していたが、彼はそれを解いて袖を下ろすと両手を膝に乗せた。

ヴィヴィアンはそんなユキノをまっすぐ見据えながら、まずは質問をぶつけた。

「とりあえず、お前は今のところどう思ってる？　これからどうするか、あては見つかったのか」

「……あては何にもない。このままじゃ帰るしかないけど、でも俺は魔法を学んで帰らないと意味がないんだ」

こちらを見つめるユキノの瞳は真剣そのものだった。ヴィヴィアンは軽く頭をかきながら、ちらちらと辺りを見回して彼に告げる。

「俺んちは見たとおり収入が安定しない上に、俺はまだ人に何か教えられるほど完成した魔道士じゃない。偉そうに胸張って師匠だなんて言えるレベルじゃない。だから師匠としては不適合で、弟子なんか取れるほど余裕はない」

「俺はそれでもいい。別に世界一強くなろうとしてるわけじゃないから。村ひとつ護れる力があれば、それ以上は望まない」

ヴィヴィアンが一人いたところで、彼の村が救われるかどうかは危うい。たとえユキノがヴィヴィアンと同列に並んだところで、彼が村を救えるかどうかはわからない。ならばもっと確実に力をつけてくれるほかの師匠の門下に入ったほうが良いのではないだろうか。「もし要望があれば、無償で首都圏の魔道士を探してやれないこともないけど」

「俺はここがいい」

「何で？　もっと完成したスキルが手に入るとしてもか？」

この街にだって、ヴィヴィアンしか魔道士がいないわけではない。ヴィヴィアンには少し劣るかもしれないが、他にももっと年齢層の

高い荘厳な魔道士たちがいるのだ。教会の神父あたりなら、教えるのも上手そうだと思うが。

「うん。ヴィヴィアンは素質があるって言ってくれたけど、首都の人がそうとは限らないし。折角認めてもらえたんだし」

「俺は別に」

「認めたわけじゃない、と言いつくした。しかし、ユキノが割り込んでくる。」

「だってヴィヴィアンは俺のこと、ちゃんと名前と呼んでくれるから。俺はふつう、知らない人にはバケモノとしか呼ばれない。ヴィヴィアンは初対面なのに俺と話してくれた。その気があれば魔法で遠ざける事だってできるくせに」

確かに、思ってみれば。そんな呪文を知らないわけではなかった。けれど、ヴィヴィアンはユキノを拒絶しきれなかった。モノ扱いして遠ざけることもできたはずだったのに、最初からそんな選択肢には思考が至らなかった。

ユキノの母国に興味があるとか、ユキノが同年代だからとか、そういうことは関係ない気がした。ただ、放っておけなかった。疲れ果てた旅人を無下にできなかった。きっとそれだけだ。

自分にそんな世話焼きな一面があることをヴィヴィアンは意外に思っていた。面倒くさいことは嫌いだし、責任がつきまとうことは嫌いだ。しかし、引き受けなければいけない問題なら、どんなに面倒でも責任が重大だとしても、ヴィヴィアンは途中でそれを放り出すことはしない。だから面倒くさい仕事なら、それなりに相手にも本気さと責任を求めるのだ。

「俺、真面目にやるよ。聞いたことは忘れない。学習能力は割と高いほうなんだ。だから読み方さえ教われれば、エンカンタリアの文法にもきつとすぐ慣れる」

ユキノはヴィヴィアンを相変わらず真っ直ぐ見つめていた。彼は信念や求める理想をはっきりとさせている。抽象的に『強くなりた』というだけの男ではないのだ。ならば、教えるほうとしても少

しはやりやすそうだ。

「絶対にここじゃなきゃ嫌か」

「嫌」

「後悔しないか」

「絶対しない」

何を訊ねても、答えは全て最初から解っている。それでもヴィヴイアンは、彼にひとつひとつ確認していった。

「後から文句言うなよ」

「うん」

「途中で逃げるなよ」

「逃げない」

「途中で死ぬなよ」

「死なないよ絶対」

「ちゃんと教えたこと守れ」

「うん。師匠は絶対だ」

「……やばい、他にも思いつく。あとから色々規約作るわ」

断ることもできる依頼だった。けれど、断ってしまえるほど他人のことを考えられない思考回路は持ち合わせていない。もしもここで断って、またユキノが路地裏で倒れていたら、ヴィヴィアンは絶対に後悔する。

「空き部屋あるけど自分で掃除しろよ」

「うん、あたりま…… え？ あれ、いいの？ それって、ヴィヴィアンの弟子にしてくれるってこと？」

「その、村の人だけ。そいつ、俺しか候補挙げなかったんだろ」
「うん」

「俺しか頼りがいないんだったら、俺だってまかされた責任を全うするべきだと思うから。お前には村人全員の期待が乗っかってるわけだろ。そう言うときだけ慈善活動じみて嫌なんだけど、お前がいればたぶん俺の生活は楽になるだろうから」

「やった！」

ユキノは満面の笑みを浮かべて飛び跳ねる。ヴィヴィアンは少し呆れながら、はしゃぐユキノを見て苦笑する。

「とりあえず飯作れ。俺は誓約書作る」

「了解です師匠！」

肩の荷が下りたようにすっきりした笑顔で魚を焼き始めるユキノに、ヴィヴィアンは少しだけ安心した。はしゃぎすぎる点は良くないが、ユキノの性格は嫌ではない。なかなか骨のある男ではないか。さて、誓約書には何を書けばいいだろう。市長への請求に使うような上質な紙に羽ペンで第一条、と記しながらヴィヴィアンは考える。

「なあなあヴィヴィアン、昼飯は何が良い？」

「お前のその金貨あるだろ。あれは半分くらい生活費に回すから、あれで何か適当に買ってこい」

答えながら、思いついたことを紙に書いていく。第一条、掃除と炊飯は義務とする。第二条、勝手に出歩かない。

「ヴィヴィアーン！ ユキノの具合は……」

突然入ってきた声にびっくりとする。背後を振り返ると戸口にナタリアがいた。ドアを開けてやると、ナタリアが料理をしているユキノを見つけて大絶叫する。そしてヴィヴィアンそちのけでユキノの方へ飛んでいった。

「きゃー！ ちゃんと元気になったじゃないのユキノ！ 良かったわ、具合はどう？」

ユキノはナタリアを振り返り、清らしい笑顔で朝の挨拶をしている。そんな二人を戸口でじっと窺っているローザを見つけて、ヴィヴィアンは手招いてやった。彼女はおずおずと店に入ってきて、ヴィヴィアンの隣に座った。

「おはよう」

「おはよ」

交わしたのは挨拶だけだったが、ぎこちなかったり冷たかったりするわけではなかった。ヴィヴィアンは誓約書の続きを書いていく。

第三条、勝手に施錠呪文を使わないこと。解かないこと。

「あれ、俺が熱出してぶっ倒れてたのヴィヴィアンに聞いた？」

「そうよ、それで依頼がキャンセルになったの。今夜きてくれるかしらヴィヴィアン」

話を振られたので、向こうを見ずに答える。

「問題ない」

このタイミングでようやく話に入れるようになったローザは、席を立ててユキノの方へ歩いていく。

「ユキノさん、良かった」

「ありがと、心配してくれたんだ」

ローザとユキノが会話を始めたところで、ナタリアがヴィヴィアンの元に入れ替わりでやってきた。

「それ、何書いてるの？」

「誓約書。これで契約したら俺とこいつは師弟になる」

そういうと、楽しそうに料理をしているユキノ以外の二人が固まった。

「し、てい？」

「何だ、反対なのか？」

半眼で答えてやると、ナタリアとローザは顔を見合わせた。

「ち、違うわよ！ あんた、ユキノを弟子にすることに決めたのね？」

「悪いか」

またしばらく沈黙があった。しかし、ナタリアは次第に表情を明るくさせ、ついにはユキノの方へ走っていった。

「ユキノおお！ 良かったじゃない、おめでとう！」

ナタリアは再びすっ飛んでいってユキノに抱きついたが、その拍子にフライパンに触れてしまったらしいユキノはすさまじい叫び声を上げた。

「熱っ！ あっつ！ ごめ、ナタリア、今はやめて！」

「きゃっ、ごめんなさいユキノ！ すぐ冷やすわ」

「ゆ、ユキノさん大丈夫？」

「うわあ焦げる、魚焦げる！ ナタリア、フライパン頼む！」

「私がやるよっ」

騒々しい彼らの声を聞いたヴィヴィアンは、羽ペンを持つ手を休めて白けた視線を向こうに送ってみた。しかし誰も気づかない。空しくなってきたため息を試してみたが、やはり台所でどたばたやっている彼らは気づいていない。

「……何やってんだあいつら」

しかし、この空気が新鮮で、少し楽しいのも事実だ。

「ユキノ、飯は食べたのか」

「あっ、今度は飯が焦げる！ ナタリアー！」

更に忙しくなる台所の様子に、ヴィヴィアンは仕方なく出向いていった。水で腕を冷やしているユキノを止め、魔法でやけどを治してやる。そうすると今度は戸口の方で声がしたので、今度は仕事着を羽織って外へ出る。

慌しいが、悪くない。リリエンスール家のあたらしい一日は、まだ始まったばかりだ。

第十話

闇夜に潜む影

小さな依頼をいくつかこなし、あとはぼんやりしているうちにいつの間にか夜になっていた。最後の依頼の時間が近づいていたので、ヴィヴィアンは店の入り口にかけてあった長い黒の外套を羽織って店にいた。

これは仕事着として着用しているもので、季節は関係なく着ている。真夏だろうが真冬だろうが、気に入って着ているのだ。立ち襟や留め具の具合が好みにぴったりだし、部屋着の上から羽織っても何となく様になるのもぐさのヴィヴィアンとしては嬉しい。それにジャケットと違い、こちらには色々な細工をしてあるのだ。

ユキノは弟子にしてもらえると解った瞬間からはりきっていたので、ヴィヴィアンの家を大掃除してかなり綺麗にし、なおかつ初歩的な魔道書を既に読み始めていた。かんざしを解いたユキノの髪は肩甲骨の辺りまで伸びていて、少し癖がある。着ている衣類は着物というらしく、東国では当たり前に着られているものなのだという。上と下が一緒になっているから脱ぐのは楽そうだが、着る時に帯をどうとめたら良いのか解らなくなりそうだ。

「依頼、何時からだったっけ」

訊ねると、ユキノは魔道書から顔を上げた。

「十時。あと三十分あるけど」

「面倒くさいからもう行こうか。早く終わらせよう」

言ってみた途端にユキノはソファから飛び上がり、テーブルに膝を打ちつけて悶絶した。見えて飽きないが、無駄に動きまわっているで視線で追うのが面倒くさい。

「いった、痛っ…… って、ヴィヴィアン。俺も連れてってくれるの?」

膝をおさえて跳ね回りながら彼は問うてくる。

「当たり前だろ、自分がいないときに他人を家に置いときたくない

んだよ」

迷惑そうに言ったつもりなのに、ユキノは嬉しそうに笑いながら、読みかけの魔道書にしおりを挟んでテーブルに置いた。まだ膝が痛いらしいが、彼はこちらに歩みよってくる。

「その服、歩きにくそうだな」

歩くときに足に絡まったりしないのだろうか。ズボンと違って両足が筒状に巻かれて固定されているわけだから、きっと歩きにくいに違いない。ヴィヴィアンは走るときに結構大股になるので、着物なんて絶対着られないと思う。

「そうでもないよ、慣れてるから。でも、腰に刀がないと何か落착着かない」

「あれ、親父の骨董品の中に刀あったとかお前言ってなかったか？」
そうなのだ、掃除の最中にユキノは刀を見つけたと大騒ぎしていた。ヴィヴィアンの父が趣味で集めていた東洋の骨董品の中に、刀がひっそりと眠っていたらしい。ヴィヴィアンは魔道書を読みながら生返事していたが、別に自分には必要ないからくれてやると言ったような覚えはある。

「え？ あれ使って良いのか？」

「ああ。そう言わなかったか？」

答えれば、ユキノは本当に嬉しそうに笑った。

「じゃあ暫く借りる。自分のじゃないとやっぱりに手に馴染まないけどさ」

ユキノは一階の奥のほうにある書庫の辺りから、古びた刀を二本取って来る。そうして、筒状の裾を捲り上げて端折り、後ろの帯に挟んですっかり動きやすそうな格好になった。

「とりあえず魔物できたら技見せろ」

「勿論！ 一週間ぶりだな、刀振るの」

腰に刀を携えて、楽しそうな足取りでユキノはヴィヴィアンの隣を歩く。歩きながら髪を後頭部でまとめ、ねじってかんざしを挿す。紐やゴムの類は全く使っていないのに、髪はそれで固定されてしま

う。イリナギ王国の文化はすごいと思った。

ヴィヴィアンは家の外に出てすぐ、ユキノを少し待たせて空中に青白く光る魔法陣を描いた。小さく一言鍵の呪文を唱えて、魔法陣に息を吹きかける。

「なあなあヴィヴィアン、今の何の魔法？」

「黙ってろ、まだ術が終わってないんだから」

ぱちんと指を鳴らして魔法陣を消し、近くに落ちていた小石を拾ってユキノを軽く振り返る。

「見てろ」

自宅に向かって石を投げた。ユキノが間の抜けた声を上げた。石は空気を裂いて細い音を立てながら正確に二階の寝室の窓に当たったが、跳ね返って落ちてきた。

「す、すげえ！」

「外出する時は施錠を忘れずに。基本だろ」

「すげー、めんどくさがりの癖にこういうとこだけしっかりしてるんだなっ」

さりげなく失礼なことを言うユキノに苦笑して、依頼先のアイアランド家への道を歩く。二人の家では学習塾を開いていて、九時ごろまでは十歳にも満たないような子供から二十歳すぎの大人まで、幅広い年齢層の学生が出入りしている。広い広い家だが、森に近いので魔物が怖いとそういえばローザは良くこぼしていた。

「前に一度、ネズミに入られたことがあるんだよね。うち」

「ネズミ？ ああ、可愛い顔してるんだよねあれ。よく餌付けて遊んだ」

「いや、違う。マウスって意味じゃなくてこの場合シーフな」

いつかは忘れたが、まだ家族と住んでいた頃だった。そのネズミを探し出して、盗ったものをすべて返させるまではヴィヴィアンはずっと苛々していた。おかげでローザを泣かせてしまい、ナタリアに蹴りを食らい、散々だったのである。見つけ出したネズミに制裁と称して魔法で電撃を落としてやったのには、実は半分八つ当たり

も交じっていた。

それ以来、家族の中で一番魔法が上手に使えたヴィヴィアンが施錠魔術の担当になった。両親も魔法を使えたが、施錠魔術がここまですべて完璧に効力を成すのはヴィヴィアンが魔法をかけた時に限ったのだ。

「じゃあさ、魔物に入られたことは？」

「ない。うちの近所じゃ、通行人が襲われることはあっても自宅を襲撃されることはすくないからな。ほら、うちの向かいに酒場があるだろ。大変な思いをして住居に入り込むよりも、酒場から帰る途中の動きのぶいおっさんを食らったほうが楽だって魔物も思うんだろうな」

「あー、酒場。そういえばあったな」

「あそここの店主、時々提携する相手なんだよ。情報通だから」

店主は中年の男だが、酒場を営んでいくせに酒が飲めないのも腹がビール腹になっていたりはしない。極度の菜食主義で、肉料理は作るくせに食べない。暇さえあれば根菜の漬物をぱりぱり食べている、変わった男だ。

「俺、その人と話したよ。ヴィヴィアンの家どこって聞かのために」

「へえ」

「美味しい浅漬けの作り方伝授してきた」

「おいおい」

初対面で話題になるのが漬物のレシピだなんて。酒場の店主に負けず劣らず、隣にいる東国人も十分変な奴なのだとヴィヴィアンは再認識する。

「で、あの二人の家は？」

「もうちょっと」

夜闇を歩きながら、石畳を踏む音を聞く。反響するその音は静かに闇へ溶け込んでいくが、その中に混じって獣の咆哮が聞こえたりすることは今はなかった。

夜の街は怖い。街灯はどこもランタンに蝋燭をいれただけの簡素

なものだから、深夜になるころには蝋燭が燃え尽きてあたりは真っ暗になる。夜型の住民が住む民家の灯りだけが頼りになってしまうのだ。そんなところで獣や強盗が現れたりしたときには、咄嗟の反応ができなくて取り返しのつかないことになりかねない。

「思うんだけど」

隣のひ弱そうな東国人が闇夜に襲撃されたらどうなってしまいうのかという方向に思考が進んできたとき、丁度そのひ弱そうな東国人に思考を中断させられた。今は本当に無意識だった。隣にいるかには自分が守る義務があるとか、師匠だからとかそういうことを平気で思ってしまうような勢いだった。

面倒くさい。だから人と関わるのは嫌なのだ。

「何」

「さつきからずっと、動物の匂いがするんだよ。肉食かなこれ、生臭い」

「……なんだって」

ユキノはさりげなく刀に手をかけながら、こちらを窺うように見上げる。

「ヴィヴィアン、セーので止まる？」

闇夜には、さして音があるわけでもなかった。今ヴィヴィアンの聴覚にあるのは、石畳の街道に響く自分の革靴の音と、ユキノの特徴的な足音だけだった。

ユキノは相変わらず枯れ草を編んだような簡素な履物（わらじというらしい軽量の履物だ）を履いているので、そんなに響く足音はしない。けれど彼は石畳を擦るように歩くので、足音はかなり特徴的だった。さりっ、さりっ……まるで石畳を箒で掃くような、その音。

規則正しく闇夜へ溶けていく二人分の足音を、注意して聞いてみる。足音に交じって荒い呼吸のような音が聞こえた。となりのユキノが息を切らしているわけでもない。……厄介な事態。

「セーの、」

「避ける！」

長い外套を翻し、背後を振り返って呪文も魔法陣も使わずに魔法をかける。咄嗟にできた技だったが、呪文や魔法陣がないと普通は魔法が使えない。

眼鏡の奥から闇夜を睨む。黄色に爛々と光る眼が、無数に揺れている。ざっと五十はいるだろう。

「……チッ」

魔法陣を描く。いや、間に合わない。

描きかけの魔法陣を消して呪文を唱える。向かってきた狼のような魔物をひらりとかわし、電撃を起こす。魔法陣がないと威力は半分以下になってしまう。一匹ならやつつけられるが、大量に駆除するためには魔法陣を描く必要がある。

しかし無理だ、描いている暇などない。一匹やつつけているあいだに他の魔物がやってきて、きりがない。

そうだ、ユキノは？

「ユキノ！」

「俺のことなんか気にすんなヴィヴィアン！」

ユキノは長刀をひらめかせ、荒れ狂う竜巻のような勢いで鮮やかに魔物を薙いでいた。書物でみた武者そのものの姿に一瞬目を奪われるが、ヴィヴィアンは自分にむかってきた魔物を倒すことを思い出して直感的に飛び上がる。空を裂く感覚と、ぐんと高くなる視界。すかさず呪文を唱える。

跳躍力は魔法で強化した。この長い外套を着る理由は気に入っているということ以外にもうひとつあるのだ。冬でも夏でも着られるようにと、この外套には魔法をかけている。普段は温度調整に働く魔法だが、使おうと思えば無意識にその魔力を他の事に使うことも可能だ。今のは、高く跳びたいという思考が無意識に跳躍力を強化した結果である。

地に足がつく前に、大規模な火炎を発生させることができた。魔物の半分ぐらいは焰に弱いタイプだったらしく、一瞬にして炭化し

た。

しかし、煙を上げる屍を蹴散らし、なおも魔物が襲い掛かってくる。咄嗟に呪文を唱えながら、着地する地面のめぼしをつけた。そこに来そうになる魔物を徹底的に排除しながら、ヴィヴィアンはもう一度だけ宙を蹴って高度を上げた。

魔物にも、水が効くタイプや電撃が効くタイプなど、様々な種類があるのだ。だから大群で来られると厄介である。

つま先から着地し、乱れて眼鏡に被さってくる髪の間からユキノが背後にいることを確認して、正面に水の盾を出現させる魔法陣を描く。向かってきた魔物たちは突然水の壁が出現したことで、勢い余って突っ込んできた。何匹かは子犬のような鳴き声を上げ、煙を上げて骨と皮ばかりの痛々しい姿になっていく。水に弱いタイプだったらしい。彼らにとって水をかけられることは、硫酸をかけられることと同じなのだ。皮膚は溶け、むき出しの組織も溶け、やけどしたようになって死んでいく。

「……うっ」

思わず口許を押さえる。

「ヴィヴィアン！ 後ろっ」

声に反応して殆ど無意識のうちにひらりと飛び上がり、空中で水の壁を蹴って更に高くまで跳んだ。水の盾の効力はその途端に切れ、一気に壁が崩れて辺りは水浸しになる。水に弱い魔物たちは骨を残して溶解し、その骨を踏みつけながらユキノは長刀を翻していた。

空中で簡素な魔法陣を描きながら、ユキノの戦闘を見る。彼は刀を振り回し、返り血にまみれながらそれでも戦い続けていた。

彼が斬った魔物の半分ぐらいは復活したが、半分はもう動かなくなっていた。延々とその繰り返しだから、だんだん立ち上がる魔物は少なくなっていた。

魔物は打撃や刺傷を与えても、持っている魔力で自身を治癒してしまう。けれど、ユキノの刀は正確にダメージが最大になる箇所を狙って打ち込まれているようで、魔物は治癒を完了させるまえに息

絶えている。白いはずの石畳が血塗れになっているのが、少ない明かりの中でも辛うじて解った。

落下しながら魔法陣を描き、描きながら呪文を詠唱する。本当は魔法陣の完成前に呪文を唱えると失敗につながりやすいが、時間が無いので仕方ない。

長い呪文だったがなんとか着地に間に合った。今度は氷の魔法を使った。地に足がつく直前に、ヴィヴィアンを中心に冷たく凍えた風が吹き付ける。魔物は数秒で動けなくなった。

氷なら、例外なく全ての魔物が凍るはずだ。ここにいるのは大群だが、知能は弱い低級な魔物だから。まれに自力で融けだして襲ってくるものもいるが、そこまで強い魔力は感じない。氷の呪文は難しく、なかなか習得できなかったことを思い出す。実戦で使えるようになったのだから、まあ進歩したということか。

「ふう……」

ターゲットを魔物にのみ絞り、ユキノは凍らせないようにする。それだけで呪文が倍になる。早口で唱えるのは大変だったが、間違えていた時のことを考えると冷や汗が額を伝った。

「っはあ、はあ……」

背後で息を弾ませるユキノを振り返り、ヴィヴィアンは愕然とする。血塗れのユキノは石畳の上に倒れた魔物に刀を突っ立てて、その刀で身体を支えるようにして両膝を地面についていた。

「おい、大丈夫か」

「平気」

短く言って、凍った魔物から刀を引き抜いたユキノにそれ以上言葉はかけなかった。ユキノは懷から出した柔らかそうな紙で刀を拭いて、慣れた動作で刀を鞘に収める。

「これが、魔物？」

「そう」

「……熊なんかよりずっと手ごわい」

「だろうな。俺は熊と戦ったことないけど」

少しずつ会話が戻ってきたこの空間で、魔物と一緒に自分たちまで凍っていたのかもしれないとヴィヴィアンは錯覚した。

刀を握ったユキノのその青い瞳は、まるで氷河のようだった。ユキノが刀を仕舞う時、一瞬目が合ったときに凍るかと思ったのだ。それだけユキノは殺気立っていて、だからこそ魔物をばさばさ斬り殺すことができたのかもしれないかった。

「殆どヴィヴィアンに倒させちゃったなあ」

「いや、だってこれは魔道士の仕事だし。怪我ないか」

「何とか平気。でもなんか、すごい疲れたんだけど」

平気だとはいえ、ユキノは顔やら首やら胸やらに凄い量の返り血を浴びていた。通行人に何事かと思われて騎士団と呼ばれたらたまったものではないので、ヴィヴィアンはユキノの正面に立った。首をかしげるユキノに、とりあえずかんざしをとれと指示する。

「ヴィヴィアン、今から何すんの？」

「目えつぶれ」

言われるがまま目を閉じるユキノに向かって、小さく呪文を呟いた。途端に滝のような水が彼の頭からつま先までを洗い流し、じっとしているはずもないユキノは大声をあげて飛び上がった。

「ぶわっ、な、何すんだっ」

「動くな、今から乾かすから」

今使った水をかける呪文の最初に、反対の意になる語を添えて呪文を唱える。ずぶ濡れのユキノから滴っていた水は全て乾いていき、着物からも血の色が抜けた。けれど、代わりに着物も一緒に一段階薄い色になってしまった。

「あー、悪い」

ちよつとまずかったかな、と思う。故郷から持ってきた数少ない物のうち、ユキノが恐らく気に入っているものであろうその濃紺は、明るめの藍色のようになってしまった。しかし当のユキノは楽しそうに自分の身体を見回して、髪を一房掴んで鼻に近づけて嗅いだりしている。何をやっているんだこいつは。

「すっげえ！ 血の匂いしない。あんな血塗れになったのに」

「聞いてないし…… まあいいけどさ」

血なまぐさい場所からさっさと遠のきたかったので、ヴィヴィアンはユキノを置いて歩き出した。ユキノは慌てて追ってくる。ようやく隣に並ぶと、ユキノは歩きながら髪をまとめてかんざしで留めた。

「ヴィヴィアン、いつもこんなことやってんの？」

「今のは例外。あんな多数相手にしたことなんか今まで数回しかない」

魔物を警戒しながら、並んで歩く。もう少しでアイアランド家に到着するから、それまでに魔物が来ないことを祈る。

あの辺りなら商店も多いから、夜でもそれなりに明るいはずだ。ヴィヴィアンの家やその付近もそうだが、商店街の店は中の明かりが外へもれやすい構造になっているのだ。ただ、商店街を抜けると一気に暗くなってしまふのだが。

「そろそろだけど。もう戦うの嫌だったらナタリアンとこ行ってるよ」

「行かない。もっと強くならないと、故郷に帰って皆を助けられないから」

毅然とした彼の態度に笑みがこぼれる。彼はどんな些細な勝負にでもむきになるタイプなのかもしれない。

第十一話 防衛本能

商店街の明かりが見えてくるころには、懐の時計が十時二十分をさしていた。依頼主がアイアランドの姉妹ではなかったら、ヴィヴィアンは全速力で走っただろう。しかし、あの姉妹はヴィヴィアンのルーズさをわかっている。一応ちゃんと報酬を貰う仕事なのだが、別に急がなくてもいいだろう。とはいえ……

「やっぱ、ちょっと急ごう」

いくら急がなくていい相手だといえども、魔物の存在に怯えながら待っているのは二人の女の子だ。二人とも魔物に対抗できそうにないし、こうしている今も街中を魔物が徘徊している。二人が魔物に襲われている可能性だって、ゼロではないのだ。

「うん。なんか心配だな…… さっきから何か獣の臭いが消えないんだよ。さっき魔物いっぱい倒したからとかそういうんじゃない、先に進むに連れて臭いが濃くなってる気がするっていうか」

「おいバカ、それ先に言え。早くあいつらの無事確かめないと」

二十分遅刻した、そのせいで二人の命が奪われていた。そんなことになったら困る。彼女らはヴィヴィアンの数少ない友人で、面倒くさいと思いつつもほぼ毎日顔をあわせている仲間なのだ。魔物になんかくれてやりたくはない。ヴィヴィアンは石畳を蹴り、足音を響かせないように注意しながら走った。ユキノが後からついてきた。二人でアイアランド家の門をくぐったのはそれから三分後のことだった。いつも塾生の騒がしい声が聞こえているアイアランド家は、今夜は不気味なほど静かだ。それが余計に不安を煽った。

「ナタリア、ローザ？」

ドアをノックしながら声を上げる。しばらく待ってみても二人は来なかった。不安げな顔をしたユキノと目が合う。もう一度ノックしてみた。

「げほ、げほっ…… 誰かね」

背筋が凍る思いで、ヴィヴィアンはその男の声を聞いていた。

よく知っている。彼はナタリアとローザの父親で、ここの塾で講師をしているのだ。ウィルフレッド・アイアランドは、いつも凜とした声で朗々と数式の説明をしている。その彼が、どうしてこんな苦しい声を上げるのか。

「ヴィヴィアンです。どうしたんですかウィル先生？ ナタリアとローザは？」

「お入り」

焦るヴィヴィアンだが、向こうは幾分か落ち着いていた。ドアが開き、有無を言わず引っぱりこまれた。ユキノが慌ててついてきて、彼の背後で大きな音を立ててドアが閉まる。

屋内は真っ暗で、人の気配も火の気配もなかった。ユキノの言うとおり、魔物の臭いはどんどん濃くなっていた。ウィルフレッドは鉛色の燭台を片手に、神妙そうな面持ちで辺りの闇を睨んでいる。

ちらりとユキノの方を見てみると、彼はかなり居づらそうにしていた。やがて意を決したのか、ユキノはそろりそろりとヴィヴィアンの影から出てくる。

「あ、あの。おじゃまします、じゃない、してます。さっき、言わなかったから……」

おずおずと声を上げたユキノに、ウィルフレッドが即座に反応する。

「何だね君は」

「うわ、ちょっと待ってくださいっ」

懷に手をやったウィルフレッドを、ヴィヴィアンは慌ててとめた。ウィルフレッドの懷に入っているのは、いつだって綺麗に磨かれたナイフなのだ。封筒を開けるときに使ったり、紙を切るときに使うのが主なのだが、明らかに殺傷力がありそうな長さのナイフなのである。そんな物騒なものを出されては困る。

「俺の弟子です。彼には構わないで下さい。それより、二人はどこですか」

困ったようにヴィヴィアンとウィルフレッドを交互に見ているユキノから目をそらし、ウィルフレッドは上のほうを指差した。

「二人は二階にいる。私が出るなど言った。だが、もう奴らはあの子達を見つけるだろう。そうしたら、おしまいだ」

見れば、ウィルフレッドの上着はぼろぼろになっていた。いたるところに引っかけ傷があり、くすんだ金髪には斑模様には血痕がついている。濃くなっていた魔物の臭いの元凶は、この空間とウィルフレッドにあるのだとヴィヴィアンは今になってようやく気づいた。

「何があったんですか」

彼は顔を上げ、ぼそぼそと語り始めた。

「……まったく、いつもどおりに答案を見ていたんだ」

今日はヴィヴィアンが来ることを知っていたため、ウィルフレッドは塾生を早めに帰して塾を空っぽにしていた。食事を終えたナタリアとローザは二階の寝室で二人で話をしていたから、ヴィヴィアンが到着したところで呼びに行こうと思って彼は一階でテストの採点をしていたという。彼はいつもそうだ。塾は朝から開いているから、始まるまでの間に答案を頑張って採点している。

しばらくして、どこかの窓が割れる音を彼は聞いた。とっさに二階へ駆け上がり、ナタリアとローザの部屋のドアの前にありあわせのバリケードを作ったところで、ウィルフレッドは背後から魔物に襲われた。それを合図に、たくさんの魔物が闇の中から出てきた。

二人に出てくるなど叫んで魔物を一階まで誘導し、持っていたナイフを使って滅多刺しにしたがほとんど効果はなく、前にヴィヴィアンが預けておいた小さな銃で撃つてようやく一匹しとめたらしい。そこで、ヴィヴィアンが到着したという流れだ。

「君の銃がなかったら、私は死んでいたね」

こざっぱりしたいつもの学習塾はすでになく、いつも綺麗に片付いている教室には机や椅子が乱雑に散らばっていた。教室と自宅を結ぶドアは外れていて、蝶番もねじごと床に落ちていた。改めて酷

い状況だと思い知る。

「あの銃には魔法で強化した弾丸を入れてありました。当たれば必ずしとめられるはずです。まだいるんですか、魔物」

「恐らくな…… 私のことは構わん、二人の様子を見に行ってくれないかね？ もう階段を上るのが辛い」

頷き、ウィルフレッドの近くに火の玉を出現させる魔法をかけた。明るくしておけば多少は魔物が近寄りにくくなるだろう。ヴィヴィアンもナタリアとローザが心配だったから、ユキノを手招いて二階へ続く階段を駆け上った。

ウィルフレッドの言うとおり、ひとつだけ書棚や机などでつくったバリケードで閉鎖された部屋があるのが見えた。逆さに置かれた椅子の間から手を通し、ドアをノックしてみる。

「ナタリア、ローザ」

声をかけると、すぐ反応があった。部屋の中を走ってくる足音がある。ほっとした。

「ヴィヴィアン、来てくれたのね！ 遅いじゃない！ お父さんは？ ねえ、お父さんは大丈夫なの？」

ナタリアが向こうからドアを開けようとしているらしく、バリケードが軋んだ音を立てた。崩れてきそうで怖いので、その前に崩れてしまうことにした。椅子に手をかけながら、ユキノにちらりと目配せする。意図を汲み取ったらしいユキノは、ヴィヴィアンがバリケードを崩すのを手伝ってくれる。

「無事だから安心しろ。何かあればユキノが守る」

「まかしとけ！」

ユキノは嬉しそうだった。二人が無事なのが嬉しいのか、ヴィヴィアンが仕事を任せたことが嬉しかったのかは解らない。

二人でバリケードを崩す。大きな書棚を力いっぱい押して動かすと、ようやくドアが開けられるようになった。ドアを開けてみると、大きな家具がそこらじゅうに散乱していた。ナタリアとローザも内側からバリケードを作っていたらしい。

「ごめん、待たせた」

言いながら部屋に入ると、入るなりすぐにナタリアに抱きつかれた。よろけて倒れそうになったが、背後のドアに寄りかかったおかげでなんとかバランスを保つことができた。ローザはその場に座り込んだ姿勢でヴィヴィアンを見上げていて、ユキノがそんなローザに手を貸していた。良かった、二人とも無事だ。

「もう、終りかと思ったわ」

いつもの無駄な元気さはどこへ行ったか、やけにしおらしいナタリアに今更ながら女の子らしさを感じた。しかし、今は一刻も早く一階に戻らなければ。

彼女の両肩を掴み、驚いたように顔を上げた彼女を見下ろして小さく嘆息する。いい加減、すぐ抱きつく癖をなおして欲しい。

「とりあえず離れろ。ウィル先生のところ行かないと」

ナタリアから離れ、ユキノに助け起こされたローザを見下ろす。

「どっか痛い？ 怪我してるなら魔法で治すけど」

「っ、違う…… 怖くて、動けなかったの」

「そっか。もう平気だから」

彼女の腕を掴んで支えてやりながら、ベッドのところまで連れて行ってやった。ローザは激しく肩で息をしながら、まだ恐怖に震えているようだった。

「ナタリア、ローザ頼んだ」

ベッドサイドから出口に向かって歩きながら、ナタリアに声をかける。

「言われなくても解ってるわよ、大事な妹だもの。あたしたちはここにいればいいのよね？」

「ああ。念のため、ここ出たらすぐ施錠魔法使うからな。外出られなくなるけどいいか？」

「いいわ。忘れないで助けに来てくれるならね」

ドア付近にいたナタリアと確認しあい、ユキノの袖を軽く引いた。ユキノは軽く頷き、先に階段を降りていった。部屋のドアを開けて

出て行こうとすると、ローザに呼び止められた。

「ヴィヴィアン…… ありがとう」

震えるような声だった。一瞬対応に困った。下手なことを言ったら、泣かせてしまいそうな気がした。

ベッドに座ったローザの肩を抱き、ナタリアはちらりところちらを向く。なぜか自然と、ヴィヴィアンは口を開いていた。

「お前らが生きてて、本当に良かった」

……何を言っているんだ自分。

勿論これは本心だったが、口にしてみるとちよつと照れくさかった。ぽかんとするナタリアと顔を赤くしたローザをに背を向けて、ヴィヴィアンはそそくさとドアを閉めて施錠の魔法陣を指先でドアに描いた。目の前のドアに鍵をすることだけを考え、集中して魔法陣に呪文を書き入れる。

「我が血をもって契る。如何なる者も断じて入れてはならない」

呟き、古代語の呪文を唱える。呪文を唱え終わると、ヴィヴィアンはポケットに入れていたペーパーナイフで左手の親指を少し切り、染み出てきた血を魔法陣の中央に擦り付けた。魔法陣の全体が燃えるように赤く輝き、やがてドアに黒く焦げ付いて離れなくなった。これで魔法はかけ終わった。

これはかなり強力な施錠魔術の一つだ。この辺りにすむ魔物や魔道士では到底開けられはしない強さで、この魔法はナタリアとローザの無事を保障している。

血を使うということは、術者の命を賭けるということだ。あの魔法がもし破られるようなことがあったら、その瞬間からヴィヴィアンは二度と次の息を吸えなくなるだろう。それでも、そんな危険な魔法を使っても、ヴィヴィアンは確実に二人を無傷で護りたかった。

「……なんでだろ」

そこまで二人にこだわる理由は上手く思いつかない。理屈ではなく感情で、ヴィヴィアンはただ護りたいと思っていた。損得も面倒

臭さも、関係なく。

階段を駆け下り、ヴィヴィアンが作った明かりの傍にいるウィルフレッドの元へ急いだ。既にウィルフレッドの隣には、ユキノがいるようだった。ヴィヴィアンがそこへ到着すると火の玉はふわりと消えて、蝋燭の寂しい明かりだけが辺りを照らすようになる。

「歩けますか、ウィル先生」

「いや、無理だ。日の出を待って、魔物が居なくなってから病院へ行くよ」

力なく笑うウィルフレッドの肩や右ひざから、血が出ているのが解った。急いで何とかしなければ。蝋燭がどんどん短くなってきているし、ここは安全地帯ではないのだ。

「だめだ、既に魔物は家の中にいる。さっきから、俺らのことずつと狙ってるのが解るから」

全くユキノの言うとおりだった。少し耳を澄ませば、ウィルフレッドの荒い呼吸に交じって獣のかすかな唸りも聞こえる。安全でないどころか、この場所は明らかに危険だった。

「とにかく、蝋燭欲しいですね」

「ああ、あるかね？」

「はい…… 一応持ってると思います」

ポケットの中に入れていた蝋燭を出してみた。本来なら手首から中指の先の長さぐらいあるはずの蝋燭は、半分ぐらいの長さでほぼ真っ二つに折れていた。だが、無いよりはましだろうと思ってウィルフレッドに渡す。

ユキノはしばらく闘志をこめた目であたりを睨みつけていたが、ふいにいつもの表情に戻ってこちらを向いた。

「って、ちよっとまった。俺ら今からここで戦うのかよ？ 机とか傷だらけにしちゃうって」

「面倒臭いから、それは後で考える。とにかくウィル先生をどこかに隠さない」と

ウィルフレッドに、先ほど使ったという銃の所在を聞く。魔物と

もみ合った時にどこかへやってしまったというので、魔力の弾丸を使って手軽に魔物を倒すのは諦めた。

何匹ぐらいの魔物がいるのかも解らない。ざっと二十くらいはいらるだろうが、もっと潜んでいたりしたら厄介だ。それに、低級な魔物ならいいが、稀にいる知能の高い厄介な魔物がたくさんいたりしたら命が危うい。

手っ取り早く魔法陣を敷いて爆破できれば話は早いが、ここは住居だ。そんなことをしたら大変なことになる。近隣の住民にも迷惑がかかるだろう。

「ウィル先生、教材室入って下さい。あそこなら狭いし、魔法の効果が切れにくいんで」

「解ったよ」

教材室は、数メートル歩いて行けばあった。恐る恐るといった様子で蠟燭の明かりを持ち、ウィルフレッドはゆっくり教材室に近づく。

ウィルフレッドの肩を支えてやりながら、心の中でまずいぞと呟く。魔物は血の臭いに敏感だ。傷だらけのウィルフレッドが、いつ襲われるか解らない。

気を抜いたら大変なことになることは十分に承知していた。ヴィアンは神経を研ぎ澄まし、辺りに気を配りながら少しずつ進んだ。

第十二話

退治

歩きながら、ポケットのペーパーナイフを握り締めた。これも魔力を帯びさせれば、立派な武器になるはずだ。柄が体温でぬるくなってきたが、ヴィヴィアンはペーパーナイフを離さずに辺りを窺いながら歩く。

「すまないね、ヴィヴィアン」

「俺の方こそすみません、途中で魔物の大群に遭遇して」

ウィルフレッドを素早く教材室に入れ、ドアを閉めた。ユキノに背後を頼み、魔力を帯びたナイフを使って教材室のドアに円を描く。「魔物の異常発生か…… 原因が何かあるはずだ。対策を取らなければ大変なことになるだろうね」

ドアごしに呟くウィルフレッドに、背後のユキノが憤慨したように返す。

「実際なってるだろ、すぐなんとかしないと」

「それは後。ユキノ、何か魔法は使えるようになったか？」

「……全然。いまいち解んない」

「じゃあ今からお前に呪文をひとつ教える。今のお前が魔法陣を使ったら効果は半減だろうから、呪文だけ確実に覚えとけ」

「え？ 魔法使わせてくれるの？」

振り返るユキノに、黙って背後を守れと指示する。渋々ヴィヴィアンと背中合わせになって刀を構えたユキノに、魔法陣を描きながら説明する。

「今の俺は施錠魔法をもう発動できない。これ以上発動したらコントロールができなくなって、ナタリアたちはともかく自宅とウィル先生が危ないことになる」

「うん」

「だからお前が魔法をかけろ。肩の力抜け。指先を魔方阵に当てて、全神経をそこに集中しろ」

背中合わせのまま、ユキノをドアの正面に向けた。ヴィヴィアンは先ほどのユキノと交代して、右の中指と人差し指をそろえた状態で構える。飛び掛られたとき、魔物がこの指に触れれば即座に凍結するだろう。呪文なしで魔法を使うのはかなり難易度が高いので、できれば魔物どもはユキノが魔法をかけ終わったあとに出てきて欲しい。

「俺にできるの？」

「自信持て。論理的には大丈夫だから。何かあったら俺がどうにかする」

本当は大丈夫だという保障などなかった。ヴィヴィアンは自分が一気に三つまでしか施錠魔法を使えなくて、しかも最上級の施錠魔法を使っている場合は明らかに他二つがおろそかになるという事実があることなど忘れていたのだ。弟子なんてとれるほど完成した魔道士ではないのに。自分だってまだ成長の途中だ。

けれど今はそんな泣き言を言っている場合ではない。ユキノにやらせるしかないのだ。素質はあっても魔法は使ったことがなかったユキノだが、たぶんヴィヴィアンが描いた魔法陣にならしっかり魔力を送り込めるだろう。

「わかった、やってみる」

彼が頷く気配がした。知らず、微笑が浮かぶ。ヴィヴィアンは小さな声で、ユキノの耳元に囁く。

「呪文はこうだ…… デイルゾルヴィエ」

魔物に十分注意しながら、ユキノの成功を願う。先ほどから何頭かこちらを窺っている気配はするが、まだ襲ってこないようだ。

慎重に、ユキノとの間合いをつめて背中をくつつける。それがスITCHになったかのように、じっと黙っていたユキノが呪文を呟く。「デイル、ゾルヴィエ」

まだまだだ、と思った。しかし魔法陣は青白く光を放ち、部屋のドアがぼんやりと光に包まれた。どうやらユキノは、ちゃんと魔法を発動できたらしい。

声は震えていたし、呪文のイントネーションは若干おかしかった。それでも呪文が発動できたということは、ユキノの魔力は常に少しずつ声に乗せられて発せられていたのかもしれないと思う。それからあの目か。何にせよ、ユキノに魔法を教えるのは楽そうだという気がしてくる。

「あ、これって、やったんだよね？ ヴィヴィアン、やったよ！」
無邪気にはしゃぎつつも、彼は飛び出してきた魔物をすっぱり切り裂いた。思わず口許を覆ってしまったのは、魔物がぴんと尖った耳をした愛らしい中型犬に擬態していたからだった。

切り裂かれた魔物は、それが本来の姿なのだろうか、全身を真っ黒い毛で覆われた尾の長い小動物のようなものになって動かなくなる。

「ヴィヴィアン、気をつけて。なんか、すげえいっぱいいる気がする」

「本当か」

せいぜい数匹しかいないだろうと思っていたのに。この暗闇の中で、魔物たちはじっと息をひそめているというのだろうか？ 確かに、神経を研ぎ澄ませて魔物の魔力の波動を追ってみると、弱いがそこかしこに潜んでいることが解った。

眼鏡を変えたほうが良さそうだ。度数の調整なら魔法でできるから、家に帰ったらとりかかろう。

「とりあえず窓を塞ぎたい。どうするか…… 障壁魔術は面倒臭いしな」

「朝になるまで持ちこたえればいいんだろ？ それか、この家をめちゃめちゃ明るくするとか」

ユキノの声を聞きながら考える。既に身体のアちこちが痛かったし、動くのもだるいぐらい疲れていた。先ほど大群を相手にした時のような俊敏な動きはもうできないだろう。ひょっとしたら、魔物はヴィヴィアンが疲れきるのを待っていたのかもしれない。ますます厄介だ。

「閃光か。やれないこともないけど、光彩術は呪文が長いしお前はまだ扱えないと思う。俺はさっきの魔物の大群に魔法使い過ぎたから、そろそろ限界」

ユキノは暫く考え込むように黙り、刀の切っ先を見つめていた。魔物の低い唸りが聴覚に引つ掛かる。ヴィヴィアンの焦りを感じ取ったらしい。

魔物は人間のしぐさや表情に敏感だ。隙を見せれば、すぐ餌にされる。

「じゃあ、一回だけそれ使ってみてよ。そしたら、あとは俺がどうにかする」

「……わかった、任せる。呪文を発動する時になったら目を閉じろ。視界が潰れるぞ」

「よっしゃ！」

ぴたりと背中を合わせたまま、ユキノは器用にヴィヴィアンを切らないように刀を振っていた。ヴィヴィアンは小さく呪文を唱え、フクロウに擬態してこちらに向かってきた魔物を燃やした。焰の呪文なら簡単で労力も少ないので、まだ使っていた。いられた。

「リギティオ・エイン・デイルジュエイ・サビエイ……」

「ッ！」

大丈夫かユキノ、と喉まで出かけた。思わず振り返る。魔物に弾かれたユキノの後姿が横にぶれた。呪文の続きを唱えながら、ユキノを引き起こす。ヴィヴィアンに噛み付きそうになった、猫に擬態した魔物をユキノは居合いの要領で切り裂いた。

「エル・フィアクス……」

「ヴィヴィアン、まだっ？」

首を横に振る。まだ呪文は続く。閃光を出すにはかなりの魔力が必要で、集中力を切らしたら失敗して部屋ごと爆破する魔法になってしまうことになってなりうる。呪文を唱える唇の前に軽く人差し指を立てて見せ、黙れと言外に訴えた。

ユキノは頷き、何に擬態しているのかすらわからない黒い物体を

真っ二つに斬った。真っ黒い体液が辺りに飛び散る。見なければ良かった。

「ロヴリエ・ラシェ……ザイン」

全部で四十八の単語による呪文は、ようやくここで終わった。その瞬間、まばゆい閃光が辺りを白く染めた。ユキノは長刀を翻し、ヴィヴィアンとまた背中合わせになる。

閃光は一瞬で終わってしまうが、光を嫌う習性がある魔物には十分効果があつたはずだ。極論から言えば、どんな魔物でも光は苦手としているから、倒すのならば閃光を使うのが一番いい。

「目、平気か」

「やばい、ちょっと眩んだ。ヴィヴィアンは？」

「呪文の中に、瞳に入る光の量を昼間と同じにするのを入れといったから」

だからヴィヴィアンには、気持ちが悪くなるぐらいにたくさん魔物が見えていた。大半は今の閃光でやられ、白目をむいて口から泡を吹いていた。狼に擬態しているものが多く、猛禽類らしいものもいた。動物らしいが、種類が特定できないものもある。

十数匹の魔物が、倒れたり傾いたりしている机の間から顔を出す。光をうまく避けるために、小動物に擬態して机の引き出しに入っていた魔物もある。

そのうちの一匹が、鷹に姿を変えて飛んでくる。咄嗟に呪文ではなく、味方を呼ぶ声が出た。

「ユキノ、斬れ！」

目が眩んでいると言った割りに、ユキノは実に正確に鷹の胴を切り裂いた。ヴィヴィアンはその場に膝をつき、肩で息をしながら前を見る。予想外に魔法を使いすぎたようだった。身体が重い。

「おいっ、ヴィヴィアン！」

「いいから全部やれ。魔物の位置、俺が教えるから」

ユキノは頷いた。そのままこっちに寄ってこようとして、倒れていた椅子の脚に引っかけてよろけた。思わずため息が漏れる。（

大丈夫かこいつ？)

「ほら、正面」

鋭く尖った長い爪をもった、中型犬ほどの大きさをした耳のない魔物が斬り捨てられた。

「右。真横」

「上もだ！」

ユキノはヴィヴィアンの言葉に従い、刀を振り続けた。ヴィヴィアンは壁との間合いをつめて、自分の傍にきた魔物は魔力を込めたあのペーパーナイフで突き刺す。そうしながらユキノの目になることも忘れはしない。疲れたなどと言っている場合ではないのだ。

「後ろ！」

部屋にいた魔物は、これで全滅した。ヴィヴィアンは立ち上がり、外套についた埃を払って壁に背中を預ける。ユキノは刀を柔らかそうな紙で拭いてから鞆に収め、ヴィヴィアンに駆け寄ってくる途中でまた椅子の脚にひっかかって今度は派手に転んだ。

「痛たた……」

「まず落ち着け」

呆れつつもそう言い、ユキノに手を貸す。そろそろ魔法の効果が切れるから、この空間は暗闇に戻るだろう。明かりとして使っていた蠟燭はすでに燃え尽きていて、その残骸が床にちらばっていた。仕方がないので、小さく呪文を唱えて指先に焰を灯す。

「すごい！ それ便利そうだなっ」

「疲れたからあんま話しかけるな」

はしゃぐユキノを黙らせ、背後を振り返る。何もいない。それを確認すると同時に、目の前からうっと光が消えていった。閃光を使ったときの、自分の瞳に入る光の量を調整する魔法が切れたのだ。

「とりあえず、ありがと」

そう言うしておく。アイアランド一家を助けるのは、自分ひとりでは無理だった。一人で来ていたなら、この家に到達する前に魔物に

やられるか、もしくはこの空間で魔物にやられるかのどちらかだったと思う。

今夜見た魔物の数は異常だった。朝になったら、きっとアイアランド家だけではなく他の家も襲われたというニュースが報告されるだろう。いよいよもって、この街も危険地帯になった。

「……へ？　今の俺に言った？」

「明日からきつと、王宮騎士団が十人くらいに増えるぞ」

確認されたが答えるのが面倒で、ヴィヴィアンは別の話題で逃げた。ユキノは不服そうにしていたが、首を捻ってヴィヴィアンを見上げる。

「なんで？」

「役に立たないとはいえ、一応騎士団の職務内容には魔物討伐も含まれてる。その目的はあくまで王宮を守護することであって、国民がどうとかっていう考えは全く持ち合わせちゃいないがな」

この国はそこそこ住みやすいが、色々と間違っている。けれど、それを指摘することも間違っている。与えられた規則に従い、背かずに生きるのが国民の宿命だ。それも間違っているとは思うが、表立って否定すれば命はないので黙ったままである。結局、嫌でも従わなければいけないのが王の立てた規則で、法律で、命令で、わがままなのだ。嫌なら国を移るしかない。

教材室の扉の前まで歩いた。そこで施錠魔術をユキノに解かせる。ただ魔法陣の一部分を指で消さただけだが、ユキノはまた大げさにはしゃいだ。

「ウィル先生」

「おお、ヴィヴィアン！」

中からよろけながら出てきたウィルフレッドの肩を支える。見ていたユキノが俊敏に動き、ヴィヴィアンの代わりにウィルフレッドを支えてくれた。

気が利く男だ。ヴィヴィアンが疲れていると言ったことを、ちゃんと覚えていたのだろう。

「全部やつつけてくれたんだね」

「ええ、見た限りもういいいです。ですが気をつけて下さい」

まだ、外から入ってくる可能性だってあるのだ。日の出までの約五時間に、他の魔物がここをかぎつけない保証はない。

「ヴィヴィアン、これからどうする？」

「俺は休みたい」

ユキノは頷き、自分の肩にウィルフレッドの腕を回す。ウィルフレッドは大人しくユキノの肩に凭れていた。身長がほぼユキノと変わらないぐらいのウィルフレッドなので、ヴィヴィアンが肩を貸すよりユキノに支えてもらった方が楽そうだった。

「とりあえず、無事な部屋どこ？」

「書斎は平気だろうね」

「案内して。ヴィヴィアンはナタリアたちのところにいろよ」

首を横に振った。駄目だ、もしものことがある。ナタリアたちの部屋に行くということは、最上級の施錠魔法を解いてしまうということだ。彼女達はあの魔法があるかぎり無事なのだから、安全が証明されるまで魔法は解きたくない。

「夜明けまでは魔法解きたくない。だから、俺たちは別の部屋で夜明けを待たないと」

「解った、じゃあ俺がまた施錠魔法使う！」

「……仕方ないか」

呟いたとき、月明かりに薄く照らされた壁を黒いものが走るのを見た。同じタイミングで気づいたユキノが反射的にそれを斬ると、黒いものは闇に溶け入って見えなくなった。取り逃がしたようだ。後には蜥蜴のしっぽが残され、持ち主から離れた後もひとりで躍っていた。ユキノは蜥蜴のしっぽのみを切り落としたらしい。

「うわ、気持ちわりい」

遠巻きにしっぽを眺めるユキノだったが、ヴィヴィアンはそのしっぽを軽くつまみあげた。しっぽの動きはだんだん弱まってきて、そのうち全く動かなくなった。

「トカゲか……」

何故か不快感を感じた。蜥蜴は別に嫌いではないし、昔似たような生き物を餌付けていたこともあるのに。直感的に嫌いになる何かをあの蜥蜴は持っていた。ほんの一瞬しか見ていないのに、何故なのだろう。

「あ」

蜥蜴のしっぽがさらさらと崩れ始めた。真っ黒い炭のような欠片をぼろぼろ落としながら、しっぽは完全に砂になってヴィヴィアンの指から消えた。

「ますます気持ち悪いな。今の何だったんだろう」

「魔物、だろうな」

しかし今までに遭遇したことの無いタイプだ。ヴィヴィアンは首を捻り、指先についたしっぽの残骸をズボンで適当に拭った。

第十三話

白む街

衰弱したウィルフレッドを支えながら、ようやく二階の書斎にたどり着いた。この部屋は多少荒れていたが魔物の気配はなく、ドアもしっかりついていた。ここにいた魔物たちは、ここに食物にできる人間がいらないことに早めに気づいて、荒らすのをやめて出て来たのだろう。

ドアを閉め、内側から内部を守るための魔法陣を描く。筆記に使えるほどの魔力が残っていないので、書斎の暖炉にあった炭を持ってきて円を完成させていく。

「ユキノ、魔法」

「デイルゾルヴィエ！」

ユキノは物覚えがいいのか、呪文も手順も忘れていなかった。魔法陣は青白く輝き、ドアに焦げ付く。これであと五時間、ここはとりあえず安全だと言える場所になった。

「凄いい、俺凄いい！ 見た？ ヴィヴィアン今の見た？」

「煩いお前少しは黙ってられないのか」

「……ごめん」

ドアに背中を預け、ずるずると座り込む。ウィルフレッドを書斎の椅子に座らせて、ユキノもヴィヴィアンの隣に来る。

「早く朝にならないかな」

呟くユキノは、膝を抱えて伏し目になっている。彼の身体はまた獣の血で汚れ、着物の袖が少し破けているように見えた。あとでナタリアかローザに頼んで縫ってもらえばいいだろう。

「悪い、俺ちよっと寝る」

「うん。日昇ったら起こす」

特に何を憂うこともなく、ヴィヴィアンは膝頭に頭を乗せて目を閉じる。すぐに睡魔が襲ってきた。まどろむ意識の中でウィルフレッドとユキノが何かを話している声が聞こえた気がしたが、内容を

聞く気力すらヴィヴィアンには残っていなかった。

数分後に少し顔を上げる。ほんの僅かな間だけは意識が完全に落ちていたが、伏せていた時間を三分と仮定した場合、二分くらいは意識を保っていたと思う。

「あ、起きた？ ヴィヴィアン、そろそろ日昇りそう」

「え？」

「良く寝てたよ。突っついてても起きなかった」

そうなのかと納得する。確かに窓の外は白み始めていたし、寝ていた時間なんてそもそも自分に正確に解るはずはないのだ。

寝ていた時間は一分くらいに感じていたから、寝足りないと思った。けれども夜明けだ、早くナタリアたちに会いに行かなければ。窓の近くに歩み寄る。無理な体勢で寝ていたため、背中や首が痛かった。ウィルフレッドは机に突っ伏して眠っているようで、近づいても顔を上げない。

そうして本当に何気なく窓辺に立って下を見下ろした時、ヴィヴィアンは背筋を凍らされた気がした。

「ユキノ、お前外見たか」

「え？」

駆け寄ってくるユキノに、塾の前の石畳を指差した。無残な死骸が転がっていた。それも、魔物のものではない。建物の二階なんて高さが知れている。顔まできちんとみえた。はらわたを引きずり出され、石畳を血に染め、その死骸はどうやったとしても生き返らないだろうと思えるほどに引き裂かれていた。

あの残骸のような死体は街の配管工だ。ユキノと初めて会った日に、依頼をうけたあの男だ。遅くまで真面目に仕事をし、地下水路を整備していたおかげでこんな惨事に巻き込まれたのだろう。

「う」

ユキノは口許を覆って後退り、壁に手をついて身体を支える。

「他にこういうことが起こってない保障はない」

知らず、乾いた声が出た。

「つて、じゃあ」

「この街ももう危ない。今日はおそらく学校という学校が全部休校だ。通りを人が歩かなくなる。昼間のうちに依頼がどっさりくるぞ、魔物倒してくれって」

きつとその通りになるだろうと、確信していた。煙突掃除を手伝って欲しいとか売り子をやってほしいなんて依頼はきつと来ないだろう。少なくとも今日から一週間くらいは。

「どうすんの？」

「助っ人呼ぶしかないなこれ」

ウィルフレッドの寝ている机をちらりと見ると、手紙に使う便箋が置いてあるのが見えた。汚れてぼろぼろになったものならきつと許可をくれるだろう。一枚拝借して、ついでに机の万年筆も拝借してヴィヴィアンは手紙を書いた。

「手紙？」

「そう。あいつに届ける」

書きあがった手紙を紙飛行機の形に折り、翼の部分に小さく魔法陣を書きこんで呪文を記す。仕上げに小さく息を吹きかけると、それだけで飛行機は飛んでいった。窓は開いていなかったが、壁をすりぬけて飛行機は上空を舞っていく。

「無事かな」

ナタリアやローザの次に心配な奴である。彼は一応男ではあるものの、そんなに筋力はないのだ。運動神経は悪くないが、小柄でひよろりとしているのでどうにも弱そうに見えて仕方ない。

彼もナタリアたちと同様に学生時代の友人で、入学して以来ずっと同じクラスだった。あてはあともう一人いるが、彼は彼で最近色々忙しらしい。

学生時代の友人であるロジェエールティエルは、街の中心に近いところに住んでいる。彼が無事でなかったら、市街は壊滅していると考えていいだろう。

ロジェには魔力を込めた紙を渡してある。それを紙飛行機にすれ

ば、魔道士ではないロジエでもすぐに返事をできるはずだ。やられていなければならないと思うが、心配だ。

「その助っ人って魔道士？」

「いや、一般市民。っていうか、むしろ魔法と反対方向にいる奴」

「へえー…… 魔道士じゃない人も普通にいるんだな。イリナギみたいに」

「まあな。全員が魔道士って訳じゃなくて、このメルチスの街も半分くらい一般人だから」

ロジエには一昨日会ったが、また奇妙な発明をしていた。彼は魔法に頼らずに生活を良くしていくことを目標に、常に常識はずれな発明をしているのである。いや、常識はずれだから発明なのか。

「あ！ ヴィヴィアン、飛行機帰ってきちゃったけど？ 届かなかったのかな」

「違う、それはあいつからの」

目の前に落ちようとした飛行機をすっと掴み取り、ヴィヴィアンは雑に折られた飛行機を開いて内容を読む。ロジエらしい軽い文字で無事を知らせる言葉が書いてあった。

ただ、街の中心でも魔物の被害はあったらしい。あの辺りは商店のショーウィンドウでもないかぎり割れやすい窓はないので、夜道を歩いていた通行人がターゲットになったようだ。

「手伝ってくれるって？」

「策は考えておいてくれたって。前々から俺と提携する気はあったらしいからな」

「そっか、よかった。じゃ、ナタリアたちのところ行こ」
「ああ」

返ってきた手紙を適当に折りたたんでポケットに入れた。街の中心の時計塔に、十時に集合したいと彼の手紙には書いてある。それまでの間に、一体どれくらい眠っていられるのか。

空はもう明るくなっていて、鳥のさえずりが聞こえ出していた。残酷なほどに穏やかな朝だ。

二人の部屋の前に来た。呪文を唱えながら指で魔法陣をなぞる。焦げ付いていた魔法陣が炭のかけらのようにぼろぼろと落ち、魔法陣はあとかたもなく消え去った。とたんにはりつめていた魔力が一気にほどけ、ヴィヴィアンは深い安堵と疲弊を感じた。

ヴィヴィアンに代わってユキノがドアを開けると、ベッドの上に座った姿勢で俯いているナタリアが見えた。

「おい、終わったけど」

一応声をかけてみるが、彼女は眠っているようで反応しない。小さくため息をついて顔を上げると、窓のそばからローザが駆け寄ってくる。

「ヴィヴィアン、おつかれさま。怪我は？」

「大丈夫。お前らの方は無事か」

「うん、おかげで」

満面の笑みで頷いてくれたローザを見てほっとした。ちゃんと守ってやれたのだと思うと、一気に肩の力が抜けた気がした。ユキノのところへ行ったローザの背中を見て、ヴィヴィアンはもう一度ナタリアを見下ろす。

こんな寝方をしては、きっと起きた時に体中が痛くなるだろう。ヴィヴィアンは俯いて座ったままの姿勢で寝ているナタリアの肩を揺する。

「おい、起きろ」

彼女の反応は鈍い。何事か呟いているように聞こえたがすぐに声は聞こえなくなり、彼女はほとんどん前かがみになっていく。このままではベッドから落ちることも考えられる。

「起きろってば」

更に揺すると若干嫌そうにされたので、大きいため息をついてやる。

「……ったく」

ヴィヴィアンとユキノが大変な思いをしているときに、彼女は寝ていたのか。そうも思うけれど、魔物だらけの家でも安心して眠れ

るほどヴィヴィアンの施錠魔法を信頼してくれたということは嬉しいことだ。

「ユキノさん、大丈夫？」

「ああ、平気。傷は浅いからなんともない」

「あの、消毒液あるよ。化膿したら大変だから、消毒するね」

「じゃあお願い。ごめんね」

背後で二人のそんな会話が聞こえる。ヴィヴィアンは苦笑しながらナタリアの身体を自分の腕にもたれさせ、もう起こそうとはしないでベッドに寝かせてやった。ナタリアは熟睡しているようで、少し身体の向きを変えてまた動かなくなる。

「ふう……」

依頼人はナタリアとローザなので、遂行したことを二人に報告しなければならぬ。ローザだけに報告しても意味はないのだ。

ということ、ナタリアが起きるのを待つしかない。報酬の話もそれからだ。知り合いだから大金を巻き上げるつもりはないが、それでも今日からの生活費は普段の倍かかるのだ。

「いだだだっ！」

「ユキノさん動かないで！ 余計沁みるよっ」

向こうの方からユキノの叫びとローザの慌てた声が聞こえてくる。傷口の消毒をしているようだが、かなりの荒療治になっているらしい。それもそうだとヴィヴィアンは思う。ローザは人の血が極端に駄目なので、消毒するときにはいつも手が震えているのだ。

「……ごめんなさい」

「いいよ別に。ありがと」

よほど痛かったのだろう、ユキノはちょっと目を潤ませていた。肌蹴っていた着物を整え、彼は少しよろけながら歩いてくる。

「ナタリアは？」

「寝てる。こいつ、一旦爆睡したら何が起こっても起きないぞ」

こうやって眠っていれば、ただの綺麗な女の子なのに。普段のナタリアは、そりゃあもちろん女の子らしいところもあるけれど、男

勝りで勝気な破天荒娘なのだ。とにかく彼女は綺麗なだけではなくかなり行動派で、だからこそ一緒にいて疲れるけれど楽しい。

「ローザはちゃんと寝たのか？」

「ううん。怖くて眠れなかった」

「まあローザに比べたらこいつ神経図太いからな」

ローザは困ったように笑う。別に本心から言った言葉ではないが、ナタリアが起きているときにこんなことは流石に言おうと思えない。

「何ですってヴィヴィアン？」

「え」

「全部聞いてたわよ。あたしだって一睡もしてないわ」

背筋をつめたいものが伝う。ナタリアは起き上がり、乱れた金髪を手櫛で整えながら小さく欠伸している。

まずい。

そう思ってそろりそろりとベッドの端へ移動し、立ち上がってナタリアから離れようとした瞬間に背中に強烈な平手を食らった。つんのめって壁に手をつき、何とか転倒を免れる。

「っ！ お前、命の恩人に対してそれ？」

「ひどい」

振り向きざまに言えば、ベッドに座った姿勢でナタリアはヴィヴィアンを睨みつけていた。よく見ると、ちよっと赤い目をしている。泣かせてしまったのだろうか。

「今のはヴィヴィアンが悪いよ」

ナタリアとヴィヴィアンを交互に見比べながらローザが言った。それは十分自覚していたから、ヴィヴィアンは真摯に頷いてナタリアに歩み寄って彼女を見下ろす。

「あー、あのな？ 悪い。別に本気で言ったわけじゃ」

「心配していいわけないでしょ」

つめたく切り替えされて若干たじろいだものの、ここで言葉を止めたら誠意が相手に伝わらない。

「ごめん」

「……やけに素直じゃない、ヴィヴィアン。どうしたのよ」

「ちよっとデリカシーなかった」

きょとんとして首をかしげるナタリアに、内心でため息をつく。謝るとナタリアはすぐに機嫌を良くして、座ったまま身を乗り出してヴィヴィアンの手に触れた。そして、呪文をかけるときに切った右の親指を、細い指で優しくなでた。

「ありがと。指、こんなに深く切ったのね？　あとでガーゼ巻いてあげるわ」

「いい。ほっとけば治る。お前いつもいろんなことが大げさ」

ナタリアには魔力は無いが、それなりに魔法の知識はある。ヴィヴィアンの描いた魔法陣でなら、軽い魔法を発動することもできる。だから彼女は、ヴィヴィアンが使った魔法がどういうものかはちゃんと理解していたらしい。事実、ナタリアはヴィヴィアンの指を見て『切られたのか』とは言わなかった。

小さく嘆息する。ただの破天荒娘に見えるナタリアも、実は結構思慮深くて優しい。表現が大げさなだけで、やっぱり彼女も根底では普通の女の子だ。

第十四話

放浪癖

「今回の報酬はいくらにする？」

ローザの声に顔を上げると、彼女はすぐ隣にある自分のベッドに腰掛けていた。そして、ちゃっかりユキノも隣に座っている。あいっは一体何をしているんだと思いつつ、とりあえず聞きたいことを聞いておく。

「上限は」

「金貨八枚」

「そこまでふんだくる気はない」

今まで二人から受けた依頼は、銀貨二枚ですむ程度の仕事が多かった。銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨五十枚で金貨一枚の計算だ。金貨より価値が上の貨幣はない。銅貨が十枚あれば向かいの酒屋で安酒を一杯のめる。あるいは、青果店でりんごをひとつ買える。税金は平均で銀貨十枚ほどだから、一月につき金貨二枚もあれば余裕のある生活が成り立つのだ。金貨八枚なんていったら、一年の三分の一を遊んで暮らせる金である。

「そうね、じゃあ決めさせてもらうわ。金貨六枚でいいかしら」

「お前、それでも多いって。物価の高騰と税を考えたとしても、三ヶ月くらい余裕で暮らしていける」

「魔物と戦ってくれたユキノの分も含めてよ。今日のディナーは豪華にできるわね」

「いいのよ、そんなに」

「いいのよ、今日はゆっくり休んで。もともとこれくらい払うつもりでいたから」

ナタリアはドレッサーの引き出しから可愛いレースのついた巾着袋を出してきて、ヴィヴィアンに手を出すように言った。言われたとおりにすると、ナタリアはヴィヴィアンの手の上に金貨を六枚数えて置いた。礼を言って報酬を内ポケットに仕舞う。

「……お母さん、大丈夫かしら」

「どこ行っただ？ 遊びに行ったわけじゃないだろ」

「会合よ。街の商工会のひとたちと、新しい議事堂で」

ああ、と思う。魔物は多人数をあまり襲おうとしないし、人の笑い声や怒鳴り声が聞こえる空間にはあまり近寄ろうとしない。奴らは群れからはぐれた人間を捕まえて食らうのだ。ならば安心だろう。街の商工会には屈強な鍛冶屋や肉屋の店主もいるし、ヴィヴィアンから見てもそれなりに強いと思う魔道士も五人くらいいる。

「あそこなら魔道士のおっちゃんがいっぱいいるから平気だろ。明るいし」

「ならよかったわ。お父さん、怪我大丈夫なの？」

「俺が出てくる頃はまだ寝てた。でも酷い怪我だし魔物にやられた傷だから、早く処置しないと」

首を回し、ぱきぱきと音を立てる。まだ一仕事残っているのだ、これで終りではない。ぼろぼろになった塾を掃除しなければならぬし、窓だって直さなければならぬ。家中ぐちゃぐちゃなのだ、ロジェとの待ち合わせに間に合うかどうかは不明だ。

「ウィル先生のところ行く。ユキノ、お前ついてこい」

「解った！」

「あたしたちも行くわ」

「とりあえずお前らはその部屋を片付けてから来い」

廊下ほどではないが、部屋の中はバリケードを作ったときにかき回したせいで散らかっていた。二人のベッドの位置が近いのもそのせいかもしれない。アイアランド姉妹を部屋に残し、ヴィヴィアンはユキノと一緒に廊下を歩く。

「ユキノ、まだ魔法使えるか？」

「平気」

「ならいい。治癒魔法を教えるから」

「本当に！？ すげえ！ 俺どんどん凄くなってる」

「うるせえよお前、朝からテンション高いな……」

書斎の扉を一応ノックしてから、返事を待たずに中へ入った。ウィルフレッドは疲れ果てているのか、痩せた頬を机にべったりつけて寝ていた。後ろから朝日に照らされているおかげで、最近になって少しずつ目立ってきた薄毛が余計にひどく見えた。

「ウィル先生」

「……ん、ああ、ヴィヴィアン。怪我はなかったかね？　昨夜はご苦労だった」

「俺は平気です。歩けますか」

ウィルフレッドはゆらりと立ち上がり、部屋の真ん中にきた。ユキノが椅子を持ってきて、ウィルフレッドを座らせる。机のところにいられると、書類が邪魔で処置ができない。だから部屋の真ん中の広いところを使って怪我を処置しようという魂胆だ。

ぼろぼろになった背広を脱ぎ、ウィルフレッドは小さくうめき声を漏らした。腕や腰にのこる魔物の爪痕が痛々しい。血に染まったシャツを脱いで貰い、ヴィヴィアンは空中に小さく魔法陣を描いた。「洗いますよ。しみるかもしれません」

ここにくるまでにユキノにやった方法と同じように、ヴィヴィアンはウィルフレッドの頭からつま先までを一旦濡らし、それから反対呪文を唱えて乾かした。まだ血が止まらない傷もあり、ウィルフレッドは痛そうに目をぎゅっと閉じる。

できればヴィヴィアンも目をとじていたかった。魔力を使う量が少ないとはいえ、疲れきった状態で魔法を使ったのだ。少し目が眩んだ。

「ユキノ、呪文教えるからやってみろ」

真摯に頷くユキノに、治癒呪文を教えてやる。ヴィヴィアンはあまり多用しないが、魔物に襲われた傷は放っておくと酷く化膿するのだ。早く直すに越したことはない。

「いいか？　やってみろ、魔法陣は俺が描く」

ウィルフレッドの背後に回り、二本の指を使って大きめの魔法陣を描く。空中に描いた魔法陣は、薄く緑がかった淡い光を放ちなが

らその場に留まっている。呪文を書き込み終え、ヴィヴィアンはユキノを魔方陣の正面に立たせた。

そして呪文を教え、ユキノに唱えさせる。

「ヘク・アルア・ウィアン」

後から呪文の単語の意味について解説しなければいけない思いながら、ヴィヴィアンはその場に座り込んだ。魔方陣の淡い光は徐々に広がり、やがてウィルフレッドの背中の傷を全て治して消えた。傷が治っても疲労が取れるわけではないので、ウィルフレッドは少しよろけながらユキノとヴィヴィアンに交互に礼を言った。

「あとは、片付けです」

「いいんだよヴィヴィアン、寝ていてくれたまえ。まともに休んでいないだろう？ おそらく近所はみんなこうなっているだろうから、皆で協力して片付けるよ」

「……すみません」

きっと荒らされることなく鎮座している自宅を思い浮かべて申し訳なくなる。けれど、この状態で手伝ったら逆に迷惑になりかねないと思い、素直に帰ることにした。

「報酬はいくらだったかな」

「あ、もうナタリアから受け取りました。本当は最初に決めておかなきゃいけないんですけどね」

普通の客を相手にする場合には、契約書を毎回書いて報酬や仕事の内容も最初に決めておくのだ。ナタリアたちの場合は信用しているから、面倒くさいことはなるべく省きたくて報酬も内容もその場の空気に任せてアバウトになる。時々は無償奉仕になったりもするが、まあ友人なので特別だ。

「しかし、朝食くらい食べていったらどうかね。冷蔵庫が無事なら、隣町から送られてきた瑞々しいメロンがあるのだよ」

そういわれるとちよつと空腹を感じたが、今は早く帰って寝たかった。書斎を出て玄関に向かうところでナタリアたちに呼び止められ、何度も礼を言われて送り出された。

家の前で見知った人が死んでいることは知っていたから、あえて遠回りをして帰ることにした。街はどこも混乱状態で、誰もが走り回ったり泣き叫んだりしていた。知っている顔もちろほら見かけた。「ひでえな……」

人の死体を四体くらいみかけた。麻布がかけられて隠されたものもおそらくそうだろうから、昨日だけでかなりの人が襲われたらしいことが解った。

何故こんなにも短期間に、異常なほど魔物が増殖しているのか。魔物の生態については明かされていないことが多く、研究者も少なく苦労していると聞いた。それに、首都から近くはないこの街に、最新の情報が回ってくるのには時間がかかる。王宮のあるエンカンタリアの城下町は現在どうなっているのだろう。

「ヴィヴィアン！　ここにいたのか」

背後から声をかけられ、振り返ると目に入っただのは亜麻色の髪をした背の高い男だった。ヴィヴィアンと同じくらいの身長だが、彼の方が少し低いかもしれない。瞳は薄い水色で、好む服の色合いはアイボリー系なので、彼は何となく全体的な色合いのまとまりがないと思う。

「ああ、エストル。久々だな。何、里帰り？」

エストルⅡグルーバーとは昔から仲が良い。魔法の腕は互角かヴィヴィアンの方が少し上をいく程度だったので、どちらかがどちらかを挑発してよく喧嘩になったりもした。魔法を使った喧嘩をして教師から厳しく叱られ、二人で全校を掃除するとか、庭の草むしりを一晩かけてやるとか、そういう罰則もよく与えられた。

ヴィヴィアンはどちらかといえば焰系統の魔法が得意だが、エストルは植物の魔法を使う。ポケットによく植物の種を入れていて、攻撃するときにはそれを魔法で発芽させて相手の自由を奪う蔓草へと生長させたりするのだ。そういう魔法があまり得意でないヴィヴィアンからしてみると、ちょっと格好良いと思う。彼はヴィヴィアンの外套に少し似た七分袖の外套を愛用し、外出する時はいつもそ

れだ。その薄っぺらな外套の中からどうしてそんなに出てくるんだというほど、エストルは種子を多用する。

「久々に戻ってきたら街がこんな状態だろ。お前のことだからその辺で死んでるかもって思ったけど生きてたからまあよかったよ」

「何だそれ。俺、魔物にやられるほどやわじゃないから」

「知ってるよ」

エストルは快活に笑う。長めの髪はいつも風に吹かれたような形で、全体的に彼から見ると右側へ流している。そんな、この辺りにしては斬新な髪型や服装のおかげで街で見かけるとすぐに解る。姿を見なくても近くにいた時は魔力の関係で大体『いる』感じがするので、気まぐれに戻ってきたときにも驚いたりはいしない。

「そういや、この外人のおチビは何だ？ 変な格好。拾ったのか、こいつ」

エストルはユキノをじろじろ見下ろし、楽しそうに観察している。ユキノはむっとして、エストルの不躰な視線を真っ向から受け止める。

それもそうだろう、ユキノは別に小さくない。ひょろりとしてはいるが、身長は高くもなければ低くもないのだ。ヴィヴィアンが無駄に長身だから、隣に並ぶと小さく見えるだけである。

「弟子だっ」

「ぶっは！ おいおいヴィヴィアン、お前弟子なんか取るようになったのか？ お師匠さん！ あはははっ！」

げらげら笑い出すエストルに、ヴィヴィアンは深いため息をついて頷いた。そのタイミングで、街の真ん中の時計台の鐘が鳴り始める。七時になったようだ。

「流れでそうなった。なんかもう、俺何してんだろうって感じ」

「ヴィヴィアンこの人誰」

「あー、放浪癖？」

まだ憮然としているユキノに、一言で説明してやる。ユキノはぽかんとした。

「えー。今ので終り？ もっとまともに紹介してくれよ」

不満げなエストルだが、こういう風にしか表現できない。彼がこの街にいるのは、かなり稀なことなのだ。学校の卒業と同時に二ヶ月間どこかへいったきり戻ってこなかったし、その後も一週間戻ってこなかったりした。戻ってくるたび異国の話や王宮の話をしに店に寄ってくれるが、気づくとまたいなくなっているのだ。

「で？ この放浪癖って何者？」

「エストルⅡグルバーっていう同級生だけど、しょっちゅう色んなところを旅してるからなかなかこの街には戻ってこない。けど騎士団で遠征してるとかそういうんじゃないくて、こいつは一応魔道士騎士団っていえば、エストルの姉さんは女性初の部隊長だよな」

「そう。姉貴かなり強いからな。ついでに言えば俺もここいらじゃヴィヴィアンの次に強いぞ。放浪癖じゃなくて根無し草って言えよ、その方が俺らしい」

「で、見ての通り面倒くさい奴」

おお、とユキノは納得する。軽い性格のエストルだから、面倒くさい奴などといわれても本気にしないところが良いと思う。けれど、その日暮らしの計画性のない男だから、彼には結構貸しを作っている。この男はその貸しを、なかなか返してくれないところが駄目だと思う。ルーズなところはお互い様なので責める気にはなれないが、ヴィヴィアンはどんなに面倒くさくても借りたものは必ず返すタチだ。

第十四話

放浪癖（後書き）

いつも微妙な切れ方をするエンタリです。

12月の更新が一度きりだったのでこれは不味いと思い。

2008年最後の更新です。

それではみなさん、よいお年を！

第十五話

多量の依頼

ポケットの中でもぞもぞと手を動かしながら、エストルは荒廃した街を見回して歩いている。彼はとても手癖が悪いので、暇になると常に手の上で種子を発芽させたり、いたずら書きを始めたりのだ。ユキノは全く気にしていない様子だが、ヴィヴィアンとしてはちょっと気になる。

「あ。そうそう、こいつタラシだから気をつけろ。好きな女ができたら傍を離れない方がいい」

手癖が悪いというワードで思い出した。何も、エストルの手癖の悪さは手いたずらの多さだけだということではない。

「あれ、俺お前の相手をとったことなんかないはずだけど。つか、その前にヴィヴィアンは、面倒臭いからって言って女の子を相手にしないだろ。一昨年のはエリザクロフトだったか？ ヴィヴィアンには勿体無い可愛い子ちゃんだったのに」

「ほら、何か気持ち悪いだろユキノ。こいつのようにだけは絶対になるな。何だ、可愛い子ちゃんって……」

そんな話をしているうちに、ユキノとエストルはだんだん打ち解けてきた。二人で仲良く会話をしているのを見て、ユキノは本当に人付き合いの上手い奴だと感心する。初めての会話の時には、あまり良い印象は受けていなかったように感じたのに。

「じゃ、そろそろ本題を。この街は一体どうしたんだ？」

何でも屋へ帰る道を歩きながら、エストルはヴィヴィアンにそう問いかけた。答えようとして何か柔らかいものに躓^{つまず}き、何に躓いたのかは見ないことにしてヴィヴィアンはエストルをちらりと見やる。

「解らない。昨日大量の魔物が出て、それで」

「エンカンタリアの宮殿近辺も結構ひどかったぞ。二週間前にいたんだけど、俺も襲われた」

「国内みんなこんな感じなのか？」

世界を放浪しているエストルだから、きっとここ以外での魔物のこともよく知っているだろう。メディアが新聞くらいしかないこの町だから、情報交換は大切だ。後は魔法を使った遠隔通信も可能だが、魔方阵が複雑で面倒だし魔力をかなり使うので殆どやらない。「エンカンタリアに安全な場所はもうないと思って良いだろう。城下町なんかは、夜でも明るいのに同じようなザマなんだからな。葬儀屋も大変だ、墓地が満杯で死体の上に死体を積むしかないんだから。あまり森のほうに行くと、魔物に荒らされるだろう？ だったら火葬しろって思うけど、教会的にはそうもいかないんだ。教義に反するとかで」

エストルは無神論者だ。とにかく行動を邪魔されるのや束縛されるのが嫌いだから、神にも背くのだろう。神の教えよりも、自分で身につけた知識のほうが合理的だとエストルは言う。

「大規模な暴動も起こってる。教会や騎士団が鎮圧に忙しいよ、神や王の力をふりかざせば市民は黙ると思ってるが、市民にとっちゃ生きるか死ぬかの沙汰なんだからな」

「……そうか、そんなことになってるのか」

これは大変なことになってきたと思い始めた矢先、ユキノが焦ったような声を上げてエストルの七分袖の上着を引っ張った。

「なあ、イリナギの方は？ 無事なのか？ 殿やられたりしてない？」

「あっちは島だし、まだここに比べたらマトモだな。殿も無事だろ、まだ一国の領主が死んだっていう情報はひとつも聞いていない。けど、海沿いの町から順に被害が深刻化してるって聞いた。もう世界で何も被害が起きてない国は、北の果ての氷の世界くらいだろう。まあ、そんなところに人は住んじやいないだろうが」

「っ、そんな」

一気に絶望的な表情になるユキノに、何だかヴィヴィアンまで焦る。

「何だよ、お前の故郷は海沿いか？ その、里親だっけ。その人た

ちがそこにいるのか？」

「大丈夫、父さん達がいるのは海沿いじゃない。けど、港町に知り合いがいるんだ」

ユキノが人生で二度も両親との別れを経験しなくて良かったと思う。それと同時に、何故自分が知り合って間もないこの弟子のことをこんなにかけているのかと少し不思議に思った。

エステルはなにやら納得した様子でユキノを見下ろし、『へえ』と感心したような声を上げた。

「そうか。それでお前は、魔法を学びにここを訪れたと。長旅ご苦労だったな」

「ありがと。けど苦労したよ、エンカンタリアに来てから。俺の師匠は誰でも良かったわけじゃないんだ、ヴィヴィアン以外に魔道士を知らなくて」

「え、こいつそんなに有名？ 何で。ただのものぐさじゃん」

ヴィヴィアンを指差しながらあからさまに驚くエステルに、ヴィヴィアンは少しむっとする。

「お前何気に失礼だな。ただのって何だよただのって」

半眼でエステルを見れば、エステルは飄々とした笑みを浮かべる。この男は自分が失礼な奴だとちゃんと理解していながら、わざとそんな言動を重ねていく。その軽さが彼の欠点であり美点だ。

「なんか、長老がヴィヴィアンⅡリリエンソールのところへ行けって」

神妙な顔で言うユキノに、相変わらずへらへらと笑みを返しながらエステルはこちらを向く。

「何、それってヴィヴィアンのじいちゃんとか？」

「違うわ馬鹿。言っとくけど俺に老人の知り合いは数えるきりしかないぞ。イリナギ人の知り合いなんかこいつだけだからな」

放っておくとユキノの肉親か何かだと勘違いされそうなので、慌てて訂正を入れておく。

「へえ。何でヴィヴィアンが海の向こうの国で人気なんだろうな」

「たぶん、同じ年くらい魔道士で強い人を探してくれたんだと思う。なんか、何でも屋だし引き受けてくれるんじゃない？ 依頼したら向こうも断れないだろ！ ってノリで」

おいおい、と思う。まあ、確かにイリナギの国民の考えたことは八割がた正解だった。ヴィヴィアンの強さはそこそこだと思うが、向こうの目論見どおり依頼は断れなかった。

「親父が骨董好きでイリナギによく旅行してたからな。それで知名度が若干あったのかもしれない」

そんな話をしながらようやくたどり着いたヴィヴィアンの店の近辺に、死人がごろごろ転がっていたりはしなかった。ほっとすると同時に、施錠を解いて自宅に上がる。依頼書受けの木箱の中身をユキノがチェックし、束になった依頼の紙を運んで持ってくる。

全てがヴィヴィアンの魔法を使って自動的にこちらに飛んでくるようにした、緊急用の依頼書だ。馴染み深い自筆の魔法陣がこちらこちらに見える。ロジェに渡した紙飛行機とおなじ原理だ。しかしロジェに渡したタイプとは違い、飛んでくる先を玄関先の木箱の中に指定しているため、気づいたら箱の中に入っているのだ。

「エストル、読み上げろ」

「はいはい。まず一つ目。依頼主は向かいの酒場のおやじさん。魔物を退治してくれだって」

「はい次」

「二つ目。依頼主は時計塔の管理人。魔物やつつけろだって」

「はい次」

「三つ目。依頼主は八百屋のミリアン兄弟。魔物を駆除しろだって」

「次」

「依頼主は町長」

「マジか。あれ？ 俺、町長にこの紙渡したかな……」

記憶があやふやだ。まあ、入手ルートは幾らでもあるから、別に不思議ではないが。

「書店のじいさんからも来てるぞ」

「うん。いつも世話になってる」

「あとは纏めて読む。連名だから」

エステルはすらりと長い腕で紙の束をテーブルの中央へ寄せながら、一枚だけ手元に残しておいた依頼書を読み上げる。

「パーティーまでに魔物の不安から解放してください、だつとよ。おつと、これはすごい。最高で金貨百枚くれるつて。依頼主は大通りのご令嬢。小学校の先生。小鳥屋の主人。魔術科の恩師。肉屋の夫妻。羊飼いの一家。木靴職人。商工会。その他諸々」

ご令嬢の依頼は美味しい。何せ金持ちだから、ほんの少しの魔法を使うだけでも金貨単位で報酬をくれる。前に執事からの依頼で庭に噴水を作ったつたら、報酬に金貨二十枚をよこしたのだ。それにヴィヴィアンは、ご令嬢に若干気に入られているらしいので更に美味しい。

「パーティーか。まあ、確かにあんな沢山人が集まるところに魔物が出たら終りだろうけど。けど、倒しても倒しても出てくるもんは仕方ないし」

「パーティーつて？」

ユキノが声を上げた。そういえば彼はイリナギ人だから、この国の伝統については知らないに違いない。

「毎年一度、ご令嬢の家でパーティーがあるんだ。可愛い子は王宮に連れていかれて侍女になれる。どこの街でも必ずやらなきゃいけないつて、逆に言えばどこの田舎町でも王宮行きのチャンスがあるつてこと」

説明してやると、ユキノはふうんと呟いた。

「それつて出世？」

「ああ。王宮で暮らせるんだからな」

頷いてやれば、ユキノは感心したように声を上げる。

「じゃあ男子は？ 召使？」

「まあ、それもあるな。けど、男子はだいたい騎士団に選抜されるんだ。そこそこ顔が整つて腕っ節が強いと、声をかけられて選抜

される。このパーティー、女子は十三歳から強制。男子は十五歳からな」

これにはエストルが答えてくれた。エストルは依頼書を折ってなにやら形作っているので、すっと手を伸ばして依頼書を取り上げた。暇になると手いたずらが多くなるエストルの癖は学生時代から変わっていないようで、人と話をしている最中に彼の手の中では、箱やら猫やら兎やら色々な折り紙が折られていくのだ。今回は何を折ろうとしていたのだろう。

エストルはつまらなそうに両手を頭の後ろで組む。ヴィヴィアンは小さくため息をついて、彼の説明に補足をつけた。

「ただし、職を持っている場合はこの限りではない。だから俺は十五歳と十六歳の時には行っただけ、去年の今頃はちょうど店を持っていた頃だったからサボった」

「え、行かなかったの？」

「だってパーティーとか面倒くさいし。まあ、ナタリアが煩いから今年に行くことになるだろうけど」

今年もまたナタリアは煌びやかなドレスを見せ付けて、あんたも正装しなさいとかなんとかいいながらヴィヴィアンを着せ替え人形にするのだろう。一昨年までの二回ではオールバックを推奨され、渋ったら勝手にヘアスタイルをセットされた。スーツもどこからかヴィヴィアンのサイズに合うものを用意してくれたが、今年は自分の物を持っているので着替えだけは自分でしたい。

身体のサイズがもうこれ以上大きくならないという予想ができたので、思い切って金のある時に仕立て屋へ行って作ってもらったのだ。

第十六話

徹夜明けの発明家

ナタリアはかなりの美貌の持ち主だから、騎士団の連中に侍女候補として目をつけられている。まだ選抜の声はかからないが、今年あたりそろそろきそうさ。

エストルは視線でヴィヴィアンを非難し、眉間に皺を寄せてため息をつく。

「本当に女心を解ってない男だな。ナタリアは純粹にお前と踊りたいだけなんだよ」

「俺と踊ってなにが楽しいんだよ」

「さあ、俺には解ないけど。お前なんかより俺を誘った方が絶対楽しいよ。可愛い子ちゃんの扱いはちゃんと心得てるからさ」

依頼書を一枚一枚折りたたみ、テーブルの真ん中に積み上げながらエストルは笑う。山積みの依頼書は、全部で十五枚もあった。全ての区域で魔物を駆除すれば相当な額の報酬がもらえるだろうが、激しい疲労のことを考えると今は休んでいたい。それに、倒しても倒しても魔物は湧き出てくるのだ。

なら、魔物避けの結界でも販売してみようか。いや、やめておこう。結界を張るのは自分自身なのだ。いかに面倒くさいことを回避して魔物を消すかということ、ヴィヴィアンは考え込んでいた。「ところでエストル、今年はお前も出るのか？」

「いや、俺は逃げるよ。職を持ってる設定にしてある。お前も逃げれば？ 依頼の山があるから無理って」

「あいつ許してくれないだろうから行くしかない。去年行かなかったらめっちゃめっちゃ怒って三日くらい口きいてくれなかったし」

「ふうん。それは新作ドレスをお披露目できなくて悔しかったと見た」

「何だそれ」

「知らないのか？ あいつのドレスは毎回自作なんだぞ。去年は俺、

途中参加だったけど。一緒に踊った時あいつめちゃめちゃ落ち込んでた」

「へえ…… 誰とも被らないデザインだと思ったら、そういうことか」

嬉しそうにドレスを見せびらかし、ヴィヴィアンの反応が薄いと『もっと褒めなさいよ！ もっとこう、世界一可愛いぞ、とか言ってくれないの？』などと無茶なことを言い、少し寂しそうにしていたナタリアを思い出す。去年に至っては参加すらしなかった。ちょっと悪いことをしてしまったかもしれない。

もしかしたら、本当にもしかしたら、一昨年とその前とで借りた正装はナタリアの手製だったのかもしれない。だとすれば彼女は、相当器用な手先と正確な腕を持っているに違いない。

「じゃあ、ナタリアに頼めば着物も作ってもらえるかな」

ユキノがぼつりと呟いた言葉に、思考が転換される。そうか、ナタリアに頼めば服飾は問題ない。ユキノがここで暮らしていく上で、服装の問題は解決された。

「楽勝だろうな。その服、つくりが簡単だから」

「よし！ じゃあちよつと頼みに」

「待てユキノ、依頼いっぱいあるだろ」

早速飛び出していこうとするユキノを引き止めると、ユキノはあからさまに残念そうな顔をする。

「えー」

「手紙書けば良いだろ？ ほら、紙やるから。飛行機にして飛ばせばナタリアのところに行くようにしてやる」

「おっ、本当？ やった！」

ユキノはヴィヴィアンから紙を受け取り、ペンでさらさらと手紙を書き始めた。だが。

「……おい」

「ん？ 何、ヴィヴィアン」

「それ、何て書いてある」

「何てって、普通に手紙書いてるだけなんだけど」

きょんとするユキノ。一体どうして自分が訝られているかわかっていない様子だった。

「俺には全く読めない。何語だそれ」

ユキノの字は太さが均一でなく、はらいが以上に長かった。こんな字を見たことが無くて、ヴィヴィアンは困惑する。

「よく読んでみるよヴィヴィアン、普通にこの国の言葉だから」

エストルに呆れたようにそういわれて、よく見れば確かにちゃんとこの国の言語で記述してあることは解った。だが、単語として読み取れたのは数箇所、あとはやはり違う言語に見える。エストルは海外旅行をよくするから、イリナギの字にも見慣れているに違いない。

「癖が強いな」

「イリナギじゃあペンじゃなくて筆を使うからな。だからエンカンタリアとは筆記体はかなり違う。ついでに、文法とかそういうのも微妙に。だろ？ ユキノ」

「そうなのか」

ポケットの中から種を出して掌で発芽させながら、エストルは笑った。ユキノは頷き、少し困ったような顔をする。

「俺は筆記体のほうが読みやすいと思ったんだけど…… イリナギではそうだから」

しよげるユキノを見て苦笑し、ヴィヴィアンは新しい紙にユキノが着物を欲しがっているということを書き、作ってくれるかどうかを訊ねてみた。手紙を紙飛行機にして適当に投げれば、ほどなくして返事が返ってくる。ヴィヴィアンが送った紙の余白に、綺麗な文字で返事が書いてあった。

「任せて！ 寸法を計ったらすぐ作るから、明日にでもうちに来て。ヴィヴィアンもよ、強制！」

どうやらナタリアは、ヴィヴィアンの分の着物まで作るつもりらしい。返事を見たユキノは嬉しそうに歓声をあげ、懷から一枚の紙

を出した。それには、どうやら着物の型や寸法らしいものが書いてある。

「これね、近所のばあちゃんが持たせてくれたんだ。仕立て屋さんにこれを見せなさい、って」

「ふうん」

「ナタリアに送ってくれる？」

「自分で送ってみろよ。魔法陣の描きかたはエステルに習え。俺はもう疲れたから寝る。エステル、十時になったら起こして」

エステルは不満を垂れつつも、そこら辺に落ちていた紙の裏を使って魔法陣の解説を始めた。その様子を見て、ヴィヴィアンは外套を脱ぎながら微笑する。ヴィヴィアンは寝室のとなりにあるシャワールームで軽くシャワーを浴びた後、バスローブに着替えてそのままベッドに飛び込んだ。久しぶりにベッドで寝る気がする。眼鏡を外すのも面倒で、ヴィヴィアンはそのまま寝入ってしまった。

そして次に目が覚めたのは、エステルが声をかけたからではなかった。甘い花の香りにむせ返りそうになりながら、ヴィヴィアンは目を覚ます。気づくと枕元には芳香の強い大振りの花が咲いていて、その花はベッドの柵に根を張っていた。どうやらエステルは、十時に開花する魔法をかけた種子をベッドに撒いたらしい。

「……趣味悪い起こし方するなよ」

ヴィヴィアンが甘い香りを苦手としていることを知っているからこそできた技だろう。こんな風にからかいを帯びた彼の行動はしょっちゅうだ。

気まぐれなエステルのことだ、もう帰ったに違いない。帰ったといっても、自宅かどうかはわからない。もう他の国へ行ったかもしれないし、もしかしたらアイアランド家を訪問しているかもしれない。

起き上がってみて、自分がバスローブで寝ていたことを思い出した。適当に脱ぎ捨てた服は洗濯したかったので、風呂場の隅にある樽に入れておく。魔法を発動させるのが面倒なので洗濯物は溜まる

まで放置だ。

ヴィヴィアンはベッドサイドの引き出しを開け、まずは下着を穿いた。そして、一番上に重なっていたジーンズとフェイククレイヤーDシャツを選び取って着た。どちらもナタリアの勧めで買ったものだ。

傍目に見ればストライプシャツの上から黒のベストを着ているように見えるが、実際に着ているトップスは一枚という優れものだ。いちいちコーディネートするのが面倒臭いので、ヴィヴィアンはフェイククレイヤーDをよく使う。

今のトレンドはハイネックの革製タンクトップらしいが、ヴィヴィアンの好みのスタイルではないので着ない。基本的にヴィヴィアンは流行を気にしないで、自分が過ごしやすい服装をしている。

「あ。そういえば、待ち合わせ十時なのに十時に起きたらまずいよな」

まあ、ヴィヴィアンがこない時は自分から店に来てくれるだろうが。彼のことだから、また新しい発明を自慢したくてうずうずしているに違いないのだ。

気付けば鮮やかな赤だった花は枯れ、しゅるしゅると元の種子へ戻っていくところだった。彼の種子は何度でも芽を出すから便利だ。ベッドに転がった種子を拾い、ポケットに入れる。

階段を降りていくと、ユキノがテーブルに突っ伏して寝入っていた。あどけない寝顔は幼い少年のようだ。たくさん戦ってくれたのだ、寝かしておいてやろう。

その辺りに落ちていた要らない紙を使って書き置きをし、外套を羽織らずに外に出た。施錠を終えて、時計塔まで歩く。

この蒸し暑いのに長袖を着てきたことを後悔した。いつもは外套で温度調節をするから良いが、ヴィヴィアンは暑いのが苦手である。待ち合わせ場所につくと、灰色の髪をした小柄な男（一瞬学生に見えた）がふてくされていた。ヴィヴィアンを捕らえる灰褐色の瞳は、少し眠たそうだった。何だ、彼も徹夜明けではないか。

「ヴィヴィアン！ お前いつも遅いっ」

彼は本当は黒髪で生まれてきたはずだったが、自宅で危険な実験ばかりしているために髪の色素が抜けたらしい。だから、見る位置によっては雨雲のような色合いだし、上から覗けば根元はほぼ黒に近い。長さはヴィヴィアンよりも短い、耳が全部出るほど短いわけでもない。彼は美容院になど行かず、自分の手で髪を切っているというから驚きだ。

「十時とつくに過ぎてるし」

「仕事してたんだよ仕事」

「どうせ寝起きの癖に。髪型変だっつーの！」

「仕事に疲れて寝てた。依頼で夜寝てなくて、さっきようやく三時間くらい寝れたとこ。……これでも俺を責める？」

言ってみれば、ロジェは小さく笑う。

「いや、何となく解ってたけど。地味に頑張ってるな、相変わらず」
「とりあえずうちに来いよ。寝足りないから話の途中で寝るかもだけど」

「おいおい」

ロジェは灰色の髪をくしゃくしゃ掻き回しながら、背後から何やら木製の板を取り出した。板はロジェの好きなオレンジ色に塗られている。角の取れた細い長方形のその板には、こぶし大の車輪らしきものが全部で三つついていた。

「何それ」

「名称未設定。移動が長いとき便利だよ。坂は上がれないけど」

「……危なくないか」

坂道をそのまま転がり続けたら、止まれなさそうだ。通行人にぶつかりそうになったら魔法で阻止しなければ。

「バランス感覚さえよければ、最高の相棒！」

「ふうん、また新しい発明か」

「そ！」

どうでもいいような発明から時々すごい物まで、ロジェは色々な

ものを作り続けている。職人の血筋だからか、彼は昔から何でも自分で作ろうとするのだ。

ちなみにロジェの父は陶器職人で、祖父は楽器職人だった。その前の代は忘れたが、遡っていくと本当に色々な職人の血がロジェに流れていることになる。殆どが王宮に仕え、王のためだけに最上級の逸品を献上していたというから凄い。

「今回は魔物に閃光を浴びせる発明をしたんだ」

「おお、すごいな」

それは大いに役立つだろう。閃光の魔法にはかなり労力を使うから、連続で発動できないのがとても痛いところなのだ。ロジェの発明で魔法を使わずに閃光を放てば、閃光から逃れた魔物を他の些細な魔法で倒す事だって可能ではないか。

「ただ、それだと俺も目が眩むから困ってるところ」

深刻な顔をするロジェだが、ヴィヴィアンにとってそれは大した問題ではない。

「俺が魔法かけてやるけど」

「駄目。なるべく魔法に頼らずに完成させたいから」

「はいはい、出たないつもの」

そんな頑固な職人氣質がロジェの気に入っているところだ。どうしても加工が人間業では不可能な機械などはヴィヴィアンが協力してやったこともあったが、それだって過去にたったの一度だ。

第十七話

提携

昼下がりの熱気にも、そろそろ嫌気が差してきた。ロジエは楽しそうに笑ってヴィヴィアンにボードを差し出してくる。何のつもりかと訝って彼を見下ろすと、本当に楽しそうな問いが返ってきた。

「なあヴィヴィアン、乗る？」

「……だめ。俺、今死ぬわけにいかないから」

「ひつでえ、俺が信用できない？」

「いや、だってそれどうやって止まるんだよ」

「車輪に改良を加えてあるんだ。見てて！」

ロジエはボードに片足だけ乗せて、もう片方の足で勢い良く石畳を蹴った。凄い速さで進んでいったと思ったら、そのままそこでぴたりと止まる。

「どうだ！ 凄いだろう？」

そう言いながら、彼はまた戻ってくる。どうやら止まる時に、ボードの一部を強く踏みつけているらしい。良く見れば切れ目が入っていて、そこを踏めば車輪にブレーキがかかる仕組みになっているようだ。よく考えたものである。

「あー本当、見事」

「面倒くさそうにいうなよなあー」

ロジエはボードから降り、小脇に抱えた。そしてヴィヴィアンの隣を歩く。

「先に帰ってていいのに」

ため息混じりに言っただけで、ロジエは少し不機嫌そうにヴィヴィアンを見上げる。

「だって店開いてないだろう？」

「いや、中に人残しといたから」

「人？」

「手紙に書いたろ、俺の弟子」

「ああ！ 謎の東国人ユキノだろ！！ 忘れてた、ちょっと会いに
いってくるわ！」

ボードを石畳に下ろし、彼はそれに飛び乗って凄い速度で走って
いった。好奇心が旺盛なところはロジェの売りだ。ヴィヴィアンは
走っていく気力もなく、歩いて店まで帰る。

ロジェは小さくてすばしっこいし、疲れにくい。本当は部屋に籠
って実験をするより、どこか外へ出て労働した方が彼にとってスト
レスがたまらないのではないかと思うほどだ。それでもロジェはイ
ンドアで、研究のためといって殆ど家から出ない。

彼の普段着は太股までの長さの黒衣（白衣を真っ黒に染め上げた
ものらしい）と、工具の入ったヒップバッグがメインだ。夏なら黒
衣の下はタンクトップ一枚だし、冬になると若干服の生地が厚くな
るものの、やはり軽装だ。火を使う実験で白衣が燃え尽きて以来、
彼は焦げ後が目立たない黒衣を着こんで実験をしている。もともと
その黒衣だって膝くらいまで丈があつたのに、やはり裾の方が燃え
たために切り取っていまの姿に至るのだった。

森から取ってきた鉱石を火に入れたり、壁になにやら特殊な気体
を吹き付けてみたりなど、とにかく彼は熱心だ。かと思えば真剣に
材木を切って織機（それも、工場で使うような大きいやつだ）を模
倣していたり、鉄材で近所じゅうに響く騒音を立てて怒られていた
りもする。ロジェがやっていることは本当に謎だ。先祖代々職人と
いうことで名のあるティエール家だが、ロジェからは本当に上流階
級の匂いを感じない。

家の前についた。ロジェはもう店に入っているらしい。依頼受け
を確認し、更に依頼が増えていることに気づいて嘆息する。嘆息し
ながら店のドアをくぐると、ユキノが真剣な目でロジェの喉元に刀
を突きつけていて驚いた。

「わ、わ、ごめん、別に怒らせるつもりじゃ…… ただ、原理が気
になったんだ」

「おいユキノ！」

ロジエが殺される。一瞬そう思ってしまった。

ユキノは殺気立った表情でこちらを振り向いた。その瞬間、後ろで綺麗にまとめていた彼の黒髪がぱりと解ける。よく見ればロジエの震える手に、ユキノのかんざしが一本握られていた。

「ユキノ、こいつは俺の友達だ。刀しまえ。ロジエ、お前は何やってんだ」

大方、眠るユキノの後頭部に触れた瞬間に刀を突きつけられたのだろう。ロジエは完全に度肝を抜かれたのか、固まった表情のままヴィヴィアンの方に駆けてしようとした。しかし、ロジエの腕をユキノが掴む。すごい力で掴んでいるのか、掴まれたロジエは転びそうになっている。

「返せ、それ一番重要なかんざし」

「あ、ごめん」

ユキノは髪が解けた拍子に床に落ちたほかのかんざし二本を広い集め、刀を鞘に収めてこちらを向いた。

「いや、ね。この髪型すごいな、どうやってんだろう？ って思ったらつい」

「手癖が悪いのはエステルと同類だな」

呆れながらため息をつく。ロジエは反省しているのかそうでないのか、ひきつった笑いを浮かべながらユキノの方をちらちらと気にしていた。

「ヴィヴィアンこいつ誰」

まだ怒っているのか、ユキノはかんざしで髪を結いなおしながらロジエを軽く睨む。ロジエは睨まれていることを気にもせず、今度は真顔になって目の前でユキノの髪が結われているのに釘付けになっていた。

「……さっきまでのあのビビり様はなんだったんだ」

「ねえねえ今のもう一回やってみて！」

「ロジエ、お前少し黙ってろ」

原理が気になる！ といったは色々な機械や人間をじろじろ観察

するため、ロジェは余計に変人だ。街でロジェを知らない人はいないのではないだろうか。ユキノの髪型がよほど面白いのか、ロジェは色々な角度から彼の髪を眺めている。ユキノは何だか怒気もそがれたように、彼の視線から逃げたり物陰に隠れようとしたりしている。

ヴィヴィアンは柱の陰に隠れたユキノと彼を追うロジェを、咳払いして呼び戻した。

「こいつはロジェ・ティエール。俺の友人で、非魔法族の貴族。発明家だ」

「将来教科書に載るぜ、俺！　ロジェって呼んでよ。あ、君の事はユキノでいい？」

「いいけど」

「で、さっそくだけどユキノ」

「ロジェ」

髪を見せてくれ！　というであろうロジェを軽く嗜めると、ユキノが慌てて胸の前辺りで手を振る。

「いいんだヴィヴィアン、助っ人ってこの人のことなんだろう？　あの、さっきはごめん。これ父さんの形見だから、あんまり人に触らせたくなくて」

先ほど彼が一番重要だと表現したかんざしは、他二本と違って少し豪華なデザインだった。シンプルな二本に対し、このかんざしには飾りがしてある。艶やかな黒地に、貝細工のような不思議な色合いをした、流れるような線の模様が入っている。

「あ……　悪いことしちゃったね」

「いや、良いんだよ、俺があんなどこで寝てたのが悪い」

しよげるロジェに、ユキノはいつもの気さくな笑みを送る。そして困ったようにヴィヴィアンを見る。面倒くさくなつてロジェの後頭部を軽くひっぱたく。

「痛っ！　何すんだよ！」

「辛気臭い顔すんな。ユキノがいいって言ってんだからいいだろ」

ユキノは結った髪を整え、小さく腰を折って身体を前に倒す動作をした。よろけたのかと思ったら違うようだ。

「俺はユキノⅡサクライ。イリナギから来たんだ」

「今の動き何!？」

「え、お辞儀……?」

「挨拶みたいなもんなのか?」

「そう。イリナギではこれが普通なんだ」

「へえ! 気になる! もっと話してよ。その服は?」

すっかり打ち解けてしまった二人を横目に見ながら、ヴィヴィアンは大きくあくびをする。

「おいロジェ、今夜のプロジェクトについて話さないのか」

「あっ忘れてた。これ本業だよね俺の。えっと、これ」

適当にテーブルの席につき、ロジェは黒衣のポケットから出した銀色の珠をごろごろとテーブルに転がした。ヴィヴィアンはそれをひとつ摘み上げてみる。真珠ほどの大きさの銀色の珠には、一本ずつ細い紐がついていた。

「これが導火線。着火して投げるとだいたい三秒でフラッシュ。やってみる? かなり眩しいよ」

「一応試しておくか。庭出る」

ロジェを連れて庭に出る。庭には洗濯物の物干し竿と小さな噴水があり、名前が解らない白い花のアーチもある。これは母が趣味でやったものだ。植物が好きなエストルが時々ふらりとやってきて手入れしてくれたりするから、庭は綺麗な状態で保たれている。

「じゃあやるよ」

自分の発明を披露するのが嬉しいのだろう。ロジェは銀色の珠を一つとって火打石で着火すると、すぐに真上へと投げた。本当に三秒後くらいに、真っ白な閃光があたりを焼いた。昼間の景色すら真っ白につぶれるくらいなのだから、夜に使えば効果はてき面だろう。「うわっ、本当に眩しい」

もろに光に直撃されてしまったらしいユキノは、長い指で顔を覆

って悶絶している。彼は本当に動きが多い。しかもいちいち俊敏で笑える。

「それでも威力はあるけど、改良すればもう少し閃光が長持ちすると思うんだ」

ロジエは破裂の瞬間に腕で目をかくしていたらしい。辺りを見ながら目をしばたき、彼はヴィヴィアンを見つけて微笑む。ヴィヴィアンは頷いて見せ、庭のなかほどに落ちてきた銀の珠の欠片をつまみあげる。朝顔の種ほどの大きさしか残っていなかったが、融けた金属のようだ。

「これなら俺の魔法と同等の威力だろうな」

「ただ困るのが、時々不発もあることかなあ。導火線が途中で燃え尽きたりするんだ。上手く着火しない」

「これ、材質は？」

「マグネシウムに細工をしてるんだ。これ単体で燃やしても強い光が出る」

「炎色反応か」

「そう。やっぱり一番強いのは白だろ？」

「ああ」

「ただ、マグネシウムは着火するまでが大変なんだ。導火線を太くするのも手だけど、どんな手を使っても安定性がない。加工も大変になるし、まず導火線自体が途中で燃え尽きて着火しなかったりとかするし。もう少し酸素が入ればいいのかなあ」

ロジエは自分の専門知識についてはぺらぺら喋る。そして、知らない知識についてはほとんどん突っ込んで訊く。

だから彼はとても知的なはずなのだが、どうも思考回路のどこかに欠陥が生じているらしい。彼の作る発明品は、八割がたヴィヴィアンにとっては『才能の無駄遣い』だと感じるものなのだ。

例えば全自動卵割り機とか。足こぎ式自動洗濯装置や、全自動サンドウィッチ製作機などというのもあった。食器洗い機に至ってはコツを掴まないと食器がすべて使い物にならなくなるし、目覚まし

時計と称されたシステムでは、時間になると頭の上から本が降ってくるという非常に野蛮な装置を使う。彼の発明はどれも凄いとは思うが、どれも使おうと思えない。

「ユキノ、イリナギの古語について教えて！　ことばは国の歴史そのものだからね。きつと全世界と共通する言葉が生まれる前に、独自の文化があったはずなんだ！　エンカンタリアじゃ、自分の国の古語なんか魔道士しか知らないんだぜ？　あ、食いもんはどう？　医者はいる？　それから印刷技術とかどうだろう。新聞はある？

魔道士と科学者の関係は良好？　税金のシステムにも特色があるはずだな。畑の広さで課税する仕組みなのか、出来高制なのか。家屋の形状もここときつと違うよね？　あつ、田舎と都会でどう違うのか教えてよ。農村部と城下町じゃ絶対違いがあるだろ！　殿つていうのはやっぱり城に住んでるの？　城の敷地面積は？」

目をきらきらさせてずいずい歩み寄るロジェに、ユキノが後ずさりながら困ったように首を振る。

「そ、そんなにいっぱい聞かれても解んない！」

「え、じゃあまず服装から！　それどうやって着てるの？　原理が気になる」

あれだけ雨のように浴びせておいても、まだロジェの質問攻撃は尽きないようだった。最初こそたじたじだったユキノも、だんだん楽しそうにロジェと会話し始める。ヴィヴィアンは本格的に眠くなってきた、何度目か解らないあくびをした。

「おい、ロジェ。今夜どうする」

「今夜は空いてるよ。俺んちに来たら？」

「そうしようか。依頼が大量に来てるから、お前も手伝え」

「えー。じゃあ俺にも分け前くれよ。研究資金が若干足りないんだ」「仕事上の提携だ、ただ働きさせるつもりはない」

「よし、じゃあ十時な！　俺、製本機改良してくる！」

ロジェはヴィヴィアンに手を振り、忙しそうに去っていった。ユキノが彼に名残惜しそうに手を振り返し、大きく伸びをしている。

「ちょっと寝たらすつきりした。午前のうちにやれることやつとくな」

ユキノはおそらく、もともと睡眠時間が少なくても平気なタチなのだろう。ロングスリーパーのヴィヴィアンは、特に冬場になると布団から中々出てこない。

「俺は寝る。客来たら起こせ」

「解った！」

楽しげに返事をし、ユキノは着物の裾をたくし上げた。早速家事にとりかかるらしい。階段を上って自室のドアを開け、まだエストルの趣味の悪い目覚ましの香りがほのかに残るベッドにダイヴすると、ヴィヴィアンは眼鏡も外さずに寝入った。

第十八話

家庭的な弟子

念願の弟子入りを果たしたユキノは、まだ高揚した気分で過ごしていた。誓約書には色々な注意事項が書いてあったが、ユキノの中では常識だったので本当に良かった。基本的にユキノは他人のプライベートを尊重するタイプだから、必要以上に干渉する気などは元からない。

ユキノは着物の袖を捲り、平紐をたすきがけにして留めた。暑いし動きにくいので裾をたくし上げて端折ると、股引のない足の見栄えがあまりよくなかった。客がきたらそのまま出て行けるように、黒の股引を穿いてみる。この股引は膝下までの長さに切ってある夏用のものだ。

紐を結ぶ時に帯が邪魔だったから、適当に緩めて紐を結ぶ。そうして着物をもう一度端折りなおし、ユキノは洗い物にとりかかった。エンカンタリアでは七分丈や半ズボンに派手な色の靴下を穿くのが流行っているようだが、ヴィヴィアンはあまり流行を気にしていないように思えた。それでもユキノから見ると、ヴィヴィアンのセンスは割と良いのだ。

エストルはいかにも女性にもてそうなハイセンスな男だったが、ヴィヴィアンはさりげなくセンスが良いのだとユキノは思う。もしかしたらナタリアに世話を焼いてもらっているせいなのかもしれないと、ちらりと思う。

洗い物はすぐに終わった。ユキノはカーテンを空け、玄関扉に吊るされている小さなメッセージボードを裏返した。金色の豪華な飾り文字で描かれた「Close」を「Open」にすると、魔法でもかかっているのか自動的に玄関扉が少し内側に開く。

この家は店としての仕様がどこしてあるから、玄関扉が大きい。しかも両開きになっている。通りに面している壁には、窓も多い。家のカラーリングも爽やかで、濃緑と白が基調だ。

鉢に植わった観葉植物は干からびかけていたから、あとで水をやらなければ。折角こんな良い家に住んでいるのだから、ヴィヴィアンはもう少し気を配ってこの綺麗さを保つべきだ。

ユキノは傘立ての傘を綺麗に巻きなおし、三本そろえて置いておく。

「ユキノー！」

振り返ると、真っ白な石畳をあめ美人姉妹が歩いてくるのが見えた。ナタリアは大きくこちらに手を振っていて、ローザはライムグリーンのかロスがかけられたバスケットを持っている。

「さっきぶりー」

笑いながら言ってみると、二人は顔を見合わせて笑った。

「そうね、もうこんなにちはかしら？ ヴィヴィアンは中にいるの？」
「寝てる。客くるまで起こすなって」

「今回の私たちはお客さんじゃないわ。仕方ないわね」

少しふくれっ面になって二階を見上げ、長い金髪を優雅にかきあげるナタリア。ナタリアは最後に会ったときと違って、ホルターネックの白いワンピースだった。胸の大きいナタリアがホルターネックを着ると、なんだか更に胸が強調されるような気がする。

イリナギの女性にくらべたらエンカンタリアの女性は大胆だとユキノは思う。母国では、遊郭にいるような女性でもないかぎり夏でも胸元はきっちり閉じていたし、脚もすっかり着物で隠れているからだ。

「そうだ、届いた？ 紙」

服装のことを考えていたら、着物のことを思い出した。着物の寸法を書いた紙はちゃんと届いたのだろうか。エステルは大丈夫だと言ったが、実際に届いているかどうかの確認をまだしていない。

ヴィヴィアンと違って、エステルは魔法陣を描くのに特別なペンを用いた。なんでも、そうしないと魔法が安定しないらしい。それでいて植物の魔法に限っては、まるで自分の一部のように自在に操る事ができるというから不思議だ。感激して褒めちぎったら、『植

物なら負けないけど、それ以外じゃ何もヴィヴィアンに勝てないぜ』などとエステルは笑った。ちよっぴり悔しそうだった。

一般の魔道士はヴィヴィアンのようにさっと綺麗な魔法陣を描いて魔法を発動することができないらしい。だから、師匠は確かにたくさんの魔道士の中でも凄い部類に入るのだらうとユキノは改めて思った。

「ばっちりよ。長さの単位に苦戦したけど、お父さんに聞いたら全部解決したの。ね、ローザ」

「そうなの。ナタリア、もう作り始めようとしてるんだよ。色んな寸法が書いてあったでしょう？ 女性用とか子供用とか、それから羽織りや袴まで」

にこりと微笑むローザに、ユキノも笑い返す。出会った頃に比べると、ローザはかなり笑顔を見せるようになった。打ち解けてくれたようで、なんだか嬉しい。

「よかった！ 腹掛けくらいなら自分で作れるけど、着物となるとやったことがなくて。男物だったら身の丈ぴったりにあわせるから楽な気がするんだけど」

言ってみると、ナタリアは楽しそうに笑う。

「頑張るわ、任せてちょうだい！ このワンピースだって私が作ったんだもの」

「すげえ！ 相当凄い腕だなそれ、既製品かと思ってた」

普通に仕立て屋が作ったのだと思っていた。素直に感想を述べれば、ナタリアは嬉しそうにした。

ユキノから見れば、ナタリアはかなり凄い女の子だ。イリナギの料理だってすぐに覚え、こうして服だってつくるし、掃除や洗濯もできる。それに、見ず知らずのユキノのことを親身に考えてくれた数少ない人でもあるのだ。

「私、将来自分で作った服を売って暮らすつもりなの。着物もレパートリーにいれるわ」

飾らないところがナタリアの良さだとユキノは思う。何でもでき

るくせに奢らず、褒められたら素直に喜ぶのは良いことだ。つつみ隠す奥ゆかしさも確かに必要だとは思うが、こうしてストレートに感情表現をしてくれると非常に付き合いやすい。

「応援してる。着物は女物だと脇閉じたりして少し形が違うから、詳しい作り方はまた機会があったらイリナギの人に聞いとくよ。男物を作ってくれたら俺が買いに行くから。あ、勿論今回もただ働きはさせないからな。布は高価だし」

「あら、いいのよ。私だってまだ研究段階なもの」

「大丈夫、俺も何でも屋だから！俺が稼いだ分は俺が使って良いってヴィヴィアン言ってたし」

「もうすっかり弟子じゃない！よかったわねっ」

ナタリアは感激したようにユキノの両手を取り、はじけるような笑顔を浮かべる。彼女のスキンシップは少々過剰だが、不思議なものでたった一日でこれが普通だと思えてしまう自分がいる。抱きつかれた時には流石に動揺したが、ヴィヴィアンだってやられていたので他意は全くないと解っていた。

彼女はたぶん、言葉で表現するのがもどかしいほどの感情を抱えて生きているのだ。ダンスや演劇などのパフォーマンスをやらせてみたら、誰よりも輝くことは間違いない。

「ね、ねえっ」

何だか必死そうに呼ばれ、振り向くとローザが困ったようにナタリアを見ていた。

「ナタリア、目的忘れてるよ！帰ってお父さんを手伝わなきゃ」

「あら。そうよ、私たち届け物をしにきたのよね」

ふわりとユキノから離れ、ナタリアはローザに愛らしい笑みを投げかける。そして、彼女の背中を軽く叩いた。押されるように一歩前に進み出たローザは、何を言うのか少し逡巡したらしかったが、手に持っていた大きなバスケットの取っ手を両手で持ってユキノに差し出す。

「これ、届けにきたの」

「何これ？」

訊ねると、ローザはバスケットに目を落とす。かけられたクロスの間から艶やかな果実が見えた。あれは桃だろうか。

「お父さんがお礼につて。冷蔵庫は無事だったの。メロンとキウイ、あと何だったかな」

「克蘭ベリージャム。はちみつ。桃も入ってるわ。オレンジもいくつか入れておいたはずよ。そうそう、お砂糖も一袋」

何だかとてもデザートに向きそうな果実ばかりつまっているらしいバスケットを手渡されるが、ユキノはどうしていいか解らなくて困った。

「えっ、いいのかよ？ お代もう貰っただろ？」

「私たちに血の結界を使ったり、お父さんの傷を治したりしたのは依頼に含まれてたことじゃないよ。それに、ヴィヴィアンはどうせいつも不健康な食生活をしてるから、フルーツを摂って少し栄養をつけろってお父さんが言ってたの。それと、ユキノさんのこともね」
え、と思わず呟くと、ローザはユキノを真っ直ぐに見上げた。

「ユキノさんもかなり痩せてるから、あんまり食べてないんじゃないかって心配してたよ。治してくれてありがとう、また塾にも遊びにおいで、って伝えて来いって言われたの」

こんな風に誰かから感謝されたことなど、ユキノにはあまりなかった。何の反応もできずに固まっていると、ローザが不思議そうな顔でナタリアを見やる。ナタリアが何か言おうとしたので、ユキノはその前に口を開く。

「初めて。家族以外の大人にこんなこと言ってもらえたの」

「……ユキノ」

「食事の心配も感謝もされたことなかったから。なんか、すげー嬉しい」

微笑が浮かぶのを押さえられなかった。他人に認めてもらえるのは無上の喜びだ。それは否定され続けることに慣れていた心に、暖かい雨のように染み入ってくる。そうして、また頑張ろうと思える

力をくれる。

エンカンタリアにもユキノを薄気味悪そうに見る人間がいなかったわけではない。だが、ヴィヴィアンの周囲の人間は誰もユキノに敵意を向けなかった。

ヴィヴィアンの周りにいる人は、皆優しくて親切だ。そしてヴィヴィアンだって、とても遠まわしな（きっと皆には気づかれないような）さりげない優しさを持っている。

きっと皆、愛されて育ったのだろうとユキノは思う。それはとても嬉しく、微笑ましいことだった。

「あたし、ユキノのそういうところ大好きよ。素直で優しくて、ほんとうに些細なことで喜べるじゃない」

「ありがと！ でもそういう言葉は、将来一緒に店を持ってくれる男のためにとっとけよ」

他意はないと解っていたが、言われなれていない優しい言葉にほんの少しだけ戸惑っていた。故郷のイリナギの女性は友愛の表現どころか恋い慕う相手にすらこんな直球を使わないから、ユキノはこんな風に直球で好きだと言われたことなどなかった。

しかし、照れ隠しだってナタリアにかかれば、

「あら、洒落たこというじゃない！」

こんな風に、前向きな印象が変わってしまう。彼女はとてもポジティブで、一緒にいて楽しい。ユキノはナタリアと笑い合う。

ナタリアと話していると、何だか前からずっと友達だったような気がする。ローザは話しかけるたびに少しずつ自分への警戒を解いてくれるのが解るので嬉しい。アイアランドの姉妹は、二人ともかなり好感を持てる。

「ありがとな、ローザ。これ重かっただろ」

バスケットを指して言えば、ローザは首を横に振る。

「途中までナタリアに持ってきてもらったの」

「そうなのか？ ナタリアもありがとな、長旅ご苦労さん」

言ってやればナタリアは嬉しそうに頷いた。ローザはちらりと街

の中心の時計塔を見やり、申し訳なさそうな表情をする。

「私たち、そろそろ戻るね。まだ話していたいけど、復旧が終わってないの。お昼に間に合うようにって、お使いで」

「ああ、じゃあ俺も手伝うよ」

本当に何気なくそう言ったのだが、ナタリアがユキノの肩をばしりと叩いた。

「痛っ!？」

「駄目よ。あんたは師匠のことをきいてちゃんと留守番してなさい。いいつけを守らなかったら、折角弟子にしてもらえたのが台無しよ!」

「うわー、うかつだった。じゃ、ヴィヴィアンが起きたら一緒に行く」

「助かるわ、作業は難航してるの。夜までには何とかしたいから、もしかしたら依頼にくるかもしれないわ」

長い金髪に右手の指を通してながら、ナタリアは微笑む。ローザはその隣で少しだけ嬉しそうに頷いていた。

「わかった。二人とも、気をつけて帰れよ」

「ええ、ありがとう! ヴィヴィアンによろしくね」

肩越しに振り返りながら手を振る彼女はとても美しかった。本当にナタリアは、嫌味のない魅力を持った女の子だ。男をとりこにする力はきつと誰よりもあるが、魔性と呼ぶには明るすぎる魅力だと思う。計算のにおいも感じない。

だからこそ、すつきりとした友愛的な好感がもてるのだとユキノは思う。媚びる女性は昔から苦手だ。

「さよならユキノさん」

「ばいばい、ローザ。また来てくれよ」

ローザもユキノに手を振って、姉の後を追いかけていった。ナタリアほど鮮やかな魅力はないにしろ、ローザも地味に可愛らしい。確かにナタリアに比べたら非常に素朴ではあるが、繊細で優しい顔立ちや小柄な体格はかなり好印象だとユキノは思っている。

ライムグリーンの瞳に眩い金髪という点では、ナタリアもローザも同じだ。ただナタリアの方が目立っているだけで、ローザが可愛くないかといったらそうではない。

「なんか、良いもの貰っちゃったなあ」

二人が見えなくなるまで見送ってから店に入り、バスケットの中身を移そうと冷却魔法がかけられた箱を覗く。中にリンゴがひとつ入っているのをみつけ、ユキノは微笑した。師匠の好物がひとつわかった。

依頼書を整理しながら、窓を拭く。持ってきていた布を使って、前掛けをつくってみる。それから観葉植物の位置を少し直し、食器棚の中身を整頓する。無地の前掛けが気になって店名の刺繍を試みた。そんな些細な家事や私事をしているうちに、もう昼の鐘がなった。

「起こすなって言われたけどなあ……」

欠食はよくない。午後には依頼がたくさんくるだろうし、現に山積みなのだ。体力をつけておかないと、魔物の群れの真ん中で倒れることもあり得る。

米はまだ残っているので、ちょっと質素になってしまうが一応食事を作る事が出来る。質素でも食べられさえすれば良いと思うが、やはり買い物に行きたい。そう考えてから、今この街が壊滅的な状況になっていることを思い出した。

考えてみれば、このリリエンスール家は異常なのだ。一般の人々は甚大な被害を受けているのに、魔法に守られているおかげでここだけはまったくの無傷なのだから。庭ですら荒らされた様子がない。すぐ隣の花屋はひっそりと静まり返っていたし、向かいの酒屋も今日は営業を停止しているようなのに。

壊滅した街のことを考えながら、何気なく玄関を出て依頼受けを覗く。

「あっ、依頼増えてる！」

箱の中には五通ほど依頼書が入っていた。それらはすべて復旧手

伝いの依頼だ。

「起こしたほうが良いよなあ」

少し逡巡していると、背後に人が立つ気配がした。さっと振り返ると、東方系の痩せた男が微笑を浮かべて立っていた。外見でいうと三十代くらいに見える。あまり血色が良くなく、眉毛も目も細い。この人は客なのだろうか？

「いらっしやいませ！ ご依頼ですか？」

心持ち緊張しつつも訊ねてみると、男は頷いた。

「ええ、ちよっとね。お手伝いしていただきたいんですよ」

黒に近い灰色の髪をオールバックにした男は、人種的に見ても間違いなく東の出身だろう。しかし、東国は東国でもユキノのいるイリナギとはまた少し違った感じだ。

彼が着ている鮮やかな青の詰襟の上着は、腿辺りまでの長めのものだ。腰の辺りにスリットが入っている。おそらく、隣国であるリエンホアの出身だろう。

「師匠を起こしてきます！ 上がって待っていて下さい、お客様！」

ユキノは男を店に上げると、全速力で階段を上った。

第十九話

風変わりな復旧依頼

何だか物音がうるさかった。誓約書には騒音を立てたら追い出すと書いておいたはずなのに、彼はもうそのことを忘れているのだろうか。手間のかかる弟子だ。

「ユキノ、煩い」

「ヴィヴィアンお客さん！　なんか手伝って欲しいって」

「あー、面倒臭……」

起き上がってみると、まだかすかにエストルが芽吹かせたあの花の香りがした。やれやれと思いながら首を鳴らし、寝癖のついた髪を適当に整える。

「あとさ、依頼書が五通来てた」

「内容」

単語だけで問えば、ユキノはいたずらっぽく笑う。

「ぜんぶ復旧手伝いの依頼」

「サボろうかな」

「あっそうだ、ナタリアとローザが来たよ。いっぱいフルーツくれた。塾の先生が、ヴィヴィアンに栄養つけろって言ってたって」

「後でお礼に行かないとな」

「ナタリアたちも復旧が夜までかかりそうだって言ってた。後で手伝いに行こ！」

「面倒臭い……　俺疲れたから寝たい」

階段を降りきると、見慣れない東国人がいた。神経質そうな細面に、細いつり目。眉毛は細く、しかもこめかみの方へ向かうにしたがってどんどん無くなっていた。

体つきもどちらかというと華奢なほうで、本当に細いという形容詞が似合う男だ。彫りの浅い顔立ちの割には、老けて見える人だと思っ

「すみません。お待たせしました」

「こんにちは。早速ですがリリエンソールさん。我が家の復旧作業を手伝ってくださいな」

「はあ、程度はどれくらいですか」

復旧作業なら山ほど手伝いの依頼が来ている。断ることもできるが、折角出向いてくれたのだから依頼はなるべくうけなければ。作業できる人員は二人に増えたのだ、他の依頼はユキノに任せれば良い。

「雨どいですよ。雨どいを直して欲しいんです」

愛想の良い笑みを浮かべた男は、外見に似合わずやわらかい物腰だったので驚いた。

「雨どい、だけですか？」

めずらしいこともあるものだ。家が全壊したから手伝ってほしいという依頼ならまだしも、雨どいだけだなんて。そんな依頼は通常も時々あるくらいなのだ、こんな緊急時にされる依頼の種類としては少々奇抜だ。

「ええ。あそこから小さな魔物が侵入してくるのですよ。昨日は留守にしていたんで、人の気配を感じなかったのでしょうか、家は無事でした。ですがね、雨どいは元々壊れていまして」

「それって穴あいてるんですか？」

ユキノが不思議そうに訊ねる。馴れ馴れしくするかと嗜めようとしたが、客の男は特に気分を害した様子もなく笑った。

「ええ。というか、雨どいが軒から外れたところに大きな穴が開いてしまいました。外れるときに壁も一緒ににはがしてしまったようなのですよ」

「じゃ、塞ぎに行きます。ユキノ、店番頼んだ」

店を空にするよりも、開けておいてユキノに番をさせたほうが仕事の能率がいいと思う。復旧手伝いもできればさせて、仕事を少しでも減らしたいのが本音だが、そうしていると店が空になってしまっって少し不安だ。

「よっしゃ、任しといて！」

店番を任されて機嫌の良いユキノに、ヴィヴィアンは軽く手を上げて応える。

「ないと思うけど軽い依頼だったら出ててもいいから」

「了解。時間制限は？」

「三十分以内に解決できそうだったら行ってこい、それなら施錠が持つ」

先に歩き出した客に続いて、ジャケットを羽織って店を出る。店を出て簡単に施錠魔法を描けると、背後からユキノのいつてらっしやいという声を聞いた。返事は面倒臭くてしなかった。

「弟さんですか？」

「いや、まさか。違います」

本気でそう思われていたなら問題だ。一体どうして、全く共通点がないユキノを弟と間違われたのだろう。街の中心とは逆方向へ向かって、強い日差しの中を歩きながらヴィヴィアンは本気で首を横に振った。

「私の弟はあんちゃでしてねえ。なんだか挙動が似てるんですよ」

「あいつは俺の弟子です」

「ふうん、お弟子さんでしたか。どうりでお顔が似ていないわけだ」男はけらけらと笑う。ヴィヴィアンは頷いて苦笑した。完全にかかわれている。

一体どれほど歩いただろうか。三十分ぐらいは確実に歩いていた気がする。そろそろ疲れてきた頃に、街外れの寂しい場所に出た。

木々に囲まれた廃墟のような家を見て、こんなところに市民がいたかどうかを自問する。この近くに住む老婆に時々依頼をされるのだが、その時にはここに人がいた気配は少しも感じなかった。

こんな町外れだし、建物が老朽化しているし、普通だったらここに住みたいとはあまり思えないとヴィヴィアンは思う。

そう考えるとおそらく、この物件は物凄く安かったのだろう。この依頼人はあまり金持ちではないらしい。外見的には全くそんな風には見えないし、むしろ高貴な感じすらするのに。

「ここです」

「雨どいだけですか、本当に」

煙突は今にも折れそうで、壁のレンガは半分崩れかけているような、そんな家だ。鉄製の門扉もすっかり錆びて赤茶になり、もう銀色の部分など少しも残してはいない。

しかし、男は笑顔で頷いた。

「今のところは平気ですよ。最近越してきたばかりなんですけどねえ、何せ移民ですからお金もなくて…… ああ、大丈夫ですよ。今はちやんと稼ぎましたから、貴方をただ働かさせるつもりはありません」
「だったら、もっといい貸家が街の中心あたりにもっとありますよ。あえてこんな所にすまなくても」

「私、この静かな家が気に入ってしまして。人が多いところは苦手なんですよ」

「そうですか」

そういうことなら無理に街の暮らしを勧めることもない。ヴィヴィアンは頷いて、雨どいを探した。朽ちかけた屋根をぐるりと見回すと、雨どいが外れて出来たらしい穴を見つけた。もともと壁にはつる植物がたくさん絡み付いていたから、屋根の影になった軒下は確認しづらかった。

雨どいは風の影響か、はたまた小型の魔物が上に乗ったのかはわからないが、壁の一部ごと外れて中途半端にぶら下がっている。

「ここですか」

外れている箇所は、見たところ一箇所だけだ。本当にわかりづらい穴だったが、確かにこの鬱蒼とした木々に囲まれた家（というより廃屋）には、街中よりも魔物が出やすそうで危険な感じがする。

「直りますかねえ。派手にいっちゃってますが」

「勿論直ります。じゃあ、今回の報酬はいくらにしますか？」

「そうですねえ、貴方の希望でよろしいですよ。金貨は出せませんが」

「じゃあ銀貨四枚で。良いですか？ 良ければ契約書にサインを」

これくらいの仕事なら、銀貨一枚ぐらいでも良かった。けれど、遠出という面倒くさいステップを踏み、なおかつ無意識に二人分稼がなければと思っていたため、二の倍数で最もそれらしい数字が出てきたのだった。一応、呪文数に応じて基本給は自分で決めているが、相手への説明をし忘れた。まあ、一度決めてしまったものは仕方ない。次回依頼された時に割引すればいいだろう。

「わかりました」

男は特に異論を唱えることもなくヴィヴィアンのペンを受け取り、ユキノとはまた違った癖のある角ばった字で名を記した。ジーイェ、と読み取れる。

「契約成立ですね。それでは、預かります」

胸ポケットに綺麗に畳んだ契約書を入れて、ヴィヴィアンは解りにくい雨どいの穴の下へ移動した。空中に魔法陣を描き、淡い黄色の光を帯びたその円形に呪文を書き込んでいく。そして、雨どいを支えて壁と接着するための部分を、元の位置に戻す。あとは壁のレンガと漆喰を部分的に固めなおすための呪文を唱えれば全てが終わった。

「終わりました。これでよろしいですか」

「ええ、ありがとうございます。報酬は銀貨四枚ですね」

嬉しそうに言いながら、ジーイェはヴィヴィアンの手に銀貨を握らせた。ヴィヴィアンは胸ポケットから契約書を出し、サインを書き加えてからジーイェに渡した。

「こちらが領収書になります」

渡した瞬間、契約書の文面は紙の上を滑るように動き、内容が領収書に変わった。それをしげしげと眺め、深い笑みを浮かべてジーイェは頷いた。

「実に楽しい魔法だ」

「それでは失礼します。またのご利用、お待ちしております」

ジーイェは手を振ってヴィヴィアンを送ってくれた。ヴィヴィアンは少し早歩きで自宅へ戻る。

「ユキノ」

「あ、おかえり！」

ユキノはソファから立ち上がってヴィヴィアンを出迎えた。しかし、彼が座っていたソファの正面には客がいる。

「バカ、お客さんのとこにいろ。いらっしやいませ」

会釈すると、立派に仕立てられた質の良い礼装を身に纏った男がヴィヴィアンに軽く手を上げて応えた。ロマンズグレーの髪に、胸の金のピンバッヂ。この格好からすると、彼はおそらく令嬢の屋敷に仕える執事のひとりだろう。

「いやあ、手先の器用な方ですね」

「うちの新人りです」

言いながらユキノをちらりと見ると、彼は誇らしげに前掛けを広げて見せた。シンプルな濃紺の前掛けの隅に、自分で刺繍したらしい「comodin」の字が見て取れた。筆記体はユキノ流で、一瞬では判読できなかった。いつのまに作ったのだろう。

「そうでしたか。良く働くい新人りさんですね、助かることも多いでしょう」

苦笑を交えて頷くと、男は子供のような無邪気な笑みを浮かべる。「魔物に襲われて転んだ時に、時計が壊れてしまいました。街の時計屋は、復旧作業で忙しいんですよ。それで魔法で直してもらおうと思ったんですが……」

時計はユキノの手の中で元通りに組み立てられ、また秒針を動かした。男は楽しそうに目を細め、軽く拍手をした。

「お見事です」

「いや、そんなことないですよ。からくりの類は昔から得意なんでああ、と思う。」

そういえば彼は、二本の細長い棒で食事をするような男だった。もともと器用なたちなのだろう。

「代金ですよ。今度から時計屋ではなく、貴方のところにくることにしましょう。すばらしい芸を見せていただきました」

本当に楽しそうに笑いながら、男はユキノに金貨を渡した。ユキノが礼を言うタイミングで、ヴィヴィアンも一緒に礼を言った。

「またきますよ。是非、パーティーにもいらしてくださいね」

「はい！　ありがとうございます！」

ユキノと二人で男を玄関まで送り、その背中が見えなくなるまで見送った。そうしてから、依頼受けを確認する。復旧作業の手伝い依頼が増えていた。頭を抱えなくなった。

「な、なあヴィヴィアン。俺、金貨もらっちゃったよ！　時計直しただけなのに！」

「お前、やらせてみると結構何でもできるな」

「やった！　ヴィヴィアンに褒められた！」

興奮して飛び跳ねるユキノを嗜めながら、ヴィヴィアンは少し笑った。

ひとたび座り込んだり寝たりしてしまえば、もう起きるのが億劫になる。ならば、依頼から帰って来たばかりの今、新人教育をはじめよう。それに、魔法を少しでも使えるようになったら復旧作業の依頼も楽にこなせると思う。

「ユキノ、そこ座れ」

ソファを指差して言い、ヴィヴィアンは自分用の低い椅子を持ってきた。ソファの前に置かれたテーブルに大量の魔道書を積み上げ、ユキノの正面に座ってヴィヴィアンは笑った。

「まずは基礎からな」

ユキノの顔がぱっと輝いた。

第二十話

新人研修

積み上げた魔道書を上から順に開いてみて、ヴィヴィアンが幼い頃に初めて読んだ魔道書を探り出す。大きくて重い魔道書だ。縦の長さはヴィヴィアンの肘から中指の先の長さより長いので、本棚には本と棚との間に出来た僅かな隙間に横向きに突っ込んである。

「これ読んでみれば大体俺がいたいことは解るとおもう。やる」
革張りの厚い表紙はもうぼろぼろで、ページをめくればインクの染みがたくさんついていたが、それでもユキノは目を丸くして驚いている。

「やる、ってことは…… え、いいの？ この本、俺にくれるの？」
「俺はもう使わない。それ、俺が三歳のときに読み始めた魔道書だ」
著者の名前すら解らないほどボロボロになっているが、背表紙には『基本魔道入門―属性別呪文索引つき―』と書いてあるのが辛うじて読み取れる。

「魔道書…… こういう本、魔道書っていうんだ！」
知らずに読んでいたのか。そう思ったが、そういえば何も教えていなかったことを思い出した。知らなくて当たり前だ。

「そう。魔法に関する資料だったり、呪文だったり魔法陣の描き方を解説している専門書は全般的にそう呼ばれる。魔道士にとってはこれがバイブルだ」

「結構読んでみたんだけど、内容がよくわかんなかった」

「それはお前が呪文をひとつも知らない素人だからだ。内容は特に難しく考えなくても、基礎さえできていれば感覚で身につくものだから」

「すげえ！」

驚いたように言うユキノだが、ヴィヴィアンは苦笑する。

「お前、刀を握る時に『左肘の角度は何度で、振り下ろす速さは何秒で』なんて考えるか？」

「全く考えない」

「それと一緒にだ」

納得したように頷きながら、ユキノは古めかしい魔道書の一番最初のページを開いた。表紙の裏に、きれいな円形に正方形を組み合わせた初歩的な魔法陣が載っている。

「まず、課題ひとつめ。それ練習しとけ」

「はい、師匠」

楽しげに頷いて、ユキノは懐から柔らかそうな白い紙と黒っぽい蠟を取り出した。メモにはそんなものを使うらしい。ただ、魔道書を一冊勉強するには明らかに面積が足りなさそうに見える。

「その形さえあれば基本的な要素は全部押さえられる。あとは応用がきくから」

言いながら、ヴィヴィアンは玄関近くに据えてある仕事用の引き出しをあさる。使っていない万年筆が出てきた。未使用の日記帳もあったので、纏めて引き出しから取り出してユキノに渡した。

「ほら、ノートとなるならこれ使え」

「え、駄目だよヴィヴィアン！ 紙は貴重だろ」

確かにそうだ。紙は高いし、大量には手に入らない。何でも屋を営む際の経費も、八割くらいが依頼書などの紙代だ。（ちなみに使用後に不用となり、床を散らかす要因へと変貌するのだから尚のくと頭が痛い）

「じゃあ今から石盤買ってくるか？ そうもいかないだろ、毎回せっかく覚えたことを消さなきゃならないし」

そうなのだ、魔道士になるためにはかなり勉強が必要なのである。記録し、保存するための媒体をたくさんもっていなければいけない。

「でも」

「それにお前の師匠は面倒臭がりだから、日記をつけたりなんかしない」

あえて“師匠”というワードをちらつかせることで、さらに食い下がるようにするユキノにストップをかけた。もう相手をするのが面

倒になりかけていたのだった。

「……ありがとうヴィヴィアン。俺、頑張って勉強する」
「じゃ、次」

ユキノは古くて分厚い日記帳が本当に嬉しいらしい。あれは、前に依頼を受けたとき、代金がないからと代わりに渡されたものだ。ヴィヴィアンは普段使っているインクの瓶を持ってきて、ユキノの前に置いてやる。

「まずは一ページ目。序章、魔法とその概要。魔法とは、学術的な定義では『ある特定の条件を満たした者にだけ扱える特殊能力』であるとされている」

「魔法は魔法だろ？ って思うけどな」

「まあ、俺もそう思う。特別な力だってことだけは、皆の共通認識だからな」

ユキノは万年筆をインクに浸し、日記帳にメモを取り始める。そして、文字を書きながら少し顔を上げて質問してきた。

「特定の条件って？」

「まずは、性質。それから体質、知能、精神性……つまりさ、俺が最初に『素質はある』って言っただろ。ああいうことなんだ」

「わかんないよ」

「だろうな」

面倒になって説明を省いてみたが、やはり駄目らしい。当然か。

「魔法は人間の精神の部分と密接に絡んでいて、使いこなすには高い集中力が必要だっていうことは理解できるな？ そういった集中力の高さ、それから意思の強さも重要な条件だ。でもいくら魔法を使いたいと願ったとしても、素質のない人間は魔法を扱えない。つまり、ひとつでも欠ければ成立しない条件なんだ」

「へえ…… 冷静さとか？ 感情の強さも？」

「それは厳密には必須条件じゃない」

「そもそも魔道士の定義って？」

曖昧だ。そう答えたくなかったが、定義はちゃんと存在する。魔法

を使えば当たり前前に魔法使いだが、魔法使いと魔道士ではちよつと違うのだ。

「二つ以上の属性を操れる魔法使いのことだ。俺は大体の属性に嫌われてないから、魔道士を名乗れる。身近なところでいうと、エストルは炎を扱えない。代わりに植物と風の魔法が得意。そう考えると、あいつは二つの属性を持っているから、クリアってこと」

「属性の種類は？」

メモをとりながらどんどん質問を進めてくるユキノ。彼はヴィヴィアンがいちいち手取り足取り教えなくても、自分から突っ込んで聞いてくる。勉強熱心な男だ。

「火、水、風、土の四つが基本エレメント。あとは氷、音、光、闇。属性として成立している基本の八個な。これに植物とか天気、磁力みたいな特殊な属性をくわえる。ただ、そういう特殊な属性が自分のメインだっていう人はあんまりいないらしい」

「へえ、じゃあエストルは特殊なんだな。ヴィヴィアンのメインは？」

「一応、火って言えるかな。特に何も考えてなくても、火の魔法なら簡単に扱えるから」

「俺のは？ メイン」

「あ、メインを主属性、サブを付属性って言うんだ。覚えとけ」

「了解！」

日記帳の隅に『主属性と付属性』と書き、大きく丸で囲ってユキノは補足説明を加えていく。

「お前は水か氷だろうな。なんとなく雰囲気だ」

氷のような瞳と寒色系の服の色からして、なんとなく連想されるのが水や氷だ。そして、戦いの時に見せたあの冷静さは、間違いなく氷系統の魔力だと思う。

「ちゃんと魔道士かなあ？」

「だと思う。お前は色んなものにてこずらなさそう」

言ってやれば、彼は嬉しそうに笑った。そして、すぐに表情を変

えてこちらを窺う。

「ヴィヴィアン、苦手なのある？」

「音と闇はてこずる。あ、でも火の反属性だけど水はちゃんと扱える」

「反属性？ 新語。どういう意味？」

「なんとなく解るだろ。タイプが反対っぽい感じ」

「色でいうと赤と青みたいなの？」

「飲み込み早いな、お前」

ユキノが属性についてのメモをとるまで、ヴィヴィアンは彼の手元を眺めて待っていた。規則的に動くそのペン先から生まれる文字は、やはり癖が強くて読み取りづらい。

「基本エレメントの四つは重要だ。この四つのうち、どれも全く使えないっていう魔道士は稀。つまり、魔道士なら最低限この四つのうちどれか一つくらいは使えるのが当たり前ってことだ」

「へえ、魔道士にも当たり前なんてあるんだね」

納得しながら、ユキノはヴィヴィアンをちらりと見る。ヴィヴィアンは促されるように続ける。

「けど、どんなに頑張ってもある属性の魔法だけは一向に操れない…… っていう魔道士もいる。魔道士だからって全ての魔法を操れるとは限らない」

ユキノは頷きながら熱心にメモを取る。ヴィヴィアンは窓の外をちらりと見た。まだまだ日は傾かないが、そろそろ復旧の依頼をこなさなければ。

第二十一話 実技試験

急ぎ足で適当に教えてしまいたかったが、それではいけない。後々、自分が面倒くさい目にあうことになるのだ。

ヴィヴィアンは早くも面倒くさく思うが、自分に気力がどれだけあるのかをためすつもりでユキノと向き合い続ける。ここで責任から逃げてはいけない。

「属性がない魔法もあるぞ。施錠魔法なんかはそうだ。魔道士によつては『空気属性』なんて言い方もするらしいが、ないって考えた方が楽だ」

「うん。じゃあ他には属性がないのってあるの？」

「解りやすいところで行けば、契約書にかけた魔法。外套にかけてる、温度調節の魔法。それと、精霊との契約魔法」

「精霊？」

「この話は面倒くさいから後。これだけは本当に面倒くさい。そろそろ実技やろうか」

ヴィヴィアンはユキノに渡した魔道書の十ページを開いた。扉絵は長い外套の男が杖を掲げているところで、かなり古めかしい画風で描かれている。ここから、ようやく第一章だ。

「お前はこれで魔法の基本を理解した。魔道士の性質が属性によって決まることと、その属性について勉強したからな。いいな？ この知識さえあれば全てに応用できる。解らなくなってきたらこの基礎に戻ってくればいいんだ」

「了解です、師匠！」

「よし、じゃあここに円を描け」

魔道書をどけてテーブルを空ける。つややかに光を反射するニスの加工は、時々魔法で手入れをするから、随分と長いこと美しいままで。

「え！？ ここテーブルだよヴィヴィアン」

「失敗したら俺が消すから。まずは広い面積を取って、正確に描くのが大切だ」

そうやって足を組み、自分でやってみると言外に促してみる。

「はい、師匠！」

ユキノは頷き、それからふと首をかしげた。

「でも、どうやって描けばいいの？ やっぱペン？」

「ペンでもいいし、お前の持つてる蠟でもいい。俺みたいに魔力を直接魔法陣に流し込むのは、たぶんまだ早いから」

ユキノは少し緊張した面持ちで、魔道書のページを戻して基本の魔法陣を出した。そして、少し震えたペン先をテーブルに着ける。なめらかな曲線を走らせ、彼はテーブルに少し曲がった円を描いた。不安げにヴィヴィアンを見上げて手を止める彼に、続けろと指示を出す。

「最初は大体そんなもんだ。それに、ちょっとくらい歪んでも何とかなったりする。俺だって、いつもフリーハンドだろ？」

「わ、わかった」

ちなみにフリーハンドでもかなり正確に描けるのは経験の問題だ。慣れてくると自分の魔力が半分くらい動きを手伝ってくれているのが解る。

円の中に正方形を書き込み、ユキノは大きく息をついた。ヴィヴィアンは魔道書のページをめくり、第一章の最初の呪文を指差す。

「エル・ラティア。この呪文で火花を起こす」

ユキノの描いた線に触れないように、正方形と円の間をそつと指でなぞる。

「ここに描きこめ。あんまりつめて書くなよ」

「やってみる」

ユキノは魔道書を何度も見ながら、原本に忠実な書体で呪文を描いた。古めかしい角ばったフォントだ。

「いや、書体まで真似る必要はないんだぞ」

ユキノは無駄にレタリングが上手かった。この調子だと、絵がと

でも上手そうだ。

「やっぱイリナギ流じゃだめかなあって思ったから……」

「まあいい、次。この『エル』っていうのは、光の呪文の定冠詞。

文法は面倒臭いから解説しないけど、適当でもワードさえ合ってれば発動されるもんだ」

「アバウトだな」

「複雑なのはちゃんと順番覚えなくていいだけだな。合理的に楽すれば問題なし。要は魔法をかけるときの集中力と気合と魔力の整合性が何とかこんとかって、前に親父から聞いた」

「すげえ！ 格言！ 合理的に楽すれば問題なしなあ」

メモを取り始める彼を見て思わず笑う。ユキノは楽しそうに、ヴィヴィアンの次の指示をまっていた。

「光の呪文は基本的に難しい。だから、それを補うためにも魔法陣を強化する」

「待って、補うって……じゃあ、魔法陣って無くてもいいの？」
無くてもいいわけではないが、説明が面倒だ。長い足をゆっくり組みなおし、ヴィヴィアンは大きく伸びをする。

「簡単な魔法を使ってる分には、なくても大丈夫だ。でも、魔法陣が絶対に必要な魔法もある。強い魔法は大体そうなるな」

実際に簡単な魔法を使う場合は、ヴィヴィアンは口で言うのが面倒臭くて魔法陣を使い、魔法陣を描くのが面倒で呪文を口にする。要するに気分だ。

ただ、精霊召喚や血の結界のような高度な魔法になれば、嫌でも複雑な、もしくは特殊な魔法陣を描かなければいけないくなる。

「魔法陣だけで魔法は使える？」

「使える。それ専用の魔法陣も存在する。うちの洗濯機の魔法もそうだ。ほかに、簡単な呪文を複雑な魔法陣で増強させたり、簡単な魔法陣で複雑な魔法を安定させて助けたりっていう方法もできるぞ。詳しくは省略」

「へえ…… 凄い！」

言いながら、彼は自分が描いた魔法陣に視線を落とした。そろそろ次の指示をしなければ。

「じゃ、魔法陣の強化をするぞ。使う呪文を書き入れたら、図形を加える。円の中に四角を書いただろう？ その四角を左上から右下にかけて半分に割れ」

ユキノは言ったとおりのことをやった。それを見届けてから、ヴィヴィアンは次の指示をする。

「四角形の辺があるだろ。自分の一番手前の辺以外にかかってるそれぞれの弧の、丁度真ん中に印をしろ。できたらそれを繋いで三角形を作れ」

ユキノはヴィヴィアンが言いたいことを非常によく理解した。完成した魔法陣は、初めてにしては上出来だった。ヴィヴィアンは立ち上がり、ユキノの背後に回る。

「呪文は教えたな？ じゃあ使ってみろ。その魔法陣に自分の力が流れ込むことをイメージして、呪文を唱える。うまくいけば魔法が発動して、お前がイメージした火花が現れる。光属性に嫌われていたら何も起きないから、そしたら別の魔法をかけよう」

「すげえ！ ……もう準備いいの？ これ」

「ああ。やってみろ」

ユキノは深呼吸して何度も肩を上下させていたが、やがて両手を魔法陣にかざして目を閉じた。

「……エル・ラティア」

呪文の終りと同時にユキノは目を開く。その瞬間、机に描いた魔法陣は一気が燃えるような眩い水色に輝いた。やわらかな風に吹かれたように、ユキノの髪が軽く舞い上がる。次の瞬間、ユキノがかざした手の下に静電気のような火花がバチバチと音を立てて散る。

「わ……、わわっ、すげえ！ 俺魔法使えた！」

凄く凄いと叫びながら、現れた火花を両手で包むようにしてヴィヴィアンの方を向くユキノ。ヴィヴィアンはその火花の色や光り方をよく観察した。この呪文で最初に出す火花の色や形が、属性を見

極めるのに重要な役割を果たす事が多いのだ。

青白い稲妻が小さくなって手の中に現れたかのように輝いている。不規則にバチバチと音を立て、はじけるように輝いている。

ヴィヴィアンが出す火花は、火花というより火の粉に近い形になることが多く、色もユキノと違って暖色になった。ためしに自分も出してみると、火花は赤やオレンジに変色しながら空中を舞った。

「凄い、同じ魔法なのに色が全然違う」

「イメージしてるものが違うからだ。火花という概念も、俺とお前じゃきつと違うから」

「ねえヴィヴィアン、これどうやって消すの」

「消したいって思えば勝手に消える」

それを聞いて、ユキノは自分の手に纏わりついている火花をじつと見つめた。すると彼の火花は次第に勢いが弱くなり、最後には床に落ちて消えた。ヴィヴィアンも絶えず宙を舞っていた火花を消し、テーブルを見下ろした。

「それじゃ、それ消すからな」

焦げ付いた魔法陣を見て、ヴィヴィアンは床に膝をつく。

「どうやるの？」

「呪文は使わない。てのひらに魔力を集めて、消えろって思って拭けば消える」

「えー。俺もやってみていい？」

「やってみろ、半分俺が消す」

ヴィヴィアンは右半分、ユキノは左半分を消すことにして、ヴィヴィアンは先にさっさと魔法陣を消してしまった。落書きを消すような気持ちで掌を這わせれば、焦げついた魔法陣は跡形もなく消えてしまう。ヴィヴィアンの手は少し汚れたが、それは適当にズボンで拭いた。

ユキノはテーブルに両手を押し付けて、じっと何か念じていた。そっと彼が手をどかすと、その場所には中途半端に焦げが残っている。全く成功しないと踏んでいたのが、少し意外だった。

「……うまくいかない」

「俺もうまく行くとは思ってなかった。初めてでそこまでできれば大したものだ」

言いながら、ユキノが消せなかった魔法陣をさっと消してしまふ。何だか肩が凝ったのは、昨日の疲れが抜け切らないうちに魔法を使ったからだろうか。

「それじゃ、復旧手伝いに行くぞ。とっとと行ってとっとと終わらせる」

「よしきた！ あ、でも俺、火花の呪文しか使えないけど」

楽しそうに意気込んだかと思えばすぐに不安げな表情で魔道書をちらちら見やるユキノ。目で追うのが面倒臭くなってきて、ヴィヴィアンは大きいため息をついてみせる。

「そのつど教える」

それからのユキノはとにかく行動的だった。指示していないのに依頼書を掻き集めてきて刀を腰に携えたかと思えば、二階に駆け上がって暫く戻ってこなかった。何をしているのだろうと思いつながら、ヴィヴィアンは山積みの魔道書を何冊かぱらぱら捲ってみたり、ソファに腰掛けてみたりして待つ。しかしまだ彼は帰ってこない。十分が過ぎただろうか。

「おい」

行くぞ、と言おうとすると彼は階段を駆け下りてきて、にこやかに笑った。

「さっき洗濯してたんだけど、お客さんがきて。放置したままになってたから干してきた」

……本当に、どこまでも家庭的な弟子だ。

第二十二話 依頼遂行

玄関で外套を適当に羽織って復旧作業に赴いたヴィヴィアンだったが、予想に反して復旧は進んでいなかった。もう午後になったというのにまだ窓ガラスのはめ込み作業をしていたり、窓ガラスが手に入らない家では木の板を何重にも窓に打ち付けていたりした。ため息が出る。

「帰れると思うか」

この調子だと、復旧はだいぶ長いことかかりそうだ。依頼は依頼受けに入っていたキャンセルを差し引いても全部で二十九件あった。回りきれない気がする。

「夜になりそうだな、全部終わるの」

ユキノはそう言って、ずれたかんざしを歩きながら直す。

「俺もそう思う。夜になったら今度は魔物退治もあるから、帰るの明日かもしれないな」

「昼飯はどうする？」

「あー……面倒臭い。食わなくてもいいかな」

「初めてみた、飯を面倒臭いなんていう人」

驚かれているようだが、若干非難されているようでもある。ユキノはきっちりした男だから、食べ物や粗末に扱う人が許せないのだろう。今のはとくにそういう意味で言ったわけではなかったが、十分に誤解を招く言い方だった。

「飯を食う行為が面倒臭いんじゃないくて、飯にたどり着くまでの時間と体力を考えると面倒臭い」

「そっか。じゃ、俺がどっかで買ってテイクアウトしてこようか？
それで適当にどっか座って食べればいいし」

「とりあえずひと段落してから考えよう。いま考えるのは面倒くさい」

「了解」

まずは一件目から、地道に潰していくことにした。一件目は、ヴィヴィアンの店の斜め向かいだった。門扉の前で声をかければ、ガラスが割れて一階部分が壊滅的な状態になっている家の奥から男が出てきた。

「ガラスを直すことってできるのかい？」

「ああ、大丈夫ですよ。俺にとっては張り替えるより直すほうが簡単です」

「それはよかった！　じゃあ、お願いしますよ。一階の全部だから、全部で十六枚だ」

「報酬はいくらにします？」

「金貨二枚で。ガラス屋に頼むとこの倍は下らないんだ」

「解りました。それじゃ、サインを」

依頼書に追加で報酬や仕事内容を書き入れ、依頼主にサインを頼む。

契約書を作ると紙の無駄だし、結局家に持ち帰って床を散らかすことになるので、ヴィヴィアンは大量に依頼がありそうな日はあまり契約書を単体で持ち歩かない。実は依頼受けに直接飛んでくるような魔法をかけてある依頼書は、依頼書から契約書に変わり、さらに領収書になるような魔法を最初の段階にかけてあるのだ。依頼主がサインすると、依頼書は契約書に変わった。

ユキノはさっそく門を抜け、被害の様子を調べている。とにかく早く終わらせなければ。依頼主からサイン入りの契約書を受け取ると、ヴィヴィアンはユキノの方へと早足で近寄る。

ユキノはヴィヴィアンが来たことがわかると、ヴィヴィアンの外套の袖を引っ張って窓枠を指差した。

「ねえヴィヴィアン、これ見て。窓枠が噛み千切られてる」

「げっ、面倒臭……」

ささくれ立った木の枠組みを指で撫でながら、ヴィヴィアンはため息をついた。これは結構ひどい。

「直し方教えて！　俺やってみたい」

「面倒臭いから一発で覚えろよ」

壁に魔法陣を描いて呪文を教えてやり、窓枠の木を直す魔法をかける。壊れたものを元に戻す魔法は、物にもよるが難易度が高い。ユキノが一発で覚えられるかどうかは微妙なところだ。

「覚えたか？」

言いながら、今発動させたものの隣にもう一つ魔法陣を描いた。今度はガラスを直すためのものだ。

「んー…… もう一回」

「ジェム・リステア・ジュスタ・レクタ・物質名。この場合木だからフォリスタって言った。ガラスを直す場合は、レクタの後をクリスタにすればいい。物質名の早見表は今日やった魔道書の巻末にあるから。そのうち規則がわかってきて覚えられるようになる」

「わかった。やってみる」

ユキノは少し魔法陣から離れ、真剣な顔で呪文を唱え始めた。凜とした声が空気を震わせ、魔法陣は青白く燃えるように眩しく輝いた。

そして光が消えると、そこらに散らばっていたガラスの破片が消えて、代わりに傷ひとつない透明なガラスが窓枠にはまっていた。ユキノの目が輝く。

「すげえ！ 成功した！」

「その調子でどんどんやるぞ。俺は魔法陣を描いていくから、お前は呪文を発動させろ」

「はい、師匠！」

まさかこの短時間でここまで使える人材になるとは思っていなかった。ユキノはなかなか優秀な男だ。

ヴィヴィアンは指先に青白い光を纏わせながら、割れた窓の近くに魔法陣を描き入れていった。

一周して戻ってくるころには、家の正面からみえる四つの窓がすべて直っていた。しばらくしてユキノが走って戻ってくる。

「完了した！」

「よし、報酬もらって次行くぞ」

依頼主に金貨を貰い、領収のサインをし、依頼書が領収書に変わったのを確認して次の家に行った。次の家でも似たようなことをやり、いいペースで復旧作業を進めていく。外套のポケットがだんだん金貨や銀貨で重くなってくるのが嬉しい。

「ちよっと疲れた」

十件目の依頼をこなした時、ユキノはそういつて肩をまわしていた。魔法は使えば疲れるものだし、ぶっ続けで使っていれば集中力だって切れてくる。そろそろ休憩させてやらなければ。

「休んどけ、慣れないうちからそんなに使ってちゃ当然だ」

「ううん、ヴィヴィアンがやるなら俺もやる」

「途中でぶっ倒れられたりしたら面倒臭いから。お前を背負って家まで歩くとか嫌だ」

「……わかった」

ユキノは渋々引き下がった。ヴィヴィアンが一人であと三つほど依頼を受け、その間にユキノは今日稼いだ報酬の一部でカフェに行き、先に軽食をとっているということになった。

街の中心までできていたから、レストランやカフェなどの飲食店はいくつもあった。その中の一つである馴染みのカフェに、ヴィヴィアンはユキノを連れていった。

静かな音楽が流れるカフェは、この街の魔道士がよく利用する。

マスターも魔道士で、コーヒーを淹れるのもパンを焼くのもすべて魔法で行っている。

特に音楽は、マスターが聴きにいった数々の演奏会の生演奏を魔法で再生しているから凄い。音源はマスターの記憶なのだ。彼は記憶にある音を再生するという、高度な魔法を使える。

「三十分かからないと思うから」

空中に浮遊する照明の蠟燭（それらを支える煌びやかな燭台は全て溶けない氷でできている）を避けながら、長身のヴィヴィアンは自分の指定席にユキノを座らせた。この店はとても雰囲気がいいが、

マスターが小さい人なので内装がすべて非長身仕様になっているのが難点だ。

「ごめん、ヴィヴィアン」

しよげるユキノだが、彼のことだ。自分の限界に気づかずに仕事に没頭し、倒れてから自分が疲労のピークに達していたということによりやく気づくタイプだろう。とにかく真面目なのだ、彼は。

「ここから動くなよ。探すの面倒だから」

「わかった」

笑顔で手を振るユキノにちらりと片手を上げて応え、マスターに軽く声をかけると、自分は依頼主のところへ行く。三件の依頼の内容はそれぞれ、踏み荒らされた家庭菜園の復元と窓ガラスの修理、荒された家畜小屋の修理だ。家庭菜園の復旧はエステルがいれば人差し指を振るだけで簡単にやってくれそうなものだが、そんなことは言っていない。

一件目の依頼先に行ってみて、ヴィヴィアンはまず『家庭菜園』がどこかと探した。何しろ目の前に広がっているのは、ヴィヴィアンの自宅の敷地面積と同じぐらい広そうな農場だったのだ。それも、かなり酷く踏み荒らされて、作物の残骸がそこらに飛び散っている。幻覚に違いない、と心の中で呟く。

「それじゃ、よろしく頼むよ」

その声の主に恨めしげな視線を送りつつ、ヴィヴィアンは芝生の上に黒炭をすりつぶして作った粉を撒いて魔法陣を描いていた。しかも、もう魔力だけで魔法陣を描くのが面倒になっていた。しかも、面積が気になるくらい広いので大掛かりな魔法陣が必要なのだ。非常に面倒な作業だったが、なんとかクリアして次の依頼に進む。

窓ガラスも家畜小屋の修理もユキノに教えたあの魔法で解決した。しかも、家畜小屋の修理を頼んできた依頼主がご馳走を振舞ってくれたりしてかなりラッキーだった。

報酬が銀貨三十枚という大金だったのだが、依頼主の夫婦は『これでは申し訳ないから』などと言って菜摘孔雀のソテーを出してく

れたのだ。逆にこちらが申し訳なくなるが、空腹なので素直に甘えておく。

「そういえば知ってる？ ヴィヴィアン。妙な噂が流れているのよ。ダンから聞いたの」

夫人は太い指でフォークを握りながら、ヴィヴィアンの方をちらりと向いた。ダンというのはこの夫婦の夫の方だ。陽気な男で、肉付きがよくて頭が薄い。夫人のほうはいつも頭にシヨールをかぶっていて、やはり夫同様に太り気味の健康そうな女性である。

二人はちょうどヴィヴィアンの両親と同じ年くらいだが、子供がない。それだからか、時々依頼されて顔を出すヴィヴィアンをまるで息子のように扱ってくれる。

「妙な噂ですか」

「エンカンタリアの王宮騎士団が、塩樽を持って色んな町を徘徊してるんですって」

「……塩樽？」

「そう、賞味百キロの。なんのためなんでしょうね」

「犯罪者を塩漬けにしちまうんだろ」

「まあやだ、あなただったら」

愉快に笑い合っているふたりだが、ヴィヴィアンは少し考えてみる。

騎士団が妙なことをやらかすとき、例外なく嫌な自体が起こる。

今回もそうなるのだろうか。この平和なメルチスの街にも、王宮騎士団の横暴な連中が四、五人居座って詰め所を作るなんてことにもなりかねない。

「この街にくるのは大分先の話みたいだけど、なんだか気になるわね」

「ええ。厄介なことにならないければいいんですが」

夫婦としばらく談笑し、懐の時計をちらりと見やってヴィヴィアンは席を立った。

「ごちそうさまでした。弟子が待ってるんで、そろそろ次の依頼に

行ってきます」

名残惜しそうだったが、夫妻は手を振ってくれる。

「気をつけるのよ、ヴィヴィアン」

「弟子にもよろしく言っておいてくれ。それじゃあな」

二人に手を振り返し、ヴィヴィアンはカフェへ急いだ。時刻は午後の四時になるうとしている。日暮れまであと二時間半ほどだ、急いで残り十六件の依頼を遂行しなければ。

小走りで数段の階段を上がり、カフェのドアを開けた。

「いらっしやいヴィヴィアン、お疲れさん」

「こんにちは」

小柄なマスターが、腰まであるような長い白髪をかき上げながらこちらを見て笑った。カウンター席のユキノはこちらを見て笑顔になると、席を立て駆け寄ってくる。

「おかえりヴィヴィアン、何か食った？」

「ああ。お前は」

「俺も。このタフタおいしいな」

タフタというのは、雑穀入りのパンを厚切りにし、そこに野菜やチーズなどの具材をたっぷり挟んだエンカンタリア料理のことだ。地方によって異なるが、この辺りでは日和草や独特の風味のする香草をベースに、ベニツバメ（ごく庶民的な鳥肉だ）のソテーを挟む。

「会計は？」

「済んでる」

「行くぞ」

「ごちそうさま、マスター。また来るから！」

「はいよ。待ってるぞ」

ヴィヴィアンがいない間にマスターと交流を深めたようで、ユキノははじけるような笑顔で彼に手を振っていた。

第二十三話 重労働

もう大分時間が経っていたので、復旧作業はどの家庭でも店を出た頃よりは進んでいるように見えた。窓を直すだけの軽い依頼が五件ほど連続し、ヴィヴィアンとユキノは要領よく二人で依頼をこなした。

死んだ家畜の処理を依頼された時は一瞬本気で拒否したいと思ったが、面倒な魔方陣を描いて死骸を腐敗させ、土に還して解決した。残りが一時間ほどになってだいぶ日も暮れてきた頃になると、依頼はあと六つにまで減っていた。

「大がかりだな、屋根が降ってきたって」

依頼書を読みながらユキノは驚いたように目をしばたかせていた。「げ。建築士に頼めよ……」

「建築士じゃ一晩で直せないよ。物理的に無理がある」

別に本気で反応して欲しかったわけではないのだが、ユキノは真面目にそう言った。げんなりするような仕事だったが、今度は魔法陣を懐の万年筆で描き、ユキノに魔法を使わせて依頼を遂行する。屋根は元通りになり、ひび割れかけていた壁も補強できたので多額の報酬を貰った。

「すっげー！ 金貨じゃらじゃら！」

「均等に五枚ずつだな」

さすがにちよつと疲れてきた。これで夜中にもまだ仕事が残っているかと思うと非常に気が滅入る。ため息をつくとき、ユキノは困ったような表情を浮かべた。

「まだ全部終わってないだろ、ヴィヴィアン。それにしても、よくこんなにくれたよな。お客さん」

「建替えるのと同じくらい綺麗に直したからな。明日の夜は豪華な飯作れよ、今夜は疲れてて食う気力ないと思うから」

「よっしゃ！ 任せて！」

楽しげにはしゃぐユキノを遠い目で見るヴィヴィアン。彼はいちいち活発だ。あれだけしっかり働いておいて、よくそんな元氣があるなと感心する。

「明日の昼間、依頼が少ないようだったら本を買いに行つてこい。面倒臭いから俺は家から出ないぞ」

「げっ。太るよヴィヴィアン」

「うるせー、いいんだよ今晚ハードに動くんだし」

「あ、そっか」

そういう問題でもない気がする。というのを、ヴィヴィアン本人が突っ込むのもおかしいか。

歩いていくと、残り六件の依頼のうち、最もハードそうな家についた。庭の池の水草が荒されたり、外壁や垣根に穴をあけられたりしているらしい。しかも、庭仕事に使う細々した道具や、それらをしまふ半壊した道具小屋の修理まで一気に頼まれる。黙々と仕事をこなしたが、これでは間に合うか解らない。

「……ユキノ、今からちよつと無理矢理なことやるぞ」

普通に考えたら成功の確率は五割だろう。けれど、今日のユキノは非常によくやってくれる。もう何軒も回ったから、ガラス修復の呪文はもうお手の物だった。これならいけると、ヴィヴィアンは確信する。

「え?」

「俺は魔法陣を描いて回る。お前がいる依頼先と、その次のお宅の窓に修復呪文用の魔法陣を描いとく」

つまり、ヴィヴィアンはこれから訪問する家に魔法陣だけ描いてとっとと退散し、次の家の魔法陣を描き終わったところでユキノに二件分の魔法をかけさせる魂胆なのだ。それぞれが違う家から代金を受け取り、三件目と四件目で同じことをすれば時間が短縮できる。五件目は最後の依頼になるはずだから、ここは二人で訪問してあとは家に帰ればいい。

「じゃあ、俺が呪文かけとけばいい?」

「違う。お前に連絡用の魔法陣を渡しておくから、それを通じて俺からOKが出たら呪文を発動しろ。次のお宅の分も、魔法陣を描いてから連絡する」

「それって、つまり二件一気に魔法をかけるってことだね？ 魔法の遠隔操作みたいな感じ？」

「ああ。しっかり繋がる魔法陣があれば、ちゃんと成功するはずだ」
言いながら、ヴィヴィアンはポケットに手を入れて中を探った。
運良くメモの切れ端が出てくるので、歩きながら万年筆で正確な魔法陣を描いていく。

「わかった。でも俺、領収書の魔法知らないよ」

「それは俺が魔法をかけてある。もう代金を受領してサインしたら領収書になる仕組みになっているから」

「そっか！　じゃあ安心だな」

無邪気に笑うユキノに、ヴィヴィアンはメモを渡した。インクが乾かないうちに触らないよう念を押し、ヴィヴィアンは彼を見下ろす。

「これを渡しておくから、注意して見てろよ。魔法陣を繋げたら、光るようになってるから」

「うん」

「繋いだら声だけしっかり届く仕組みにしてあるから、指示を聞け」
「了解しました、師匠！」

ユキノから二件先と四件先の依頼書を受け取ってから先に歩き、目的の家に着いたヴィヴィアンは、即座に魔法陣を描いて立ち去った。この次の依頼主は四件となりに住んでいるので、移動しはじめてから魔法陣を描きおわるまでにあまり時間はかからなかった。

手の甲に小さな魔法陣を描き、ユキノが持っている魔法陣とつなげる。

「ユキノ、ガラスの修復呪文をかける」

「わかった！」

ユキノが呪文をかける声を確認すると同時に、自分が描いた魔法

陣が自分ではない魔道士の力で遠隔操作されて光り輝いた。新鮮な感じだ。

「ありがとうよ、ヴィヴィアン」

依頼主の老人に渡された麻袋の中の銀貨を確認し、ヴィヴィアンは微笑する。

「報酬の銀貨三十枚、確かに頂きました」

そう言ってサインした瞬間、ヴィヴィアンの手の中で依頼書が姿を変える。領収書となった依頼書を依頼主に渡して、ヴィヴィアンは早足で次の依頼主の家へ行く。

「ユキノ、そっちは」

歩きながら、ふたたび手の甲の魔法陣をユキノのもつ魔法陣へとつけた。魔法陣の向こうから嬉しそうな声がしてくる。

「ちゃんと領収書になったよ！ よかった。報酬は銀貨十八枚。次の家は？」

「メインストリートの外れ、ハドソンさんちだ。酒場と金物屋の間にあるから解りやすいと思う。今度は俺が魔法をかけるから、お前は報酬だけ貰ってこい」

「了解！」

非常に仕事が楽である。最初からこうしていればよかったと思ひかけるが、そういえば最初はまだユキノが魔法をうまく使えていなかった。

次回から大量の依頼があったときにはこうして分担してやることにしよう。ユキノにしっかり魔法陣の描き方を教えれば、今と役割を交代することもできる。

ハドソン氏の家には猫がいる。猫用の入り口が魔物の侵入口になってしまったようで、ハドソン氏はそれをひどく嘆いていた。塞いでほしいといわれたので、そこらに落ちていた小枝を拾ってきて適当にあてがっておく。

「こら、それで済ます気か」

ハドソン氏は軽く笑いながら言った。ヴィヴィアンは肩をすくめ

る。

「違いますよ。何事にも材料が必要ですから」

言いながら、魔法陣もなしに魔法をかける。面倒臭かったので魔法陣を省いたが、その分集中力が要るので魔法をかけ終わった後に後悔した。

小枝はみしみしと軋みながら太く長く伸びてゆき、猫用の入り口の周りをぐるりと囲んだかと思うと、だんだん広がっていく。軋んだ音を立てながら、小枝は原型を留めなくらいにドアと融合していく。

「おお、これはすごい」

「はい、終了です」

猫用の入り口は四角く輪郭を残していたが、ドアは綺麗に平らになった。ドアにあいた穴は、小枝のおかげで綺麗にふさがったのだ。エストルならこれを魔法陣どころか呪文もなしにやってしまう。

いや、もしかしたら材料として使った小枝すら使わないで、ドアの木材を操ってしまったかもしれない。つくづく彼の植物の魔法は凄いと思う。

「それじゃ、あとは窓ガラスですね。弟子がくるんで、そいつが持つてる依頼書にサインをお願いします」

「はいよ」

「それじゃ、失礼します」

ヴィヴィアンはそう言って礼をすると、ハドソン邸から走って移動した。西日が暮れかけている、急がなければ。

「次…… あ、近い」

次の依頼先は市立図書館の斜め向かいだった。この街の図書館は小さく、中心街からは少し外れたところにひっそりと佇んでいるのだ。この界隈は商店街や中心街のような活気がなく、少し寂れている。これでは魔物も出やすいだろうと思う。

ヴィヴィアンは小走りで依頼人の待つ家に向かった。

第二十四話 修繕ツアー

この家の依頼主は中肉中背の青年で、年齢はヴィヴィアンより一回り程度上に見えた。左手に銀色の結婚指輪が輝いているのが見える。

「窓ガラスと、あと、血の掃除をお願いします。この石畳、魔物が家内の足を食い散らかしたときに、こんな風に忌まわしい染みをつけられてしまった」

悔しさが滲み出るような声で依頼主は言った。ヴィヴィアンは頷いて門をくぐり、中に入ってみる。夕陽に照らされた白と黒の綺麗な石畳には無残な血のあとがまだ乾ききらずに残っていた。血のついた何かを引きずったあとが玄関先まで続いている。

ぱっと見たときに、石畳の色よりも血の色の面積の方が広く視界に飛び込んでくる気がした。こんなに大量の血が出たということは、ちょっとやそつとの傷でないことは明らかである。

ヴィヴィアンは窓の傍の壁に魔法陣を描いて周り、ユキノが既にハドソン邸に到着していることを確認してから先に窓ガラスを直す魔法をかけた。

「奥様は大丈夫ですか」

言いながら石畳に大量の水を流し、それを乾かす反対呪文の魔法をかけると血の染みはすっかり消えた。依頼主は力なく項垂れる。

「……ショックで口もきけない状態だ。どんどん弱っている」

「怪我の程度はどうですか。出血は？」

「片足がなくなってしまった。血はまだ止まらない、少しずつ流れ続けているんだ。このままでは死んでしまう」

足が無い。それは大変な事態だ。きっと激痛に苦しんでいるだろうし、放っておけば化膿し、高熱が出始めてそのまま死に至るかもしれない。

「魔物は血の匂いを敏感にかぎ分けます。出血を止めて、血のつい

た包帯の類をすぐに家から遠い場所へ捨ててください。じきに日が暮れます」

しかし、この調子では医者皆往診に出かけているだろう。緊急の患者は他にもたくさんいるだろうし、かといって放っておくわけにもいかない。

「止血くらいなら魔法でできます。俺がやりましょうか」

自然にそう言っていた。面倒くさいし時間もないが、そう思う気持ちよりもこの依頼主の妻を助けてやりたい気持ちの方が強かった。「本当ですか。お願いです、家内を助けてやってください」

深く深く頭を下げる依頼主を見て、ヴィヴィアンは依頼主と共に家にかかる。そして優雅に続く螺旋階段を上り、二階の寝室のドアをノックした。

「奥さん、コモディンのリリエンスールですが」

「ああ……はいってちょうだい、ヴィヴィアン。あなたのこと、街でよくきくの」

言葉はとても嬉しそうな調子でつむがれたが、かなり弱弱しい声だ。ヴィヴィアンはドアを開け、依頼主の妻の容体を見る。

若く美しい妻だ。しかし、その顔はひどく青ざめている。依頼主は苦しそうに目を伏せた。

ヴィヴィアンは依頼主の妻にちらりと目をやり、そっと血に塗れたタオルケットをめくる。右足の膝から下がなくなっていた。夫がやったのか、足の付け根あたりを何重にも紐で縛ってある。これで止血を試みたのだろう。

結果的に、この応急処置がこの時間まで彼女を生かすことになったのだ。しかし、このままではあと何時間もつかわからない。

ふと視線を下ろしたときに、ぼろぼろの傷跡をまともに見てしまっ
って思わず息を呑んだ。

「……出血を止めます。失った足は元に戻す事ができませんが、傷口をある程度塞ぐことならできるので、手遅れにならないうちに魔法をかけます。いいですか」

「助けて…… ヴィヴィアン」

そんな辛そうな声はもう聞きたくなかった。

ヴィヴィアンは空中にほのかに輝く魔法陣を描き、長い治癒呪文を唱えた。治癒魔法は基本的にその人の自然治癒力を助長するためのものであることが多いし、ヴィヴィアンの知っている治癒魔法だって殆どがそうだ。この呪文も例外ではないから、依頼主の妻には負担をかけてしまっているに違いない。

申し訳ないと思いますが、呪文をかけ終えた。出血は止まったし、傷口もあと少しで治るところまで回復させた。

「不完全だから、このまま安静にしていって下さいね」

「ヴィヴィアン…… ありがとう、ありがとう」

依頼主の妻は相変わらず弱弱しい声で、何度もヴィヴィアンに礼を言った。泣きながら礼を言う妻を優しく抱きしめながら、依頼主が金貨を二枚くれた。ヴィヴィアンが受領のサインをすると、依頼書は領収書に変わった。

「それでは、失礼します」

「また頼むよ」

「あまり力になれなくてすみません。傷は完全に治っていませんか、あとからちゃんと医者に見てもらって下さい。お大事に」

依頼主は頷き、小さく手を振った。ヴィヴィアンは彼に会釈して階段を降り、玄関を抜けて家を出た。

外はもう暗くなりかけている。走って次の依頼先へ向かう。ユキノはすでについていて、依頼主の話を聞いているところだった。

最後の依頼主は教会の牧師だった。滅茶苦茶に荒された礼拝堂を修復してほしいとのことだった。美しいステンドグラスが砕け散り、真っ白だったはずの座席は踏み倒され、ひび割れたり汚れたりしている。

「悪い、遅れた」

依頼主との話を終え、ヴィヴィアンはまずそう言った。ユキノは気にした風もなく、にこりと笑って壁際に歩み寄る。

「いいんだよヴィヴィアン。それよりこれ、どうしたらいい？」

砕けたステンドグラスの欠片をひとつ拾い上げ、ユキノは上の方を見上げた。三階分くらいは余裕である高さの天井には、魔物がつけたらしい血の染みがついていた。おそらく、獲物を食べた後そのまま天上にはりついたりしたのだろう。

「ステンドグラスにかける魔法は難しいから俺がやる。お前は席を直せ。床も修復しろ、出来るはずだ」

言いながら、壁に魔法陣をひとつ描く。ユキノにこの魔法陣を使わせ、床や席を直す魂胆だ。

「俺、まだ魔法陣が解らないんだけど」

「描いてみる、これを真似れば問題ない。意味と解説は後」

「わかった！」

ちよつと適当な指導の仕方かもしれないが、今は仕方ない。ヴィヴィアンは砕けたステンドグラスの枠の前に立つと、目を閉じて気分を落ち着かせる。そして空中に淡く留まる光の線で魔法陣を描くと、呪文を呟いた。

魔法陣がひととき大きく光って空気に融けると、無残に砕けた極彩色のガラスの欠片は、淡い光を纏って宙に浮かび上がる。そして、ジグソーパズルのように一つずつもとあった場所へとはまっていく。やがて、全てのかけらが窓枠に揃った。淡く輝いていた光がすうっと消えると、ステンドグラスはすっかり元に戻っている。

「ふう…… 骨の折れる作業だ」

特に意味を考えて呪文を紡いだわけではなかった。直したい、元に戻したい、そういう意味の言葉を連ねた結果がこうだったのだ。単に割れたガラスを元に戻すならいつもどおりの方法でいいが、ヴィヴィアンはステンドグラスの図案や色の配置を暗記していなかった。なのでその方法は使わないほうが良かった。

完成品のイメージがしっかりできるものでなければ、魔法は使えない。大体そうだ。

仮にこのステンドグラスに普通の窓ガラスを直す魔法をかけたと

したら、いまこうして天使と女神の図案がある場所に、魚や鳥などのまったく教会らしくない図案が登場したかもしれない。

あるいは、天使のはずが神だったり、女神のはずが罪人だったりするようなことも起こり得た。

「すごい！ ヴィヴィアンお疲れ様！」

「どこまでやった？」

「あとはあれ」

指差され、上を見上げる。天井の血の痕がまだ残っていた。

「あー、解った。消す」

言いながら空中に魔法陣を描いた。

「水降って来るぞ、下がれ」

「あ、うん」

慌ててユキノが後ろに下がる。それを確認し、ヴィヴィアンは呪文を唱えた。魔法陣から水が噴き出し、天井の血痕を流し去る。あとは水を乾かして依頼は完了した。

「お疲れ様」

教会の外から見守っていた牧師は、にこやかに笑いながらヴィヴィアンとユキノに二枚ずつ金貨を握らせてくれた。

「お布施の一部だよ。大事に使ってね」

「ありがとうございます」

教会なのだから無償奉仕でもよかったが、何せ大掛かりな依頼だったのだ。金は使えばなくなってしまうものだから、貰うにこしたことはない。

「領収書になります」

ユキノがサインをした紙を牧師に渡すと、牧師の手の中で依頼書が領収書に変わった。

「おお、すごいね」

「凄いのは俺じゃなくて師匠です。それじゃ、魔物にお気をつけて」
ぺこりと礼をし、牧師に別れを告げるユキノ。すっかり弟子らしくなった。

「それでは失礼します。また何かあったら、依頼書を送って下さい。足りなくなったらまた作りますので」

「わかったよ。ありがとうヴィヴィアン」

牧師と別れると、ヴィヴィアンはユキノを連れて真っ直ぐ家に帰った。

第二十四話 修繕ツアー（後書き）

本当は二十三話の一部でしたが、長いので切ってみたら半々くらいになりました。書くごとにだんだん一話が長くなっています。

第二十五話 依頼遂行、夜の部

復旧作業が終わりきらない町並みは歪で、いつもよりずっと静まり返っていた。

魔物は低級なものなら子ネズミと一緒にだが、厄介になってくると壁を溶かすようなものまでいる。アイアランド邸でやつつけたものたちは殆どが低級なものだったが、強い魔物になると魔法で相手の動きを封じたり、何度でも自己再生したりと、魔道士からしても面倒な相手になる。下手をすると命を奪われかねない。

被害の様子を見ていると、そんな強い魔物が徘徊した痕跡が多数見られた。火を吹いたりとんでもない怪力を発揮したりと、奴らは暴れ放題暴れたようだ。もうこれでは、外灯だけでは何の意味もないようなところまできているのかもしれない。

「ヴィヴィアン、次は？」

家についたユキノは、暗くなった玄関が自動的に人の気配を感じ取って門灯や外灯に明かりを灯すところをしげしげと見ていた。これは父が考えた魔法だが、母がかけたときのほうが上手くいく不思議な魔法だ。ヴィヴィアンは呆けたユキノを横目に見ながら、大きく伸びをして肩を回す。

施錠の魔法を解いて家に入ると、ユキノも依頼書受けを見てから後続に続いた。中には数枚の依頼が届いていたようだ。

「次なあ…… とりあえず金を全部置いていって、また依頼書を確認して動く形でいこう」

何せヴィヴィアンの手元には、銀貨が百八十一枚、金貨が十八枚もあるのだ。ポケットが重くて仕方ない。

こんなに高収入が得られるとは思っていなかった。しばらくは楽ができそうだ。そう思って少し笑うと、ユキノは自分が貰ってきた報酬をテーブルにあけて首をかしげた。

「これも一緒に保管しとく？」

「やめとけ、財布の管理を一緒にすると後で絶対トラブルが起きる」
経験上そうだ。それがどんな相手であっても、金のトラブルはかならず厄介な方向へ向かう。

「けど、かなり大金だな。すげえ」

「貸せ、全部あわせて二で割るぞ。今回の報酬は一人分を計算するのが面倒臭い」

依頼書をちらりと見やる。サインしてある依頼書の報酬を受け取るのが通常だが、今回は特別だ。

「二人とも同じくらい働いたし、問題ないな」

言いながら、自分もポケットの中に入っていた多量の硬貨をテーブルに積み上げる。ヴィヴィアンはユキノの分とあわせて数えてみようと思い、テーブルの上に乗っているユキノの報酬も数え始めた。「ううん、同じじゃない。駄目だよヴィヴィアン、俺、途中休んだじゃん！」

「あー、解った。じゃあやっぱり共同の財源も作っところ。それでいいな？ 税金とかそういうの、個人別に出してる方が揉めそうだし」

面倒臭くなってきた。ユキノが途中で休んでいた分の依頼がどこにあたるのか覚えていないし、その前も後もヴィヴィアンが魔法陣を担当し、ユキノが魔法をかけるという共同作業が続いたのだ。

ヴィヴィアンの方が多く働いているのは店主として当然だし、師匠として当然だ。それに、こんなに大金なら僅差でユキノの方が多くてもヴィヴィアンは問題ないと思った。飢えないで暮らせればそれでいいし、これからまた大量に金が入る。

「そっか、なるほど。わかった、賛成する！」

「飯代と店の経費にあてる貯金ってことでいいな？ 他には」

だいたい、食事なんて全てユキノが用意するのだ。そのたび自分の財布から半分出して、ユキノに買いにいかせて…… というのは面倒だし効率が悪い。

店にかかる金をどちらかが一方だけで負担するのはおかしいと思

うし、こうするのが正しいのだろう。

「本は？ 薬とか、あと食器とか調理器具とかそういうの」

「じゃあそれも。私物を買う金とか床屋代、間食代なんかは自分で出す。いいな？」

「了解！」

全てあわせて銀貨が二百九枚、金貨は二十五枚もあった。新しい魔道書がたくさん買えるし、ずっと買い換えたかったカーテンなどの生活雑貨も充実させられる。依頼書用の紙も買い置きしておけるし、万年筆のインクだって買い置きできる。面倒くさい買い物が暫くの間は省略できるのだ。これは嬉しい。

「まとめてここに仕舞っとく。使うときは、何に使ったかメモを残すようにしろ。後で最悪に取り返しをつかない面倒くさいことになるより、ちょこちょこ面倒くさを解消していくほうが多分いいと思うから」

リビングに飾ってあった壁飾りの絵画をずらし、変色した壁の一部にすっと指を滑らせると、四角く穴があいた。これは魔法ではなく、単なる隠し扉だ。

父がへそくりを貯めていた秘密の金庫で、現在はヴィヴィアンが大金を保管するのに使っている。最近はここに隠すような大金もなかったので、金庫の中身は空っぽで埃っぽい。その空っぽの金庫をしげしげと見つめ、ユキノが興味深げに声を上げた。

「じゃ、忘れるなよ。飯代とかはこっから出せ」

「はい、師匠」

にこにこ楽しそうに笑うユキノに、ヴィヴィアンも少し表情を緩める。

気づくと時計の針が七時半を指していた。外はもう漆黒の闇で、どこか遠くから犬の遠吠えが聞こえる。

「ちょっと待って。刀手入れしとく」

ユキノは言うど、ヴィヴィアンから離れてリビングの広いところへ行った。そうしたかと思うと、帯に結んでいた紐を解いて刀を外

し、その場に正座する。

「……あー、寝たい」

ユキノがすらりと長刀を抜き、その刃に懷から出した白い布のよ
うなものを当てているのを見ながら、ヴィヴィアンはあくびをした。
「駄目だよ、寝たら起きられなくなる」

そんなことは百も承知だ。ヴィヴィアンは外套も脱がずにソファ
に深く腰掛け、ユキノが刀を手入れする様子を見ていた。だんだん
眠気が襲ってくる。

「ロジェとの待ち合わせは」

自分が約束しておいて弟子に聞くななんてどうかと思うが、先ほど
までの依頼が重労働すぎてすっかり忘れた。ユキノは一瞬考えたが、
すぐに答えてくれる。

「十時だと思ったけど」

「今きた魔物退治の依頼書見せてくれ」

「はい、全部で四枚。時間帯はみんな『なるべく早く』って言うて
るけど、曖昧だよな」

「全くだ」

面倒くさいが立ち上がって台所へ向かう。しかし、何か飲むうか
と思つて、そういえば随分長いことコーヒーも茶も切らしているこ
とに気づいた。

仕方なくコップに水を汲み、せめて温度くらいはなんとかしよう
と氷の魔法をかけた。凍る寸前のところで止めてコップの中身を呷
れば、冷たい水が心地よく喉を流れていく。少し目が冁えた気がし
た。

「ヴィヴィアン、戦つてる最中に呪文を教えてもらうのって無理だ
ろ？」

「当たり前のこと言うな」

「けど、ナタリアんちで魔物斬った時、結構復活されて困ったんだ
よ」

「あー、お前そういえば魔法使わずに退治してたのか」

忘れかけていたが、彼は凄腕の剣士だ。魔法を使わずとも、魔物をやっつけてしまった。

しかし、あれは低級な魔物のあつまりだった。もっと酷い魔物になると体も大きくなるし、魔法で攻撃してきたりする。そうなった場合に、魔法が使えないと厄介なことになるのは常識だ。

「相手を凍らすにはどうすればいいんだ？」

ユキノは着物の襟を正しながらヴィヴィアンにそう訊ねた。ちらりと向けられる青い瞳はやはり氷河の色に見えた。ヴィヴィアンはユキノにやった古い魔道書を引っ張り出してきて、適当に机の上に置いた。

「この魔道書の氷の項に書いてあるぞ。ちなみに魔道士として腕が上がる、得意な属性なら俺やエステルみたく呪文も魔法陣もなしで魔法が使えるようになる。お前もそれを目指せ」

ちなみにエステルは時々呪文ではなく、植物への愛の囁きで魔法をかけるようなとんでもないことをする。やはり植物相手にも『可愛い子ちゃん』『愛してるぜ』等のエステル用語（主にロジェとヴィヴィアンの間での通称である）がぼんぼん飛ぶのだ。口説かれた植物の種子は、すぐに成長して見事な花を咲かす。

しかし、普通はこんな寒気のするような言葉が呪文の代わりになったりしない。ただの遊び人に見えて、エステルもひっそり努力しているのだ。

「うん、頑張る」

ユキノは早速魔道書を開き、氷の項を読み進める。

「俺も弟子に追いつかれないように頑張らないといけないな……」
めきめきと上達しているユキノだから、彼がすぐに同列になってしまうことも十分ありえる事態である。そんなすぐに抜かれる自分が、偉そうに師匠としてふんぞり返っているのもおかしい話だ。

人に何かを教えるのだから、自分はそれなりにこの分野を完璧にしておかなければならない。それが道理で、師匠としての責任だと思ふ。

「あー……」

考えるのが面倒になってきた。ユキノはというと、熱心に魔道書を読んでいる。

「なあヴィヴィアン、練習したいけどどうしたらいい？ さすがに辺りにあるもの勝手に凍らせたらまずいよな」

「俺が氷の魔法を習得するのに時間がかかった、一番の原因はそれだ。とりあえずリングで練習しとけ。生物を相手にする場合は気をつけろよ？」

「え、なんで？」

きよんとするユキノに、ちらりと視線を送る。

「一旦凍らせたら、溶かしても生きてるとは限らないぞ。お前が氷の魔法を絶妙にコントロールできるようになったら話は別だろうが、一瞬で凍死しちまう可能性のほうがいい」

だから動き回る生物に氷の魔法をうまく当てられなくて、最初は大変な思いをした。呪文がややこしくてそちらに集中力を奪われるというのに、すばしこい魔物に狙いを定めようとするすぐに逃げられるので、練習中はかなり苛立った。

まあ、ユキノなら集中力が並大抵ではないから、たぶんすぐに習得できるだろう。

「……わかった」

「魔法は人を殺せる力だ。間違っってほんのちよつとでも人に危害を加えたら、それだけで牢屋行きだ。下手したら騎士団の連中に殺される」

魔法を使える人間は限られている。だからこそ、地位は高いが危うい位置にいる。魔法が使えない人間の中には、魔法を使う人々を快く思わない人もいるのだ。

特に、騎士団とか。騎士団の連中は何かと魔法族を取り締まりたがる。うかつな行動はできないだろう。

そう考えたところで、ユキノの市民権をどうするか考えた。このメルチスの街には、長く住む場合は引越してきた人も外国人も役

所へ行って手続きをしなければならないのだ。面倒なことこの上ない。

ちなみに、成人証明というのもしなければならない。単に住民票をチェックして、間違えて死んだことになっていないか、紛失していないか調べるだけなのだが。それも誕生日から一週間以内に済ませなければいけないと考えると、だんだんげんなりしてきた。ヴィヴィアンはため息をついてソファに埋もれた。

第二十五話 依頼遂行、夜の部（後書き）

魔幻より短く！ と思っているのに、いつのまにか一話の長さが魔幻と同程度かそれ以上になってるんですね。困り者です。毎回、読みづらいところで区切ってしまったてすみません。

第二十六話 ナイトベーカー

ユキノは少しの間、繰り返し指先で魔法陣を描いていた。やがて指の動きを止めると、台所の保冷箱の中からリングをひとつ出してきてテーブルの上に置く。

「ちょっと見てて、師匠」

「ああ」

ヴィヴィアンは頷いて、体を起こしてソファに深く腰掛けなおす。軽く衣擦れの音を立て、ユキノは右腕を胸の高さまで上げる。その掌をリングへ向け、囁くように呪文を唱え、リングは見る見るうちに凍っていった。表面に霜が張り付き、冷気が白い煙のようにテーブルの下へと流れていく。

「どう？」

楽しげにユキノはそう問いかけてきた。ヴィヴィアンはソファの縁に頭を乗せ、横になりながらリングの下辺りを指差す。

「七十点。テーブルも一緒に凍ってる」

「あっ！」

こうしている間にも、テーブルに広がった氷の面積が広がりつつあった。ソファに深く埋もれながら、ヴィヴィアンはあくびをする。なかなか良い筋をしているとは思うが、ユキノが氷をコントロールできるようになるにはまだ時間がかかりそうだ。

魔法を使っているときに見せた真剣さと緊張感はどこへやら、ユキノは凍ってテーブルに張り付いてしまったリングを引っ張ったり叩いてみたりしている。リングはしっかりと凍りつき、びくともしなかった。何だか頭が痛くなってくる。

「……溶かせよちゃんと」

「え、どうやるの？」

「反対呪文だ」

面倒くさいが起き上がり、呪文のかけ方を教える。ユキノはすぐ

に反対呪文で氷を溶かし、リングを保冷箱に戻してきた。

「食わないのか」

「だってあれ、ヴィヴィアンの好物だろ？」

「あー、まあな。けど、とられて怒るとかそういうことはないから。もともと二つ買ったうちの一個だし」

近頃よく思うのだが、ヴィヴィアンには物に対する執着心があまりない気がする。自分の眼鏡や魔道書など、なければ困るもの以外は結構平気で人に与えている気がするのだ。

「そろそろ行こうか。もう既に依頼のこと面倒臭くなってきてるから、このままここに座ってたら本当に寝る気がする」

「よっし！」

意気込んで仕度をはじめユキノをみながら、ヴィヴィアンは伸びをする。そして、柔らかいソファの誘惑を絶って立ち上がる。そうすると、ふと壁のカレンダーに目がいった。

「パーティーまであと一週間か…… 面倒だな。六日以内に依頼を全部こなさないといけないのか」

パーティーの日だけ、魔物避けの结界を町全体に張るというのはどうだろう。もしくは、令嬢の家だけでもいい。とにかく、魔物はどれだけ倒してもすぐに湧いて出てくるのだ。いくら何でも屋といえど、この店のスタッフ（たった二名）だけではどうしようもないと思う。

「そういえば、そのパーティーって、俺はどうするの？」

そう訊ねられ、ユキノの方を振り返る。ユキノは刀を腰に佩き、例のレギンスのようなズボンと端折った着物という姿で食卓の椅子に座っていた。ヴィヴィアンは真っ暗になった窓の外を見やりながら、また一つあくびをした。

「お前も来い。服はナタリアがなんとかしてくれるだろ」

相手はどうなるかわからないが。ヴィヴィアンはおそらく、令嬢のボディガード兼ダンスの相手になることを依頼される。おそらくユキノは、アイアランド姉妹のどちらかと踊ることになるだろう。

「行くぞ」

「はい、師匠」

楽しみに腰の刀を直し、ユキノはドアを開けた。風が生ぬるく頬を撫でた。

昼間に比べたら少し落ち着いたが、やはり蒸し暑い。明かりのまばらな薄闇の中で、虫が鳴いている。

「最初の依頼は」

「アルラッド・ベーカリー」

「あー、四番通りか。ちよつと歩くぞ」

空中に魔法陣を描き、施錠魔法をかけた。そして、少しでも闇を減らすために自宅の門灯と外灯に火を入れる。呪文も魔法陣もなくとも、それはヴィヴィアンになら簡単にできることだ。

「すげー。あんなに離れた所にあるのに」

「行くぞ」

「はい、師匠」

空の低いところにぼんやりと霞む月が見えた。不気味な赤い色をしている。何となく早足になったが、ユキノは文句も言わずについてきた。どうでもいい話をしながら、店から遠ざかる。

二十分くらい歩いただろうか。目的のアルラッド・ベーカリーに到着した。洒落た看板は半透明のガラスで出来ていて、中で火を焚いて看板を光らせる工夫がしてある。

依頼主は太ったパン屋の店主で、小麦粉まみれの棍棒を片手に店から出てきて笑顔を見せた。その足元には、五、六歳くらいの少年がまとわりついている。

「こんばんは」

挨拶すると、少年がくりくりした茶色い目でヴィヴィアンをじっと見つめた。ちらりと彼に視線を送ってやると、彼は依頼主の後ろにさっと隠れた。

「よく来たね、ヴィヴィアン。さっそくとりかかってくれ」

「終了の目安は？」

「今夜の営業が終了するまで。あと三十分くらいかな」

段取りよく話を進め、依頼書を読んで内容を確認する。太った依頼主の腰の辺りからひょっこり顔を出し、少年が再びヴィヴィアンを窺い始める。何でも屋の外套が、そんなに物珍しい格好なのだろうか。

「場所は庭と店周辺でいいですか？」

「助かるよ」

「報酬はいくらにしますか」

「銀貨二枚と明日の朝飯二人分で頼むよ」

アルラッド・ベーカーリーの朝食二人分は魅力的だとヴィヴィアンは思った。このパン屋は少し遠いので、ヴィヴィアンは朝方に歩いてパンを買いに行ったりはしないのだ。焼きたてのパンを温かいうちに食べる贅沢は、普段はナタリアが買ってきてくれたときに限定されている。

今回はユキノに取りに行かせれば問題ない。ヴィヴィアンは依頼を快諾した。

「了解です。契約書にサインをお願いします」

ヴィヴィアンとユキノをじっと見て、少年は父親の足にぎゅっと強く抱きついた。そんな様子を目で追っていると、また少年と目が合った。少年は何か決心したような顔でヴィヴィアンをじっと見つめる。

「ね、お兄ちゃんたち、強い？」

囁くように少年は言った。ユキノがこちらを見る。ヴィヴィアンも彼と顔を見合わせて、首を捻った。この少年は、唐突に何を言いつ出すのだろうか。

「たぶんな」

「じゃあ、魔物の王様倒せる？」

「何だそれ」

今度こそ本当に意味がわからなかった。おとぎ話の登場人物か何かだろうか。それとも、王様級に大きい魔物なのだろうか。

少年はユキノとヴィヴィアンをちらちらと見ながら、父親の足から少し離れて歩み寄ってくる。

「魔物は魔物の王様に操られてるんだ。王様がいなくなれば、また前みたいに戻るんだよ」

「そんな話、どこで聞いたんだ？」

子供に合わせて屈み、彼の目を見ながらユキノがそう言っている。教会のシスターや、小学校の低学年を教えている先生のようなだ。

「理科の先生が言ってた。『ませいぶつがくしゃ』って人たちが考えた『かせつ』なんだって」

たどたどしくなれない単語を紡ぎながら少年がユキノを見上げる。不安げな表情だ。

魔生物学者の仮説が飛び出してくる第一学年の授業というのもの、なかなかあるものではない。この少年の理科の担任は、子供らに悪影響を与えているとヴィヴィアンは思った。『仮説』などと言われるのも意味が解らないから、子供はこうして仮説を信じきってしまう。ユキノは『そっかそっか』とあやすように少年の頭を撫でた。少年は子供扱いされたことが不服なのか、無然とした顔でユキノを見上げていた。ヴィヴィアンはそろそろ仕事がしたくなったので、少年に歩み寄る。

「本当かどうかはまだわからないんだろ。その辺のことは学者に任せとけ」

「本当だったら、お兄ちゃんたち、魔物の王様倒せる？」

真剣な澄んだ瞳がヴィヴィアンを見つめていた。濁りのないその琥珀色に、ヴィヴィアンはどう答えるか一瞬だけ迷った。

「……たぶんな」

ここは子供を安心させておくのが得策だろう。泣かれたら面倒くさい。ヴィヴィアンはそう思い、軽く口許に笑みを浮かべた。

「よかった！　ありがとうお兄ちゃん」

「まだ何もしてねえよ」

ぼやくヴィヴィアンの声が聞こえたのか聞こえていないのか、飛

び跳ねるように少年は駆け回る。そうして父親の周りをぐるぐる回っていたが、やがて怒られた。その様子を見てユキノが心底楽しそうにしている。

「ユキノ、さっさと仕事終わらせるぞ」

「はい」

頷いて明るい返答をしてくるユキノを連れて、ヴィヴィアンはパン屋の庭に入った。

苔むした庭木にはつる性植物が絡みつき、鬱蒼としていていかにも魔物が出やすそうだった。子供が乗って遊んでいたと思われる木箱や、ままごとの道具が辺りにちらばっている。そのどれも朽ちかけていたし、洗濯用のロープにもつる草が絡まっている。ずいぶんと長い間、この庭には人が入っていないようだ。

「店が繁盛して忙しくなって、庭にあまり出なくなったらこのざまさ。魔物が怖いが、庭仕事をする時間なんてパン屋の営業が終わったあとだからもう日が沈んでいて。残った仕事を片付けてくるから、ここはよろしくたのむよ」

「あ、はい」

ヴィヴィアンではなくユキノが返答し、サインされたことで契約書に変わった依頼書を受け取った。ヴィヴィアンはため息でもつきたい気分で、空中に青く輝く魔法陣を描き始める。

「ヴィヴィアン、何の魔法？」

「とりあえず光らせとく。魔物避けの照明」

そう言ってユキノに黙っている合図すると、ヴィヴィアンは呪文を唱えた。魔法陣から白く輝く光が漏れ出し、そこを光源にあたりが明るくなった。眩しくはないが、持続してくれる照明だ。

明るくなった庭を見てヴィヴィアンはため息をついた。これでは魔物も出るわけだ。

見るからに陰気で暗く湿った庭なのだ、この状態を改善しないかぎり魔物は増え続けるだろう。

「すっげえ！　なあヴィヴィアン、俺は何したらいい？」

「よし、とにかくこの陰気な庭何とかするぞ。氷の呪文、知ってたな？ あれでこの辺の草とか邪魔なの凍らせろ。全部だ」

「え？ あ、うん」

ユキノが魔法をかけ始めて、辺りの温度がぐっと下がった。しかし、まだユキノが魔法をコントロールできていないので、冷気は暴走しかけている。物干し用ロープや子供の遊ぶおもちゃまでもが、真っ白な霜に覆われた。

「こんな感じ？」

「ああ、それでいい。目を閉じてろ、破片が入る」

言われたとおり目を閉じるユキノの姿を確認し、ヴィヴィアンは外套の魔力を利用して高く跳び、生えている木を足場にしてパン屋の屋根に上った。そして、そこから呪文を唱え、強い風を吹かせた。凍らされた植物がびきびきと小さな音を立てながら舞い上がり、市内を流れる川の方へ飛んでいく。

「よしよ、っと」

屋根から飛び降り、音もなく着地する。ユキノが目を見開いて辺りを眺めていた。

「雑草なくなっちゃったけど、どういうこと？」

「凍らせてから風吹かせて、折った。どうだ、ちよつとは明るくなつたろ」

物干し用ロープも粉碎されて飛んでいってしまったが、元々使われていた形跡がなかったし大丈夫だろう。作業灯としてつけておいた魔法の照明はつけっぱなしにしておいて、ヴィヴィアンは辺りの木々の間に魔物がいるかどうかを確認する。

「よし、終りかな」

魔物がいる気配もあまりない。三十分といわれた依頼時間は、そろそろ過ぎようとしている。ポケットの中の万年筆を取り出して、契約書へのサインの準備をしていると、背後の窓があいた。

「いやあ！ すっかり綺麗になったね。ご苦労さん。これ、二人のために焼いておいたんだ。チップ代わりだよ、食べてくれ」

「あ、どうも」

受け取ったパンは焼き立てで暖かい。刻んだサラミを生地に練りこんであるようで、空腹を呼び覚ます匂いがした。

「頂きます」

ユキノは嬉しそうにパンを受け取ると、報酬を受け取ってから契約書を店主に渡した。店主の手の中で契約書の文面が領収書に変わっていく。

「お名前お願いします」

楽しそうに名前を書く店主を見ながら、ユキノも楽しそうだ。ヴィヴィアンが渡した万年筆で自分の名前をサインし、領収書を店主に返すと、ユキノは丁寧に頭を下げた。

「それじゃ、失礼します」

店主にそう言い、窓からちらちらのぞいている子供たちに手を振ってやると、子供たちはきやあきやあ騒ぎながら奥へ引っ込んでヴィヴィアンの様子を窺っている。なんだかなあと思いつつ、ヴィヴィアンはアルラッド・ベーカリーを後にした。

第二十七話 恋する発明家

小さい魔物を大量に駆除して回ったが、先日 của アイアランド家での依頼ほど疲れなかった。パン屋に貰った美味しいパンのおかげもあるかもしれない。結構な大きさがあったので、昼以来ろくに食事を摂っていなかった胃をしっかり満たしてくれた。

十時にロジェの家に行く予定だと思ったから、その後にアイアランド家を尋ねよう。復旧の様子が気になる。

「それじゃ、そろそろロジェんところ行こうか」

「了解です、師匠」

ユキノは今日はあまり血塗れになっていない。何故かと尋ねてみたら、刀に慣れてきたからだと言われた。原理がよく解らないが、まあそういうことなのだろう。

歩いていけば、すぐにティエル邸が見えた。何せティエル家は、一応王宮付の技能者たちの名門なのだ。貴族の豪邸がウサギ小屋では困る。

「でっけー…… なにこれ。公園？ お城？」

白い柵に乗り上げるようにして、ユキノは芝生の綺麗なティエル邸の庭を覗く。

豪華な噴水や植物園並みの花壇など、色々とゴージャスなこの家だが、現在はロジェと母親しか住んでいない。姉二人は海外へ技術を磨きに旅に出ているし、陶器職人の父と家具職人の兄は王宮で職人として働いているのだ。

「ここがロジェんち。入るぞ」

「ええっ！ 嘘だろ、あいつこんなところに住んでんの？ あんな変な格好してんのに？」

「ああ」

いや、変な格好をしているのはお前も同じだ。そう思ったが、口に出さないでおく。

ティエール邸は白いレンガで造られた、まるで宮殿のような青い屋根の豪邸だ。一階部分は高い天井の広間になっていて、窓は床から天井まである。二階より上は洒落た出窓になっていて、屋根の上の優雅な風見鶏がなんとも上流階級らしい。

付近に住んでいる子供たちは、ここにお姫さまが住んでいるといっつきかない。どうやら、中から髪が変色した変てこな発明家が出てくるところは見た事がないようだ。

今日は客人でもいるのだろうか、建物の中から歌う声やはしゃぐ声が聞こえてくる。

門を開き、ロジェのいる小屋を目指す。そう、ロジェはこんな豪邸に住んでいながら、敷地の一部の水車小屋に寝泊りしているのだ。ユキノはふらふらと植物園の方へ行きそうになっているが、呼び戻すのも面倒になって自分だけ水車小屋へ向かった。

「ロジェ」

散らかった水車小屋の真ん中に、黒衣を腰に巻いたロジェが座って作業をしていた。暑いのかノースリーブを着ていて、そこから伸びる肩や腕には意外としっかり筋肉がついている。ひ弱に見えがちだが、ロジェは単なる頭脳派ではない。

「ジャストじゃん、ヴィヴィアン。めずらしい。試作品がちょっと進化したよ」

「相変わらず酷い部屋だな、お前がどこにいるか最初わからなかったぞ」

「うるさい、ヴィヴィアンよりマシ」

「そうか？ 俺は少なくとも、床にインクまき散らかしたりはしてないけど」

「うっ」

ヴィヴィアンの部屋も散らかっているが、ロジェの小屋とどちらがひどいかと言われたら互角だと思う。ナタリアがこの小屋を見たら、卒倒するに違いない。

「それ持って残りの依頼、一緒に片付けよう。その前にナタリアん

どこ寄りたいたいけど……」

いいか、と言う前にロジェが飛び跳ねたので驚いた。

「やった！ やった、ヴィヴィアンお前大好き。ありがとう」

薄気味悪くなって思わず表情に出すが、そういえば忘れていた、彼はローザのことが好きなのだ。そう表現するとロジェがローザを見るたびにそわそわしたり、頬を赤らめてしまったり、言葉につまって逃げ出したりしている様子を想像する人がある（ヴィヴィアンの友人でロジェを知らない者は大体そうだ）。確かにロジェのルックスや体の小ささから、そんな微笑ましい少年らしい恋心を連想されても仕方ないかもしれない。しかし、彼の愛情表現にそういうしおらしい感じは全く無い。

彼はとにかく激しい求愛行動で常にローザの目を引こうとする。ある意味少年らしいが、少年を通り越して子供っぽいような気がする。

卒業までの間、ロジェは毎日ローザと（ほとんど無理矢理）一緒に食事をとっていた。会えば必ず好きだとか愛していると叫び、ローザをいじめる男子がいると聞けば喧嘩までした（意外と腕っ節が強いので、相手を泣かせて先生に怒られていた）。卒業してからも、まるでヴィヴィアンに対するナタリアか、それよりもっと高い頻度で家に会いに行くという。無論、そのたびナタリアに追いつ返されているのだが。

呆れるくらい熱烈なアプローチだと思う。

「ほんと大好きヴィヴィアン、良い奴だなあ！」

「ああ！ 気持ち悪いいんだよ馬鹿、俺に告白すんな。寒気がする」
やったやったと跳ね回るロジェの後頭部を一発ひっぱたくと、ロジェは少し痛そうに体を前にかがめたが、またすぐに嬉しそうな顔をします。

「でもやった、昨日ローザに会えなくて寂しくてしょうがなかったんだよ！ 家に行ってみたら、ナタリアに忙しいから帰れって追いつ返されちゃってさあ」

「どうせまたラブコールして帰って来たんだろ。大体予想つく」

「ヴィヴィアンにはいつもお見通しだなあ」

「お前が解りやすすぎるんだよ」

学校の三階の窓から、下校中のローザに向かって愛を叫ぶロジェの姿が思い出される。彼はいつもそうやって、全身でローザへの愛を表現していた。とても一所懸命な奴だとは思うが、果たしてローザはどう思っているのやら。

「あれ、ユキノは？」

「その辺にいるだろ。はぐれたけど声かけるの面倒でこっち来た」

「よし、じゃあちよくら新製品を試しますか」

ロジェは楽しそうに笑い、狭い小屋の中のぐちゃぐちゃに散らかった机の上から設計図らしきものを大量に払い落とした。すると、テーブルの中央にコップ状の何かが置いてあったことに気づく。

「音量拡大器。ちよつと耳塞いでて。あ、やっぱ、ちよつとじゃなくってしっかり塞いでてね」

言われたとおり耳を塞ぐと、ロジェがコップのようなものを口に当てて叫んだ。耳をふさいでいてもかなりの音量が届いてきて驚く。

「どう？ 安定させるのに苦労したんだぞ」

「用途は？」

どうせまたろくでもない用途だろうと予想はついたが、一応そう尋ねてみる。

「ローザへの愛を……」

「馬鹿か。ローザの耳壊すつもりかお前は」

「うちからアイアランド家に届くような声だって出るよ、きっと。母さんに許可とって、うちの一番高い部屋から叫んでみるつもり」

「聞く耳持たないなお前、そのうち本当に相手にされなくなるぞ」
ため息をつくと同時に、水車小屋のドアを勢い良く開け放ってユキノが現れた。

「ロジェ！？ なんかすごい声でしたんだけど」

「よ、ユキノ。どう？ 新製品なんだ」

「すごいカラクリだな、便利そう」

「ほらほら、原理が気になるだろー」

非常に楽しいなロジエと興味津々のユキノに、気が抜けるような思っていた。

「行くぞ、お前ら」

「はい、師匠」

ウエストポーチに大量の特製『マグネ弾』を詰め込み、ロジエは黒衣をさっと羽織ってヴィヴィアンの後続いた。ユキノはぼらぼらの設計図を整えたり整頓されていないねじ回しの類を片付けていたが、すぐに追いかけてくる。

「ロジエ、もうちょっと部屋片付かないの？」

「え？　だって、すぐ使える場所に置いた方が楽じゃん」

「必要なときに必要なものだけ使えば良いのに……」

几帳面なユキノのことだ、面倒臭がりなヴィヴィアンと無頓着なロジエに挟まれて非常に辟易しているだろう。

ヴィヴィアンは足元を照らしながら進み、魔物の吠え声をちらほらと聞きながらアイアランド家の門をくぐる。ドアをノックすると、ナタリアが出迎えてくれた。

「きてくれたのね、ヴィヴィアン。ありがとう」

相変わらず綺麗なナタリアだが、その手に小さな傷がいくつかあるのをヴィヴィアンは見逃さなかった。復旧作業で重いものを持ちったり、ささくれた木片をどかしたりしたのだろう。

「家のほうはどうだ？」

「まだ完全じゃないのよ。教室部分が、特に」

「悪いな、俺らが暴れたせい」

そのせいでナタリアの綺麗な手に傷をつけることになっていたら、ヴィヴィアンはそれを本気で謝りたいと思った。けれどナタリアは全く何も気にしていないという風に首を横に振り、いつも通りの快活な笑みを浮かべて見せた。

「そうじゃなくて、ガラスが手に入らないの。ていうか、他のところ

ろの修理してたら時間足りなかったのよね」

「あ。それなら直そうか？ 俺、できるようになったんだ」

「本当に？ 凄いいじゃない、ユキノ！ あら……」

ここでもようやく、ナタリアはロジェの存在に気がついたようだ。少し意地悪く目を細め、ナタリアはロジェの変色した髪をくしゃくしゃと撫でる。

「小さくて気づかなかったわ、ロジェ」

事実、ロジェは身長が百六十二しかない。しかも、ここ数年で伸びていないというから大変だ。ヴィヴィアンと三十センチ近い身長差があるなんて。

「小さいとかいうな！ ローザとはしっかり身長差あるし」

「あはは！ あの子まだ伸びるわよ、あたしがここまで大きいんだから」

正論だから言い返せないと思ったのか悔しそうに俯くロジェに思わず笑いがこみ上げてくる。ナタリアがローザの年齢だった二年前には、既に今ぐらいの身長だったことをロジェは忘れているのだろうか。

ナタリアが家に上げてくれたので、ロジェの肩をぽんと叩いてやった。

「くそっ、絶対身長伸びてやる！」

「頑張れ！ 煮干食るといいらしいよ」

「煮干って何？」

「小魚をね……」

身長アップのために奔走するロジェとアドバイザーのユキノを放置し、ヴィヴィアンは勝手にソファに座ってナタリアを見上げる。

「ナタリア、ローザは？」

尋ねてみると、ロジェがぴくりと聞き耳を立てるのが見えた。

「ローザは部屋にいるわ、ロジェが来てるって知ったら降りてこないわよ」

「だろぅな」

下校中にロジエに見つからないようにと、わざと歩道を外れたところやヴィヴィアンの影を歩いていたローザの姿が思い出される。ローザもロジエを嫌ってはいないが、体面もなくラブコールを重ねるロジエに困惑していることは確かだ。

第二十八話 美人姉との共謀

ロジェは少しだけ考え込んだが、小さくため息をついた。

「……そっかあ。俺、嫌われてんのかな」

彼はただがむしやらにローザへの愛を叫んでいるのではなく、彼に言わせればちゃんと全て考え抜いて発言しているらしい。そんなことをちらりと思い出して、ヴィヴィアンはロジェをどう励ますかほんの一瞬程度考えた。そしてすぐに、目の前にいるお調子者の美人と目が合ったことで言葉をひらめいた。

「嫌われてたらもっとナタリアが攻撃的になるぞ」

「何よそれ！ ちょっと、もうちょっと可愛い言い方ないの？」

腰に手を当てるナタリアを見て、ヴィヴィアンはくすくす笑った。

「じゃ何だ、俺が可愛らしいイントネーションで『攻撃的だ』って言えばいいのか」

「そうじゃないわよ。でも言ってみなさいよ、聞いてみたいわ」

まさかそうくるとは予想していなかったので、一瞬呆けた表情を作ってヴィヴィアンは返答に窮す。

「何でだよ」

「可愛いヴィヴィアンとか最高じゃない。結構いけるわ」

「……お前、ちょっと危ないぞ」

「あら、そういうこと言うの？ あたしガラスのハートなのよ、傷ついちゃうでしょ」

「はいはい」

「あ。面倒臭くなり始めたわね？ あんたっていつもそう！ 構ってくれないとどこかに行っちゃうわよ。いいの？ 本当はあたしがないと寂しいでしょ？ 素直になりなさいよ」

「全然。面倒ごとが減って気が楽だ」

間髪いれずにそう返せば、ナタリアは一瞬言葉に詰まった。まさか本当にガラスのハートなのだろうか、言いすぎてしまったのかと

一瞬思ったが、何か言おうとした瞬間にソファに置いてあったクッションを投げつけられた。

避け切れなくてまともに胸に当たる。そんなに大した力は籠っていなかったが、ちよつと驚いた。ナタリアは唇を震わせ、クッションを投げた姿勢で数秒動かなかったが、ヴィヴィアンをきつと睨みつけて叫ぶ。

「何よっ！ 一人でパンツも洗えないくせに！」

うわ。それを言うか。

ユキノが苦笑いし、ロジェの表情が一気に驚愕へと変わる。思わずクッションを投げ返していた。ナタリアはそれをひらりと避け、ロジェの顔面にクッションがぶつとヒットする。

「ぎゃっ！」

心の中で（あえて心の中でだけ）ロジェに謝る。

「洗えるわ馬鹿！ 洗濯が面倒で放置してたっただけだろうがっ」

「洗えるならどうして洗濯樽の中からパンツが六枚もでてくるのよ！」

「なんで枚数覚えてるんだ変態！」

それはさすがに恥ずかしい。だいたい、友人に下着の色と形状を把握され、なおかつ枚数まで把握されるなんて絶対におかしい。

「変態じゃないわよ馬鹿！ それを言うなら、七枚以上もパンツをコレクションしてるあんたの方が変態じゃないの！ なによ、面倒くさがりのくせにパンツは毎日違う柄じゃなきゃ嫌とかいうくだわりでもあるわけ？ 意味わかんないわよ！」

「ねえよそんなくだわり！ 大体、その発言が変態なんだろう？ 気づけよ、頭弱いなお前は。人んちにずかずか上がりこんできて、挙句抱きついてくる奴にの何が変態じゃねえっていうんだよ」

「あれは愛情表現じゃない！」

にべもなく言いきられ、頭痛を感じた。彼女は少しも間違っていないとは思わず、ヴィヴィアンに『愛情表現』をする。友愛的な感情をそんな風に言われると、なんだか胸の奥のほうがむずがゆくなる。

「過度なんだよお前はいつも！ 歳考えろ、小さいガキじゃねえんだから！」

しかしよく考えてみたら、ヴィヴィアンの下着の色と形状を把握されたのはあれが初めてではない。すっかり生活に染み付いているナタリアの存在にヴィヴィアンはため息をついた。いい加減、自立しなければいけないことは解っている。小さいガキみたいなのは自分のほうだ。

ナタリアがまたヴィヴィアンに言い返しはじめたところで、ロジェが遠慮がちにヴィヴィアンの外套を引っ張った。

「なんだよ」

「あのさ。俺いつも思うんだけど、ヴィヴィアンとナタリアって本当に付き合ってるの？」

「誰が付き合うかよ、こんなじゃじゃ馬と」

冗談ではない。彼女は年齢が一桁の頃からの幼馴染なのだ。恋愛感情なんて一度も持ったことはないし、持つつもりもない。持たれても困る。

「ひどい言い方ね。だからあんたモテないのよ」

ナタリアはふくれっ面でヴィヴィアンを睨み、ぷいとそっぽ向いた。

「よかった、だってパンツの話とかしてるからってつきり。付き合ってるなら安心したけどさ」

後頭部をひっぱたいてやった。さっきの話は蒸し返されたくない。「だってさ、考えてもみろよ！ 俺がローザと結婚したとき、ヴィヴィアンがナタリアと結婚したらさあ……俺、ヴィヴィアンのことお義兄さんって呼ばなきゃいけないるだろ？」

一瞬、沈黙が降りた。確かにヴィヴィアンとしてもそれは勘弁してほしい。そんな密集した家族は嫌だ。まして、ロジェに『お義兄さん』なんて呼ばれたあかつきには、ヴィヴィアンは寒気が止まらなくて寝込むかもしれない。

「あー」

ユキノが頷いて、神妙な顔でロジェと二階へ続く階段とを見比べる。

「おいそこ、何納得してんだ」

思わず突っ込んだヴィヴィアンだが、ナタリアは特に反対する気もないらしい。ナタリアにとっては、問題は自分なんかのことではなく、いちいちオーバーな発明家と大事な妹がくっつくかくっつかないかということなのだろう。

「その前に、ローザはあんたになんかあげないわよ。あたしの大事な妹だもの」

「くっ、デカイぞ立ちはだかる壁」

「鉄壁よ。ローザのガードは堅いわ」

得意げに笑うナタリアの清々しい表情に、ロジェがうちひしがれる様子が彼らのほうを見なくてもわかった。いつもこういうのだ、ロジェとナタリアは。

堪え切れなくてくすくす笑っていると、二階で少し物音がした。

「ナタリア、誰か来てるの？」

上からローザの声がした。あからさますぎるほどにロジェが勢い良く顔を上げる。

「ええ。ヴィヴィアンとユキノと…… ロジェ」

ナタリアはロジェを横目で見てにやにや笑いながら、付け足しのように彼の存在を伝えた。ナタリアはそのまま、ちらりとヴィヴィアンを見る。その目は笑っていた。

軽く頷き、ロジェが何か叫ぶ前に彼の首に腕を回した。何事かと顔をあげるロジェを無視し、上に向かって呼びかける。

「ロジェは俺が抑えてるから。降りてきていいぞ、ローザ」

言いながらロジェの腕を後ろでまとめ、押さえつけた。筋肉質ではあるが、やはり細いその腕は簡単に押さえられる。

「えっ、なんだよヴィヴィアン！ 離せ！」

暴れ出すロジェの肩に肘を乗つける。逃げようともがくロジェに笑みを送りながら、ナタリアに目配せした。

「そのまま押さえてて！ ローザ、護衛ならユキノがしてくれるし大丈夫よ！ ね、ユキノっ」

「お、おう」

とんでもない無茶振りだ。それでも階段付近まで小走りで向かうユキノに笑いがこみ上げてくる。こうやってロジェをいじるのは非常に楽しい。

「こんなにやる！ 裏切ったなユキノ！ 覚えてろー！」

騎士団に取り押さえられた反王政派のテロリストさながらに、ロジェは声を張りあげる。ナタリアがロジェに歩み寄り、頭を撫でながら笑った。

ヴィヴィアンだったらこんな顔で笑うナタリアには絶対に絡まれたくない。楽しげな、非常に楽しげな笑みなのだが、どちらかというと『楽しんで』いるというより『愉しんで』いる。

「ユキノには常識があるもの。嫌がる女の子に迫る男がいたら、放っておけない紳士なのよ」

ヴィヴィアンも一緒になって笑っていたが、ロジェの視線がずっと上のほうに固定されるのを見逃さなかった。咄嗟に振り返る。螺旋階段の一番上で、柱に寄り添うようにしてこちらを見ているローザと目が合った。

「……ローザ！ やった、会いたかったんだ！ 今日可愛いぞーっ、愛してるー！」

「落ち着け」

途端に大絶叫を始めるロジェに、ローザは顔を真っ赤にして柱の影に隠れてしまう。

ユキノがそれを見て、足音も立てずにしなやかに階段を駆け上り、ローザの手を引いて階段を降りてくる。ローザはなるべくロジェの方を見ないようにしていた。

「あっ！ おいこらユキノ、その手を離せ！ ローザにさわんな！」
暴れ出すロジェを押さえつけ、ヴィヴィアンは彼のわきの下をくすぐってみる。途端に身をよじってげらげら笑い出すロジェに、ナ

タリアが呆れたような笑みを送る。

ユキノは階段を降りきったあたりでローザの手を離し、彼女に微笑みかけてから少し離れたところに立った。すっかり『ご令嬢の護衛』というポジションが板についている。

「あ、あの…… ヴィヴィアン、ユキノさん、こんばんは」

「おう」

軽く片手を上げて応え、またすぐにロジエを押さえつける。ローザはここで何が起こっているか解らないらしい。彼女はヴィヴィアンにくすぐられて床を転げまわるロジエを見て、不思議そうに首を捻っていた。

「ね、ローザ、俺は？ 俺、には？ っは、おい、ヴィヴィアン、そろそろ息が…… ひやははは！」

涙を流して転げまわるロジエを更にくすぐってやると、笑い声が一段と大きくなる。

「……ロジエ、こわい」

ユキノの背後に隠れながらローザが言う。ロジエはぴたりと動きを止める。ヴィヴィアンも腕が疲れてきたので、立ち上がってソファまで歩いていった。ヴィヴィアンが座ると同時に、ナタリアも隣に座った。

ロジエは暫く床に転がったまま息を整えていたが、長座の姿勢で起き上がる。

「こんばんは、ローザ」

まだ息が上がっているし、疲れきってはいるが、嬉しそうな声でロジエは言った。ローザはぴくりと固まったが、ユキノの後ろに隠れて顔だけのぞかせながらロジエを見下ろす。

「こ、こんばんは」

「復旧作業、お疲れ様」

「え？ あ、ありがとう」

「よかった。昨日あれだけ魔物が出たから心配だった。元気そうで嬉しいよ。怪我とかしてないよね？」

幸せそうな表情だ。ローザはロジェにとって全てなのだろう。

その一方的すぎる愛情表現にローザは困惑しているだろうが、過度なところさえなければロジェのような一生懸命な男がローザには似合うのではないだろうか。

ローザは助けを求めるようにナタリアをみやる。ナタリアはもう少しロジェを観察していたいようで、にやにや笑いながらソファの背もたれから上半身を乗り出してロジェを見下ろしている。

彼女は結局ロジェを止めたいのか応援したいのか。彼女の感性では、面白ければすべてよしという感じなのではないだろうか。

「ロジェ、今日はどうしたの」

ユキノから少し離れて、ローザはてくてくとロジェに近寄っていた。いつも愛を叫ばれ、半ば付きまとわれるようにしているのに、ロジェに対しての危機感はありませんらしい。

ロジェは柔らかな表情でローザを見つめ、長座の姿勢のまま彼女を見上げて微笑んだ。

「仕事。ついでにここに寄っていくってヴィヴィアンがいうから、これはチャンスだと思ってついでにきた」

「また発明？」

そう訊ねられると、急にロジェは跳ねるように立ち上がった。ローザが驚いて数歩下がるが、すぐに間合いを詰めてロジェはウエストポーチの『マグネ弾』を取り出す。

「そう！ これね、マグネ弾っていうんだ。火をつけると真昼より明るい閃光が炸裂するんだぜ。魔物も消滅するけど、普通に護身用として使えるから。ローザにもあげる！ 眩しいから火をつけたら直視しちゃだめだよ」

片手で掴めるだけ掴んで、ロジェはマグネ弾をローザに差し出した。おずおずと両手で受け取るローザを見ながら、ナタリアがにやにやと笑う。

「あら。かawaii乙女はここにもいるわよー」

「ナタリアにはヴィヴィアンがいるからいいんだよ」

「おい勝手に押し付けるな」

面倒臭くなってきた半眼でロジエを睨むが、

「ローザは俺が守る。ナタリアはヴィヴィアンが。これで完璧じゃん」

と、全く噛みあっていない返事がきた。ため息が出る。

「そういや、ユキノどこいった」

ロジエに尋ねると、ローザが両手一杯のマグネ弾に困惑しながらヴィヴィアンの方を振り返る。

「教室のほうに行くの、見たよ」

「あー。とっとと仕事済まさないと面倒だな。よし、ロジエ行くぞ」

「へいへい。ローザ、ナタリア、また後でな」

名残惜しそうにローザに手を振るロジエの襟首を掴んで引っ張りながら、ヴィヴィアンは苦笑した。ナタリアがそんなヴィヴィアンをみて、何か閃いたような顔をする。

「あたしたちも働きましょう！ 依頼のお返しよ」

そういつてキッチンを指差すナタリアに対して、ローザがふわりと微笑んだのを確認すると、ヴィヴィアンは教室へ向かった。

第二十九話 違和

薄暗い教室には、生ぬるい夜風が通っている。この広い教室に、窓ガラスが一枚も残っていない状態というのはやはりちよつと奇妙だ。おまけに机や椅子もばらばらで、『誰かさん』がつけた刀傷や『誰かさん』がつけた焦げ痕が非常によく目についた。

一瞬だけ何か不可解なものを感じた気がしたが、おそらく雑然とした教室の光景が脳内にあるいつもの教室の風景からかけ離れすぎているせいだろう。教室の姿は、ヴィヴィアンとユキノが暴れた時からあまり変わっていない。

「……うん。後始末って大事だよな」

「この年でようやく理解したか」

思わず呟いた言葉にロジェのきつい突っ込みが入り、懽然として前方を見やるとユキノが一人で教室の真ん中に突っ立っているのが見える。

「おい、ユキノ」

声をかけると、ユキノはぴくりと反応して首だけ振り返ってこちらを向いた。

「おかしいな、さっきまで聞こえたんだけど」

ユキノは少し眉をひそめ、気味悪そうに何度も黒板の辺りを睨んでいる。

「聞こえたって、何が？」

ロジェがそう尋ねると、ユキノはこちらに歩み寄ってくる。刀から手を離さないところを見ると、かなり警戒しているようだ。

「さっき皆でわいわいやってたろ？　で、あの空間には明らかにロジェとヴィヴィアンと俺しか男はいなかったはずだろ。いたとしても先生くらいなもので。でも、おっさんの声が聞こえたんだ」

「おっさん？」

「うん。聞いたことないおっさんの声。『空腹だ』『血が欲しい』

『若い娘の血が欲しい』って、どう考えても尋常じゃないこと言ってたから、浮浪者でも迷い込んだのかと思って。こっちの方から聞こえたんだ。さっきまで、似たようなこと繰り返してた」

険を帯びた表情で辺りをちらちらと警戒しながら、ユキノは心持ち落としたトーンの声でそう言った。

「それ、幻聴じゃないの？ ユキノ、疲れてるんだよ」

心配そうなロジェに、ユキノは首を横に振って強い調子で続ける。「でも絶対聞こえた。それと、なんか……なんていうんだろう、蛇が舌出す時にする音。シュー……っていうの。あれも」

「蛇に擬態した魔物が近くにいるのかもしれない。ロジェ、お前も警戒は怠るな」

「ラジャー」

この闇に、本当に男が潜^{ひそ}んでいるのなら大変な事態だ。儀式に動物の血を使うのはよくあることだし、前に読んだ本では実際に若い娘の血を使った魔術のやりかたも紹介していた。闇属性の魔法ばかり取り扱った本で、その儀式も悪魔を身の内に宿すとか、そういうちょっと狂った感じの魔法を使うためのものだったと記憶している。そんな思考を持った魔道士が、ナタリアやローザをみつけたらどうなるか。生贄まっしぐらだ。

「ユキノ、他に何かあったか」

「ううん、特に」

一瞬迷ってから首を横に振るユキノに、ヴィヴィアンは頷いて窓枠の方を向いた。すると、ロジェが机の上に座りながらヴィヴィアンの袖を引っ張った。

「何だよ」

「ヴィヴィアン、明かりつけない？ 暗いと作業にくい」

「あー。そっか」

ヴィヴィアンは机の上に立ち、危なっかしい足元を気にしながら上を見る。天井に直接魔法陣を書くのは難しそうなので、天井より十数メートル下の空間に魔法陣を描く。この魔法陣を光らせれば、

部屋全体が明るくなるようになるはずだ。

教室はとても天井が高く、どうやっても手が届かない場所に採光用の大きな窓がある。年に一度、高いはしごをいくつか使ってアイアランド家の親族が命がけで掃除するらしい。幸い、その窓は割れてはいなかったが、当然のことながら夜なので明かりは入っていない。今夜の月明かりはとてもおぼろげなのだ。

ヴィヴィアンは魔法陣を描き終わると、両手をかざして目を閉じる。いくらなんでもこれではライトの位置が低い。魔法陣を上に向けて、高度をとろうと考えたのだ。

少しずつ、描いた魔法陣がふわふわと上に上がっていく感じがして、制御できるぎりぎりのところまで高度をあげていった。目を開けると、綺麗に描いた魔法陣がばらけかけている。内心で舌打ちしながら人差し指ですっと弧を描けば、魔法陣は描いた時のように綺麗になった。

「すげえ！ さすが師匠！」

「へんっ、魔法に頼らなくなっただって生きていけるもんね！ ……でもすげえや」

下のほうで二人が騒いでいるのを聞きながら、ヴィヴィアンは魔法陣を光源にするための呪文を唱えた。呪文が終われば、白い光が昼間のように教室を包み込む。それを見届けてから、ヴィヴィアンは机から飛び降りた。

「それじゃ、始めるか。ユキノ、窓の修復から。お前はあっち半分、俺こっち半分」

「了解！」

「ロジエは机を直…… せなかったっけ。とりあえず元あったように並べといて。魔物入ってきそうになったらそれで撃退しろ」

マグネ弾を指して言えば、ロジエは頷いた。ユキノは早速黙々といびつな魔法陣を描き始め、ロジエも机を動かし始める。ヴィヴィアンも呪文を唱え、歪んだ窓枠を元に戻していく。

教室の入り口のあたりから良い匂いが漂っている。入り口は二つ

あつて、一つはアイアランド家内部に繋がっているが、もう一つは直接庭に繋がっていた。匂いはもちろん家の方からする。庭側の入り口は半壊していて、ささくれた木にべつとりと魔物の血がついているのが見えた。

「あれ直さないことにはな……」

欄間のような感覚の、開かない飾り窓を含めて四つの窓を直していったが、窓はあと六つある。面倒になってきた。舌打ち交じりに呪文を呟いて、一気に六つとも修復した。

肩が重くなり、どっと疲れる。あまり一気に大量の魔力を使うべきではないが、面倒だから仕方ない。ヴィヴィアンは両腕をぐっと伸ばして伸びをし、首を鳴らしながら半壊したドアの前に立った。そこまではよかった。

なぜかそこで、妙な感覚が頭をよぎった。前にもこんなことがあった気がする。いや、ドアを直すという行為ではなく、その先に。今から起こることを自分は知っている。一瞬そんなことを思い、ヴィヴィアンは首を傾げた。何を考えているのだろうか、自分は。疲れているのだろうか、きつとそうだと思う。

ゆつくりとドアに触れて、繊維のむき出しになった木片に魔力を流す。そうして、呪文を紡ごうとした刹那。

きん、と耳元で金属音が聞こえた。一拍遅れてぞわりと鳥肌が立つ。

ひやりとした金属の感覚が首のすぐ近くにある。しかも自分の赤毛が数本、切られて宙を舞うのを見た。

驚いて声もだせなかったが、強い力で後ろに引かれてようやく体のほうは動きを取り戻す。衣類に染み付いた嗅ぎなれない香りから、ヴィヴィアンを引っ張ったのはユキノらしいと解る。中途半端に首を回し、振り返るとユキノの伶俐な横顔がすぐ近くにあった。

「どいて。じゃないとヴィヴィアンまで殺っちゃう」

ユキノのその声は、いつものそれではない。聞いただけで喉元に刀を突きつけられている気分になるような、重く鋭いものだった。

明らかな殺気が感じられる。

冷や汗が頬を伝った。正面を向いたところでようやく状況を理解した。

ユキノは意味もなくヴィヴィアンの首すれすれのところを切ったのではなかった。

ヴィヴィアンの肩越しに、正面にいた得体の知れない生物を突き刺したのだ。

ぐるる、と黒い生物が鳴いた。ヒトと猿の間をとったような顔をしていて、ごつごつした骨の形がはっきりわかるような首は、頭三つ分ぐらいの長さをしている。その顔をまともにみた瞬間、ヴィヴィアンは吐き気を感じた。瞳孔が開ききった黄色い眼は、白目であるはずの部分が真っ黒になっている。歪んだ口許からは垂れ下がった真っ黒いグロテスクな舌と鋭い牙が見えていた。その口の端から、数秒ごとに黄ばんだ唾液が糸を引いて垂れ落ちる。

その生物は首からべとべとした黒い血を滴らせ、クモのような長い複数の脚をドアの入り口にかけて蠢いていた。

「っ……」

目をそらさなければ。ヴィヴィアンは目を合わせず、相手の首から下に意識を集中させた。こういうとき、決して目を合わせてはいけない。自分の焦りや恐れ、それから戦略もすべて相手に悟られてしまう。

相手の首から下を見ながら、ヴィヴィアンは思考を停止して対策を考えていた。真っ黒なごわついた頭髮は長いが、首は分厚く硬そうな皮膚がむき出しになっている。そして、爪の先で破れそうな薄い皮膚に覆われた胴体からは、細身の脚が甲殻類や昆虫のそのように無造作に突き出している。呼吸のたびに柔らかそうな腹部が動き、それに伴ってたくさんある足も不規則な動きをする。どこが急所になるのだろう。腹部は相当大きいので、少し刺した位ではダメージが与えられないかもしれない。

「な、なな、なんだこれ!? どっから出た?」

マグネ弾を握り締めたロジェが裏返った声を上げる。

「ずっと気配はしてた」

ユキノが短く言い、刀を引いて薙ぎ払う。粘性の強い血液がべちゃりと噴出し、長い首が仰け反って折れるような嫌な音を立てる。ヴィヴィアンは思い出したように後ろに飛んだ。外套のおかげで無意識に跳躍力が働き、知らぬ間に魔法をかける準備すらできていた。我ながらこの外套を作った自分に感心する。

引きつった顔でロジェはユキノを見ていたが、ユキノが動くのにあわせて一目散に部屋の隅に引っ込んだ。

わかつている。おかしい気配はしていた。しかし、その気配はあまりに普通に夜の闇と意識の隅のほうに溶け込んでいた。今になってみて初めて、あれがその異常な気配だったと気づいたのだ。感じていた曖昧な異分子は、急に強大になっていた。

そして、先ほどのデジャヴのような感覚の正体に思い至る。ヴィヴィアンはこのことを知っていた。いや、正確に言うところのことではなく、もっと前の別の出来事のことだ。

これは、高知能を持った厄介な魔物なのだ。中途半端だがヒトにも擬態するような、相当なレベルの魔物だ。たった一度だけ、ヴィヴィアンはこのタイプの魔物に遭遇した事がある。すぐに親や他の魔道士たちが退けてくれたが、ヴィヴィアンは自分に擬態しようとした魔物が薄気味悪くてしかたなく、何日も眠れなかった。

その魔物に遭遇した時もそうだった。

気づいたら目の前にゆらりと姿を現し、ヴィヴィアンを食らおうとしていたのだ。そいつと目があった瞬間のことは思い出したくない。先ほど経験済みの吐き気をもっと酷くなって襲ってくる。思わず隣の弟子の名前を呼んだ。

「……ユキノ！」

ばんっ！

入りたくても入ってこれない魔物が複数の脚で壁を叩く。体重はゆーにヴィヴィアンの五、六倍ぐらいはありそうな魔物の巨体が、

その動きのたびに振動でぶるぶると波打った。

見えているだけでも七本くらいある脚が、ばらばらと不規則に動いてもがくようにドアを破る。半壊していたドアはついに外れ、気管から搾り出すような魔物の鳴き声が壁を叩く音の間から断続的に響いた。

部屋の隅でロジェが息を荒げ、固まっている。ユキノは魔物から目をそらさず、目の前に伸びてきた足を一本切り落とした。粘性の液体が弧を描いて吹き出し、叩きつけるように壁に黒い帯を引いた。「どこが一番効く？」

尚も魔物から目をそらさず、ユキノが訪ねてくる。魔物は苦しそうに呻き、甲殻類のような脚の先をユキノの着物に引っ掛けようと暴れ、壁をみしみしと軋ませた。

「心臓。脳。どっちも確実にやれば刃物でもいいける。けど再生能力が尋常じゃないぞ、おそろく無茶だ」

現にいま切り落とした脚の断面がぼこぼこと膨れ、新しい脚が形成されていていつている。ヴィヴィアンは机を蹴り倒し、動けるスペースを作ってからユキノを引っ張って後ろに下がる。教室の入り口にひっかけた魔物の脚から、何か出てくるのを視界の端に捉えたからだった。

「うわっ」

ユキノの袖に火がついた。出てきたものの正体は、粘性の炎だったのだ。即座に水の魔法で消し、自分とユキノの前に水で分厚い防護壁を作る。

水の壁越しに魔物がこちらを向いて口をあけ、火を吐く様子が見えた。見ている場合ではない。防護壁から飛びのいて魔法陣を描き始めると、魔物は動きを止めて静かになった。その優秀な知能を使って、ヴィヴィアンとユキノをどうしとめるか考えているらしい。

「うかつに近寄れない」

苛立ったように吐き捨て、ユキノは刀を握ったまま小さく呪文を唱える。それに呼応し、冷気が部屋を満たし始めた。コントロール

の効かない冷気が部屋の壁を凍らせ、水の防護壁を凍らせ、魔物の表面に霜をつけていく。しかし、魔物は自分で溶け出して動き始めた。

「気をつけろ、毒吐いたり地面割ったりする奴もいる。目を合わせるな」

そう言いながら、魔物の動きがおかしいことに気づいた。でたために脚をうごかし、執拗に宙を引っかくようなあの動きはもうない。やわらかな胴体を利用し、魔物は脚を一本ずつこちらに引き入れ、壁を足がかりにして少しずつ入ってくるのだ。

その異様な動作に、ぞくりと寒気がする。

第二十九話 違和（後書き）

今日で一周年を迎えました！ ありがとうございます。
一周年がこの話でいいんだろうかと随分自問しました。

第三十話

呼応、連鎖

ユキノが脚を一本ずつ切り落として阻止しようとするが、魔物は火を吹いてユキノを遠ざける。氷の防護壁は簡単に融解してしまった。そして融解したそばから凍りだし、歪な彫像のようになる。ヴィヴィアンは魔法陣を完成させ、呪文を唱え始めながら内心で舌打ちしていた。防護壁が少しは時間稼ぎになってくれるかと思ったが、あまり役に立たなかった。

部屋の温度が氷点下になりはじめたらしいことには、魔物やユキノの口から漏れ出す吐息が真っ白に凍っているのを見て気づいた。ヴィヴィアンは温度調節機能のある外套で外気温の変化にあまり気づかないし、魔物にもあまり効果がないようにみえるが、ユキノは自分で自分の首を絞めたいらしい。この呪文が終わったら助けよう。

切り落とされた魔物の脚から吹き出る血が、出た瞬間凍る。凍った血の塊を振り回し、魔物はそれすらも武器にしてユキノを狩ろうとしている。ユキノは真っ白な吐息を吐き、がくがく震えながら血の塊を切り落とし、そのまま胴体に刀を突き刺した。

「……ヴィエ・ロスファ・ライ」

ユキノが刀を抜くのと同時に呪文が発動する。その瞬間、真っ黒い血を吹き出しながら魔物が進入してきた。魔物めがけて強い紅蓮の炎が吹き上がり、あっという間にその巨体を包み込む。壁とユキノを燃やさないように命令を加えたから呪文が長くなったのだ。

「ユキノ、大丈夫か」

「へいき」

短く答え、ユキノは飛びのいて机の上にひらりと上がる。炎につつまれてもがく魔物の腹からは血が脈動に合わせて噴出していて、見る間に床が黒く染まっていった。ヴィヴィアンはユキノが暴走させた冷気の魔法を止め、部屋の隅で震えるロジェの腕を乱暴に掴んで引っ張った。

「さ、寒い……」

「ナタリアとローザを二階に連れてけ。ウィル先生もだ」

「わ、わかった」

「絶対に一階に戻ってくるな」

教室と家とをむすぶドアからロジェを送り出し、ヴィヴィアンはドアに施錠魔法をかけた。これで向こう側からドアが開いて、三人がこちらに来ることはなくなった。

炎に包まれた魔物はユキノがドアから遠ざけていてくれた。ヴィヴィアンも加勢することにして、右手を上げて指を鳴らす。鳴らした指の辺りから炎が吹き上がり、やがて形を成して剣となった。ヴィヴィアンはそれを掴むと、机を思いっきり蹴りつけて魔物に突っ込んでいった。そうして胴体に剣を刺してから、心臓の位置がわからないことに気づく。

魔物はもがきながら十一本ある脚から血を流す。その血をつかってヴィヴィアンのかけた魔法を解こうとしているようだ。普通だったら水をかけても消えないような魔法だが、魔物の血には魔力が宿っている。黒いべつとりとした血のおかげで、火は徐々に静まっていった。ヴィヴィアンは狙いを定め、魔物の首を力いっぱい薙ぎ払う。

ごろり、首が床に落ちる。吐き気がしたが、ヴィヴィアンは落ちた首には目もくれずに胴体の方を見定める。皮膚が焦げ付いているが、表面がぼこぼこ泡だつてすぐに再生していく。

魔物は血が抜けたからかどうかは解らないが、少しスリムになっていた。脚も十一本あったと思ったのが六本になっている。ぼってりしていたフォルムが縦長になっているのは気のせいではない。

少し遅れて、ヴィヴィアンは魔物が戦闘用に自分をどんどん作り変えているということに気づいた。細身のほうが暴れやすいし、俊敏に動けると思ったのだろう。

首のない魔物はそれでもヴィヴィアンとユキノがいる場所がわかるようだった。何の魔法で滅するべきか考える。考える間に動いて、

鎌のように変化した魔物の脚から逃げる。魔物の脚は何もない宙をひゅんと切り裂き、ヴィヴィアンは魔法で空中に空気の塊をつくりだして足場を確保した。そして、鎌のような脚を切り落として胴に刀を突き立てるユキノに声をかけた。

「ユキノ、頭やれ！」

ごろごろと転がりながら、頭は自分の体のほうへと向かっていた。ユキノがそれを脳天から突き刺し、突き刺したまま拾い上げて机に叩きつけた。びちゃりと飛び散る魔物の血。魔物は潰れた喉から悲痛な叫び声をあげた。

ユキノは血に濡れた黒いごわごわした毛を鷲掴みにして、魔物の首を肩の高さまで持ち上げると、体部分から遠い床へと投げつけた。とどめを刺そうとしたが、体部分に攻撃されそうになったのだ。ヴィヴィアンはそれを、直径が身長くらいある大きな魔法陣を描きながら見ていた。

部屋の隅へと転がっていった首は暫く動かなかったが、痙攣したような動きでまた少しずつ転がり始める。そして、転がりながらヴィヴィアンの方を見上げた。まずい、やろうとしていることに感づかれた。

首のない魔物はユキノを攻撃するのをやめ、背中からめきめきと大きな翼を生やし始めた。コウモリの羽ににている。ヴィヴィアンは魔法陣を描きながらユキノの名を叫ぶ。魔法陣はまだ六割しか完成していないのだ。ここで攻撃されたらまた態勢を立て直すために時間が要る。

すかさずユキノが魔物の翼を斬った。落ちた翼はのたうつように暴れ、そのままどろりと溶けて血になって床を濡らす要因となった。おかげで魔法陣の外形が完成し、呪文を書き込む段階までこぎつける。ユキノは尚も魔物を阻止しつづけてくれたが、急に壁際に吹っ飛ばされた。一瞬送られて、体中に薬品をかけられたかのような痛みと熱を感じてヴィヴィアンはたじろぐ。魔物を中心に発されたその波動は、間違いなく魔力の固まりだ。

「ユキノ！」

壁にたたきつけられ、ユキノは魔物の血が広がる床にぐったりと倒れこむ。魔物の脚に吹っ飛ばされたのではないことは明らかだ。

「てめえ、何をっ」

未完成の魔法陣をそのままに、ヴィヴィアンは炎の剣を再びつくりだして魔物の体を切る。真つ二つにするには大きすぎる魔物だから、ヴィヴィアンの懇親の一撃も首の部分をごっそり切り落とす程度で終わった。しかしほんの少しの時間稼ぎにはなったようで、動きを止めた魔物の首の断面がぼこぼここと泡立っている。

「ユキノ！」

背後に注意しながら彼に駆け寄ると、ユキノは両手で体を支えて起き上がろうとした。しかしすぐに倒れこむ。

「っ、平気」

「平気じゃないだろ、何があった」

「空気の刃……」

最後まで聞けなかった。背後から強烈な魔力の塊が迫ってくるのを感じ、ヴィヴィアンは咄嗟にユキノを抱えて机の上に飛び上がる。今までユキノが倒れていたあたりに、地を割るような衝撃が起こる。絨毯が切りつけられ、壁に刃物のようなあとがいくつもついた。魔力の痕跡からは煙すら上がっている。

「……げ、厄介」

逃げるのがあと一瞬遅れていたらと思うと、鳥肌が立つ。見れば、ユキノの腹部あたりが赤く汚れていた。魔物の血は黒いはずだ。呼吸が止まるかと思った。

「怪我、してるのか」

どう見たってしている。自力で立って刀を構えてはいるが、ユキノの足元はふらついていた。かなり動揺しながらも、ヴィヴィアンは炎の剣で魔物の脚を切り取り、根元を焦がす。

「避けられなかった」

言いながら、ユキノは震える手で刀を握って魔物を睨む。

「治療教える。待ってろ、もうちょつと持ちこたえてくれ」

言いながら、ヴィヴィアンは彼と背中合わせになるようにして呪文を唱え、主にユキノ側に真空の防護壁をつくる。

「ヴィヴィアン、上いっていいよ」

「アホか、死ぬぞお前」

呆れと苛立ちに任せ、炎の剣で魔力の塊を切り裂いた。しかし、このままでは埒が明かない。

相手の攻撃をうまく利用して、こちらを強くする方法は一瞬で考えついた。成功するかどうかは別にして、相手の魔力を利用するのは魔道士同士の決闘では常套手段だ。魔物にも使ってみる価値はあるかもしれない。

いちかばちかで、切り裂いた不純な魔力を剣の中に取り込んでみる。何も起こらない可能性も、魔物の魔力が暴走する可能性もあったが、上手いこと炎の勢いが増した。

「……よし、これは使える」

「え？」

「ユキノ、お前はそこから動くな」

ヴィヴィアンは魔物が発する魔力の塊を切り裂きながら、片手で魔法陣を描いてユキノの前にもうひとつ防護壁を作る。

その防護壁は相手の攻撃を自身に取り込むように設計し、ユキノ側からの攻撃は通すようにと呪文を改変していく。気づくと炎の剣は、魔物の魔力に増強されてかなり大きくなっていた。呪文を唱え、防護壁に炎の剣から魔力を送り込む。しかし、そこで受け損なった空気の塊がヴィヴィアンの左肩を直撃した。

「っ！」

二度目の攻撃は大きくなった剣を盾にして防いだが、まだ製作中の壁が不完全だ。これではユキノを守れない。

よろけるように一枚目の防護壁の中に入り、ヴィヴィアンは呪文を唱えなおす。そうしながら、防護壁に背中を預けるようにして座り込んだ。

鼓動が早鐘のように加速し、息が上がる。左肩を押さえた手の下から、生ぬるいものがあふれているのがわかる。気が遠くなった。傷を受けた直後はかすり傷程度で済んだかと思っていたが、甘い考えだった。心臓がひとつ撃つたびに、一拍分の血が全部出て行ってしまうているかのように思えた。

「ヴィヴィアン！ 大丈夫か」

「自分の心配してろ」

刀を持つ手が少し震えている。そんな状態のユキノを魔物の前に置き去りにしていくわけにはいかなかった。ヴィヴィアンは呪文を唱え終わると、出来上がった二枚目の防護壁に寄りかかってユキノの前に小さく魔法陣を描いた。

「治癒の呪文を教える。この魔法陣つかっていいから、傷を軽くしろ。自分の治癒力を使う魔法だから、完全に治すと疲れて立ち上がれなくなるぞ。ほどほどに治したら、こいつをひきつけて戦ってくれ。この防護壁は相手の攻撃を受ければ受けるほど強くなるし、こっち側からなら突き刺しても破れない」

「わかった」

治癒の呪文を教えてやると、ユキノは頷いて先ほどヴィヴィアンが描いた小さな魔法陣の前に立った。魔物の脚がユキノめがけて振り下ろされたが、防護壁に弾かれて脚は折れた。折れた脚をぶらぶらさせながら、尚も魔物は防護壁を攻撃する。ヴィヴィアンはその真正面に立ち、魔物をひきつけながらユキノのに声をかける。

「これから雷をつかう。刀の方に落ちるかもしれない。魔法かけるとき……」

「大丈夫、策はいま考えたから」

ヴィヴィアンは軽く口角を上げ、ユキノと頷きあってから防護壁を蹴って先ほどの魔法陣の続きを描きにいく。追いかけるように迫ってきた魔物の攻撃は、空中で炎の剣を振り捨ててそれで防ぐ。

空気の塊で足場を作っていると、一枚目の防護壁が破られるところが見えた。教えた呪文をちゃんと使えたのか、ユキノは刀をまっ

すぐに握りなおして防護壁の中から相手に攻撃を加え、相手の注意を引く。

このまま持ちこたえられるかどうかは時間の問題だが、今はユキノの腕を信頼するほかない。肩は痛み、脂汗が滲むが、それでも早く魔法陣を描いてしまわなければ。震える指先に魔力を伝わせ、ヴィヴァンは魔法陣の続きを描く。

第三十一話 乱舞

手早く魔法陣を完成させると、ヴィヴィアンは長い呪文を唱え始める。左の肩がずきずきと痛んだ。無意識に目をやってしまったから後悔した。見ないようにしていたのに、裂けた外套と抉れた肩の傷、そこから溢れ出る鮮血を目にしよう。目をそらしたが、そらしてどうにかなる問題でもない。

「ジェギ・リクサ・ノア・ロウエ……ッ」

痛みに気が遠くなる。良く見るとまだ血が止まっていなかった。痛すぎて血が出ている感覚がわからないが、相当深く傷を負ったらしい。鼓動が打ったび血が抜けていく。

どうにか呪文を紡ぐが、視界がひどく揺れている。次第に魔法陣を捉えるのすら困難になってきた。

「苦戦してるね、おにーさん？」

からかうような調子の軽い声が後ろでしたと思ったとたん、背後からふわりと花の香りがした。呪文を紡ぎながら横目で見れば、壁を這う植物から伸びた枝にぶらさがったエストルがすぐ隣にいた。いつもどおりの軽い笑み。それを見た途端、なぜか急に安心した。

「エストル」

呪文は途中で打ち切ってしまった。どのみち、もう集中力がきれかけていたので最後の単語までこぎつけられなかったと思う。エストルはひらりと外套をはためかせながら、伸びてきたもう一本の枝に足をかけて優雅に笑ってみせた。

「なんか強烈に嫌な感じがしたから、来てみたらこれだろ？ 俺って女の子相手じゃなくても鋭い勘使えるんだな。超クール」

この状況でも軽口を叩けるエストルに少し感心した。どうでもいいと思われているからこんな態度をとられるわけではなくて、彼なりにヴィヴィアンを気遣っているからこんな発言が出るのだ。

「あいつの…… ユキノの方を手伝ってやって。あいつまだ無理し

てる」

「ずいぶんボロボロにみえるけど、こっちの人は平気なのか？」

声と同時にすると伸びてきたエストルのつる草が、ヴィヴィアンの肩に絡みつく。

「っ、痛てえよ」

「圧迫止血。ないよりマシだろ」

肩の傷口の少し上を、つる草はじわじわとしめつけていく。眼下でユキノがすっかりいつもの動きを取り戻しているのが見えたが、痛みのせいで視点をそこに留めておくのが困難だった。すぐに目を伏せ、ヴィヴィアンは絡みつくる草に指を添える。

「それくらいにしないとやれ、サンキュ」

エストルの一言で、ぴたりとつる草の動きが止まった。

「ずいぶん乱暴だな、その『可愛い子ちゃん』ってのは」

軽口を叩いた瞬間、膝から力が抜ける。エストルの背後の方から伸びてきたつる草が肩に絡み付いているおかげで自分が作った足場から落ちずに済んだが、もしそのまま落ちていたらと思うとぞっとした。

「残念、こいつは可愛い子ちゃんじゃなくて頼れる相棒」

「植物にも性別ってあるのかよ」

「当然だろ？ 学校の理科で習わなかったか、雄株と雌株。雄花と雌花。美しけりゃみんな女の子だし、力強けりゃ相棒だよ」

エストルは笑いながらヴィヴィアンに手を貸し、どんどん成長を続けて巨大な樹になりつつある植物の枝に軽く腰をかけた。エストルは動かなくても、樹が生長に合わせて枝を伸ばしてくれるので移動ができる仕組みだ。彼は完全に植物を操っていた。

「……で、他は？ ご要望とあれば、鎮痛薬にも活躍してもらおうけど」

「ここやられただけ。時間さえ稼いでくれれば、何とかできる」

左肩を指して言えば、エストルは目を細めて楽しげに笑った。

「オーライ。そんじゃ、準備運動からいきますか」

「早くあいつを手伝ってやってくれ」

「はいはい、っと。そいつの肩、頼んだぞ」

エストルがそう言った瞬間、つる草は自分の生えている元を断つてヴィヴィアンの肩にきゅるきゅると巻きついた。止血はされているが支えはなくなった状態になって、ヴィヴィアンはよろめきながらそこに留まる。

そんなヴィヴィアンをしばらく心配そうに見ていたが、やがてエストルは背後を振り返り、樹の根元の方に何か囁き声を投げかけた。途端に凄い勢いで枝が増殖しはじめ、目にも留まらぬ速さで成長する樹の波のような枝に乗ってエストルは魔物の方に突っ込んでいく。「さて、俺のほうも仕事しないとな」

消えかかっている魔法陣に魔力を送り込み、深呼吸してから呪文を紡ぐ。ちよつと頭がふらふらする。それでも、意識の力だけで自分の足場となっている空気の塊を保ちながら、ヴィヴィアンは長い呪文を唱え続けた。

「エクタ・フリリカータ・クェリル・スタウ……」

眼下の魔物はエストルのつる草に巻かれて身動きを取れなくされていたが、それでも口から真空の刃を吐いたりべつとりした炎を吐いたりしていた。それでもヴィヴィアンの方に攻撃がこないということは、あの二人の攻撃を防ぐことで手一杯なのだろう。

ユキノが器用につる草からはみ出た部位だけを斬るところや、エストルが奥の手のやどりぎを使うのを見ながら、ヴィヴィアンは少しずつ呪文を完成させていく。

呪文を唱え終わる瞬間というのは、並みの魔道士や魔法使いにならずに判別できる。魔法陣または魔道士へ集まった魔力が、一気にはじける瞬間がわかるのだ。少しランクがあがってそこそこ強い魔道士になると、呪文を唱えている間に膨れ上がる魔力の気配を感じ取ることが出来る。そろそろ終わるなというのを、予知できるのだ。

エストルにはその力があるはずだったが、疲れているのか集中したいのか、なかなかこちらに気づかない。心の中で必死にエストル

を呼ぶ。(おい気づけ、ユキノを連れて魔物から離れてくれ!)

とうとう呪文は最後の段落にさしかかり、魔法陣は強く白い光を放ち始める。あと四つ、単語を口にしたら呪文は終わる。二人がうまく避けてくれることを祈り、ヴィヴィアンは小さく息継ぎをした。「シルマ・ヴェスパイア・サン・サンドレ」

とたんに目の前が真っ白に塗りつぶされる。空間ごと裂くように轟く大きな雷鳴を伴い、雷撃が魔物を直撃した。と、思う。視界が焼け付いて辺りを確認できない。

自分とした事が、自分の目を眩まないようにする呪文をすっかり忘れていた。外套の魔力を使って飛び上がり、空気の塊を蹴って床に着地した。

「ユキノ! エストル!」

まだ目が眩んでいるが、視界に映る机の残像を頼りにして二人のもとへ急ぐ。すると、ぽんと肩を叩かれた。

「ずいぶん派手にやってくれたな。耳いてえよ」

「無事か」

よく見えないが、エストルはたぶんいつもの快活な笑みでヴィヴィアンを見ているのだろう。

「まあ、なんとかな。ちよっと頑張ったと思わない? お前が雷撃を炸裂させる瞬間、こいつらをみんな種子に戻したんだ」

ポケットを指すエストルに、ヴィヴィアンは頷いた。彼は自分が扱う種子を非常に大切にしている。植物は彼の武器というより仲間であり、極めて友達や恋人に近いのだ。

「考えたな。じゃあ、呪文が終わる瞬間にはちゃんと気づいてたのか」

「当たり前だろ? お前の魔力の動かし方なんて、ガキの頃から知ってたんだから。呪文聞かなくてもどこで発動されるかすぐ解るよ」

「ん。そっか」

魔力には個人差があり、感じる温度や雰囲気も違う。人によっては色がついて見えたり、香りとなっていることもある。魔法が使え

る者同士なら、それを見分ける事が可能だ。

とくに古くからの友人の魔力は、ちゃんと注意していればすぐに判別できる。エストルがこの街に戻ってくるときも、ヴィヴィアンが面倒くさいから家に籠りっぱなしでいることが多いだけであり、街を歩いていればちゃんと解る。

そうだ、それを利用すればいい。やわらかく流れる水のようにでて、冷たく硬い氷のような、力強さと繊細さを兼ね備えた魔力を辿る。その持ち主が、すぐ近くにいます。……生きていけば。

「ユキノ！」

感じる魔力を頼りに走ると、机に膝をぶつけて痛かった。少し呻きつつも、彼がいる場所へと向かう。ようやく目が慣れてきた。ユキノは地面にうつぶせになり、氷のような青い瞳を伏せて小さく息をしている。

「おいユキノ、大丈夫か」

「……傷、開いた」

「お前、刀は？」

「あっち」

見れば、魔物に突き刺さって黒焦げになっている刀が目に入る。そして、その刀に貫かれた魔物も焦げて炭化し、ぼろぼろと崩れていく。おそらく金属製の刀を利用して、雷を魔物の心臓辺りにしっかり届くようにしたのだろう。こんな状況下でもユキノは非常に頭が切れる。

あれだけ感じていた強い禍々しい魔力をもう感じない。ヴィヴィアンの目の前で、魔物はどんどん崩れていった。崩れる途中で黒焦げの刀が魔物の腹から抜け、床に落ちて大きな金属音を立てる。黒い山の中へ落ちてしまったので詳細はわからなかったが、割れているように見えた。

やがて甲殻類のような脚も亀のような首も全て崩れ、魔物の死骸は消し炭の山のようになる。外の生ぬるい夜風が、中途半端に原型を残した魔物の死体を更に砂のようにしていった。

「終わった？」

「ああ」

ユキノに頷いてやり、手を掴んで立たせてやった。崩れた死骸はどんだん風に飛ばされ、黒い霧のように窓や壊れたドアから外へ運ばれていく。

何気なく目を留めると、炭のような死骸がもぞりと動いた。ぎよっとして魔力を指に溜め、魔法をかける構えをしていると、崩れていく死骸の中から小さなコウモリが飛び出した。炭を撒き散らしながらふらふらと窓から出て行こうとするコウモリに、ヴィヴィアンは呪文を唱えて火をつけた。コウモリはもがくように滅茶苦茶な飛行をしながら、窓から闇夜へと飛んでいってしまう。

「……なんだったんだ今の」

ユキノは腹部を押さえて机に寄りかかりながら、コウモリが飛んでいた方角をしばらく見つめていた。ヴィヴィアンも同じようにコウモリが出て行った窓を見ていたが、もうその姿を捉えることはなかった。

「あのちっちゃいのが本体だったんだろ。でも大分衰弱してたから、しばらくは襲ってこないと思う」

「そっか」

答えながら頷くユキノがつらそうだったので、ヴィヴィアンはとりあえず窓の修理とドアの修理をひとりで行うことにした。幸い、エステルがまだ十分に動ける体だったため、望みは薄いと思いながら声をかけた。

「手伝ってくれる気ない？」

「こないだ借りた魔道書、返せないけどあれチャラにしてくれるなら」

「よし、交渉成立」

あの本けっこう気に入っていたのに、と思わないわけでもなかったが、仕方ない。エステルは木製のドアやドアの枠を呪文も使わずに直し始めたので、ヴィヴィアンはガラスを修復した。数分でその

作業は終わった。

机の天板は木で出来ているから、エストルにも半分手伝わせた。部屋はちよつと掃除が必要な汚さではあるが、部屋にある物品の修復は完了する。さすがというか、自分と実力が互角に近いエストルがいると仕事が早く済む。

「ユキノ、平気か」

修復が終わってユキノに駆け寄ると、ユキノは虚ろな目をこちらに向ける。

「ご、ごめんヴィヴィアン……俺、何もできなくて」

「腹なんとかするぞ。エストル、助かった。お前いてくれて本当によかったよ」

背後からユキノの様子を覗き込んでいたエストルだが、ヴィヴィアンが振り返ると清々しい表情で腰に手を当てた。

「ま、たまには良いことしてみるのがいいかなって感じ？　じゃあ俺行くから。姉貴に会わないとな、久々に帰省して俺の帰り待ってるから」

「シスコンめ」

半眼で言ってやれば、エストルは途端に真面目な顔をする。何をいうかと思えばいつものエストル節で、

「だって姉貴可愛いんだもん。俺は全ての可愛い子ちゃんの味方なんだよ、平等に愛してやんないよ」

……ヴィヴィアンからすれば、ちよつと寒気がするような発言だった。

「お前、それ家族に対する発言じゃないぞ」

「俺の哲学では、可愛い子ちゃん相手にそういうつまらない壁はないんだよ。それじゃ、そっちの美人ふたりよろしく」

そう言うが早いか、エストルはドアを開け放って軽く地面を蹴って楽しげに呪文を呟いた。途端に強い風が巻き起こり、エストルはその風に乗って飛ぶように闇夜に消えていった。その後姿を見送り、ヴィヴィアンはドアを閉める。

第三十二話 帰還

しんとした闇夜に、少しずつ虫の声が戻り始めていた。

ユキノの傍に戻ってみると、ユキノはゆっくり顔を上げて訪ねてくる。

「ヴィヴィアン、怪我してるのか？」

「あー」

思い出したら何だか痛みに意識が向いた。無視していたはずの痛みが急に痛みを取り戻したように感じる。ヴィヴィアンはユキノの肩を支えるようにして教室に繋がるドアの前に立つと、施錠魔法を解いてドアを開けた。

静まり返ったアイアランド家のリビングに、人の姿はない。二階から何か喧嘩するような声が聞こえるのが気になったが、まずはユキノの手当てをしなければ。

ソファにユキノを座らせた。ユキノは着物を脱ぎ、ノースリーブというか首の後ろと背中では結ぶ前掛けのような衣類とレギンスのうなズボンというスタイルでソファに腰掛け直す。

「あーあ。着物も腹掛けも、こんな切れ方したら直らないかも」

ずいぶんと気落ちした様子で呟いたユキノに、傷の方はいいのかと突っ込みたくなる。

「随分派手な怪我だ」

「でも、この傷受けてからは、怪我してないんだ」

「よく避け続けたな」

感心すると同時に、ひやりとした。もしもユキノが弟子入りを志願してきた普通の男だったら、すぐに殺されていただろう。剣の才能があったからこそこうして生き延びているのであり、魔法はもつと教育してやらないと身を助けるレベルにまで達しない。自分すら守れないのだから、村を守るなんて無謀だ。

そして、自分も。人に何かを教えるのだから、少なくとも自分の

身は守れるようにしておかなければいけないのに。自分もやられているのだから本当にどうしようもない。痛む肩を握り締めるようにして、感じる不快さをごまかす。

「これは完全に予想外だったんだ、魔物ってこんな攻撃もしてくるんだな」

「もっと厄介なのだと、エストルのやどりぎまがいのこととしてくるからな」

「怖っ、そんなのと急に戦えって言われたら今度は死ぬよ俺。ありがとう。ヴィヴィアンが壁つくってくれたおかげで、手負いでもなんとかなった」

「死なれたら困るんだよ。規約にも書いただろ、勝手に死ぬなって」
「うん。大丈夫、まだ生きてる」

明るく笑うユキノの顔色が紙のように真っ白であることに気づき、ヴィヴィアンは小さな魔法陣を空中に描いた。そして、治癒の呪文を唱える。この状態のユキノにあまり強い治癒魔法はかけたくなかったが、仕方ない。たぶん腹の傷は塞がるだろうが、そのあとユキノが歩いて店まで帰れるかどうかは怪しい。

治癒の魔法をかけ終り、ヴィヴィアンは疲れきってソファに深く座り込んだ。ユキノも喋る気力すらないのか、二人で黙り込んでいた。すると、二階の階段からウィルフレッドが降りてくる。

「ヴィヴィアン！ ユキノ！」

ユキノがぴくりと反応した。たぶんウィルフレッドに名前を呼ばれことに驚いたのだろう。ヴィヴィアンは顔をあげる気力も起きなくて、視線だけでウィルフレッドを見上げて軽く会釈した。

「話は聞いたよ、ヴィヴィアン。すまなかったね、塾生の個人情報をもとめていて、君達がきてくれたのに気づかなかったよ。凄い物音がするから見に行こうとしたら、ロジェに止められて」

「いいえ。挨拶がおくれてすみません、お邪魔してます。さっき、教室なおしておきました。あと掃除がまだ残ってるんですけど、もう授業は再開できると思います」

「助かるよ、ありがとう。……ひどい怪我じゃないか、ヴィヴィアン」

ウィルフレッドはヴィヴィアンの左肩に手を伸ばした。激しい痛みに襲われ、思わず体ごとウィルフレッドから逃れる。

「あ、ああ、すまない」

「いえ、気にしないで下さい。あれ、奥さんは？」

「昨日ひとばん商工会の者たちと会議をしている間に、うちがこんな風に荒されただろう。あのまま議事堂に泊まったんだが、なんとなくこんな様子を見せたくなくてね。もう一晩とまって来いというてある」

「そうだったんですか」

とはいえ、三日も四日も議事堂に泊めておくわけにはいかないだろう。できたら全ての状況が整ってから家に帰ってきて欲しいと思うが、今のヴィヴィアンの力では無理だと思う。ろくに動けないこの体で、アイアランド家をすっかり元通りにすることは不可能だ。

「何か冷たいものを持ってくるよ。そのままそこで待っていなさい」

「あ、そんな気を遣わないで下さい、昼にも色々貰ったし」

「今晚のこれは依頼じゃないんだろう。それでは私たちの気が済まんよ」

ウィルフレッドは台所の方へ消えていき、ヴィヴィアンはため息をついた。

「おいユキノ、生きてる？」

「死んでる」

「生きてんだろが」

「気分的には死んでる」

「あー、それは同意」

たったこれだけの会話に疲れた。エストルのつる草がまだしっかりと肩を締め付けてくれていとおかげで血はあまり流れないが、血の流れがとまりかけている左手が全体的にしびれている。気持ち悪いので早く直したいが、魔法をかける気力も無い。

なんだか疲れて眠い。ここで寝てしまっではいけないと解っているが、瞼が下りてくるのに逆らえない。しかし、ずっと気になっていた喧嘩の声がどんどん大きくなるので、意識が途切れない。ついに声はつきり聞こえるようになる。

「だからっ！　ここでお前が出てったら、ヴィヴィアンは何のためにお前らを俺に守らせたんだよ！　あっち行ってもお前は足手まといなの！　なんでそんなことも解んないんだよっ、自覚してるだろお前だっ！」

「うるさいわねっ、そういう問題じゃないの！　もういいわ、埒が明かないもの。あんたはローザだけ守ってなさい！　何もしないで待ってるなんて、あたし嫌なのよ！　死んじゃったらどうするの！」
びくりとして顔を上げる。それと同時にすごい勢いでドアが叩きつけられ（開いた音なのか閉まった音なのかは判別できない）、階段のあたりにナタリアの姿をみつける。

「おい」

小さく声をかけてみると、ナタリアがその場で動きを止めた。それから、彼女の顔に見る見る絶望の色が広がっていく。

「ヴィヴィアンっ！」

凄い速さで階段を降り、よく転ばないかと感心しているとナタリアが胸に飛び込んできた。思わず両手で受け止めたが、左肩の丁度傷があるあたりにナタリアの細い肩がぶつかって叫び声を上げそうになった。

「っう！　痛っ、痛い、ナタリアどけ、いてえ！」

しかしナタリアは、ヴィヴィアンの胸に顔をうずめて首を横に振った。

「駄目よ。離したら、どっか、行っちゃうじゃないっ。あんたがいなくなったら困るのよ、馬鹿！　馬鹿っ……」

とうとう泣き出すナタリアに、心底困り果ててヴィヴィアンは助けを求めるように隣を見た。救いのはずのユキノは虚ろな目を伏せ、俯いている。これはちよつとまづいんじゃないだろうか。早く家に

連れて帰らなければ。

「落ち着けよ、死ぬほどのもんじゃないから」

「死んじゃったらどうするつもりだったのよ！ 血、血がっ……」

こんなに出てるじゃないっ、顔色真っ青だし、震えてるわ」

顔色や震えについては指摘されるまで気づかなかった。眩暈やふらつきがあるということは貧血になっているだろうとは思ったが、まさか自分も見ることからに重傷の風体であるとは。ナタリアも心配するわけだ。

「大丈夫だから。俺、まだちゃんと生きてるから。ほら、血がつくだろ、服汚れるからどけ」

そう言って安心させるために右手で頭を撫でてやると、ナタリアは涙で濡れた目でヴィヴィアンを見上げた。

胃の底が締め付けられるような感覚を覚える。なんだかナタリアに申し訳ないことをした気がした。ヴィヴィアンには、大怪我をした時に自分のことのように泣いてくれる人がいるのだ。怪我をしたヴィヴィアンを見て、ナタリアがこんな風に泣いてしまうことは予測できたはずだったのに。

目をそらせない。何か言わなくては。

「あー。えっと、ごめんな。そんな風に泣かすつもりはなかったんだけど」

彼女の澄んだ新緑色の瞳を見つめたまま、ヴィヴィアンは少し困りながらそう言った。ナタリアは少しの間黙っていたが、思い出したように声を上げた。

「あっ！ ……痛いよね、ごめんなさい」

申し訳なさそうにヴィヴィアンから離れたナタリアの右肩から胸にかけて、べっとりと真っ赤な染みがついているのが見えて頭がくらった。なぜ彼女は白い服で抱きついてきたりしたのか。

ナタリアはヴィヴィアンの右隣に座り、心配そうにヴィヴィアンの肩を見る。

「いつものことだろ、お前が飛び掛ってくるなんて」

「飛び掛ってなんかないわよ！」

「……水くれないか」

ナタリアはヴィヴィアンの隣にいたかったようだが、渋々腰を上げて台所の方へ向かっていった。ナタリアのあの服を見たらウィルフレッドが何と言うだろうか。

「ユキノ、生きてる？」

二度目の問い。ユキノの返事がなかなか返ってこなくて、ヴィヴィアンは不安になった。

「血が足りねー」

しばらくしてから答えが返ってくる。少し安心し、ヴィヴィアンは小さくため息をついた。

「俺も」

「家帰ったらさ、レバーとか食べたほうがいいよ俺ら」

「俺レバー嫌い。他に何が効くんだったけ」

話をしていないと、ユキノが眠ってしまう気がする。眠ってしまったって、二度と起きないような気がする。彼はそんなに弱い男ではないと知っているが、そう思わずにはいられなかった。

「えっと……『豆？』」

「あー」

「他……貧血に効くの、なんだろう」

「手っ取り早いのはエストルの薬草だな」

「そっか、その手が」

「種子のストックならあるから。発芽させる気力はないけど」

「……大人しく寝てろってことか」

「まあそうなるな」

二人で乾いた笑い声を立てているところに、ナタリアがたっぷり水を汲んだグラスを持ってきてくれた。

「ヴィヴィアン、お水持ってきたわ」

「ありがと」

「ユキノも、はい。あんたも大分疲れてるわね」

苦笑して頷くユキノを横目で見ながら、ヴィヴィアンはため息をついた。

「当たり前だろ、こいつ腹に大怪我を」

「……あんたが治したのね？」

「ああ」

ナタリアはため息をついた。無茶をしたヴィヴィアンに呆れているのかもしれない。あるいは、ユキノの方にも呆れているのかもしれない。

「ユキノ、生きてて良かったわ！　これ食べてちょうだい、糖分摂った方が良いわよ」

氷飴をひとつぶユキノの口に入れ、ナタリアは小さく微笑んだ。

ユキノは一瞬身を強張らせたが、為されるがまま飴をほおぼって小さく礼を言う。

「最初、あんたの方は無傷だと思ったのよ」

「割と重傷だったよ。ヴィヴィアンが治してくれたから、いまなんとか生きてる」

ユキノはにこりと笑って見せるが、相変わらず蒼白な顔色にナタリアは余計痛々しさを覚えたようで、俯いてユキノの手を握り締めた。

「ごめんなさい、あたしが頼んだりしたから」

「お前が謝ることじゃない」

横からそう言ってやれば、ユキノもうなずいた。そして、握られている両手のうち右手をすっと引っこ抜いてナタリアの手の上に被せる。驚いて顔を上げるナタリアに、ユキノは少し躊躇ってから腹掛けを摘み上げて見せた。

「できたらこれ、縫って欲しいんだ。着物も」

この状態でも相変わらず気丈なユキノを見て、ナタリアは服の袖で乱暴に目元を拭う。そして、すぐに顔を上げて微笑むと頷いた。

第三十三話 ブラッディ・ナイト

痛みが激しくてぎゅっと目を閉じ、肩を押さえ込む。骨が邪魔で傷口がうまく握れなくて苛々する。

「ヴィヴィアン、あんたのもね。その外套お気に入りでしょ」
「頼む」

短く言って目を閉じる。頭がふらついて、偏頭痛のような痛みを頭のそこかしこで感じるのだ。無意識に左肩に手をやると、その手の上からナタリアが軽く手を添えてきた。

暖かいその手の感触に驚いて、彼女の方に顔を向ける。泣きそうな顔をしたナタリアが、目を伏せてヴィヴィアンの肩を見つめていた。

「どうして魔法が使えないのかしら、あたし」

そこでナタリアが自分を責めることはないのに。ヴィヴィアンは少し考えてから、とりあえず無難そうな言葉を選んで気にするなと言いたい気持ちを伝える。

「そりゃ、生まれつきの問題」

「ねえ、魔法陣描いてちょうだい。動かすだけならあたしでもできるじゃない」

「面倒くさい」

「ヴィヴィアン！」

責めるような声色だ。尚も続けてこようとするナタリアを、ヴィヴィアンは右手を弱弱しく持ち上げてさえぎる。

「面倒くさいっていうか、手を動かしてる気力がない」

「どうしたらいいのよ……」

「いいよお前は、部屋戻ってろ。しばらくしたら帰る」

「そんな血塗れの格好で外歩かせる訳にはいかないわよ！ 魔物が寄ってくるじゃないっ」

「あー……」

この格好で真夜中の街を歩いたら自殺行為だ。そんなことも考えられないぐらい、今の自分には余裕がないらしい。

「そっか。どっちにしろこれは脱がないとか」

肩の部分が裂けて血塗れになった外套を見下ろし、ヴィヴィアンはため息をついた。

この外套を脱ぐということは、止血帯になっているエストルのつる草を解かなければいけないということになる。解けた瞬間どうなるかなんて、想像に難くない。結局、ここで自分の肩を治癒してからでないとか家に帰れないということだ。

「面倒くせー……」

結論は出た。やるしかない。

なんだか苛立ちすら生まれてきた。過去に戻って、魔物の攻撃を避けそこなった自分を呪いたくなる。痛いし血が止まらないし、疲れきっていて魔法どころではないのに。

「ナタリア、俺のポケットの中から万年筆出して」

「わかったわ」

ナタリアはヴィヴィアンの外套の中に手を滑り込ませ、万年筆を捜した。いつもどこからペンを取り出すのか、ナタリアはちゃんと見ているのだろう。特に迷うこともなくペンを取り出し、ナタリアはそれをヴィヴィアンの右手に握らせる。

魔法陣を描く際、ヴィヴィアンはいつも指先に込めた魔力を使う。しかし、そこまで余裕がない場合は物理的なものに頼るしかない。万年筆のインクに魔力を伝わせれば、いつもの半分くらいの力で魔法陣が描けるだろう。

左肩の痛みに顔をしかめつつ、ヴィヴィアンはゆっくりと右手で魔法陣を描く。正方形の魔法陣にすることにして、直角を意識しながら一本ずつ正確に線を引いていく。

「呪文…… 面倒くさい」

「死んであたしに泣かれるのとどっちが面倒？」

「呪文書く方がマシ」

即答してみたが、今回のナタリアはそのまま黙って頷いただけだった。いつもなら『なんでそんなこと言うのよ馬鹿、あたしは面倒くさくなんてないじゃない』と突っかかってくるくせに。

細かく呪文を書き込んでいき、終わったところで大きくため息をついた。明日は店を休みにして、一日寝ていよう。

「はい。あとはお前の方で何とかして」

「任せて、絶対うまくいくわ」

ソファの背もたれに力なく体をあずけ、ヴィヴィアンは目を閉じた。ナタリアが書いてある呪文の中から、一番たいせつな一言だけを選び取って囁くのが聞こえた。教えてもないのにどうしてそんなことがわかったのだろう。

やがて暖かい光が左肩を包み込んだ。同時にしゅるしゅるとつる草がはずれ、ヴィヴィアンの足元でクルミのような種子に戻っていた。途端に激痛が左肩を襲う。思わず体を翻しそうになるが、ナタリアに押さえつけられた。

「だめよ！ 動いたら、治癒が終わらないわ」

「っ、離せ！ ああっ！」

しばらくもみあっていたが、やがてナタリアがヴィヴィアンを押さえつける腕から力を抜いた。その瞬間突き飛ばしてしまって、ヴィヴィアンは咄嗟に抜けた声を上げる。

「あ」

ナタリアは絨毯の敷かれた床に長い金髪を投げ打って倒れていた。思わず呼吸が止まる。心臓も止まるかと思った。しかし、すぐに彼女は起き上がってその場に座る。

「痛あ……」

絨毯で擦った膝が痛いようで、彼女は立膝になって膝を摩っている。ヴィヴィアンはようやく息をするのを思い出して、止めていた息を吐く。

「悪い、大丈夫か」

「もう、元気になったらたっぷりお礼してやるわ」

「ごめん。今の、本当に悪かった。痛かったとはいえ、突き飛ばすなんて」

いつもの軽口にも軽口で応じられる気分ではなかった。悪気がなかったとはいえ、ヴィヴィアンは怪我の治癒を手伝ってくれたナタリアを突き飛ばしてしまったのだ。今日の自分は色々と最低だと思う。

「なんでそんなに謝るのよ、これじゃあたしが怪我人いじめてるみたいじゃない。……傷はどうなの？」

「痛みが激しい。むしろ治る前より痛い」

「とりあえず脱ぎなさい、それ。怪我の程度がわからないわ」

大人しく従う。外套を脱いで、インナーのシャツも脱いで半裸になってみると、肩の傷口は抉れた痕をうっすらと残して塞がっていた。服を脱ぐ際に右手も血塗れになったが、とりあえず外套の血がついていないところでぞんざいに拭う。

「傷はふさがったわね！ 良かったわ」

「ああ、ほんとに。助かったよ」

かなり深い傷だったようだから、よく塞がったと思って感心した。ほっとすると同時に眩暈がきて、ヴィヴィアンはソファに倒れこむ。「ちよつと、ヴィヴィアン！」

うつぶせに倒れこむヴィヴィアンをナタリアが仰向かせる。彼女の長い金髪が首筋や頬に当たってくすぐったいが、抵抗する気力もなかった。真っ青な顔で覗き込んでくるナタリアに、そんなに心配しなくても思いながら目を閉じる。

「自然治癒力を、無理矢理強くする魔法なんだ。……さすがに疲れた。たぶん、回復力を年単位で早めたから」

「もう、先に言いなさいよ馬鹿！ いきなり倒れるなんてっ」

「その外套、もし迷惑じゃなかったら洗ってくれると助かる」

「当たり前よ、こんな血塗れのまま縫わないわ。一日借りるわね」
ソファの隅に綺麗に畳んでおいてあったユキノの着物と一緒に、ナタリアはヴィヴィアンの外套とシャツも畳んで床に置いた。

「ユキノ、大丈夫？」

「ん、大丈夫」

「ふたりとも、流石にその格好のまま放置ってわけにもいかないわね。部屋に行って服取ってくるから、その場から動いちゃだめよ」

「うごけねえよ」

ナタリアは駆け足で階段を上っていったが、半分くらい上ったところで肩越しにこちらを振り返った。

「ねえ、ユキノの分、あんたの服貸してあげていい？ サイズがちようどいいの、他にないかもしれないから」

頷きながら、少し妙に思ってたナタリアを呼び止める。

「いいけど、その前に何で俺の服がお前んちにあるんだよ」

「何年か前に依頼で庭仕事してくれたとき、汚れたからお父さんの服を着て帰ったことあったでしょ。あのときのシャツが一枚。それから、あたしが作った紳士物の服がいくつか」

「あー、自作」

それがどうしてヴィヴィアンの服なのか。おそらく誕生日プレゼントで貰った服の試作なのだろう。去年の誕生日には、上下セットで服を貰ったのだ。あれには非常に驚いた。

「寝ないでよ。お願い」

「解ってる、寝たら起きなくなる」

ナタリアが駆け足で階段を上っていくのを見ながら、ヴィヴィアンはため息をついた。もう今夜は他の依頼を片付けるところではない。

しばらく激痛に目を閉じていると、階段を降りる足音がした。そして、悲鳴を飲み込むような声。

「ヴィヴィアン！ ユキノ！」

戻ってきたのはナタリアではなくロジェらしい。

「……おう」

「死んでるかと思った、よかった、ちゃんと生きてるじゃん！ そこに血塗れの服あるし、お前血塗れだから」

確かに、傷は塞がったが左半身に乾きかけた血がこびりついている。特に左手が血塗れで、肩から伝い落ちた血がまだ滴っていた。

「そういえばお前、ナタリアと喧嘩してたな」

血を適当に外套で拭いて、ヴィヴィアンはロジェに尋ねる。ロジェは一瞬固まったあと、ヴィヴィアンからさっと目をそらした。

「……今も気まずい」

「良いだろ、俺もユキノも生きてたんだから」

「そうなんだけど、向こうがまだ怒ってるから。でもさ、しょうがないだろ？ あんなでつけー魔物が襲ってきて、しかもヴィヴィアンがその扉に鍵かけたりしたから。絶対あっち行かせちゃ駄目だと思って、俺必死で止めたんだよ？ でもナタリアは、ヴィヴィアンのところに行きたいって言ってきかなくて」

「それであんな会話か」

ロジェもナタリアも必死だったのだろう。特にロジェは使命感が強い男だから、やれといわれて引き受けたことは絶対にやりとげようとする。

「理解できるよ、ナタリアの気持ちだって。でも、俺らがいたところで何も力になれないって、お互い解ってるはずなのに。女って原理がわかってても、どういうわけか納得しようとしなから解んない。原理がおかしい」

「ははは」

思わず軽く笑い声を立てる。

「笑い事じゃないし。どう納得させるかめっちゃめっちゃ考えたんだぞ」
ロジェはちらりと階段の方を見る。ナタリアとローザが気になるのだろうか。

「お前はよくやってくれたよ、止めてくれなかったらあいつも巻き添え食らってた。正直、自分のことで精一杯で守ってやれなかっただろうから」

重くてなかなか持ち上がらない腕を持ち上げ、右手でロジェの灰色の髪をぐしゃぐしゃ撫でてやった。

「……そっか。よかった、俺、ついてきても邪魔なだけだったかな
って来る時から思ってたから」

「いや、助かったよマジで。ありがとう」

そう言っでやるとロジェはほっとしたように頷いた。そして、ソ
ファを半分使っで寝転がっているヴィヴィアンと、隅の方でじっ
としているユキノの間辺りに座る。

「家まで送るよ」

「助かる。ユキノもいるから」

「任せとけ！ マグネ弾の威力はすさまじいぞ」

黒衣の袖をまくっで見せるロジェ。さっそく帰る気であるのか、
ひらりとソファから立ち上がっでウエストポーチの位置を直したり
している。しかし、ヴィヴィアンはさすがに半裸で帰るわけにはい
かない。

「ローザのところ、戻らなくて良いのか」

「……ナタリアと気まずいということはローザとも気まずい。解る
だろ、この図式」

「あー」

納得すると、今まで黙っでいたユキノが小さく笑い声を漏らした。

「なんだよユキノ！」

「ローザも気まずいみたいだよ、ロジェがそんなこというから」

がばっと階段を振り仰ぐロジェの視線の先に、もの言いたげにこ
ちらを見下ろしているローザがいた。きつとユキノやヴィヴィアン
に駆け寄りたかつたのだろうが、ロジェがこんな感じなのだ。ナイ
ーブなローザは、ロジェに気まずいと思われていることで近寄りづ
らくなったのだろう。

「あ、あの、ローザ？」

ロジェが慌てて声をかけるが、ローザはどう反応して良いか解ら
ないようで救いを求めるようにヴィヴィアンの方を向いた。

「ナタリアは？」

訊ねると、ローザは背後のほうを指差す。

「すぐ来るよ。今着替えてて、それから、ユキノさんに合いそうな服探してるの」

少し青ざめた顔色なのは、ナタリアの白い服にべっとりと付着したヴィヴィアンの鮮血を見てしまったからに違いない。申し訳ないと思った。

「そういえば、西の服は初めてだ」

ユキノはそう言って、相変わらず血色の良くない頬に少し笑みを浮かべた。ローザの言うとおり、本当にすぐ廊下をばたばた走る足音が聞こえて、階段の前にナタリアが立つ。

「ヴィヴィアン！ 生きてるわよね！」

「でけえ声出すな、頭に響く」

呟いてみたが二階のナタリアに聞こえるはずもなく、彼女は再び階段降りの妙技を披露する。ローザが彼女に続いて、慌てて階段を降りてくる。ナタリアは真っ白だった服を、黒に近い臙脂色のシャツに替えていた。

「はい、これで血を拭いて」

ナタリアに濡らしたタオルを渡され、ヴィヴィアンはそれを適当に肩の傷に乗っけながらため息をついた。

「面倒くさい」

「解った、あたしがやるわ」

「あー、それもやだ。いい、触んな。折角着替えたのにまた汚れるだろ」

何が悲しくて、友達の女の子にそんな介護じみたことをさせなければならぬのか。体が重い、ヴィヴィアンは肩の傷や腕を伝う血を少しずつ拭いていた。ローザがヴィヴィアンの血塗れの半身を見て、ふらりとよろめく。

「苦手だろこういうの、あんまり見るなよ」

「でも、私、何か…… 何か、できないかなって」

青ざめた顔でそんなことを言われてしまったのは、邪険にもできない。ヴィヴィアンは少し考えてから、ローザの方をちらりと見やる。

「それじゃ、服取って。どっちが俺の？」

ナタリアがそこらの床に放置したヴィヴィアンとユキノの着替えを指差して言えば、ローザはそれを広げて大きさを見て、大きいほうを取って持ってきた。受け取ってそれを着る。

第三十四話　そして帰路へと

ロジエはヴィヴィアンの近くで気まずそうにおろおろしていたが、ナタリアに二人分の血に汚れた服を押し付けられて固まる。

「あ、えっと、ナタリア、さっきは……」

「それ、お風呂場に持っていって。出来たら水につけておいてちょうだい。たぶんもう汚れは取れないけど、何もしないよりマシですよ？」

「おう、とりあえず水に入れるんだな？」

「それとも、新開発の洗剤とか持っていたりするのかしら」

「開発段階なら。使ってみる？」

「そうね、それじゃお願い」

ナタリアは全くいつもどおりの対応でロジエに話しかけ、ロジエも最初こそいくらかぎこちなかったが、いつもどおりに応じた。ナタリアとロジエは時々こうして喧嘩になったりなりかけたりするが、いつもこうして自然にいつもどおりに戻っている。

少しすっきりした様子で、ナタリアはユキノの正面に立膝で座った。

「ユキノ、それ何ていうのかしら。あんたもその黒い服、脱いで」

「背中紐になってるんだ。ごめん、解いて。体動かすの辛い」

「わかったわ、ちょっと前かがみになってちょうだい」

てきぱきとユキノの腹掛けを外し、ナタリアはユキノにも濡れタオルを渡した。

「ありがとう」

「……あたしがやろうか？」

「いい。汚れるよ、手」

ユキノは血を拭い、真っ赤にそまったタオルを見て小さくため息をつく。

「ごめんな、色々ありがとう、助かるよ」

「ううん、そんなこと言わないで。あんたたち、全然自分のこと考えないんだもの。いつもあたしたちのために無茶してくれてありがたい、ヴィヴィアン。ユキノも、昨日あったばかりなのに」

ナタリアがそう言って、ユキノとヴィヴィアンの方をそれぞれ見て笑みを投げかける。ヴィヴィアンは疲れきっていたので、反応は少し口角を上げる程度に留まった。

「昨日あったばかりの俺に、こんなに優しくしてくれるだろ。俺はそれが素直に嬉しいよ」

「ありがと！ きつとあんたとは一生いい友達でいられるわ」

嬉しそうに笑いながら、ナタリアはユキノにシャツを着せる。色は濃い臙脂で、袖が七分丈になっているものだ。何年前か前、まだ身長がここまで高くなかった頃にヴィヴィアンが好んで着ていた服である。

「はい、袖通して」

ぱりっとしたエンカンタリア流のシャツ（ユキノの体型には微妙に合わず、ややゆったりとしている）に、イリナギのタイトなズボン。ちよつとアンバランスな格好かもしれないが、ユキノはとりあえず着替えを終えた。ヴィヴィアンもローザに取ってもらった服を着て、ソファに浅く腰掛けた。

「悪いな、血まみれだ」

凄惨たる光景にぞっとした。今座っているアイボリーのソファには、ユキノと自分が寝たり座ったりしていたところにべったりとその痕跡がついていたし、居間の絨毯は教室の入り口からソファまでの間が酷いことになっている。

「いいのよ、こんなこと気にしなくて」

ナタリアはそういうが、絶対にこれはまずい。これは明日になってアイアランド夫人が帰ってきたとき、間違はなく気を失うレベルだとヴィヴィアンは思う。今は頑張って目を向けないようにしているローザが、ふと視界にこの光景を入れてしまったら同じようなことになるのは明白だ。

「明日復活したら、早めに染み消しにくるから」

「なんなら泊まっていけばいいじゃない、帰るの大変でしょう？」

「それは遠慮しとく。これ以上世話になりたくないし、たぶんこのまま家からずっと離れてたら施錠の効果が薄くなる」

そんな会話をしているところに、ロジェとウィルフレッドがやってくる。自分の娘に猛烈なアタックをしかけているロジェに対して、ウィルフレッドの目が厳しいかというところでもない。

むしろウィルフレッドは、発明家としてのロジェにはいたく関心を持っている。ロジェもローザに対する感情を、上手にウィルフレッドに伝えていられるので、この二人は意外と仲が良いのが現状だ。

「ヴィヴィアン！ ウィル先生がフローズンドリンクつくってくれたよ！」

駆け足で寄ってくるロジェは、大きめのグラスを手を持っている。

「ありがとうございます」

ウィルフレッドに向かっていうと、彼はにこりと微笑んだ。微笑んだ時に目じりや口許に寄る皺は、最近になって少し増えた気がする。

「君はリンゴが好きだったね？ シャーベットにしてあるから、溶けないうちに飲みなさい」

ロジェに渡されたグラスには、すり下ろしたリンゴと砕けた氷の欠片が入っていた。ヴィヴィアンはそれを一口あおり、冷たい液体が喉を流れてく感触に目を閉じた。やはり冷たい飲み物は良い。しかし、冷たいものを一気に飲み込んだおかげで頭が痛くなった。

「ユキノ、君は少し鉄分を取ったほうがいい。クイリの実には昔から貧血予防の効果があるといわれているんだ、飲みなさい」

「すみません、ありがとうございます」

思わず頭に手をやって無言で悶えていたヴィヴィアンだが、そんなやりとりを聞いてユキノを振り返る。ユキノは恐る恐るといった様子でグラスに口をつけ、それから少しずつ中に入った飲み物を飲

み始めた。クイリの実は毒々しい赤なので、飲むのを躊躇う気持ち
はよくわかる。

「明日の朝一番でそっちに行くわ。ご飯つくってあげる」

意気込むナタリアだが、ヴィヴィアンは頷こうとしてやめた。パ
ン屋の依頼を思い出したのだ。

「それなら、アルラッド・ベーカリーに行ってくれ。今日の依頼料
として二人分の朝食つけてもらったから。ユキノに取りに行かそう
と思ってたけど、無理そうだし」

「一晩寝れば治るよ」

そう口を挟んでくるユキノだが、無理をされて体調不良が長引い
たらヴィヴィアンの生活（主に炊事）に支障が出る。教えなければ
いけないこともたくさんあるのだし、休めるときに休んでおくのが
一番だ。

「バカ、安静にしとけ」

叱ればしよげたように目を伏せ、ユキノは無言でグラスの中身を
飲む。ナタリアがそんなユキノの隣に座り、ぽんぽんと彼の頭をな
でながらしょうがないなという風に微笑む。

「わかったわ、パン屋さんね。ユキノ、ヴィヴィアンはあんたのこ
と心配してるのよ。大事な弟子なんだもの」

「何もできないのって歯がゆいからさ」

「今あんたが師匠のためにできることは、ゆっくり休んで元気にな
ることよ」

顔を上げるユキノに、ナタリアはとびきりの笑顔で応じる。ユキ
ノも頷いて、嬉しそうに笑った。

「ナタリア、悪いな。助かったよ、色々」

彼女がいてくれたおかげで本当に色々助かった。こうして服を着
替えさせてもらったり、魔法陣を発動させるのを手伝ってもらった
りしたおかげで、最悪のコンディションだがなんとか生きているの
だ。

「ヴィヴィアン、お願いがあるんだけど」

神妙に切り出され、何を言われるのかと身構える。

「多少無茶なことぐらいただったら聞く。何だ？ 傷が治ったら家を改装して欲しいとか？」

「違うわ。今年のパーティー、絶対あたしと踊って」

「……そんなことでいいのか」

ヴィヴィアンの方はとくにナタリアと踊るつもりでいたのだが、そういえばまだ今年は誘われていなかった。

これで先約ができたから、ご令嬢とのダンスは無しになる。依頼はいつもおいしいが、甘えた声でねだられたり、過度にくっつかれたりして疲れる。それがなくなると結構気が楽だ。相手がナタリアなら、甘えられてもくっつかれても慣れているので全く平気である。

「そんなことって！ 去年すっぱかしたじゃない！」

「あー、悪い。あれは本当に悪かった」

「服、あたしを選んでいいかしら」

「礼装一着持ってるけど」

「本当？ じゃ、当日それ持ってここに来て！ あ、その前に練習しましょうよ、あんた時々ステップがおかしいから」

「了解。あ、ユキノなんだけど」

最後まで言わなくてもナタリアはヴィヴィアンが言いたいことを理解してくれたようだ。異邦人であるユキノがこの国のダンスパーティーの伝統を知らないだろうということは彼女にも予想がついただろうし、第一、ナタリアの場合はヴィヴィアンを誘った時点でユキノもどうするか考えていたに違いなかった。

ナタリアは何かとヴィヴィアンにくっつきたがるが、かといって他のメンバーそっちのけでヴィヴィアンにだけくっついていようなことはしない。

「一昨年あんたに着せたの、丁度いいんじゃないかしら。服は貸せるわ。相手は…… ローザ、あんたユキノと踊ったら？」

「あ、うん」

ローザは微笑んで頷いた。ユキノも蒼白な顔面に頼りない笑みを浮かべる。

「おい！ 待て！ ちょっと待てよ！」

ふつうに会話の流れでパートナーが決定しかけていたが、ロジェが慌ててストップをかけた。

「何よ。あんたまだ申し込んでなかったの？」

「誰かさんが俺に門前払い食らわすから」

無然としてロジェはナタリアにそう言った。そうだったかしらととぼけるナタリアを尻目にローザの前に立つと、彼は真剣な表情で彼女を見つめる。

「ローザ。ユキノじゃなくて俺と踊ってくれませんか」

「えっ」

真剣な誘いにローザは固まる。ナタリアがにやにやしながらこちらを見た。ヴィヴィアンも激痛にたえながら、彼女に向かってにやりと笑ってみせる。

「無理には言わない。ローザが嫌なら諦めるし」

真摯に迫るロジェだが、ローザはどんどん後ずさりしていく。ロジェが悲しげな表情でローザとの間合いを詰めると、いよいよローザの表情が困惑し、頬が赤く染まった。

「あの、えっと…… 私、あんまり踊るの得意じゃないし、ロジェなら他の人、すぐ見つかるよ。貴族のお嬢さまとか」

ローザもロジェを扱いにくいのだろう。気恥ずかしいのかもしれないし、本当に困り果てているのかもしれない。きっぱり断らないのはローザの優しさ故なのか、本心では満更でもないと思っているのか。その判別は残念ながらヴィヴィアンにはつかなかった。

「ダンスなら俺がリードするから。一応これでも上流階級だし、ローザに恥ずかしい思いは絶対させないよ。ローザは他の男でもいいかもしれないけど、俺はローザじゃないと嫌なんだ。ローザ、お願い。俺にして」

「……おねがいします」

呆れに近い思いでヴィヴィアンはロジェを見ていた。こうまで言われてしまったのはローザも承諾するより他ないだろう。

気弱なローザを利用していてもとれる強引な迫り方だが、誘われた本人が困ったようにナタリアや自分に助けを求めてこないところを見ると、やはり満更でもなかったのか。ヴィヴィアンは友人の恋の進展に、少しだけ期待する。ロジェの一生懸命な恋心が、いつかローザにもわかってもらえればいいと少しだけ思う。

「やったああ！ やったよヴィヴィアン、俺、ちゃんとローザ誘えた！」

「あーはいはい、煩い怪我に響く」

応援しようと思っていたことを撤回してやろうかと思いつながら、ヴィヴィアンは目を閉じて肩口を押さえる。押さえると余計痛んだのですぐ手を離し、ため息をついた。

「去年もその前も断られっぱなしだったもんな、ナタリアに！ やつと誘えた！」

「あら、ローザには先約があったもの」

ロジェは嬉しそうに笑い、ウィルフレッドにも挨拶している。

「ローザのことは、安心して俺に任せてください。絶対離しませんから」

「それじゃ、頼んだよ。だけど君にあげるとはまだ言っていない。調子に乗り過ぎないように。変なことしたら黙っちゃいないよ」

「はい、先生！ 安心してください、ローザが嫌がることは絶対しないんで」

ロジェのはじけるような笑顔に、ウィルフレッドも少し笑う。ヴィヴィアンはグラスの底に残った氷を喉へと流し込むと、重い腰を上げた。

「そろそろ帰ります」

急に立ち上がったことでふらりとよろめいた体を支えたのは、一番近くにいたナタリアだった。しばらくの間目を閉じて、めまいをやりすごす。

「送っていくわ」

ヴィヴィアンが落ち着いたところを見計らい、ナタリアが心配そうにそう言った。

「お前に送らせるのは嫌。危ない。ロジェもいるし平気だ」

即答で断り、彼女の肩を掴んで自分から離れさせた。ロジェがため息をつき、首を横に振る。ナタリアは引き離されてもなお真剣な顔でじっとヴィヴィアンを見上げているから、ヴィヴィアンは目をそらしてため息をつく。

「嫌っていうなよ、ヴィヴィアン。別に危なくないよ、人が多いほうが良いんだしさ。マグネ弾もあるし、いざとなったら俺がなんとかする。ナタリアはお前から離れたくないんだよ」

そんなことを言われても、部屋の隅で縮こまっていたロジェを思い出してヴィヴィアンは承諾を渋る。

「お前に何とかできるのか？」

「できる！　だって発明は他にもいくつかあるし。声だって武器になるぐらいだぞ」

ナタリアはできたらここに置いていきたかったが、このままいくら渋り続けてもついてくるという結論は変わらないだろう。だってら、これ以上深夜にならないうちに帰らなければ。時計の短針はすでに十二の位置を越えていた。

「わかった。ローザは置いていけよ。ロジェ、お前は俺んちまできたら、ナタリアをちゃんとここまで送れ」

「言われなくても」

ロジェは笑顔で頷き、ローザの方を振り返る。ローザは心配そうにナタリアとヴィヴィアンを見ていたが、ロジェの視線に気づいて俯く。

「お父さん、ローザを頼んだわよ」

「お前は止めても無駄だろうからな。ローザ、二人でナタリアとロジェを待ってしよう」

ウィルフレッドはローザの頭を優しく撫で、説得するようにその

顔を覗き込む。

「……うん」

ローザは渋々といった様子で頷いた。本当はついてきたかったのかもしれないが、安全のためには仕方ない。黒衣のポケットに手を突っ込みながら、ロジェはローザの方を向き直ってしばしの別れを告げる。

「すぐ帰ってくるからな。大丈夫だから」

「怪我なんか絶対しないでね。ナタリアも、ロジェも」

ローザはロジェを見上げ、潤んだ目を伏せる。ロジェが一瞬固まり、それから嬉しそうにローザの両肩に手を添える。

「よっしゃ！ ローザにそんなこと言われたら絶対怪我できねえし！ ローザのためだけに無傷で帰ってくるからな。ローザ、愛してる！」

そのまま抱きしめそうな勢いのロジェをナタリアが引き剥がし、戸口の方まで引っ張っていった。ローザは真っ赤になった頬を覆って立ちすくみ、それから慌てたようにロジェの去っていった方向に背を向ける。ロジェが見たらきつと『可愛い！』と連発する仕草だ。ヴィヴィアンは背後を振り返り、ソファに深く座ったままのユキノに手を貸す。

「ユキノ、平気か」

「うん。ごちそうさまでした、先生」

ヴィヴィアンの手を借りて体を起こし、ユキノは持っていたグラスをウィルフレッドに渡した。ウィルフレッドは頷き、グラスを適当にその辺りに置いてユキノの肩を支える。

「気をつけて帰るんだよ。ナタリアがわがままを言って悪かったね、ヴィヴィアン。後で私が迎えに行くよ」

「家の中にいてください。ロジェが責任持って送りますから」

引き下がらない彼に何度も大丈夫だと言って、ヴィヴィアンはユキノを連れて玄関を出た。戸口まで送ってきてくれたローザとウィルフレッドに別れを告げると、待っていたロジェとナタリアに続い

て家路につく。

第三十五話 帰り道

夜道は静まり返っていて、虫の声すらしなかった。ロジェに肩を借りたユキノがゆっくりと前を歩いているので、ヴィヴィアンもゆっくりと歩きながら肩を気にしていた。塞がってはいるが治ってはいない状態で、血こそ出ないものの激痛は治まらない。ナタリアが心配そうにヴィヴィアンの横顔を見上げ、肩に手を差し伸べようとしてやめ、俯いて隣を歩く。

「本当に何も出来ないのね、あたし」

「だから、良いってそんなの。何か出来る奴のほうが稀なんだし」

「でも、痛がってるのに」

ナタリアはまた泣きそうな目をしてヴィヴィアンを見上げる。いつもそうだが、彼女の若草色をした澄んだ瞳にまっすぐ見つめられると、なんだか気まずくなる。ヴィヴィアンは小さくため息をつく。

「お前色んな事が大げさ。腕もぎ取れたわけでもないのに」

「大げさなんかじゃないわ。あたしが同じような怪我したら、あんなだってきつと心配するでしょ」

そんな現場に直面したら、まず彼女を安全なところに避難させるだろうから怪我はしないだろうと思う。それでも怪我をしたら、悪態をつきつつも真っ先に治癒してやるに違いない。ナタリアではなくローザやロジェが怪我をしたとしてもそうするだろうし、現にユキノがやられた時のヴィヴィアンの反応は、自分で思い返して呆れなくなるぐらい過保護なものだった。エストルがやられたら放っておくかもしれないが、それは相手の強さを信頼しているからだ。

「即なんとかするから心配とかしない」

「……あたしにはそれができないの」

「あー」

もしも魔法をもたないただの人間だったら、ヴィヴィアンはどうするだろう。歯がゆい思いをするだろうし、大事な人たちが傷つい

ている時に何も出来ない自分を呪うだろう。

夜の闇に吸い込まれて消える足音を聞きながら、ヴィヴィアンとナタリアはしばらく無言になった。

「あー、のさ。ヴィヴィアン」

しばらくすると、ロジェが話しかけづらそうに軽くこちらを振り返り、声をかけてきた。視線だけで応じると、ロジェは変色した灰色の髪をがしがし掻きながら前を向き直る。

「やっぱ何でもない。あ、あとさ、この道暗いよな」

彼が言おうとしていたことなんてすぐ解った。どうせまた、ヴィヴィアンとナタリアが恋人同士のようなと言いたかったのだろう。言葉を濁す様子からして、そういう話題だということは読み取れる。

「一個かせ、そのマグネ弾」

あえて後半の言葉にだけ反応し、ロジェに手を伸ばす。ロジェは途端に明るい笑顔を浮かべると、先ほどの話しかけづらそうな様子が嘘のように身体ごとこちらを振り返る。

「よっしゃ！ ユキノ、しばらく目え瞑ってろよ！ はい、マグネ弾」

ロジェとユキノが再び正面を向いたところを確認すると、ヴィヴィアンはロジェから受け取ったマグネ弾の導火線に魔法で火をつけた。ほんの一瞬火花を起こすだけでも眩暈がひどくなり、本格的に自分が衰弱しているのだと再認識する。

しかし眩暈がひどいからといってそのまま持っているわけにもいかない。ヴィヴィアンは導火線に火をつけたマグネ弾を、上に放り投げる。そして呆けたようにその仕草を眺めていたナタリアの目を、腕で抱きすくめるようにして覆い隠して自分も目を閉じた。その一連の動作が終わるのとほとんど同時に、軽い破裂音がして頭上で閃光が炸裂する。

まぶたの裏にまで焼きつく白い光に感嘆しながら、ヴィヴィアンはナタリアの目を覆っていた腕を外す。目が眩んでいたので表情は読み取れなかったが、ナタリアはいきなりヴィヴィアンに引き寄せ

られたことに驚いたのか固まっていた。

「どう？　すごくない？」

ロジェは楽しげに振り返って飛び跳ねようとしたが、ユキノを支えなおしてその場に留まる。ヴィヴィアンは辺りを見回し、何の危険もないことを確認するとロジェに親指を立ててみせる。

「完璧だ。魔物の気配がなくなった」

その声に反応するように、ナタリアがようやく動きを取り戻す。大きな瞳を何度かしばたかせ深く息を吐く姿に、ナタリアがもしかしたら炸裂の瞬間を怖がっていたのかもしれないという考えに思い至る。

「びっくりしたわ！　本当に明るいのね、その爆弾。ヴィヴィアン、ガードありがと」

「どういたしまして。これを直視したら冗談抜きで目が潰れる」

ヴィヴィアンとナタリアの会話を聞いてロジェはにやにや笑いながら、ユキノの肩を支えたまま飛び跳ねるようなステップで前に進む。

「はっはっは！　やったね。発明王ロジェ様と呼んでくれたまえ」

本当にわかりやすい奴だと心から思う。揺られるユキノが少し青ざめていたから、静止させるために視線で訴える。

「ユキノが死ぬぞお前」

「あっ！　ごめんユキノ、大丈夫？」

「うえ。なんか酔った……」

「ぎゃああ！　ごめん！　本当ごめん！」

こんなに騒がしかったら魔物も寄り付かないかもしれない。ヴィヴィアンはそう思って笑った。声を上げて笑うと肩の傷が痛んだが、それでも笑いが止まらない。

「ちょっと、ヴィヴィアン？」

「ごめ、なんか、ツボ……　ロジェ、ガキみたい」

神経が磨耗しすぎておかしいな感情回路が組み立てられてしまったのかもしれない。何が可笑しいわけでもないのに笑いが止まらず、

ヴィヴィアンはナタリアの肩にもたれて歩きながらひとしきり笑う。
「あんた笑ってる時の方がいいわよ。いつもむっつりしてるじゃない」

「やめろよ人をスケベみたいに」

「だってそうじゃない、あんたの周りってロジェみたいな一途かエ
ストルミみたいなプレイボーイじゃないでしょ？ あとは普通の男
の子だけ。なのにどうしてあんたは女の子に興味ないのよ。あるの
に隠してるならむっつりじゃない。あんた十八歳の健全な男の子な
んだから、もうちょっとがつつきなさいよ。折角顔も体格も申し分
ないんだから、モテようと思えばエストルだって目指せるわ」

ちよっと待つて欲しい。それは十八歳の健全な女の子が口にすべ
きセリフではない。ヴィヴィアンはこめかみに痛みを感じ、無意識
にナタリアの肩に回していない方の左手をそこへやりかけて呻いた。
「誰が目指すかよあんな種馬！ お前やっぱり変態なんじゃないの
か？」

「誰が変態よバカ！ あたしはあんたのこと心配してるの！ この
モテ期を逃しちゃったら、一生ひとりかもしれないじゃない！」

いや、その前に今はモテ期なのだろうか。コモディンの利用者は
半分以上男性だし、若い女の子は一握りだ。色々気を遣わなけれ
ばいけないのが面倒くさくて、彼女はずいぶん長い間いない。

「一生ひとりの何がいけないんだ、理由を列挙してみろよ」

「はあっ！？ 理由、あんたそれもわからないの？ あんたひとり
じゃ何にもできないじゃないっ！ 炊事洗濯掃除整頓、裁縫も庭仕
事も買い物も、あんた何ひとつまともにできないでしょ！ このま
まずっとユキノにやらせるつもり？ ユキノだっていずれは、母国
に帰って村を護らなきゃならない、じゃない……」

最後のほうは尻すぼまりの勢いで、ナタリアは前を歩くユキノの
方を見た。籠っていた力が抜け、行き場のない両手を胸の前で重ね
るようにしてナタリアは俯く。自分で言ってしまった言葉に自分で
ダメージを受けたようだ。

「そうよ、ユキノはイリナギに帰ってしまうんだわ」

「うん、そうだよ。いつかはここを出ないと」

ナタリアを振り返ることなく、落ち着いた声でユキノは言った。

「……ユキノ、なるべく成長しないでね。できるだけ長く一緒にいたいわ」

「あはは、それはどうだろう」

「折角仲良くなれたんじゃない！」

「一日や二日で完成した魔道士にはなれないよ。大丈夫、まだずっとここににいるから」

「よかったわ！ ヴィヴィアン、ユキノを大事にしてあげてね」

どうしてそこで自分に話を振るのかと思いながら、ヴィヴィアンはとりあえず頷く。

「はいはい」

「絶対よ。ここからイリナギまで、どう軽く見積もったとしても五ヶ月はかかるわ。そんな長い旅をしてここにきてくれたんじゃない」

「……そんな遠かったっけ」

「お父さんに聞いたわ」

教師という職業上、地理に強いウィルフレッドの言うことなら間違いないだろう。確認を取るようにユキノを見ると、ユキノはちらりと振り返って邪気のない笑みを口許に浮かべる。

「びっくりしたでしょ」

「実際どれぐらいかかったんだ？」

というロジェの問いに、ユキノは前を向き直りながら呟くように告げる。

「八ヶ月」

喉の辺りに何か張り付くような感覚を覚えた。その八ヶ月間の苦労も努力も我慢もすべて、冷酷に跳ね除けた自分を呪いたくなる。こんな感情が芽生えたということは、いよいよ自分がこの弟子を信頼し始めてしまった証拠だろう。

出会ってまだ数日のこの弟子が、どこまでも自分に尽くして身を

削り戦う男であることをヴィヴィアンは知ってしまった。誰よりも人の痛みに敏感で、心優しい弟子が、これからどう育っていくかは自分次第なのだ。

だから師匠になんてなりたくなかった。自分がこの弟子の持っている輝かんばかりの素質を、一つ残らず潰してしまいう可能性だってあるのに。

そうならなかったために、精一杯できるだけのことはしよう。ヴィヴィアンはそう固く胸に誓う。血塗れになっても身を引き裂かれてもヴィヴィアンを守るために戦ってくれたこの男に、最低限の忠義は尽くしたい。

「だからね。最初にヴィヴィアンに会えたときは、本当に嬉しくって腰抜けるかと思ったんだけど案外そうでもなかった。だって倒れてたもんね俺」

思わず笑い合うユキノとヴィヴィアンだったが、ナタリアが彼の言葉に反応してヴィヴィアンの袖を引っ張る。

「ヴィヴィアン？ あんたユキノに何したのよ」

「術かけて体動かなくした」

「ちょっと！」

「だってこいつ、未来の師匠の性別も知らなかったんだぞ」

一瞬、四人の間に沈黙が流れた。次いでロジェがげらげら笑い始める。

「あはは！ そっか！ 性別間違えたのか！ ユキノ、そりゃ駄目だ」

「だってほんと、赤毛で綺麗な緑の目をしてるなんて言われたら女の子しか想像できなかったんだよ！ それに、弟子入りの話を持ちかけられたときは色々混乱してて、長老の話なんかまともに聞いてなかったし。とりあえず友達にどう別れを切り出そうか、そればかり考えてて。俺がいなくなったたら家事は弟の中の誰が担当するんだろうとか、もう熊汁食わせてやることもできなくなるのかなとか」

蹴りを食らわせてやろうかと思ったが、相手が真っ青な顔色をし

た重症患者であることを思い出してやめた。ロジエは頷きながら、『帰ってくるなら別れなんて要らないじゃん、そこまで強迫観念を持った原理がわからない』などとユキノに疑問符を投げかける。

「だってまず、エンカンタリアに着けるかどうかともわからないだろ。船なんか乗ったことなかったし。港町ではよく商船が嵐に飲まれて沈没した話を聞くし……もしかしたら、一生の別れになるかもしれないって、そう思ったら」

旅客船などという豪華なものには乗れず、商船で手伝いをしながら港まで運んでもらうことになったというユキノにとっては絶望的なニュースだっただろう。もしかしたら魔道士になる以前の問題で、イリナギを出てそのまま行方知れずになった可能性すらある。

本当に、死と隣り合わせの危険な旅をしてきたのだろう。旅費も十分に持たず、魔法も使えず、気の遠くなるような道のりをひたすら歩いて彼はここにやってきた。ただひたすら、ヴィヴィアンに弟子入りをするためだけに。

「よく生きてたな」

色々迷った挙句、発することができたのはこの一言だけだった。

ユキノは前を向いたまま、小さく笑い声を上げた。

「幸運なんだよ、俺。生まれたときからずっと、色んなことに恵まれてる。優しくて真っ直ぐな両親がいて、二人がいなくなってから暖かい家族に迎え入れてもらって。村のみんなは冷たいけど、それでも俺を追い出さずにいてくれたから。ちゃんと恩返ししなくちゃな」

「それじゃ、早く安否知らせてやらないとな！ 待っててくれる人がいるんだろ？ 八ヶ月も連絡なかったら、今頃心配してるよ。毎日お祈りしてるかも」

ロジエには割と信心深いところがある。無神論者のエストルに馬鹿にされてもめげず、自分の発明が成功すると教会に祈りを捧げに行ったりする。清い心を持つのはいいことだと思うが、その理知的な頭脳が神の存在をどう論理的に紐解いたのか気になるところだ。

「でも俺、どうやって生きてるって伝えたらいいかわかんない。国外への手紙の書き方なんか知らないし、向こうもそうだろうから返事返ってこないかも」

「魔法で飛ばせばいいだろ」

「あ。そっか」

紙飛行機を思い出したのだろう。ユキノの目が輝いた。

第三十六話 帰宅

そうしてすぐユキノから質問がくるだろうと構えていれば、先にナタリアが嬉しそうにヴィヴィアンの背中を叩く。

「ヴィヴィアン、描き方教えてあげなさいよ！」

「そのつもり。あと、お前の部屋に描いてある魔法陣。あれも描けば完璧だろ？」

「そうよ！ 声まで伝わるじゃない！ 魔法って本当にすばらしいわ」

楽しそうにはしゃぐナタリアだが、ロジェは『いつか魔法じゃなくても声が伝わる道具を作ってやる』とかなんとか、ぶつくさ言っている。

「声？」

不思議そうに反復するユキノに、一昨日の…… と言いかけてやめた。そういえばあのときのユキノは衰弱していて、半分意識がなかったのだった。

「お前朦朧としてたから覚えてないだろ。ナタリアとローザの部屋には魔法陣が描いてあって、俺が同じ魔法陣をどっかにかけばそこと空間が繋がるようになってるんだ。声とか振動とか、匂いとかそういう空間的な要素は全部伝わる」

「凄い！ それじゃ、姿は見えないけどその他は全部解るって感じだ！ 懐かしいな。線香やお茶の匂いなんてしばらく嗅いでない」

とたんに嬉しそうに笑うユキノ。声にはいつもほどの元気はないが、あの青白い状態でこんなに声を上げられるのだから相当機嫌がいいのだろう。やはり故郷の事が気にかかって仕方なかったのかも知らない。

「ちなみにエストルはどこにいても俺のと同じ魔法陣描けるから、全く連絡が取れなくなるっていう心配はない。どこにいても何しても、本当に必要で呼ばれてるときはお互い魔力で解るし」

「だから今日も来てくれたのかな」

ユキノの感心したような呟きに、ヴィヴィアンは頷いた。

「おそらく。無意識に助けを求めてたんだろうな、俺」

「その魔法陣、ロジェんちにはないの？」

「あった」

神妙な声色でロジェは言い、肩をすくめる。

「過去形？」

「こいつ、実験で何度か小屋を吹き飛ばしてるから。そうじゃなくても、魔法陣の上に薬品こぼしたりとか」

えへへと悪気なく笑うロジェの背中に軽く膝蹴りを食らわせてやる。ロジェは尚も悪気のない笑みを浮かべ続けた。

「俺の管理があんまりにも酷いから、必要なときは手紙を出そう！
ってことになったんだ。紙ないときは徒歩で俺から出向く感じ。」

ヴィヴィアンは面倒くさがって飛行機飛ばしてくる」

「俺が歩いて行くより、紙飛ばした方が早く着くだろ」

そんな会話をしていると、やがて見慣れた深緑の屋根をした家の前にたどり着く。今夜は酒場もひっそりと静まり返り、いつも以上に静かだった。帰宅してすぐ目につく様子が、改めて普段と違うことを実感する。

「ユキノを部屋まで頼む」

言いながら、片手で大きく弧を描いて施錠魔法を解いた。使ったのは右手だったのに、引っ張られた左の肩が猛烈に痛む。

「ちよ、ちよっとヴィヴィアン」

思わず地面に膝をつくヴィヴィアンを見て、ナタリアが慌てて覗き込んでくる。ロジェが足を止めて駆け寄ってこようとするのを視界の端でとらえたので、軽く顔を上げて首を横に振ってみせる。

「いい、こなくて。ロジェはとりあえずユキノに部屋の場所聞いて、寝かしといてやって」

「お、おう」

ロジェは言われるがまま、ドアを開け放って家の中へ入っていつ

た。

「……悪い。手、貸して」

右手を軽く肩の高さまで上げ、ナタリアを上目遣いに見上げる。ナタリアは外灯の暖色の光に照らされているのに、あまり血色がよくないように見えた。

「大丈夫なの？」

「へいき。とりあえず、家の中まで行かないと。施錠の効果解いてるから、魔物に侵食され放題」

差し出してもらった彼女の手を掴み、体を起こす。ナタリアはすかさず背中に手を回し、ふらつくヴィヴィアンの体を支えた。当たり前だが、一人で立っているよりも、ナタリアに半分くらい体重をかけて立っている方が楽だ。

「大丈夫よ、もっとあたしに寄りかかっても」

無言で頷いたが、このままの体勢でこれ以上ナタリアに体重をかけたらしたら、きっと彼女は潰れる。ヴィヴィアンはそのまま背筋を可能な限り伸ばしていた。半ばナタリアに引っ張られるようにしながら、家の中へと急ぐ。

家の中について、扉を閉めてヴィヴィアンは魔法陣を描いた。こればかりは平面でないドアに筆記用具で描くわけにもいかず、万年筆のインクに魔力を宿して空中に描くこととなった。

呪文を紡ぎ終わった瞬間、疲労がピークに達してヴィヴィアンはそのまま目を閉じて後ろに倒れた。ナタリアは支えてくれようとしたのだが、ヴィヴィアンの重みに耐え切れずに巻き添えを食らう。放っておいてくれてよかったのと思ったが、彼女のおかげで頭を直接床にぶつけずにすんだ。ヴィヴィアンは彼女の肘から上の辺りをクッション代わりに、左腕を上にした状態で倒れたのだった。

「悪い」

すぐに右腕を軸にして起き上がり、その場に半身を捻った妙な姿勢で座りながらナタリアの様子をうかがった。

滑らかな金髪が、ドアにあいた窓から入ってくる淡い光に照らさ

れている。しかし、明かりが少ないとはいえ顔が見えないのは妙だ。一瞬だけ考え、ヴィヴィアンは倒れた時の衝撃で眼鏡がどこかに飛んでいってしまったことに気づいた。手探りで辺りを探している、ナタリアが肩を叩いてくる。振り向くと同時に眼鏡をかけられ、心配そうなナタリアと目が合った。

「割れてなくてよかったわね、眼鏡」

「すぐ治せないからな」

「ねえ、貧血の薬とか家に置いてないの？」

「薬草の種なら。薬品もさがせば出てくると思う。……飲めそうにない状態のやつが」

ナタリアはため息をつき、ヴィヴィアンに手を貸した。

「もう無茶しないでね、ヴィヴィアン」

ふたたびナタリアに体重を預けて立ち上がり、ヴィヴィアンは螺旋階段の方を向いた。今から上らなければいけないと思うと、なんだか気が滅入る。

「お前も気をつける、家からなるべく出ないようにしとけ。ユキノがお前んちで、妙な声を聞いている」

「妙な声？」

一段ずつ、ゆっくり階段を上っていく。先ほどのように倒れたりしたら、今度はナタリアを下敷きにするどころでは済まない。運悪く頭を打って二人とも天に召される可能性だってあるのだ。ヴィヴィアンの家の螺旋階段は、ナタリアの家と比べると急だ。

「それで、何て言ってたの？」

「若い女の血が欲しい、って」

「気持ち悪いわ、何よそれ。魔物って喋れないでしょう？」

会話をしつつも、神経を使って少しずつ確実に階段を上っていった。

「魔物だけじゃなくて変な魔道士がいる可能性もあるってこと。しばらく護衛はエストルに頼んでくれ」

「……そうね、あんたはまだ回復してないから」

階段を上りきった時、思わず安堵のため息が出た。ナタリアは早く階段付近から離れたいようで、止まらずに歩き続ける。

「数日で復活できると思う。そうしたら、俺からお前に連絡する」

「解ったわ、しっかり休むのよ」

「これから随分世話になると思う。正直いうと、毎日お前の手を借りないとやっていけない気がする」

「ええ、任せてちょうだい！ そんなの気にしなくて良いわ。あんたもユキノも心配なもの」

ナタリアはヴィヴィアンの部屋のドアを片手で開け、体を斜めに滑り込ますようにしてドアを全開にした。ヴィヴィアンはナタリアの肩に回していた腕を外すと、そのまま右肩を下にしてベッドに飛び込んだ。そのまま仰向けになると、ナタリアが床に散乱した魔道書や瓶を拾い上げて整頓しているのが目に入る。

「……疲れた」

「寝て良いわ。あの鍵、一方通行でしょ？ 家から出ることはできるけど、入ることはできない施錠。そうじゃなかったかしら」

答えながらもては止めずに机の上を整理し、拾い上げた魔道書を積み上げて書類を纏めているナタリア。ベッドに寝ていると、その彼女の後姿を斜め下から見上げることになる。

「あー。……あれ。ちょっと待て、何でお前それを」

「あんたあたしのこと馬鹿だと思ってない？ これでも教師の娘なのよ！ 記憶力は良いの」

そういえばそうだった。彼女の学校の成績は思えばいつでも結構上のほうで、よく妬まれたりもしていた。天は二物を与えないという、どこか外国の名言があったと思ったが、それは絶対に嘘だとヴィヴィアンはナタリアを見るたび思う。

「ごめんすっかり馬鹿が定着してた」

「もう！」

からかってやればいつもどおりに反応する彼女に、思わず微笑した。いつまでもうじうじ悩まないところが彼女の良いところだ。

「そっか、呪文の意味わかってるのか。だから治癒の時も、唱えるべき呪文が解ったんだな」

「全部理解してるわけじゃないけどね。それにね、あんたは大事な呪文を描く時そこだけ微妙に丁寧になる癖があるの」

「よく解るな、そんなの」

「凄いでしょ。あんたのことなら大体なんでも知ってるわ、長い付き合いだもの」

自慢げに胸を張るナタリアに、なんだか複雑な気分になった。ナタリアはヴィヴィアンの考えることの大体全部を掌握して気を遣う。はしやぎすぎる点は確かにあるが、ヴィヴィアンがナタリアを心の底から嫌だと思ったことは、これまで一度も無かった。

ヴィヴィアンがどんな言動で苛立つか、どんな言動で機嫌を良くするか、ナタリアは全部知っているのかもしれない。色々な感情が胸の中で渦巻いてもやもやした。ヴィヴィアンは一つずつ感情を洗い出していく。呆れ、苛立ち、不可解さ、これが当たり前だという奇妙な納得。そして、安堵感や少しの嬉しさもその感情の渦に交じっているようだった。

「それじゃ、俺が今何を考えてるか解るか？」

まだもやもやする心中を隠しながら、ヴィヴィアンは訪ねた。こんなことがナタリアに解るはずがない。ヴィヴィアンはただ疼く痛みが鬱陶しいと思うくらいで、ナタリアの真意が知りたいということ以外にはあまり意味のあることは考えていなかった。疲れきっているのだ。

「当ててみましょうか」

いたずらっぽく笑い、ナタリアはヴィヴィアンの目にかかっていた前髪をそつと掻き分ける。

「あたしが早く帰ってくれないかって、思ってるんじゃないかしら」
穏やかな声だったが、その瞳は少し悲しげだった。

「え？」

「早く寝たいでしょ。あたしと喋っていると疲れるものね」

まあ、軽く面倒くさいと思わないでもなかった。しかし、このまま一人になってもしばらく眠れないだろう。疲弊しきってはいるものの、傷の痛みはまだやまない。本格的に眠くならないと、目を閉じてもすぐに痛みで体を起こしてしまうだろう。

「そうでもない。痛いし、すぐ寝れないと思うから」

本当に、本心をほんのちよつとだけ言うとしたら、傍にいてくれた方が落ち着く。弱っている時、自分の体が上手く動かなくて苛立つ時、誰かが傍にいただけで少しだけ安心できるのはたぶんヴィヴィアンだけではないだろう。そんなことは口が裂けても他人には言えないが。

「ねえ、あんたが寝るまで傍にいていい？」

前言撤回だ。こんな風にベッドに半身を乗り上げ、吐息の温度すらわかるような至近距離から顔を覗き込まれたらあまり居心地は良くない。眠気はいつまでも訪れないだろう。

「えー」

即座に嫌そうに顔をそむけると、ナタリアは少し傷ついたように体を引いてベッドサイドに足を崩して座り込む。視線を戻せばスカートの中が見えかけていたので、その体勢は危ないとヴィヴィアンは思ったが、忠告するのが（というより、忠告したあとにするだろうと予想される反応が）面倒で黙ったままだった。

「何で嫌がるのよ」

「早く帰らないと危ないぞ」

忠告のつもりで言っただけで、ナタリアは両手で口元の辺りを覆って頬を染めた。

「な、なんで、そんな……ときめくじゃない！」

「馬鹿か。つか、意味わかんねえよ」

心の底から感情込めて吐き捨ててやる。一体いまの冷たい拒絶ともとれる言動に、どうやったらかときめくのか。

「困るんだよ怪我なんかされたら。俺の責任じゃん」

今度こそ本当に冷たく跳ね除けてやれば、ナタリアは小さくため

息をついて唇を尖らせる。

「冷たいわね！ エストルを見習えとは言わないけど、あの子くらい優しい言葉かけられるようになりなさいよ」

「お前の感性じゃ、泊まってけとか俺の布団で一緒に寝ろとか、そういうのが優しい言葉に入るのか？」

ヴィヴィアンがそんな言動でナタリアを引き止めることは百パーセントあり得ない。しかし、エストルは友達のナタリアが相手でもそう言って引き止めるだろう。何せ、エストルは帰国してナタリアに会うとき、いつもその頬にキスをしているのだ。それが隣国では挨拶らしいが、生憎この国ではハグはしてもキスはしない。

「……考えてみたらそうね。こういう場合、エストルは植物使っても女の子を自分の傍に引き止めるわ」

「なんか、想像できちまう辺り空しくなるな」

「そうね」

なんだかげんなりして、お互いに乾いた声で笑い合う。一気にテンションが下がったところで、ナタリアがふとドアの方を振り返ってからヴィヴィアンに訊ねる。

「どう？ ユキノは。大怪我してたんでしょ？ あれちゃんと治ってるの？」

「ああ。ただ、深かったから相当あいつに負担かけたと思う。治癒の魔法ってそんななんぼっかりだから。たぶんな、これから数日してあいつが朝食作るときに、包丁で怪我するとするだろ。治るのに普段の倍くらいかかるよ」

「そんな！」

「栄養つけとけばそうとも限らないけどな。ということで、食事のメニューは頼んだぞ」

「任せておいて。貧血改善メニュー、たくさん考えてくるわ」

だんだん痛みが麻痺してきた気がする。動かずにじっとしているからだろう。先ほどからヴィヴィアンは喉しか動かしていない。

気づくとまるで独り言のように、ナタリアにそっと語りかけてい

た。

「自分が死にそんな大怪我しても、俺をかばうために刀を振り続けてた。そういうやつだよ、あいつは。あいつがそうやって頑張ってる姿見てるとき、やっぱなんていうか、なんだろ…… 半分くらい後悔した」

懺悔のつもりなのだろうか。自分で自分の意図がわからない。とにかく、誰かに聞いて欲しい気分だった。誰にも聞いてもらえなくて良いから、言葉にしたい気分だった。自分なりにユキノへの意識が変わったことを、自分で認識したかったのだ。

「どうしてよ!」

「俺なんかが立派にしてやれるわけない。むしろ今、俺よりあいつの方が立派な人間だと思う」

どんなに気味悪いといわれてもめげずに、家族を愛し、村を愛し、全てを守るために命を削る覚悟で飛び出してきたユキノ。健気で忠実で、心の広い男だと思う。

「あんただって十分立派よ。ちゃんとユキノと信頼しあって、持ち場を決めて戦ってたでしょ? あんたは弟子を助けるためにいろんな魔法を使っただし、自分の身を盾にしてもあたしたちを守ってくれたじゃない」

「うん。だから、もう後悔するの面倒くさいから、復活したらすぐ魔法を特訓する。契約したからには、あいつは俺の弟子だ。俺はあいつを育てるために、強くならなくちゃいけない」

「そこなくちゃ!」

ナタリアの機嫌が再び良くなったところで、部屋のドアが控えめに開いた。

「やつほー。邪魔しちゃったかな」

ロジェがドアの隙間から半分くらい顔をのぞかせて、ヴィヴィアンとナタリアを交互に見ている。その顔は少しにやついていた。

「いや、別に」

答えてやれば、ロジェは最初からこちらの返答など気にする予定

はなかったらしく、

「ナタリア、そろそろ帰ろう？」

そう言いながらドアの隙間から手を出して、ナタリアを手招いた。

「えー、まだここにいたいわ」

「これ以上深夜にならないうちに帰ったほうが良い。ロジェ、悪いな」

「全然気にしないで。ユキノはもう寝ちゃったよ」

「そっか。ありがとう」

ロジェに片手を上げて見せれば、ナタリアはそつとヴィヴィアンのベッドから離れる。そのまま出て行くかと思いきや、彼女は思い出したように振り返る。

「それじゃ、無理を承知で一個だけ頼んでいいかしら」

「何」

「朝起きたらすぐ、あたしの部屋に魔法陣繋げてちょうだい」

「あー。忘れてなかったらやる」

頷いて見せれば、ナタリアは嬉しそうに笑った。ロジェがこちらに向かって、軽く手を振った。

「じゃあな、ヴィヴィアン！　お大事に。明日また来るよ、死んでないか見に来る」

「そうして。俺よりむしろ一階のユキノが心配だから」

「あたしが来たらちゃんと施錠解きなさいよ」

「死んでなかったら解く」

「もう！　縁起でもないこと言わないの」

むっとするナタリアに、苦笑を返してやる。ナタリアはまだ名残惜しそうにしていたが、微笑んでヴィヴィアンに手を振る。

「それじゃあ、おやすみなさい。しっかり休むのよ」

その声を最後に、ナタリアとロジェは部屋を出て行った。階段を降り、ドアを閉める音がした。ちりん、とドアチャイムが響く。

「ふあ……あ」

眠気が襲ってきて、ヴィヴィアンは目を閉じた。痛みが少し和ら

いできたので、そのまま寝てしまうことにする。なるべく肩のことも魔物のことも考えず、明日の昼に何を食べようか、ナタリアが来たらどんな言葉で迎えるべきか考える。そうしているうちに、徐々に意識がフェードアウトしていく。

第三十七話 夜明け

翌朝、肩の痛みで目覚めた。窓からは薄明るい朝の景色が見える。早朝だからか、歩いている人の姿は見えない。静かな夜明けだった。体を起こしてみると、貧血の方は大分改善されていた。歩いてもあまりふらつかない。睡眠はやはり重要だ。

壁に備え付けた棚を探り、瓶をいくつか見繕う。透明なガラスの瓶に閉じ込めた種子は、それぞれ鎮痛用と貧血用、疲労回復用の用途に分けられている。ベッドの上にとりあえず撒いてみた。今なら魔法が使えると思う。そっと指先に魔力を伝えてみれば、ちゃんと魔法陣が描けた。安心して、植物を生成するための魔法陣を描いていく。

呪文を唱えれば、種子が芽吹いた。芽吹いたがそれ以上成長はせず、そのまま止まってしまふ。どうやら、長いこと出してもらえなかったことで拗ねているようだ。エストルに言わせると、種子がいうことを聞かない場合は大体術者が悪いらしい。

呪文を変えてみる。いくつかためしてみた。ようやく薬として効果がある大きさに成長したので、ヴィヴィアンは薬草を摘み取った。エストル流に接しなければまた拗ねられるかもしれないと思い、植物たちに礼を言ってから階段を降りる。

「ヴィヴィアン、おはよう」

ソファにゆったりと凭れかかっていたユキノが、顔を上げてこちらに走ってこようとする。寝起きでぼんやりしていたところにヴィヴィアンがやってきたのだろう。ユキノは髪も結っていなかった。

ヴィヴィアンは来るなというジェスチャーをして、階段を下りきってユキノのそばを通り過ぎる。

「まだ疲れてるだろ。寝てろ」

「ヴィヴィアン、何すんの？」

キッチンへ向かうヴィヴィアンを呼び止めるユキノに、半分だけ

振り返って返事をする。

「葉草煎じる。出がらしは湿布にすると傷が早く治るらしい」

肩の傷に貼り付けておけば、少しは効果があるだろう。今日は一日大人しくしているつもりだから、その間に回復してくれば非常にありがたい。

「多分、そういうのって俺のほう得意だと思う」

声をかけられ、確かにそうだろうと思って肩越しにユキノを振り返る。

「……そんな気がする。やったことある？」

「どれくらい煎じるの？」

「色が透明な緑になるまで」

「んー、わかった。効きそうなタイミングで止める」

髪をさつと結び上げ、かんざしを一本だけ使って留めると、ユキノは袖をたくしあげながらキツチンへ向かった。その背中に向かって、ヴィヴィアンは少し迷ってから声をかける。

「昨日は悪かったな」

「謝らなきゃならないのは俺のほうだよ、色々迷惑かけたし、全然役に立てなかった」

肩越しに振り返って笑うユキノを見て、何故だか少し安心する。ユキノがヴィヴィアンの発言に対して冷たい反応をとることなど、絶対にないと解っていたのに。

「葉煎じてる間にナタリアたちと連絡取る。……今何時？」

「五時すぎだよ」

「まあ、おきてるだろ」

本当ならあと数時間寝ていたいところだが、眠れないので仕方ない。ユキノが腰掛けていたソファに腰を下ろし、正面のテーブルに魔法陣を描いた。呪文を唱えれば、誰かの話し声がする。

「ナタリア？」

「ヴィヴィアン！ 早かったじゃない、起きて平気なの？」

「ああ」

「よかった、ヴィヴィアン」

ローザのほっとしたような声が聞こえて、ヴィヴィアンは安堵すると同時に少し不可解さを感じた。

「お前ら、いつ起きたんだ？」

二人の声から全く眠そうな気配を感じない。起きたばかりというわけでもないのだろう。

「実は眠れなかったわ」

ぽつりとそう呟くナタリアの声に、罪悪感が湧いてくる。魔物の恐怖から救ってやりたくて戦ったのに、余計怖がらせてどうするのだろう。

「ごめんな、怖い思いさせて」

「いいのよそんなこと！ 怖い思いしたことより、あんたがどうにかなっちゃうことのほうが心配だったのよ」

「……そっか」

心配をかけたことについては謝りたいが、少し過保護なのではないか。ヴィヴィアンを心配するあまりナタリアまで不眠で倒れたりしたら、後の対応が面倒くさい。

「すぐそっちに行くね」

ローザが明るい声で言い、続けてユキノの安否を気遣った。

「あいつならいま、薬煎じてる」

「もう動けるの？」

「あんまり万全じゃないけど」

そんな会話をしていると、草の青っぱい匂いが漂ってくる。草刈をした直後の畑でするような匂いだ。

「ヴィヴィアン！ ちょっと底が見えてきた」

声がする方を見れば、鍋を覗き込んでいたユキノが振り返って笑う。

「完全な半透明になるまでだ、頼むぞ」

「はい」

ユキノの声色がだんだんいつものトーンに戻りつつある。ヴィヴ

イアンはそれに少しだけ安心し、魔法陣に向き直った。

「じゃ、ナタリアはパン屋寄ってきてくれ。ローザはそのまま来い」
「わかった。じゃあ先に行くね、ナタリア」

ローザの軽い足音が聞こえ、部屋のドアが開閉する音がした。

「早くあんたに会いたいわ」

「石畳でコケんなよ」

「平気よ！」

「待ってる」

そういつて魔法陣の繋がりを断ち、ヴィヴィアンは肩を押さえながらソファに横になった。このまま眠ってしまいたいが、痛みが煩わしくて眠れもしない。

「ヴィヴィアン！ 出来たみたい！」

「それ鍋ごと持ってこっち来い」

ユキノはヴィヴィアンの言うとおり、鍋ごと薬草を持ってきた。

鍋を持って塞がった両手の、僅かな指だけを器用に使って濡れ布巾を敷くユキノを手伝いながら、ヴィヴィアンはちらりと鍋の中身のをぞく。綺麗に澄んだ濃緑の液体の底に、しなびた薬草が漂っているのが見えた。

「グラス…… もってくるの面倒だな」

「俺がいく！」

「いい」

ヴィヴィアンはユキノを制して右手を挙げ、軽く背後を振り返って指を振った。人差し指の軌跡は、食器棚からテーブルまでのゆるやかな放物線を描く。すると、その指につられるようにして、食器棚の扉が開いてグラスが二つ飛んできた。ユキノが目を丸くしてそれを見ている。

「す、げえ」

「あー、疲れた」

「なんかすっげえ魔法っぽかった」

「当たり前だろ、魔法なんだから。解けない氷でグラス作ったり、

水を固めてグラスにしたり、面倒くさいときはそうする。けど今、そこまで魔法使う気力はなかった」

「十分だよ！ これ、二等分すればいい？」

「おう」

ユキノが葉を綺麗に二等分し、グラスに注ぐ。ヴィヴィアンは小声で呪文を囁き、凍る寸前のところで止めてグラスの中身を冷やしてからグラスを手にとってみる。ひんやりとした感触が気持ち良い。「これって何の薬草？」

「鎮痛剤と貧血防止と疲労回復。面倒くさかったから混ぜた」

そう言いながら、グラスに注がれた緑の液体を眺める。透明度が高いので、緑のステンドグラスを通したように向こう側がしっかり見える。

「鎮痛剤、俺の分は無くてもよかったのに。傷は治ったよ、疲れたけど」

「いいよ、まだ種あるし」

芽吹かせるのは面倒だが。

「あちっ」

ヴィヴィアンに倣ってグラスを取ったユキノだが、熱さが想定外だったらしく、驚いて乱暴にグラスを置く。中身は大きく揺れたが、零れることは無かった。

「冷やせよ馬鹿」

「だって俺が冷やそうとすると全部凍るもん」

「あー」

そういえば彼の魔法はまだ制御不能なのだった。寝癖がついた（いまついていることに気がついた）赤毛をぼさぼさとかき回しながら、ヴィヴィアンは呪文を唱えてグラスの中身を冷やす。ついでに鍋の底に残っていた薬草の残骸も冷やしておいた。

「ほら」

グラスを差し出してやれば、彼は頷いて受け取った。そして、一気にグラスの中身を呷る。どんな味がするのかは匂いで代いたい解

っていたが、それでもユキノの反応が気になってヴィヴィアンは彼の挙動を窺う。

「どうだ」

「……草の味。超ー効果ありそう」

非常に苦そうな表情でユキノは眉をしかめ、空のグラスをテーブルに置いた。ヴィヴィアンはあまり気乗りしなかったが、息を止めてグラスの中身を飲み干す。

「っげ、まんま草じゃん」

「しばらく口に残るよね」

二人でげんなりしながら乾いた笑い声を上げる。

「なんでこう、薬ってまずいんだろ」

「薬飲むのいやで、もう怪我とか病気とかしたくなくなるだろ。塗り薬にしても、しみるの嫌だし。だからじゃないかな。治る時気持ち良いならみんな怪我したがるよ」

「あー」

納得してしまうのかもしれないと思ったが、本当にそうだったらしいら面白い。実際には単に有効成分が苦味になっているだけなのだろうし、他にもロジェに言わせるところの『原理』の部分がたくさんあるはずだ。しかし、考え方はユキノのほうが柔軟性があるって楽しいとヴィヴィアンは思う。

「で、効き目は即効？」

「そうでもないかも。単なる薬であって魔法じゃないからな。ちょっと休んでろ」

「そうする」

ユキノがソファの肘掛に頭を乗つけて寝るのを見て、ヴィヴィアンは場所を空けてやった。そして、自分はテーブルを挟んで正面にある二人掛けソファの方にうつる。

ヴィヴィアンは二人掛けのほうに座り、客人を広いほうのソファに座らせるのが依頼を受ける時のスタイルだ。そんなことを思いながら、ヴィヴィアンは昨夜ナタリアに借りたシャツを脱ぐ。浅いと

はいえ、左肩に抉れた跡が見えて吐き気がした。

「傷跡残っちゃったな」

「ああ」

「まだ痛むんだろ」

「ああ」

ユキノの問いに答えながら、ヴィヴィアンは玄関近くの引き出しの中からガーゼをいくつか持ってきた。包帯もあったはずだと思って、リビングの隅にある引き出しや、壁際の本棚のすみにある木箱の中を探した。

「村を守るどころか、自分の師すら守れないなんて」

ぽつりとユキノが呟いた。見るとユキノはソファの肘掛に頭を預けた姿勢のまま、その澄んだ深い青色の目でこちらをじっと見つめていた。

「これは俺の不注意だ。それに、元々お前に守られるつもりもなかった」

「怒ってないの？」

「何を怒るんだよ」

純粹に疑問でそう問い返すと、ユキノはしばし黙り込んだ。そして、唐突に何か閃いたような表情を浮かべる。清々しいぐらいの笑みだ。

「よかった！ これからも師匠の役に立てるように頑張るから」

何と答えていいか解らなくて、ヴィヴィアンは軽く頷く程度に留まった。ユキノに真っ直ぐな眼差しで師匠と呼ばれるたびに、胸の奥が疼く。

ここまで自信がないことを自覚したのは初めてだった。ユキノと関わり始めてから、自分がそこまで凄くないことをヴィヴィアンは痛感していた。今まで大体のことは完全にできたし、魔法が強いと言われることを肯定できていた。何でも屋の人気も上々だったし、常連客たちが毎回褒めてくれるのが素直に嬉しかった。凄いいわれるのが当たり前だった。だから適当にでも、毎日生活しているこ

とに何の疑問ももたなかった。

それが今では、以前とまるで違った状況に立たされている。自分はちっとも凄くなんてないという現実を、ユキノと自分の大怪我という目に見える形で突きつけられてしまった。今まで自分が無意識に持っていた自信の根拠になる部分を、粉々にされたのだ。

このままでは自分がどんどんわからなくなる。今まで当たり前だと思っていたことの全てがなくなってしまった今、このまま呆然としていては元の形を失くしてしまう。それが怖かった。だからもっと強くならねばならない。

責任感とかそういう格好の良い言葉で今の自分の感情を表現するのは難しい。これは責任というより保身や逃げに近い。

「あー、面倒くさい」

呟いて髪をがしがし掻きまわし、ヴィヴィアンはため息をつく。

要は力をつければいいのだ。そうすれば自分は、町一番の魔道士の名に恥じない、それに見合ったスケールの師匠になれる。

凄くなる事が目的ではない。ユキノに村ひとつ守るだけの魔法を教えてやれば、あとはもう今までどおり適当に過ごせるのだから。それだけ頑張ってみよう。

「……俺なんか迷惑なこと言った？」

「べつに。単にお前の教育が面倒くさいだけ」

包帯はどこにしまっただろう。ヴィヴィアンはまだ探していない棚のほうへ歩き出す。すると、玄関の方で物音がした。

第三十八話 プレゼント

ノッカーを叩く音がする。音が軽くてあまり響かないので、おそらくローザが到着したのだとヴィヴィアンは思った。

「ローザかな」

「だろうな。……何か着てないとまずいか」

相手がナタリアだったら別に向こうが全く気にしないので半裸でもよかったが、ローザとなると話は別だ。ローザは血が極端にだめだが、同じぐらい異性にも苦手意識を持っているらしい。幼馴染であるヴィヴィアンやその他数名とは話をするが、知らない男性には絶対に近寄らない。そして友達であっても、ヴィヴィアンがタンクトップなどの露出の多い服を着ていると絶対に目を合わせてくれないのだ。昨日は血塗れでそれどころではなかったから例外だったが、普通に何の怪我也無い状態で半裸でいたら確実に近寄ってこなかっただろうと思う。

ヴィヴィアンは面倒くさいと思いつつも脱いだシャツを再び羽織ると、適当にボタンをかけてドアを開ける。澄んだ朝の涼しい空気が家の中に流れ込んできた。

「おはよう、ヴィヴィアン。具合どう？」

手に小さな籠を提げたローザが、心配そうにヴィヴィアンを見上げていた。睡眠不足で疲れているのだろう、なんとなくやつれた印象を受ける。

「昨日に比べたら楽。あがれよ」

ローザを招きいれ、ドアを閉める。どこからか蝉の鳴き声が聞こえ始め、本格的に朝になったのだなとヴィヴィアンは感慨深く思った。卒業以来、こんなに早起きしたことはほぼ無いと言っていい。この時間まで起きていることなら多々あるが。

「ユキノさん、おはよう」

「おはよ、ローザ」

ソファに寝た状態のユキノを、上から覗き込むようにしてローザが挨拶しているのを見る。ユキノは中途半端な高さに上げた右手をひらひら振って応える。

「疲れてるの？」

「ちよっとね。貧血がひどい」

「あ、あのね。貧血の薬持ってきたよ。私ね、家の裏で薬草を育ててるの。時々薬にしてしまっておくんだよ」

そういつて、飴色の籠から瓶を取り出すローザ。ユキノはソファに仰向けに寝たまま天井を見上げた姿勢で、やわらかい微笑みをローザに向ける。

「そうなんだ。ローザは植物育てるの上手そうだな」

「そうかな」

少し照れた様子のローザだが、手を止めることはない。瓶をいくつか見比べ、二本だけテーブルに置く。恐らくその色を判別していたのだろう。傍目には大した違いのない無印の瓶を、その微妙な色の差だけで判別できるのだから凄い。

「栄養剤と貧血の薬。これは飲んだらすぐに効くの」

「本当か？　ありがと！」

「早く元気になってね」

二人の会話を聞きながら、依頼書を纏めておく引き出しを開けてみた。隅の方に丸まった包帯をみつけ、ため息をつきながらそれを手に取る。何故こんな場所にあるのだろう。

「ヴィヴィアン、どうかしたの？」

「包帯探してた。こんなとこにあった」

「ヴィヴィアンの分も持ってきたよ。鎮痛薬と貧血の薬」

「ありがと」

ソファの近くに歩み寄ると、ヴィヴィアンに近いテーブルの上にローザは瓶を二つ置いた。そして心配そうにこちらを見上げる。

「傷、また痛む？」

「痛みで目え覚めた」

「そっか…… ごめんね」

「違う、お前らが悪いって言いたいんじゃない。気を抜いてたんだ、魔物相手にしてるのに真剣みが足りなかった」

一歩間違えたら命を奪われかねない危険な闘いだだったというのに、ヴィヴィアンの意識は大量の雑魚たちを相手にしたときと殆ど変わらなかった。それがまずかったのだ。

一人前の剣士が隣で戦っているからといって安全なはずがない。魔物は物理的攻撃で致命傷を与えるのが困難なのだと、言っていたのは自分の方だったはずなのに。隣に共に戦える人材がいるということ、どこか安心していただと思う。つくづく自分の間抜けさに呆れる。

「依頼受け見てきてくれる？ 全部キャンセルしないとだから。できたら張り紙か何か作ってもらえると嬉しい。都合により今日は依頼を受けられませんって」

言いながら、ヴィヴィアンは適当にかけて掛け違えていた一番下のボタンから外し始める。ローザはさっとヴィヴィアンから目をそらし、軽く頷いて玄関まで走っていく。ヴィヴィアンはシャツを脱ぎ、ソファに座ると鍋の底に残った薬草を搾ってガーゼに包む。そして、ひんやりと冷たい薬草を傷に乗せると、包帯で適当に巻いた。「ヴィヴィアン、それちょっと適当すぎると思う」

今まで挙動を冷静に見守っていたユキノが、重々しく口を開く。ヴィヴィアンは頷いた。

「やっぱ？ 腕動かせなくなった」

何も考えずに巻いたら脇を閉じることすらできなくなっていた。腕を少し体から離れた状態のまま、ユキノに視線を返す。ユキノが表情をやわらげ、ソファから腰を浮かした。

「俺やるよ、そういうのやりなれてる」

「頼む」

包帯すら自分で巻けないなんて子供じゃあるまいし、と思いいながらも結局任せてしまう。ユキノに巻きなおしてもらうと、きちんと

腕が動くようになったので助かった。

「ありがと」

「どういたしまして。俺ちょっと着替えてくるね」

「おう」

「やっぱ、先に風呂借りてもいい？ 血の臭いが気になるから」

そういわれたが、ヴィヴィアンは全く気づかなかった。多分拭いただけに留めたのだから、自分も血の臭いがするはずだが、草の臭いしか感じない。

「勝手にしろ。魔法陣触れば程よく暖かい水が出てくるから」

「便利！」

「あんまり長湯するとナタリアに覗かれるからとっと出てこいよ」
「大丈夫、足音ですぐ解る」

本当に彼は色々な神経が研ぎ澄まされていると思う。聴力も嗅覚も良いし、アイアランド家での一度目の魔物退治のときに、視力だって良いことが実証されている。色々なものに反応しすぎて疲れないのだろうか。家の中にずっといれば目なんて見えなくていい場合があるから、ヴィヴィアンは時々眼鏡を外してわざと視力を使わずに過ごすことだってあるのに。

「タオルは洗面台の下に棚だ。石鹸も同じところにおいてあるから、新しいの一個やる。あー、それから、洗濯物あふれてたら適当に樽なんか突っ込んで。お前のも洗うなら一緒に」

「全部一緒に洗って干すから心配しなくていいよ。じゃ、お先」

手に風呂敷というらしい布の包みを持ち、ユキノは二階へ上がっていった。バスルームは二階なのだ。

「ローザ？」

そういえばローザが戻ってこないの、ヴィヴィアンは気になって玄関の方へ行ってみた。ローザは玄関にいたが、どこか一点を向いて固まっている。

「おい、ローザ」

「あ、ヴィヴィアン」

真後ろまできてやっとな反応したローザだが、ヴィヴィアンの半裸を目にして慌てて下を向いた。

「何見て……」

言いながらローザが見ていた場所に目を移せば、ヴィヴィアンも言葉を失った。

「ヴィヴィアン！」

視線の先にはナタリアがいたのだが、どうも様子がおかしい。ナタリアは半袖のワンピースを着ているはずなのに、どうしてその二の腕から先が真っ赤なのだろう。

手にはバスケットと、何故か真っ赤な花束が抱えられていた。花束に巻かれた包装紙も真っ赤でぐしょぐしょになっていて、ナタリアは泣きそうな顔でヴィヴィアンに駆け寄ってくる。その姿で駆け寄られるといささか怖い。

「な、なんだよその格好！」

思わず逃げ腰になると、ナタリアは本当に泣く寸前のように顔を歪ませて項垂れる。

「知らないわよ！ わかんないわよ…… 急に溶けたの！」

ローザが後ずさり、ヴィヴィアンの背中に隠れるようにして小さく悲鳴を上げる。

「溶けたあ？」

「うちをでるとき、玄関に置いてあって…… 気味悪かったから、そのままにしていこうと思ったの、でも、メッセージが」

「わかった、わかったから落ち着いて話せ」

ナタリアは頷き、救いを求めるようにヴィヴィアンを見上げた。ヴィヴィアンはとりあえずナタリアに荷物を置いて目をつぶるよう指示し、鮮血に似た赤い液体を洗い流して乾かした。そうしてから、その真っ赤な液体の元凶となっているらしい花束を見下ろす。

「これが、溶けた？」

「そう、そうなの、近づいたら」

「だから、落ち着けて」

真っ赤な液体は生臭く、どう考えても血にしか見えなかった。た
めしに人差し指にとってみればねっとり絡みつく、その粘性の液
体に少し吐き気がする。おまけに生暖かい。

さすがに舐めてみる気にはなれなかったが、舐めたらきつと鉄錆
のような味がするのだろう。こんな液体は血以外に知らないし、血
ではないとしても不快なことこの上ない。

赤い薔薇のようなものは、玄関の敷石の上でどんどん溶けていっ
た。やがて茎も葉も全て溶け、血塗れの包装紙と凄惨たる血溜りだ
けが残る。後ろでばたりと軽い音がして、何かと思って振り返ると
ローザが真っ白い顔色で倒れていた。しまった、見入っていないで
真っ先に彼女の目を塞ぐべきだった。

「とりあえず、お前はローザを連れて中に行け。話はちゃんと聞く
から」

そう言ってナタリアを押しやれば、彼女はバスケットを抱えて家
の敷居をまたぐ。そして中にユキノがいないことに気づき、唇を震
わせながら振り返る。

「ユキノは？ ユキノはどうしたの？」

ローザが失神しているので、実質的に家の中に一人になる。それ
が怖いのだろう。

「残念ながら風呂。出るまで待ってろ。俺はこれを片付ける」

ナタリアは頷くとローザを抱き上げ、ふらついた足取りでソファ
まで行った。ヴィヴィアンは足元に広がる血溜りを見下ろし、ふと
何か白い紙のようなものが沈んでいるのに気づく。非常に気分の悪
いことではあったが、その血溜りに手を伸ばして指先で紙を掴み取
る。沈んでいたのはメッセージカードらしい。

「……読めねえ」

真っ赤に汚れたメッセージカードには何か黒いインクで文字が記
されているようだが、読めなかった。ヴィヴィアンは呪文を唱え、
水でカードを洗ってから再び逆呪文を唱えて乾かす。文字は掠れて
いたが、真っ赤だった時よりは読めた。

「愛しいナタリアへ。……彼氏？」

絶対に違う。そんな男の存在をヴィヴィアンは知らないし、第一ナタリアの彼氏になるような男は、早朝に花束を玄関先に置いて逃亡するなんていう小心者じみたことはしないはずだ。

彼氏ではないなら一方的な求愛だろうかと内心で思いながら、読み進める。

「少し早いけど誕生日おめでとう。歳の数だけ薔薇を贈ります。愛の印として受け取って下さい。次の満月の夜に、貴女をさらに行きます。それまで他の男に近づいちゃ駄目ですよ？ そいつがどうなっても知りません。貴女は僕だけを見ていればいいんですから」
小さいカードに小さい文字でびっしりと書いてあったのは、こんな寒気がする内容だった。寒気と同時に少し苛立った。思えば、こんないいところだ、自分の素性も明かさずに何が『僕だけを』だ。自分を見て欲しいなら、せめてカードに名前ぐらい書けと思う。

しかも、次の満月の夜といったら丁度ナタリアの誕生日の晩にあたる。彼女の誕生日は、今年はダンスパーティーの日に重なったヴィヴィアンの誕生日の二日後なのだ。

差出人の名前を探してみたが、裏面にも見当たらなかった。文字は印刷したもののように見えた。綺麗にどの字も同じ形をしているのだ。印刷機が使えるということは、上流階級なのだろうか。個人単位での印刷なら、文字を彫った石をインクにつけて一文字ずつやるやり方もあるが、それだって一般家庭に普及しているわけではない。

犯人について様々な思想をめぐらせながら、ヴィヴィアンは足元の血溜りも魔法で一掃し、不気味なカードを持って家に入ろうとした。しかし、玄関をくぐって施錠の結界を通った瞬間、カードは火を放って燃えだす。思わず手を放すと、カードは灰すら残さずに燃え尽きた。空中をゆらゆらと漂いながら落ちていった紙は、床に着く前に跡形もなく消える。

「……、魔力か」

施錠の魔法に弾かれるということは、あのカードが何らかの魔力を持っていたか、あるいは悪質な魔術を使って作られたものだったということだ。非常に大きな面倒事の気配を感じる。ちらりと顔を上げれば、ソファに座って膝に乗せたローザの髪を撫でながら、青白い顔で俯いているナタリアが視界に入る。

「お前、なんか最近身の回りで変なことない？ 洗濯物が盗まれるとか、買い物中に後ろから誰かの気配がするとか、知らない男にじっと見られてるとか。俺に会いに来た日は必ず何か嫌なことが起きるとか」

訊ねながら、正面の二人掛けのソファに乱暴に腰を下ろす。ナタリアは顔をあげ、力なく首を横に振る。

「ないわよそんなこと。町で男の子に声を掛けられるのだっていつもどおりの頻度だし、変な人に絡まれたりもしてないわ。ナンパしてくる人だって、嫌って言えばちゃんといなくなるもの」

ナタリアは非常に人気が高いので、街中に行けば通りを歩いているときによく声を掛けられる。そんな現場にヴィヴィアンと一緒にいると、ヴィヴィアンはナンパ避けの用心棒として利用されたりもする。

悪質な相手に遭遇したことも何度かあって、そのときにはヴィヴィアンが相手をこてんぱんにしたこともあった。もしかすると今回もそういうケースで、しかも相手が魔道士という最悪に厄介なパターンかもしれない。

「そっか。けどお前、やっぱり変な魔道士にストーカーされてるぞ。あのカードも花束も、何か悪質な魔力で作られたものだった」

「こ、怖いこと言わないでよ！」

「事実だからしょうがない。お前はなるべくここを出るな。対策はちゃんと考えるから」

施錠魔法でしっかりと魔力が避けられたこの空間なら、よほど強い魔道士が現れない限り侵入は不可能だ。そんな魔力が近づく気配は空気に感じないし、今のところは大丈夫だと思う。

第三十九話 ついてくる厄介の種

なんだか一気に頭痛の種が増えた気がする。ヴィヴィアンは包帯をいじくりながら、ソファの肘掛に腕を投げ出す。ナタリアはまだ顔色が優れず、時折怯えたように窓の外を見る。

そんな姿を見てみると、どうにかその不安を拭えないものかと真剣に考え出してしまう自分がいてため息が出た。面倒くさいといいつつも、身内に対しては割と献身的になる傾向にあるということには自覚していた。

「ごめんなさい、ヴィヴィアン。面倒ごと、押し付けて」

先ほどのため息をナタリアに対しての苛立ちか呆れだと勘違いしたらしく、彼女はしょげたように俯いた。ヴィヴィアンは首を横に振る。

「確かに面倒。最悪に厄介。けど、それはストーカーに対してで前に対してじゃない」

「あんたにまた頼みごと増やしちゃったわ。またお礼するわね」

「いいよ別に、いつも掃除洗濯食事で世話になってるしお互い様。依頼されて雇われてるわけでもないし、礼とかいらないよ」

そう言ってみれば、ナタリアは嬉しそうに笑った。その飾らない笑顔が可愛いと思う男は多いだろうし、友達として近くにいれば外見だけでなく中身も魅力的だと気づくだろう。そして、彼女とつりあうような男はそう簡単には現れないに違いない。

「ありがとう、ヴィヴィアン」

「買出しは全部ユキノとローザに頼む。一体どうしたんだ、あれは？ 置いてあったのか？」

とりあえず真相に迫ろうと思う。状況が把握できていれば、対策もきちんとできるかもしれない。

あんな気色の悪いメッセージを、犯人はどうやってナタリアにだけ届くよう仕向けたのだろう。ローザが出かけるときにあったなら、

その時点でナタリアの部屋から連絡が来たはずだ。

「そうなの。家を出て、足元にあんな鮮やかな赤い花があったでしょ？ 嫌でも目に留まるじゃない。玄関、出てすぐのところに置いてあって、気持ち悪いメッセージが書いてあって、怖くなったのよ。質感はお花そのものだったけど、匂いがしなくて妙だったし」

肩幅に開いた腿に右肘だけを乗せ、前のめりになるような姿勢で頷きながら聞いてやる。ナタリアは少しだけ落ち着きを取り戻したようで、話を続けた。

「怖くてあんたに見せようと思って、それを持ったままパン屋さんに行ったわ。そこまでは何もなかったの。でも、あんたの家近づいてきたら、急に花が温くなってきて、血の臭いがしてきて」

怖くなったらヴィヴィアンに見せようと思うところがナタリアらしい。ローザだったら真っ先にナタリアを頼るだろうし、エストルやロジェは置いてある花が花でないことをちらりと見ただけで見破ったはずだ。そして自力でなんとかしてしまおうだろう。

「魔法が解けたんだと思う。元々人が動物の血か何かを元に魔法で形作られていたものが、俺の家の結界に近づくに連れて形をとどめておく効果を失ったんだ。俺んち全体が魔よけみたいな感じだからな。持ってきてよかったな、いずれは形がなくなるように作られてたと思うし、部屋なんかに持っていったらたぶん」

びくりと体を竦めるナタリアに、今の推測を言わなければ良かったと後悔した。たぶん、部屋中血塗れになって自分とユキノが昨日つけた血痕が可愛く思えるぐらい汚れたに違いない。そんなことを続けようとしていたが、もう言えなくなった。

「悪い、あんまり考えたくない内容だったな。それで？」

「……ローザが、それどうしたの？ って言ったの。玄関に置いてあったじゃない、あんた気づかなかったの？ って答えた瞬間、花が少しずつ溶けてきたの。チョコレートが溶けるみたいに、あたしの腕にかかっている場所だけが」

「それでローザがあんな顔で固まっていたのか」

最初はローザも信じられなかったに違いない。花が溶けるなんて普通に暮らしていたらまず出くわさない現象だ。

「ええ、そこにあんたが来たのよ」

「ローザは知らなかったってことは、昨日からあったわけじゃないんだな。お前の言うとおり、あんなのが置いてあったら嫌でも気づく」

犯人はまだ近くに潜んでいるのかもしれない。不安げに花束を抱きしめてヴィヴィアンの家に向かうナタリアを、そっと尾行してきて路地裏に隠れていたりするのかもしれない。

そして、ナタリアが男の家に上がりこんだことに腹を立てて攻撃準備をしているのかもしれない。そうしたら自分が出向くからいいが、うかつに彼女を外に出せないと思う。ユキノにも十分気をつけるように言わなければ。彼も一応この家に住んでいる男であり、ストーカーからしてみたら滅すべき敵なのだ。

「あたしたちが家を出たの、たった五分差だったわ。ローザが家を出てから五分以内に、誰かが来て置いていったのよ」

「そうすると近所に住んでるとか、森からお前の家を見張ってるのか」

そして、今も家の窓からこちらを窺っているとか。さすがにこれ以上怖がらせたくなくて口には出さなかったが、ヴィヴィアンはカーテンを閉めたままの窓の方をちらりと見やる。警戒しておくに越したことはない。

「やめてちょうだい、怖くて帰れなくなるわ」

「放っておいてローザやウィル先生やおばさんに被害が無いといいけど」

犯人は近くにいるのだ。こんな早朝からナタリアに気色悪いプレゼントを用意し、彼女の様子を窺っている。そうなれば、彼女の家族だって危険に決まっていた。

「そうよ、新聞で読んだわ。若い女の子をストーカーして、靡いてくれないことに癪癪を起こした男が、女の子の家族を……」

消え入るナタリアの声に続くヴィヴィアンの返事はなく、二人の間に沈黙が下りる。

絶対に避けなければいけない事態だが、こんなことがありえそうだと推測してしまえるのが恐ろしい。最近は魔物の増殖と同時に物騒な事件が増えているらしいし、特に美貌のアイアランド姉妹は気をつけて見張っていないと取り返しのつかないことになるだろう。ローザは基本的に男性すべてを警戒しているし、ロジェがついてるので安心だと思うが、ナタリアは自分がしっかり護衛しないと悪い男にひっかかりそうである。

「ど、どうしましょうっ」

パニックになるナタリアに、とりあえず落ち着けと冷静に声を飛ばす。

「平気だから。大丈夫だから、いざとなったら俺がなんとかしてやる」

「本当？」

泣きそうな声でそう言われ、ヴィヴィアンは即座に頷いた。とりあえず頷いておくしかなかった。

「当たり前だろ。小さい頃からお前んちには色々世話になってる。必ず全員、無傷で守る」

「ねえヴィヴィアン、昨日の魔物も、そいつが仕向けたのかしら」あれだけ強い魔物を操れるような魔道士はこの街にいないだろうが、魔物が自発的に人の少ないアイアランド家を襲いにきたと考えるのも不自然である。近所に八人家族や十二人家族の家がちらほらあるのに、あえて四人家族の、それも一人欠けて三人しか住人のいない家を襲うなんて、何か理由があったに違いない。そして今のところ、魔道士に操られていたという考えが一番しっくりくる気がした。

「可能性はあるな」

「嫌よ……誰なのよこの男、ヴィヴィアンにもユキノにも、大怪我させてっ！許せないわ、最低よ」

「落ち着けって。大丈夫だから」

再び泣きそうになって両手で耳を塞ぐナタリアに、これ以上何と声をかけていいか解らなくなる。とりあえずナタリアの隣に移動して、ぼんぼんと頭を撫でてやれば彼女は少し落ち着いた。

「ヴィヴィアン、風呂あいた」

上のほうから声がして、見ると階段の辺りでユキノが手を振っていた。

「今はいい」

答えると、ユキノは頷いて首に巻いていたタオルを外す。濡れ髪を一つにまとめながら、彼は螺旋階段を降り始める。

「おはよ、ナタリア」

「おはよう、ユキノ」

「どうした？ 元氣ないじゃん。ローザ寝てるし」

ぱたぱたと急いで階段を降りきり、ユキノは簡素な着物の合わせ目を手で直しながらナタリアを覗き込む。ユキノに場所を譲るような形で、ヴィヴィアンは二人掛けソファの方に戻った。

「おきてるよ」

ナタリアの腹側に顔を向けているローザだが、とっくに意識を取り戻していたらしい。ゆっくりと起き上がり、ナタリアの肩に頭を預ける。そんなローザの肩を抱き、ナタリアは再び目を伏せた。

「寝ててもいいのに、徹夜だろ」

不思議そうに訊ね、ナタリアの横顔を覗き込むユキノ。ナタリアは少しだけ顔を上げ、ユキノを見て弱弱しい笑みを見せた。

「寝てもいられない事件が起きたのよ」

「どうした？」

ユキノの声色が一変し、事によっては加害者を斬りかねないと思うほどの緊迫した空気が生まれる。ナタリアはちらりとヴィヴィアンを見た。あの薔薇のことは口に出したくないらしい。仕方なくヴィヴィアンが口を開く。

「こいつ、ストーカーにつけられてるみたいなんだ」

「あの声、やっぱり！」

憤慨したように言いながら、ユキノはまだ湿ったままの髪を簡単に結び上げた。後れ毛の感じがちよつと芸術的だ。

「ということで、昼飯の買出しはお前とローザに頼む。お前一人じや色々不安だし、ローザ一人じゃもつと不安だ。本当は俺も行きたいところだが、ナタリアを一人にしとくわけにもいかないし、施錠が薄まったら困る」

「わかった！ 任しといて」

ユキノは貧血で倒れても自力ですぐ帰ってくるだろうが、一人で行かせては店の場所を見失って帰ってこれなくなるかもしれない。ローザがいればいつも利用する店の場所がしっかりわかるが、彼女を一人で行かせたら悪漢に絡まれそうで怖い。それなら二人で行かせれば、道案内をローザがして、ローザの護衛はユキノがするという形で完璧に収まる。

「ユキノ、お前も気をつけろ。今現在、ナタリアに接触してる男は全員危険だ。この家から出てくるところを見られたら、お前も標的になる可能性が十分にある」

「わかった、気をつける」

ストーカーは今もこの家の外から、どう侵入しようか考えているのかもしれない。施錠魔法で守られているから手出しされないが、この家から出たときが問題だった。

「ローザは女の子だし妹だから大丈夫かもしれないけど、お前を人質にとつて『ナタリアをよこせ』って脅しをかける戦略を使ってくるかもしれない。ユキノから離れるな」

「うん、わかった。ユキノさん、お願いします」

ぺこりと頭を下げるローザに、ユキノは微笑んで頷く。

「任しといて！ あ、けどヴィヴィアン、刀どうしよう」

そう言われて、一瞬何のことか解らなかった。そして一拍置いてから、ユキノが魔物との闘いで刀を失ったことを思い出した。

「……あー。焦げたのか」

「焦げたあと炭になっちゃった。直せるかな」

あれは酷い損傷の仕方だったから、たぶん修復の呪文も完璧に効果を成さない。加えて今はあまり上級な魔法は使えないから、どうしようもないと思う。

「たぶん無理」

ユキノはがつくりと肩を落とした。気の毒だが仕方ない。むしろ、骨董品の刀がよくここまでもったと思う。ユキノの扱いが良かったからなのか、イリナギの刀が元々強く作られているからなのかは解らないが、大したものだ。

「急あつらえだけど仕方ないか…… ローザ、この街で刀売ってる店があつたら教えて」

「う、うん。わかった」

二人の間で約束が成立したのを見計らって、ヴィヴィアンは三人に声をかける。

「それじゃ、朝飯にするか。飯終わったら薬もらうぞ、ローザ」

「うん」

そこでふと気になって、ナタリアの方に視線を送る。

「お前らの分はあるのか？」

「ええ、アルラッドのおじさんがサービスしてくれたわ」

「良かった。それじゃ、焼きたてを貰おうか」

幾分か冷めてはいたが、ほんのりと温かいパンからは良い香りがした。昨日貰ったのと同じサラミを練りこんだパンと、クルミを練りこんだパンの二種類が入っている。

ヴィヴィアンは昨日と同じサラミ入りを選んだ。ユキノは一番最後に選ぶようで、女の子二人の挙動を窺っている。ローザがクルミ入りを、ナタリアがサラミ入りを選ぶ。最後に残ったクルミ入りを手にとって、ユキノは優しい笑顔で姉妹の方を見た。

「ここは安全だから、安心していいよ。俺の師匠が魔法で色んな侵入者を弾いてるから」

そういつてユキノがヴィヴィアンの方を向いてコメントを待って

いるので、とりあえず未だに顔色が悪いままの二人に視線を送る。

「安心しろ。俺が守る」

嘘ではないが、言ったことを後悔した。言ってしまったてからなんだが無性に恥ずかしくなってきた、視線を明後日の方に逃がす。

「カッコいい！ カッコいい今の！ もう一回言ってちょうだいっ」

ナタリアが黄色い声を上げる。ますます恥ずかしくなってヴィヴィアンは乱暴に頭を掻く。

「やだよ恥ずかしい」

「もう一回聞いてみたい」

「ローザまでそういうこと言うのかよ」

とりあえず、怯えた様子の二人が安心してよかった。面倒くさい状況にはなったが、とりあえず朝食を済まそうと思う。

第四十話

ふたたびプレゼント

朝食を終えたので、ローザが持ってきてくれた薬を飲んでソファに凭れていた。半裸のヴィヴィアンを気遣ってかナタリアが部屋からタオルケットを持ってきてくれたので、狭いほうの二人掛けソファの肘掛に頭を乗せ、はみ出した膝から先をぶらぶらさせた状態でタオルケットを被る。左肩は出したまま、主に腰から右胸にかけての場所を斜めに覆った。

「シャツ着られないの？ 包帯が邪魔とか、そういう感じで」

「違う。薬草の汁で染みになるのが面倒。洗濯で臭い落ちなかったら最悪だし」

「まだ痛むのね」

「ああ、じくじくと」

鬱陶しくて意識したくないが、眠りを妨げるくらいには痛みが続いている。苛々するが、したところで痛みが軽くなるわけでもないので余計に苛立つ。

「魔法は使わないの？」

「今の俺が治癒の魔法使ったら、たぶんまた魔法使えなくなる。結構あれって体力使うんだぞ」

基本的に、疲れているときに魔法は使うべきではない。体力の低下に伴って魔法も使う気力がなくなるから、魔力がいくらあったとしても意味が無い。

魔道士がもつ魔力は体力と同じで、基本的な量は人によって異なるし、トレーニングすればもともと持っている基礎力がアップする。そして、使わなければ衰える。使いすぎれば疲れきってしまうので、しばらく休んで回復するか薬に頼るか、さもなくば他の元気な誰かに魔力を分け与えてもらわない限りは魔法が使えなくなる。ヴィヴィアンの場合は基礎力が高いので、疲れきっていても簡単な魔法なら使える。しかし、高度な魔法は今では使えない。

幸いヴィヴィアンの魔力の回復は早いから、午後までゆっくり休めば魔力は昨日までの水準に戻れると思う。今はそれを待つのが一番賢い。

「いくつかあるじゃない、自分の治癒力を使わない方法も」

「治癒力を使わないだけであつて魔力は倍使う。今やったら死ぬる」

「じゃあ他には？」

ナタリアは言いながら、ぐっと身を乗り上げてヴィヴィアンの腹に肘をつく。ちょっと苦しいが、声をかけるのも面倒臭いのでそのままにしておく。

「誰かの治癒力を分けてもらうとか、そういうのだけ」

「あたしの治癒力じゃ役立たないの？」

「試したこと無いからわからないけど、お前に負担がかかるから試すつもりもない」

「気にしないでよそんなことっ！」

憤慨したようにナタリアは眉根を寄せて、ヴィヴィアンの上からどく。そして、床にべったり座り込んでヴィヴィアンに背を向けた。へそを曲げたらしい。

「じゃあ仮に、お前が俺に治癒力を分けてくれたとして。今日の昼飯作るとき、誤って包丁で指切ったらどうなるか教えてやる」

面倒くさくなつてため息をつきながら、ナタリアを横目で見る。「どうなるのよ」

こちらに背を向けたままちらりと肩越しに振り返るナタリアの表情は、かなり不満げだ。ヴィヴィアンは目を閉じ、微妙に強くなつた傷の痛みを恨めしく思いながら呟く。

「失血死」

「嘘！」

まだ怒っている様子のナタリアは、完全にヴィヴィアンに背を向けて膝を抱える。その姿が子供っぽくて、ヴィヴィアンはくすりと小さく笑い声を漏らす。

「何笑ってるのよ馬鹿」

「いや、別に。ちょっと大げさだったかな、死ぬかどうかは傷の程度にもよる。……けど、ずっと血が止まらないんだぞ。普通ならすぐくっつく傷口が、何日も開きっぱなしだ」

ナタリアはなにやら神妙な面持ちでヴィヴィアンを振り返り、目を伏せる。ヴィヴィアンはそんな彼女から目をそらして、天井を見上げる。

脅しではなく本当の話である。たぶんヴィヴィアンも、疲れが取れるまでは回復力が異常に遅くなる。たとえばドアにぶつけて唇を切ったとしたら、不快な血の味が丸三日ぐらいは口の中でし続けるといった具合にだ。今度からは低級な魔物を倒した際に、その魔力を奪って使って傷を治そうと思う。その方が体に負担をかけずに済む。

「怖いわ、それ」

「だろ。だから無闇にそういう魔法使えねえの」

そんな会話をしながら、ヴィヴィアンは頭が痛くなるくらい色々なことを考えていた。ナタリアのストーカーのこともそうだし、これからどうユキノを教育していくか、自分を鍛錬するための修行はどうするか、一週間後に控えたパーティーやそれまでに退治すべき魔物はどうしようか、そんな面倒くさい悩みが久々にたくさん重なって潰れそうになる。

「ユキノは部屋に行ったのか？」

「ううん、貧血が軽くなったからって洗濯してるわよ。ローザはユキノに付き添ってるの。倒れたら師匠に伝えてって、ユキノが頼んだから」

「結構元気そうだなあいつ」

思わずそう言ったが、ナタリアはすぐ首を横に振った。

「空元気よ、見ていてわかるわ。本当は無理させたくないけど、あたし、あんたの傍を離れたくないの。ユキノも病人扱いはやめてほしいって言うし」

別に離れてくれて構わないのに、と言ってしまうのは楽だった。

ただ、そんなにストレートに言ってしまっただけはナタリアが傷つくかもしれない。

「見てて面白いもんでもないだろ」

「心配なのよ」

「ストーカーが？」

「あんたが！ ストーカーはここにいるかぎりこないわ。それに、来たとしてもあんたがいれば平気。あ、気分的な意味よ。あんたの傍にいれば色々安心できるから。別にボロボロのあんたにこれ以上ボロボロになってもらおうだなんて思っただけ、安心して」

たまに彼女の発言が、冗談なのか本音なのかわからなくなるときがある。安心できるとは、一体どういう意味だろう。真っ青な顔で心配だと繰り返し言っていたのは一体どのどいつだったか。あの様子からは、かけらも安心してゐる気配は伝わってこなかったとヴィヴィアンは思う。

「それじゃ、俺がこのままソファで見てたら、お前はストーカーの顔面に華麗な回し蹴りを食らわすことができるよ」

「そういうことよ！ 上手くできたら褒めてちょうだい」

「無理。こゑーから俺逃げる」

「もう！」

ナタリアの反応が面白くて、ヴィヴィアンは暫く笑っていた。実際にストーカーがここにきたら、その顔面に回し蹴りを食らわすのは自分だ。ナタリアの武力行使を見てみたい気もしたが（見たらきつと気分がスカッとするだろう）、そんな危ないことはさせられない。

「パーティーの日が怖いな。お前、俺とずっと一緒にいることになるだろ？ 踊ってる最中なんてずっと腰に手を回してる訳だし。そうしたら、ストーカーは絶対俺のこと消しにかかるぞ」

踊っていないときだって、ナタリアは絶対にヴィヴィアンの腕に細い腕を絡め、楽しそうに喋っているに違いないのだ。そんな姿をストーカーが目撃したら、下手をすればナタリアまで八つ裂きにさ

れかねない。

「そうよ！ 気持ち悪いくらい嫉妬深い男なんだったわ」

ナタリアが白く細い腕で自分の体を抱きしめるようにして、薄気味悪そうに斜め下へ視線を降ろす。

「ストーリーカーが一人ならいいけどな」

眩きながら、ヴィヴィアンは痛む肩に手を伸ばしかけてやめた。

今触ったら、右手に薬草の臭いがつく。

「……やめてちょうだい、怖いわ」

「お前のこと狙ってる奴多いからな。学生の頃からよくあっただろ、ストーリーカーは」

「あんただって数回あったじゃない」

事実だが、どれもナタリアへの被害に比べたら可愛いものだった。学校帰りに待ち伏せしていたり教室でずっと待っていたり、気づいたらヴィヴィアンの私物である、インクの切れた古い万年筆を大事そうに持っていたりするような微妙に気持ち悪い感じのストーリーカーがいたことは事実だが、ナタリアにつきまとう連中とは比べ物にならないくらい穏やかだ。ナタリアへのストーリーカーはとにかく過激な者が多かった。

「馬鹿、お前は数回どころじゃなかったじゃねえか。同時期に三人とか、ストーリーカー同士で闘争が起きたりとか。一緒に死のうとか言い出す奴が現れたときには、どうしようかと思ったよ」

エステルとタッグを組んでストーリーカーにたくさんの制裁を下したが、ナタリアを想う男子は思いのほか多く、気づいたらヴィヴィアンとエステルがいなくても彼らのおかげで自然にストーリーカーが排除されるようになっていた。

まあ、今はその便利なネットワークがなくなったので、ヴィヴィアンが一人でストーリーカーをどうにかしなくてはならないのだが。

「今回はもっと重症よ、あんな狂气的なプレゼントつきだったもの。あれで女の子が喜ぶと思ってるなんてまともじゃないわ！ 一緒に死んでくれっていわれるほうがまだ可愛げがあるじゃない、少なくとも

とも何を考えているかは解るし」

「で、その何考えてるか解らないまともじゃないやつが複数」

「彼らが全員騎士団に捕まって牢屋行きにならない限り、この家から出られないわね」

そうなたらナタリアまで居候することになってしまふのかと割と真面目に考えてしまい、馬鹿らしくなって頭を描いた。

「……面倒くさ」

そうなる前に手を打てば良いというだけの話だ。

少し重たい頭を抱えつつ、ヴィヴィアンはソファから起き上がった。そして、正面のソファに座っていたナタリアを置いて部屋に向かう。

「ちょっと、どこいくのよ！」

「部屋。ちょっと寝る。お前は入ってくんな」

勿論嘘だった。さっそく手を打ちにいくのである。

ヴィヴィアンは階段を上がり、自分の部屋に入ってドアを閉めると、乱暴に椅子に腰かけて机の引き出しを漁った。折れた蝋燭やマツチの空箱、画鋲や釘や軸の折れた万年筆がでてくるが、どれも使えそうにない。机の上に乗せてある棚を探り、小箱の中にひっそりとしまわれた純銀製のアクセサリーをみつけ、ようやく息をついた。

魔よけに銀製のアクセサリーや弾丸を用いることは昔から常識になってるが、どうして効果があるのか解明できた人はいない。ロジェも『研究したい物事リスト』の上のほうにこの大問題を掲げているものの、当然のことながら未だに謎を解明できていない。ただ、今から作ろうとするものに材質はあまり関係なかった。強いて言えば銀で作れば楽だというだけだったが、その銀を見つけられたことがヴィヴィアンは少し嬉しかった。

銀色のリング状のモチーフは直径がヴィヴィアンの人差し指の付け根から爪あたりまでの大きさだ。流れる風のような流線型の模様の上に、古代語の文字が彫られている。表面が少し黒ずんでいるのは手入れを怠っていたからだだろう。これは確か、三年くらい前に父

の知り合いの銀細工師と一緒に作ったものだ。アクセサリーの類はあまりつけないが、銀細工には興味があったので工房に連れて行ってもらった。

「ゴツいし重いから、すぐ外したがるかもな」

苦笑しつつ、ネックレス用の皮ひもを外す。自分が怪我で毎日傍にいてやれないのなら、お守りを作ってやれば良い。そうすれば回復してから彼女につきっきりでいることがなくなるので完璧だ。面倒くさいことを一気に回避できる。

個人単位に効く結界を張れば、魔物はおろか魔力を持った人間も彼女に弾かれるようになる。古代から魔道士の護身のためによく使われた魔法だ。ナタリアの家族に魔法使いはいないから、何も問題はないだろう。

銀を媒介にして守護の術をかけるとなれば、他の材質よりも呪文が少なくて済む。効力がきれるまでにどれくらい時間がかかるかはナタリアの扱いによるだろうが、短く見積もっても二ヶ月くらいは結界を保ちたい。

「……とすると、ちょっと面倒な魔法陣が必要だな」

埃をかぶった魔道書を引っ張り出してくる。エンカンタリア古語で書かれた魔道書だが、古語の読み方は国民全員が学校で習うので特に困ることはない。特に魔道士は語学に堪能でなければいけないから、放課後を利用して図書室に行くなどという実に優等生じみたことをして必死で古語を勉強するのが普通だ。

覚えた古語の使用方法がたとえどんなに不純でも、古語の理解度からいけば優等生なのである。たとえば強い風を吹かせて女子生徒のスカートをめくるとか、体育の授業中に大雪を降らせて授業を中断させるといった魔法がその代表的な使用法にあたる。断っておくが、ヴィヴィアンはただの一度もそんな魔法を使ったことはない。

「えーと、うわ、目次消えかけてる」

触っただけで千切れそうなページを用心してめくりながら、目当ての魔法陣を探す。みつけた図案を眺め、複雑な魔法陣の意図や意

味を考えながら机の上に模写していく。魔法陣を描いたらその中央に護符としたいものを置き、呪文を唱えて完成させるのが手順だ。囁くように呪文を唱え始める。

「レ・ナイン・スイエ・ヴィエリオ・エ・ナタリア……」

呪文の中に守りたい者の名前を入れなければならないのが、この護符魔法の特徴だ。地獄耳のナタリアのことだから、この呪文を普通の声で紡いでいたら絶対に（目を輝かせながら）邪魔しにきたに違いない。

「アス・レナス・ヴァルア・エン・ティス・ダ・ヴィヴィアン・アル・リリエンソール」

最後に魔道士の名前を組み込むことで、魔法が補強される。姓はともかく名前は非常に嫌いな語感なので普段は滅多に口にしないから、ヴィヴィアンにとって自分の名前はもはや呪文の一節としてしか用途が無い。

淡い紫色の光がやわらかに銀細工を包み込み、飲み込まれるように消えていく。呪文が終わったので、ネックレス用の皮ひもを適当に巻きつけてヴィヴィアンはそれをポケットに押し込んだ。少し体がだるいので、食事が出来た時に移動しなくていい一階のソファで寝ようと思う。

階段を降りると、ソファにユキノがいた。降りてくる足音が誰かは見なくてもちゃんと判別できているらしく（驚きだ）、ユキノは振り返りながら迷わず話しかけてくる。

「ヴィヴィアン、早めに買い物行ってきたんだけどいい？ ちょっと遠出して、こないだ聞いた着物の店も見に行きたくて。刀も欲しいし、色々寄り道すると思うから」

「ああ、行って来い。今日は一日休みだし」

頷いてやれば、ユキノは嬉しそうに笑った。

「よし！ ローザ、行こう！」

「うん」

居間の奥のほうで散らばっていた紙などを拾っていたローザは、

ユキノに声を掛けられてすぐに出て行った。玄関を出るときに少しだけ肩越しに振り返り、手を振ってくれる。ヴィヴィアンは微笑して手を振り返した。

思えば、ローザが知り合って間もない男と二人で出かけたことなど今までに一度もなかった。ユキノは相当信頼されているらしい。上のほうで廊下を走る足音がして、どこかの部屋のドアが思いつきり開け放たれる乱暴な音が響く。

「ヴィヴィアン！」

どうやらナタリアがヴィヴィアンの部屋を開けたらしい。しばらく間があり、開いたドアを閉じて廊下の手すりから階段下を覗き込むナタリアがようやく一階のヴィヴィアンに気づいた。

「なんだ、そっちにいたのね」

軽やかに階段を駆け下りてくるナタリアは、エプロンをしてはたきを持っていた。掃除中らしい。

「ちょうど良い。ナタリア、ちょっとここ来い」

「え？ どうしたのよ」

言いながら、ナタリアは階段を降りきってヴィヴィアンの隣に座る。

「長さ。調節しないと」

「何の長さよ」

「紐。たぶん俺のじゃ長い」

きょとんとしているナタリアの長い金髪を片手にまとめ、持ち上げてうなじへと手を持っていく。ポケットからはみ出ていた紐を掴み、彼女の首に回そうとしたところで手が足りないことに気づいた。ナタリアの髪をまとめている右手は動かせないし、左手で器用な動きをすると肩に響く。

「あー、やっぱ面倒くさい。この場で自分でサイズ直してくれ」

ヴィヴィアンは彼女の髪を下ろし、適当に手で整えてやってから左手に握っていたものを差し出した。

「俺からも、ちょっと気が早い誕生日プレゼント。ストーカーに対

抗してみた」

「え？ ……え、ちょっと、何言ってるの」

戸惑うナタリアの手に、体温で少しぬるくなったアクセサリーを握らせた。ナタリアは自分の手を見下ろして固まっている。

「悪いな、そんなのしかなくて。ゴツいから、流行りの細いアクセサリーとかみみたいに気に入ってもらえないと思うけど」

「嬉しい……！」

ナタリアは空いた右手で口許を覆い、左手に握ったアクセサリーとヴィヴィアンの顔とを順に見る。今朝まであれだけ血の気の無かった頬が、今は真っ赤になっていた。

「気に入らなくても絶対毎日つけてろよ。強制。魔道士と魔物を一氣に防げる便利アイテムだから。これをもっとれば、魔道士も魔物もお前に指一本触れられない」

「やだ、何よ、嬉しすぎて頭が真っ白よ！ ありがとう…… 本当にありがとう！ 絶対肌身離さず毎日つけてるわ、ありがとう」

「おう」

ちょっと喜びすぎではないだろうかと思ったが、嘘ではなさそうなのでほっとする。早速首にかけ、皮ひもの長さを調節しはじめるナタリアを見ながら、ヴィヴィアンは小さく欠伸した。

「あんたが誕生日プレゼントくれるなんて、初めてよね。十何年つきあってきて」

嬉しそうに胸元を見下ろして微笑むナタリアに、なんだか照れくさくなってヴィヴィアンは視線をそらした。はたしてその十数年越しの初プレゼントが、面倒ごとを一気に回避できる便利アイテムでいいのだろうかと思っただが、彼女が嬉しそうなので良いとしよう。

「まあな」

「もしかして、手作りだったりする？ だってこれあんたの字じゃない」

「一応。何年か前に銀細工師の知り合いが工房に連れてってくれて」

「凄いいじゃない！ この古語もなかなか好きよ、『未来』を意味するのよね」

習いたての古語が非常に格好良く思えて、字体までばっちりキメて書いた単語が今となっては恥ずかしい。

「やめろそこ突っ込むな、恥ずかしいそういうの」

「いいじゃない、あたしは好きよ」

そういうナタリアが常に笑顔で本当に嬉しそうだから、ヴィヴィアンも少しだけ安堵した。魔物やストーカーに怯えて真っ青な顔をしていたのが嘘のように、彼女は魅力的な笑顔でヴィヴィアンがプレゼントしたお守りを見つめている。

「魔道士じゃないストーカーがいたらそれはエストルに頼んでくれ、紙はいつもの場所。俺は寝る」

彼女に背を向けるようにしてソファに寝転がると、背後からナタリアがヴィヴィアンを覗き込んでくる。

友愛表現として抱きついてきたり乗っかってきたりするのはもう慣れているから構わないが、その柔らかな胸をべったりと密着させてくるのはいかなものかと思う。いや、実はいつも思っている。

『だからお前は無防備なんだよ』と口に出して注意したいが、ことがこただけに言いづらくてただ『離れろ』としか言えない。もしかすると、ヴィヴィアンはナタリアに男として認識されていないのではないだろうか。

そうしているうちにだんだん意識するのも面倒くさくなってきて、最近ではめっきり反応が鈍くなっている。確実にまずいと思う。ヴィヴィアンの方もナタリアを女の子として意識しなくなる日が近づいているのかもしれない。

「ここで寝るの？」

「もう階段上がるの面倒くさいから。飯できたら起こして」

ナタリアは小さくため息をつき、ヴィヴィアンの上からどいた。

そして、寝癖のついた赤毛をくしゃくしゃと撫でてから、元のように撫で付けてくる。

「わかったわ、おやすみ。もう部屋入っていいわよね？ 片付けてくるわ」

「頼んだ」

目を閉じると眼鏡を外される。小さく礼を言うと、近くのテーブルに眼鏡を置いたらしい軽い音がして、その後しばらくしてから部屋の扉を閉める音が聞こえた。

第四十一話 芽吹く厄介の種

食事が出来る前にすっかり目が覚めたのは肩の痛みのせいだけではなく、何やらはしゃぐ声が煩かったからだ。

「つてえ…… 何だよ」

肩を押さえながら起き上がると、ナタリアがこちらを振り返って口許に手を当てる様子がぼんやりとわかった。

「あら、起こしちゃったわね。ごめんなさい」

「ほんと、安眠妨害」

「ごめんヴィヴィアン、たぶん俺のせい」

しばらく聞いていなかったユキノの声がしたので、声がする台所の方を見た。しかし、眼鏡がないのでそう遠くまでは見渡せず、彼の姿はぼんやりと風景に同化していた。

「久々に眼鏡はずしたヴィヴィアンをまともに見たわ。あんたこっちもいけるわね」

「とって」

ナタリアがいるであろう方向に手を伸ばすと、微妙にずれた位置から眼鏡を渡された。かけてみれば、ユキノが台所で水仕事をしているのが見える。

「あれ。服買った？」

ひだのついたロングスカートのような、真っ黒な衣類。こんな奇抜な衣類をユキノは持参していなかったと思う。

「そう。これね、袴っていうんだよ。絶対この方が動きやすいと思って。股引でも問題ないんだけど、道場ではいつもこれだったし。でも自分が持ってたのはみんな丈が間に合わなくなってたから、弟にあげちゃって」

半分くらい話がわからなかったが、とりあえず頷いておく。

「で、何？ ロングスカートに見えるけど」

「スカートじゃないし！ ちゃんと別れてるよ。ほら」

右の腿の外側から布地を引っ張り、ちゃんと両脚が別れていることを見せてからユキノは再び台所のほうへ体を向ける。

「刀もすっかり手に入ったし、ローザには本当に感謝してる！」

「ううん、私もありがとう。これすごく可愛い」

見れば、ローザの手には小さな巾着袋が握られている。若草色の布は表面に縮れたような加工がしてあり（もともとそういう布地なのかもしれない）、イリナらしい画風で鳥や花が描かれていた。

「それ、ユキノがプレゼントしたのか？」

先ほど自分がナタリアに与えたものとは随分と格差があるように感じる。明らかに女の子が喜びそうなものをユキノは選んでいるのだ。ユキノが気配り上手な男であることは知っていたが、女の子の扱いまで上手いとは思っていなかったのだ。なんだか微妙に負けた気がした。負けたからどうこうという問題ではないが。

「そうよ！　それでね、あたしはこれなの」

そういえばなんだかナタリアの髪型が違うと思ってはいたが、まさかかんざしで留めているとは思わなかった。楽しみに頭の後ろを見せるナタリアは、かんざしでその長い金髪を結い上げていたのだ。ユキノのものと違い、赤いガラス玉や布製の造花のついた黒いかんざしは、ナタリアの金髪によく映えている。

「へえ。なんか斬新」

「それってどっちにも取れるわよ、意味」

「褒めてるよ。ね、ヴィヴィアン」

当然だとも言いたげにローザが反論し、ヴィヴィアンをちらりと見た。ヴィヴィアンは頷いて、ナタリアを見上げて微笑む。

「良いよ、それ。似合ってる」

たまには良いだろうと思い、素直に褒めてやった。ナタリアがやれば大体どんなファッションでも似合うのだ。たぶんこの髪型は、ダンスパーティー以降のメルチスの街で流行する。ひょっとしたら街を飛び出し、城下の方まで伝染していくかもしれない。身内鼯鼠などではなく、一般論で彼女は可愛いと思うのだ。

「嬉しいわ！」

満面の笑みを浮かべたナタリアはヴィヴィアンにぎゅっと抱きついてくる。八割くらい予想できていた行為だったから、傷に触れないようにそっと左肩を上げた。

「はいはい、解ったから離れろ。薬草臭いの移るぞ」

ヴィヴィアンの胸板に頬を寄せ、嬉しそうに笑っているナタリアを引き剥がす。彼女は薬草の臭いを気にしていないのだろうか。おまけにヴィヴィアンはまだ上を着ていないのだ。

「パーティーの日、楽しみにしてて！ 絶対いつもより可愛いから、あんた惚れちゃうわよ。とりこにしちゃうんだから」

「はいはい。とかいって、どうせ礼装で集まったカッコいい男たち多数にお前は惚れるんだろ。俺そっちのけでアタック始めたり」

そんなことだからストーカーに絡まれるのだ。後始末をするのはヴィヴィアンなのだし、少しは軽率な言動や行動を控えて欲しい。

「しないわよ馬鹿！ そのためにあたしが当日にあんたをスタイリングして、世界一カッコよくするんじゃない。楽しみで仕方ないの」

「そっか。なら良……くねえよ！ 編み込みだけは絶対嫌だからな」

「ううん、もうちょっと考えるわ。あんた一昨年より髪伸びたもの。どうしようかしら。できたら燕尾を着て欲しいのよね、サイズ合わせようかしら」

「折角礼装買ったのに」

「あら、それならあんたの私物をベースにあたしが手を加えるわ。コサージュは白い百合でどうかしら？ 清楚だし夏らしくて良いじゃない」

あれこれと思索をめぐらせ、楽しそうに同意を求めてくるナタリア。また着せ替え人形にされるのかと思うと、なんだか想像するだけで疲れる。

しかしナタリアにセットしてもらうと、髪も衣装も確かに様になっているので嬉しいのも事実だ。彼女にスタイリングしてもらって

一緒に踊っていれば、曲と曲の合間に可愛い女の子たちに誘われる。満更でもない状況だ。

「ヴィヴィアン、ちょっとテーブルの上使っていない？」

声を掛けられて、食卓を振り返った。ユキノがテーブルの上に風呂敷の包みを置いて、こちらを見ている。

「何するんだ？」

「新しい前掛けにも刺繍するんだ、『comodin』って」

笑みを浮かべて紺色の前掛けを広げて見せるユキノを見て、ナタリアが大声をあげる。

「あーっ！」

「うるせえな何だよ」

「そうだわ、ユキノの礼装を仕立てなおさなきゃいけないんだった！」

「いいじゃねえか明日で」

「今暇じゃない！ 何か服作りたいのよ」

確かにそうだ。仕事が無いし、昼時は未だなので寝ることくらいしかやることはない。そこまで考えて、早急に対処しなければならぬはずの問題を二つくらい思い出した。

「あー…… ユキノ、留守番頼んだ。俺、こいつんち行ってくる。」

外套とか回収してすぐ帰ってくるよ。リビングの血の跡消してこない」と

アイアランド夫人が失神しかねない程の、夥しい血の跡はまだ消していないのだ。早くなんとかしなければ絶対にアイアランド一家にとって不快だろうし、ヴィヴィアンだって不快だ。

「俺も行くよ」

ユキノは風呂敷を解きかけていた手を止め、壁際に立てかけてあった新しい刀を手にする。しかし、ヴィヴィアンは彼を止めた。

「今はうかつに店の外に出ないほうがいい、相手は魔道士だから。まだ貧血だって完全に治ってないだろ？」

「わかった、それじゃローザと仕事してる」

「頼んだ。行くぞ、ナタリア」

ソファの隅の方に丸めてあった服を羽織り、ヴィヴィアンは適当に前のボタンをはめながら玄関のドアを開けた。ナタリアが後ろからついてくる気配がする。

店の脇の路地や正面の酒場のテーブルなど、怪しいところは全てチェックしながらナタリアの手を引いた。そして自分のすぐ右隣の、必ず目が届く場所にるように釘を刺す。

「左側にいると俺、咄嗟に腕動かないかもしれない」

「わかったわ、ちゃんと右側にいる」

お守りをつくってやったとはいえ心配だった。相手は魔道士なのだ。ヴィヴィアンが護符を作ることなど先読みしていて、魔道士でない相手を探してきて誘拐を担当させたりするかもしれない。今のところ嫌な魔力は感じないが、気は抜けない。

日差しはじりじりと肌を刺す。外套の温度調節がない今は、非常に暑くて苛立ちの度合いも増した。ナタリアも暑そうに手で首筋を扇いでいる。

「塾は再開したかしら」

「するって言ってたか？」

「午後から開くって言ってたわ、掃除をしてから」

「そっか」

そんな会話をしながら歩く。心なしか早足になっていたが、ナタリアも早足でついてきた。いつもそうだ。ナタリアと一緒に歩いていると、彼女が必ずヴィヴィアンに歩調をあわせてくれる。

「お母さんも午後に帰ってくるのよ」

嬉しそうにナタリアは言った。街の魔道士たちがたくさんいる場所で守られていたとはいえ、ナタリアの母は魔力もなければ武術の腕もない。安否が心配だったに違いない。

「それじゃ急がないとな」

「あら、あんたもお母さんに会いたいの？」

「ちげえよ、掃除。あんな光景見せるわけにいかない」

人通りの多い道に出る。書店やカフェがある通りだ。路上で髪の毛長い女が敷物を広げ、そこで何かを売っている。この街ではよくある光景だ。

たくさんの人がいる場所に来ると、たくさん魔力の気配も感じる。強すぎるエストルの魔力は彼の自宅方面から感じたし、知り合いの魔道士たちの魔力が混ざり合って空気に満ちている。

これが昼時のピークになると、もっとたくさんの人が街に出てくるから大変なことになる。たくさんの人がいすぎて、魔力も混雑状態になる。人は避ければいいが、魔力は意識して自分で締め出さない限り色々な方向から感じるのだ。あまり外に出たくないと思う理由のひとつがこれだった。

ヴィヴィアンはふと、ひしめきあう魔力の波の中に混ざった馴染み深い魔力の気配に気づいた。極めて至近距離にいるのは、いきつけのカフェのマスターだろう。こうやって魔力を拾い出す感覚は、ちょうど人ごみの中にちらりと知り合いの顔を見つけたような感じに似ている。

「あ。マスター」

ナタリアが呟いた。

復旧の道具や用途不明な石材などを担いであるく男達がたくさんいたが、彼らの間から真っ白い長い髪が時々見える。向こうもヴィヴィアンがいることに空気に伝わる魔力で気づいたようで、ちらりと振り返る。

「おはよう」

マスターは足を止め、ヴィヴィアンとナタリアが来るのを待っていた。

たくさんの人がいる通りだが、その中でも腰まである長い白髪はひととき目立つ。身長はロジェと同じかそれより低そうなほど小さく、加えて白髪なのでマスターは老人に見えがちだ。しかし、近寄ってみれば青年と中年の間ぐらいの年齢がわかる容姿だし、張りのある凛とした声を聞けばすぐに彼が老人で無いとわかる。

もともとは茶髪だったらしいのだが、ある重大な呪文を唱え間違えたことによって全身が燃え、もちろん頭皮もやけどし、それをどうにか治癒呪文で治したら白髪しか生えてこなくなったと聞いた。失敗したのが闇の精霊との契約だとか、死人の蘇生秘術、他人への呪いなど、色々な噂が飛び交っているが本人は固く口を閉ざしている。ヴィヴィアンも深く訊ねるつもりはない。

「久しぶりね、マスター！」

「おはよう、ナタリア」

並んでみるとナタリアのほうが身長が高い。あまりこの二人が一緒にいるところを見ないので、余計に珍しい光景だった。

「買出しですか」

訊ねると、マスターはにこりと笑った。銀のフレームの眼鏡が昼の日差しを跳ね返して輝く。マスターは常に長袖で丈が足首まであるような黒い外套を愛用していて、足元はいつだってふくらはぎまでの皮のブーツだ。絶対に暑そうだが、やはりヴィヴィアンと同じように衣類には温度調節の魔法をかけているらしい。だから一年中同じような格好をしているのに、非常に涼やかなのだ。

「まあそんなところだよ。……怪我をしているようだね」

「解りますか」

「カフェのマスターの鼻を馬鹿にしちゃいけないよ。葉草の匂いで解る。まだ痛むんだろう」

「ええ」

「少し止まりなさい」

マスターはヴィヴィアンの前に立ち、身長が足りないので右手をうんと伸ばしてヴィヴィアンの肩のあたりにかざす。そして彼は、何か小さく呪文を唱えた。系統は治癒の呪文だとわかったが、聞いたことのない呪文だった。疼く痛みがだんだん痺れたようになり、驚いて肩を動かしてみれば痛みはすっかり消えていた。

「あ、ありがとうございます」

「君の治癒力や魔力には手を出さずに、痛みを消し去った。効いて

るかい？」

その言葉にナタリアが反応し、ヴィヴィアンをちらりと見上げる。

「即効でした」

「凄いわマスター！」

「ジュリオスの古語だよ。ここらの魔道士はあまり使わない手段だ」
一瞬だけそれはどこだろうかと首をかしげそうになったが、遠く離れた大陸の小国の存在を思い出す。ヴィヴィアンはその土地の気候や風土がどうなっているのかを少しだけ授業で習った事があるが、ほぼ名前しか知らない。

「マスターは平気ですか」

何しろ今の呪文で痛みがすっかり消えたのだ。ヴィヴィアンは鎖骨あたりをこつこつ叩いてみて、骨への振動が傷に何も害を与えていないことを確かめながらマスターを見下ろした。

「私は動かない魔法が得意なんだ。地味に凄いタイプだよ」

おどけた仕草でそう言って、マスターは笑顔を浮かべた。ヴィヴィアンは微笑を返し、彼に軽く頭を下げた。

「地味じゃなくて普通に凄いです。今度お礼させてください」

「気にしないでくれ。君は大事な常連さんだからね」

「それはお互い様じゃないですか」

マスターが次に向かう店とアイアランド家の方向が同じらしいので、ヴィヴィアンはマスターも一緒にいてもらうことにした。マスターは街一番とは言われないが、本人も言うように動かない魔法が得意なのだ。一緒にいてもえれば、もしもの時にも安心である。

彼には燃え盛る炎を操ったり巨大な水の壁を作ったりするような強さはないが、治癒や音などの魔法にかけてなら自分より凄いとヴィヴィアンは思っている。

「ほう、それでナタリアは変な男につけられているのだね」

ナタリアは早速、今朝起きた事件についてかいつまんでマスターに話していた。言いづらそうな部分はヴィヴィアンが助け舟を出した。マスターは親身に聞きながら、時々何か考え込むような表情で

辺りを見回している。

「怖いよ、文面で脅されたでしょう？ あたしも魔法が使えたら、こんな奴すぐ暴き出して氷の檻に閉じ込めるのに」

「私も力になるよ。パーティーでは音楽担当だから、ホールの一番高いところからダンスを見ていられるんだ。異変があったらすぐヴィヴィアンに伝える」

「心強いわ、マスター」

二人がそんな会話をしているのを聞きながら、ふと足を止める。今、一瞬何か違和感を感じた。

「マスター」

「ああ。ちらりと尻尾を出したね」

違和感の正体は、明らかにこちらに意識を向けている魔力だ。ヴィヴィアンはいつでもナタリアをかばえる体勢で辺りを見回す。視界の端にくすんだ金髪の男が引かかる。彼は路地からひよっこり顔だけ出していたが、ヴィヴィアンと目が合うと慌てて引っ込めた。直感で彼だと判断し、マスターに視線を送る。マスターは無言で軽く頷いてくれた。全速力で彼がいると思われる路地に飛び込む。

第四十二話 刈られる厄介の種

路地の先は袋小路になっていて、逃げ場がなくてあたふたしている金髪の男をすぐに捕らえる事が出来た。

ぼさぼさした金髪によれた服。あまり裕福そうではないが、彼からは魔力を感じる。やはり、魔法使いというよりは魔道士だろう。ヴィヴィアンは彼の胸倉を掴み上げ、その灰色の瞳を覗きこむ。

「おい」

我ながら物騒な声音だ。いつもより何段階低い声が出ているのだろう。

「ひい！」

「ひいじゃねえ、お前に尾行なんて十年早いんだよ。魔道士なめんな」

「ご、ごめんなさい」

「魔力を消していたな？」

自分の魔力をコントロールすることくらいなら誰でも出来るが、一時的とはいえ完璧に魔力を消す事が出来ていたので、彼は非常に器用な魔道士だ。人にもよるが、全神経を張り詰めて意識していないと魔力は完全には消せないのだ。彼の魔力が物凄く微弱なのか、並程度だが物凄く執念深いかのどちらかだと思う。

「は、はい」

「いつからナタリアをつけてた」

「一週間、前から……」

「ずっとか」

「朝も昼も夜もずっと。家の裏の森に隠れて、窓から見えるナタリアを追っていたんだ。外出するときは、後ろから、ついていつて。だから知りたくないのに君のことも知ってる」

一瞬殴ろうかと思ったが、まずはやったことを洗いざらい白状させてからだ。ナタリアへのストーリーカーは当然ながら近いヴィヴィ

アンやユキノや、ひいてはロジェやエストルのことにまで詳しくなるだろう。それがなんだか気持ち悪かった。

「あの花束もお前の仕業だな？」

「……花束？ そんなもののプレゼントする勇氣、僕にはない。ナタリアが君の家に持っていた、あの赤い薔薇だろ？」

「知ってるのか」

「徹夜明けでうとうとしていて、ドアが開く音で起きたんだ。見たらナタリアが、赤い花を持って。それもって何処に行くんだろうと思ってついていったよ。君が家から出てきたからすぐ隠れて、花がどうなったかは見てないけど。ナタリアを怖がらせるなんて最低な男だ」

「犯人はお前じゃないのか」

「僕じゃないよ、僕はナタリアを愛してるからね」

この口ぶりだと、カードの内容が狂氣的なラブレターだったことは知らないようだ。あの花束をナタリアへの完全なるいやがらせと判断しているのは、花束を持ったナタリアの反応をよく見ていて、彼女がかけらも喜んでいる様子がないことを読み取ったからだろう。

「証拠が無いな」

まだ何か聞き出せるかもしれないと思って、彼を探るように見る。彼はまたびくりと体を竦めた。

「本当だよ！ 僕はただ、見てるだけなんだ。ナタリアがあまりにも可愛いから。起きてすぐカーテンを開けるとこも、ネグリジェで窓辺に佇んでるところも。彼女は僕のお姫さまなんだ、高貴すぎて近寄れないけど、見てるだけで幸せなんだ」

あまりにも鳥肌の立つような発言だったので、睨み付けてやった。男は身を竦めて黙り込む。

「じゃあ、あとひとつだけ聞くから真剣に答えろ」

答えによってはっきり脅してから無傷で解放してやるつもりで、ヴィヴィアンは彼に尋ねた。男はごくりと息を呑み、ヴィヴィアンをまっすぐ見つめる。

「ナタリアの入浴シーンを一回でも見たか」

アイアランド家の風呂場には窓があるのだ。カーテンを引いているが薄いので外から見ればきつとシルエツトは丸わかりだし、たまにカーテンが閉まりきっていないときがある。

何故そんなことが解るのかというと、幼い頃によくアイアランド姉妹やエストルたちと泥まみれになって遊んで、風呂場を借りた事があるからだ。しまりきっていないカーテンを閉めたかったが、いつも背が届かなかったことを記憶している。

「ナタリアの、お風呂？」

「ああ」

男は目をしばたき、それから幸福を噛み締めるように頷くと、とろんとした目で笑う。

「生きてて良かったと思った。幸せだよ」

予想もしなかったその表現に、ちよつと殺意が芽生えた。

「あー、そうか」

笑顔で言っただけのぼさぼさの金髪をぐしゃぐしゃなでやり、ヴィイアンは男を見下ろす。男も釣られて一緒に笑っている。

「じゃあ、死んだほうが良かったと思わせてやるな」

男の笑顔が凍りついた。ヴィイアンは彼の髪を鷲掴みにし、死なない程度の雷を食らわせた。そしてぐったりと気を失った彼の後頭部に火花を放った。一度は気を失った男が、意識を取り戻して地面をのたうち始める。

「今度やったらハゲるだけじゃ済まないぞ。目え潰してやるから覚悟しとけ」

「ご、ごめんなさ、ごめんなさいっ」

「二度とナタリアに近づくな」

後頭部に手のひら大のやけどをこしらえ、涙を流しながら男は頷いた。ヴィイアンはちよつとやりすぎたかなと思い、彼の後頭部に魔法で冷たい水をかける。

「いだだだだっ！」

やけどに水はしみるのだった。忘れていた。

彼を放置したままマスターとナタリアのところに戻ってみると、マスターがナタリアを宥めているのが目に入った。

「大丈夫だよ、ちゃんと魔力を感じる。ヴィヴィアンは死んでない」
またロジェとの言い合いと同じ内容を繰り返していたのだろう。

ストーリーカーの近くにナタリアが行くなんて危なすぎるとマスターはわかっていたから、ちゃんと彼女を止めていてくれた。ナタリアもちゃんと学習しているようで、今度ばかりはその場から一步も動こうとしなかった。

「今終わったところだ、よかったね」

彼の言葉と同時にぐらいに、俯いたナタリアの隣に立つ。ナタリアは顔を上げると、いきなり無言でヴィヴィアンの右腕にぎゅっと抱きついた。

「そんな大げさにしなくていい、相手はただのチキン野郎だったし。一週間前からお前をずっと見てたらしいぞ。見てるだけで被害はなさそうだったけど、見てるだけでも結構気持ち悪いからちよつとこらしめといた」

マスターも見ている手前、かなり気まずいので腕を離させながら言った。ナタリアはヴィヴィアンのすぐ横にぴったりとくつつきながら、顔を見上げてくる。

「ありがとう。……見てただけってことは、あの花はどうしたの？」

「違ふみたいだ。あいつ程度の魔力じゃ、俺んちにつくまであんな風に精巧な花の形を保っておけない。ストーリーカーなんだから別のストーリーカーのこともわかるかと思ったら、肝心の犯人は見えてないらしい」

「まだいるのね、気持ち悪いわ」

ナタリアは辺りを見回しながら、ヴィヴィアンに心持ち近寄った。

「もっと強いのがな。絶対一人になるなよ、それと」

「ええ、ちゃんとこれ、つけてるわ」

胸元の銀細工を誇らしげに握り、ナタリアは満面の笑みを浮かべ

ている。

「護符だね。よく考えたものだ」

「本に載ってたの思い出したんです」

苦笑気味に答えながら、ヴィヴィアンはマスターをちらりと見た。面倒ごとを避けるための頭の回転は通常より速い自信がある。

「ヴィヴィアンの手作りなのよ。それだけで効果ありそうだわ」

「ほう。なかなか紳士的なことをするじゃないか」

「面倒ごとを一気にまとめて片付けたかっただけですから」

別に紳士的でもないし優しくもない。ナタリアに万が一のことがあったら嫌なだけだ。完全に自分のエゴである。

「ヴィヴィアン、ありがとう」

「はいはい」

三人で歩いていくと、アイアランド家に到着した。教室で騒ぐ声が聞こえるということは、塾を再開したのだろうか。

そう思って少し塾の方を向けば、教室の大きな窓から中の様子が少し見えた。モップを持ってはしゃぎまわる子供達がたくさんいる。どうやら、生徒達が掃除を手伝っているらしい。

「それでは、私は行くよ」

マスターは微笑んでヴィヴィアンとナタリアに手を振った。ゆったりした袖口がひらひらと揺れる。

「ありがとうございます、マスター」

会釈すると、マスターは肩をすくめる。

「気にしないでくれ。ナタリア、気をつけるんだよ」

「ええ、本当にありがとう！ また遊びに行くわ」

ナタリアが飛び跳ねるような勢いで手を振るので、マスターは呆れたように笑った。そして、白い長髪と外套をなびかせて颯爽と歩いていった。彼の歩く足音が、石畳に軽やかに響く。

「マスターって本当にかっこいいわ」

「独身なのが不思議だな」

「そうね。マスターってどこか壁を作りたがってる雰囲気がある人

だから、女の子もちょっと遠慮しちゃうのかもしれないわ」

「あー」

マスターのことを深く知りたいと思うようになった者は、しばらく彼の雰囲気を探っているうちに諦めてしまうのだろう。確かにマスターには少し壁を感じる時がある。他人と自分との間に、一定の距離をしっかりと保っているのだ。

ヴィヴィアンは無理に踏み込もうとしないし、マスターもこちらに深い詮索はしない。こういう距離感がベストなのだろうと、漠然と思った。

「入りましょう？」

「ああ」

マスターの背中を見えなくなるまで見送った後、ヴィヴィアンはナタリアを追ってアイアランド家の門をくぐった。

ドアを開けて家に入るナタリアだが、居間には誰もいないようだった。血塗れのソファやカーペットはそのまま、乾いて濃くなった血の色に少し吐き気を覚えた。さっさと消してしまうことにして、空中に魔法陣を描く。

呪文をかけた物を綺麗にするという、魔道士の間ではポピュラーな呪文で部屋全体を綺麗にすると、ヴィヴィアンはソファに深く沈みこんだ。なんだかとても疲れた。

ヴィヴィアンを置いて自室に戻ったナタリアは、しばらく降りてこなかった。ヴィヴィアンは外套をどうしようか悩んだが、勝手に他人の家を歩き回るのは何となく嫌だ。いくら相手が幼馴染で、家族ぐるみのつきあいがあるからといっても、そこはわきまえておかなければいけないマナーである。

「おい、ナタリア」

上階に声をかけてみた。しばらく返事が無いから聞こえていなかったのかと思ってもう一度同じ事を言おうとすると、返事がくる。

「もう少し待ってちょうだい！ 荷物が多いのよ」

「手伝おうか」

珍しく自分から働きかけたと思う。しかし、ナタリアは困ったように声を返してくる。

「駄目よ、今すぐく下着が散らかってるもの」
浮かしかけていた腰を思わず深く落ち着けなおした。あのいつでも整然とした部屋に下着が散らかっているとは、一体どういう状況だ。

「やっぱり手伝いに来てちょうだい、探すの」

「やだよ下着散らかってるんだろ」

「あ、あったわ!」

「何がだよ」

「何で布団とシーツの間にあるのよ」

「俺に聞いてどうすんだ」

全くかみ合わない会話を一階のソファと二階のナタリアの部屋との間でかわす。

「ヴィヴィアーン!」

「何」

「ドアが開かないわ」

ヴィヴィアーンは一瞬無言になったが、大きくため息をついて階段を見上げる。

「一旦荷物を全部床に降ろせ。話はそれからだ」

「あー、重たいわ」

言いながらドアを開ける音がした。ヴィヴィアーンは彼女の方をみずに、指先に出来たさかむけを剥いていた。少し失敗して血が出てきたが、治癒の魔法はもう使いたくなかったので軽く口に含んで血を止める。

「俺の外套とユキノの着物は?」

「四時ぐらいに水をきって、干しておいたわ。生乾きだけどここにあるの」

「そうか」

そんな会話をしながら階段を降りてくるナタリアを振り仰ぎ、思

わずヴィヴィアンは頭を抱えなくなった。

「……お前さ、限度ってもんがあるだろ」

いつも遊びに来る時に持ってくるような鞆の他に、大きなトラウクを持ち、更にその上に入りきらなかった外套や着物を積み上げているナタリア。旅行にでも行くつもりなのか。

「だって明日からも入り浸るじゃない。作業がはかどるわ」

「それじゃまるで泊り込むみたいな仕度じゃねえか」

たった一日、暇を潰すための道具がなぜこんなに膨大なことになっているのか。女の考えることはやはり未知である。

第四十三話 おつかい終了

ナタリアは重そうなトランクを階段に置き、ひと息ついてから実
に綺麗な笑顔を浮かべる。

「場合によっては泊り込むわ、あんたたちの片方が急に体調を崩し
て寝込んだりしたら大変だし」

「いくら友達でも女の子を家に泊めるのは無理。送ってくからちゃ
んと帰れよ」

開放的過ぎる彼女に頭痛を感じつつも、階段に置かれた荷物を持
ってやる。

「解ってるわよ。あんたのそういうところ、紳士で良いわ」

そういうところとは、家まで送ることを言っているのか、それと
も今荷物を持ったことに対してなのか。どちらにせよ、ナタリアの
ヴィヴィアンに対する見方は今のところ紳士らしいのでため息をつ
く。

これでもし、泊まっていけと言ってしまったところで彼女の反応
は『紳士なのね』なのだ。彼女の中の紳士の定義はいささかおかし
い。これでは危なっかしくて目が離せないとヴィヴィアンは思う。

「はいはい。お前はもうちょっとレディになれよ」

「大好きな人たちに愛情表現できなくなっちゃうのがレディになる
ことなら、あたし少しくらいはしたなくても構わないわ」

「だからストーカーに絡まれるんだよお前は。隙がありすぎるんだ」
「ここまで解放的なのはヴィヴィアンに対してだけよ。だってあん
た、小さい頃からずっとあたしの大親友だったんじゃない。あんた
に支えられてきたから今のあたしがあるのよ。それが純粋に嬉しい
だけ。あんたにはいつも感謝してるの」

だからといって。そう反論しようと思ったが、不意に言葉に詰ま
った。

幼いままの友愛感情をストレートにぶつけてくるナタリアの存在

は、いつだって眩しい。お互いに何でも知り合っているからこそ、彼女はこんなにも無防備でいられるのだ。

ナタリアにとってヴィヴィアンは最も信頼のおける人物の一人であり、ヴィヴィアンにとってもそうだという、当たり前前の事実が急に見出せた気がした。

「……何よ。何か言いなさいよ」

「やっぱ、ズレてるよな」

普通はそれでも、どこか遠慮がちになったり壁をつくったりして、他人同士という感覚を維持してしまうものだ。どこまで信頼していても、所詮は違う人間なのだから。

しかし、彼女にその考え方は通用しないらしい。それでもし裏切られたらどうするつもりなのか。再起不能なほど傷つくのは目に見えている。

「あたし、可笑しいのかしら」

「いや、そういうこと考えるのって大事だと思う」

自分がそこまで信頼されていることを、少し照れくさく思った。

口に出してありがたいと言うのは恥ずかしいので、何となく言葉を濁す。

「あんたは？ あんたにとって、あたしって何？」

「すっげー微妙な質問」

答えは決まっている、ヴィヴィアンにとってナタリアはなくてはならない友人だ。しかしそんなことは、恥ずかしくて答えづらい。

まさかこんな質問が来るとは思っていなかったから、彼女の真意が純粹な興味なのか、何か悪戯心を含んでいるのか、それすら判断できなくなった。

「お前が俺のことさっきみたいな風に思ってるなら、俺にとっても同じようなもんだと思う」

「何よー！ 濁してない？ その答え方」

「ばれたか」

言ってやると、ナタリアはくすくす笑った。ヴィヴィアンは重い

トランクを左手で持ってみて、本当に何も痛みがないことに感動しながらナタリアの一步先を歩く。

「あたしにとってあんたは凄く大事な人よ」

「おう」

「毎日あんたに会うのが楽しみで仕方ないわ」

「そっか」

「本当に、いつも一緒にいられて嬉しいの」

「ふうん」

何やら嬉しそうなナタリアだが、ヴィヴィアンは半分くらい聞き流している。言葉のひとつひとつが非常に熱烈だが、こんな言動にももう慣れている。

「ちゃんと聞いている？」

「ああ」

「とにかくね、あんたに出会えてよかったっていつも思うのよ」

「……ふうん」

どうして彼女はこうもストレートな感情表現ができるのだろう。これではまるで愛の告白だ。慣れているとはいえ、どう反応して良いか解らなくなる時は往々にしてある。

ナタリアは一旦言葉を切り、ヴィヴィアンの横顔を見上げている。頬に視線を感じてそれがわかった。

「……何だよ？」

「『お前が俺のことさっきみたいな風に思ってるなら、俺にとっても同じようなもんだと思う』、ね。最高に嬉しいわ」

ヴィヴィアンの口調を真似してナタリアはにこりと笑った。一瞬何のことか分からなかったが、すぐにその笑みの意味するところに気がついて、ヴィヴィアンはしまったと心の中で叫ぶ。

「あんたにとってあたしは凄く大事で、毎日会うのが楽しみで仕方なくて、いつも一緒にいられて嬉しい女の子よ！ さっきの質問の答えて、こういうことね！ やったわ、相思相愛！」

一気に恥ずかしくなって、視線を斜めに逃がしながらナタリアの

背中を軽く叩いた。

「痛いじゃない！ 何するのよ」

「何が『痛い』だ調子乗んな馬鹿、お前は発言が痛いんだよ全部」
そう吐き捨てるナタリアはくすくす笑い出す。

「なんだよ」

「ほっぺ赤いわよ」

「うるさい黙れ」

照れ隠しにナタリアの柔らかな金髪をぐしゃぐしゃに掻き乱してやった。ナタリアは文句をいいつも嬉しそうにヴィヴィアンに寄り添う。

「ねえ、寄り道しない？」

長い綺麗な金髪を手櫛で梳きながらナタリアは言う。新緑色の瞳が嬉しそうに輝いていた。彼女は非常に楽しんでいるのだろうが、ヴィヴィアンとしては面倒くさい。

「お前忘れてるだろ、今ストーカーに狙われてるんだぞ」

「あんたがいるから大丈夫よ」

「あのなあ」

「だって久々じゃない、あんたが仕事以外で家から出てきてくれるの」

「店でローザとユキノが留守番してんのか」

うっと言葉に詰まるナタリアに、ヴィヴィアンは少し勝った気分になった。

「外套貸して」

「生乾きよ？」

「だからだろ」

じつとりと湿気た、重たい外套を肩に羽織る。羽織りながら小さく呪文を唱え、水を乾かした。血の色が微妙に抜け切っていなかったが、家に帰ってから消そうと思う。外套の襟の裏に描いておいた魔法陣が温度調節の魔法を担っているのだが、これはなんとか消えずに留まっていた。

ヴィヴィアンは居間の奥にある扉を開け、教室を覗き込んだ。塾生たちが振り返り、楽しそうに手を振ってくる。男子も女子も全員が半ズボンに裸足で掃除をしていた。床には水がまかれ、泡がそこらじゅうに散っている。

「おお、ヴィヴィアン。傷は平気かね」

ウィルフレッドがこちらにやってきた。仕立ての良い上品なスーツのズボンを膝までたくし上げ、彼もまた裸足でモップをかついでいる。

「カフェ・アルティールのマスターに治してもらいました。今はもうなんともありません」

「それでも疲れているだろう。少し休んでいったらどうだね？」

「いえ、ユキノとローザを店においたままなので。居間の血痕を消しに来たんです。とりあえず、綺麗になったことを報告したくて」

「そうか、ありがとう。妻がそろそろ帰ってきてしまうんだ、それまでに塾の方も片づけを終わらせなければ…… レイガン！ モップで人叩いて遊ぶんじゃない！」

すっかり先生の顔に戻ってきたウィルフレッドを見て、ヴィヴィアンは少し安心した。最近では疲弊しきった顔や焦ったような姿しか見ていなかったような気がするから、朗々と響く彼らしい声が懐かしく思えた。

彼に別れを告げてアイアランド家を出る。すると、門を出てすぐのところでアイアランド夫人に会った。

「あら、ヴィヴィアン。遊びに来てくれていたのね、久しぶりじゃない」

波打った髪を肩の辺りでまとめ、スカーフで巻いて留めている髪型はナタリアがすすめたという。彼女は十八歳と十六歳の娘をもつ母親でありながら、若く美しい婦人である。ナタリアはその均等のとれた体型を、ローザはあどけない目元をしっかりと受け継いでいる。「こんにちは」

ウィルフレッドはこの美しい妻に、今でもときめいている。だから

らアイアランド夫妻が二人で一緒にいるところを見ると、ヴィヴィアンは逃げ出したくなる。

ウィルフレッドは、夫人の方をなかなか向けない。しかも、手が触れ合っただけで硬直して瞬きが多くなる。それでも平静を装い、咳払いして無駄にネクタイや襟元を直し始めるウィルフレッド。そんな彼を見ていると、片想いの少年を見ているようでむずがゆい気持ちになるのだ。

「お母さん、おかえりなさい」

「ただいま、ナタリア。ローザは一緒じゃないのね」

「ええ、ヴィヴィアンのお店にいるの。あたしたちは裁縫道具とヴィヴィアンの上着を取りに来たのよ。日が暮れる頃には帰ってくるわ」

ナタリアが言うと、夫人はさっとヴィヴィアンの外套に目を走らせる。

「ウィルが私に帰ってくるなって言った時点で、半分くらい予想はついていたけど。……魔物がきたのね。それで、あなたはその服を。血がついてるじゃない」

「今は魔物よりストーカーが心配です。ナタリアに嫌がらせする魔道士が現れたんで」

答えてやると、夫人は目をしばたいて固まった。

「ストーカーですって？ 人間の」

「そうよ、お母さんも気をつけて。複数いるみたいなの」

「狙われてるのはあなたなのよ、ナタリア。カッコいい男の子についていっちゃ駄目よ」

さすが母親というか、指摘する点は的確だ。ナタリアは優しく微笑んでいる母に対し、少し唇を尖らせてそっぽ向いた。

「失礼ね。いけないわよ、だってここに世界一素敵な男の子がいるもの」

思わずナタリアの方を向くと、いたずらっぽく微笑む彼女と目が合った。

「世界一つていうほど世界知らないだろお前は」

「見て、お母さん。ヴィヴィアンにお守り作ってもらったの」

「恥ずかしいからあんまり人に見せるなよ」

そんなヴィヴィアンとナタリアのやりとりを見て、アイアランド夫人はくすくす笑った。

「いいわね、若くて」

「どういう意味ですかそれ」

「あ、お母さん！今日は私もローザもヴィヴィアンの家で食べるから、ご飯はいいわ」

「夕飯はどうするの？」

「暗くなってから移動するのは危険よね…… あ、ヴィヴィアン、うちに来てちょうだい。送ってくれるついでにご飯も食べていけば良いわ」

「助かる。うちの炊事係は要静養だからな」

アイアランド家の食事は美味しい。ナタリアもローザも夫人もとでも料理が上手なのだ。だからこうして呼ばれる際には、ヴィヴィアンはほぼ断らない。

「ユキノのことね。夕飯の時に聞いたわ」

「あいつが家事ぜんぶやってるんで打撃です」

「それまであなたが一人でやっていたじゃない」

そういえばそうだと思いかけたが、実際はそうでもない。放っておけば洗う物は溜まる一方だし、食材も買いにいけないことが多いことが多かった。掃除や洗濯など論外で、ナタリアが来てくれない日が三日続くと部屋は壊滅的なことになっていた。

「あら、八割あたしが手伝いに行っていたわよ」

「そうだったわね」

返す言葉も無い。思わず苦笑すると、夫人は綺麗な笑みを浮かべて笑い声を漏らした。

「ユキノが待ってるわ、ヴィヴィアン。早く帰りましょう」

ナタリアにそう言われ、ヴィヴィアンは早急に帰らなければいけ

ないことを思い出した。

「そうだな、あんまり外にいと危ないし」

「ナタリアとローザのこと、頼んだわよ。ヴィヴィアン」

「はい。それじゃ、失礼します」

アイアランド家を後にし、ヴィヴィアンはナタリアの重い荷物を片手に提げながら店を目指すのだった。

第四十四話 足掻く魔道士

店に戻る途中も、警戒は怠らずにいた。しかし、特に何事も起こらずに店についた。少し妙だと思う。

「何の気配も視線も感じない」

「さっきあんたがストーカーひとりやつつけたところ、見てたんじやないかしら」

それにしてもおかしい。大体、そのストーカーをやつつける前に他の気配は感じなかったのだし。

「とにかく気をつけろよ。俺が離れたらすぐ狙いにくるかもしれないし」

「大丈夫よ意地でも離れないから」

「何かそれ怖いぞ」

軽口を叩きつつ、店に足を踏み入れる。ドアにローザの字で『本日休業』と書いてある紙が貼ってあった。木箱にも蓋をしてある。

「おかえり！ ヴィヴィアン、ナタリア」

「ただいま、ユキノ！ ローザは？」

ナタリアとユキノが会話するのを横目に見ながら、ヴィヴィアンはソファにどっかり腰を下ろして外套を脱いだ。ユキノはひらひらした袖を肩までたくしあげ、箒を片手に持った状態だった。

「掃除手伝ってくれてるんだ。書斎を含めていくつかの部屋が物置状態だったから、上の部屋をやってもらってる」

「動けるのかお前は」

訊ねてみると、ユキノは頷いて額を手で拭った。この部屋は少し蒸し暑い。ヴィヴィアンは温度調節の魔法をかけようかと思ったが、面倒臭いのでやめた。

「疲れたら休むよ。俺の着物持ってきてくれたんだ」

「ああ」

「ひでえな、染み」

「魔法陣消すみたいになってみるよ、結構とれるぞ。ほら」

ヴィヴィアンは言いながら、ボロボロになった外套の特に染みが濃い部分に手を当てた。そして、ゆっくり右に撫でるように手を動かせば、染みは最初からなかったかのように綺麗な布地が現れる。

元々が黒い布地だったのに、染みが目だった原因は色落ちにあった。完全な漆黒ではないから赤黒い染みが際立っていたのだ。また新品同様に染め上げて、汚れを目立たなくしたいと思う。

「すっげー！」

「後でこれ、もっと黒く染める」

「そうだ。これってさ、窓を修理したときの呪文で元にもどるかな」

「あー。その方が確実かもしれないな」

「やってみる！ 物質名がわかんないな。魔道書は、っと」

ユキノは楽しそうに魔道書を開き、自分の衣類で魔法を試し始めた。ヴィヴィアンは（おそらく外套を繕う役目が無くなったことに対して）微妙に残念そうにしているナタリアをちらりとみて、欠伸びながら外套を渡す。

重たい外套を急に手渡され、ナタリアはきよとしながらヴィヴィアンの方を見た。

「直して。新品みたいな外套だったら、多分俺はまた油断する」

袖が破れた形跡は、しっかり戒めとして残しておきたかった。またこうなりたくなかったら集中して戦えと、そう自分に言い聞かせたいのだ。

ナタリアは一瞬置いて頷いて、嬉しそうに笑った。そして、すっかり染みの消えた外套を小脇に抱えて荷物を開けはじめる。

「いいわ、赤い糸で直してあげる」

「好きにやってくれ」

楽しそうな彼女の様子からすると、直すついでに刺繍でも入れられそう。出来上がりが少し恐ろしい気がするが、彼女の腕は信頼している。絶対に着たくないデザインにはされなと思うので、任せておこうと思う。

ヴィヴィアンは階段を上り、自室のドアをあけた。それと同時に、隣の部屋からローザが出てきた。大量の本を抱え、埃で咽ている。

「……大丈夫か？」

「何年も放ったらかしだったでしょ、この部屋。ナタリアがヴィヴィアンの部屋で鍵をみつけたから、入ってみたら凄いことになってたよ」

放ったらかしというか、鍵を失くして入るのが面倒臭くなって忘れていたのだ。そう反論しようとして、それこそ放ったらかし状態の極みなのだと気づく。

そこはヴィヴィアンに与えられた勉強部屋のはずだった。寝室として与えられた部屋ですべてこなしてしまうので、メインの部屋以外にもいくつがある部屋は、どれも本と埃に埋もれているのが現状だ。リリエンソール家における開かずの間は、おそらく片手で数え切れないほどあると思う。

「ありがとな」

「ううん、いいの。折角たくさん部屋があるのに使わないなんてもったいないよ」

ローザは笑顔で古書を廊下に積み上げ、再び埃まみれの部屋に入っていた。ヴィヴィアンも自分の部屋に入ろうとして、そこでもうやくまともに部屋の内部を見た。

「あー」

床に散らかっているはずのものが無い。机の上に適当に積んであった本がない。見れば見覚えのない本棚がベッドサイドにひとつ出現していて、そこに本がしまわれていた。古さからすると、おそらく父や母の部屋にあった本棚だ。

綺麗すぎる部屋にほんの少し居心地の悪さを感じながら、ヴィヴィアンは椅子に腰掛けた。軽く木の軋む音が耳に心地良い。

適当に本棚から引っ張り出した魔道書を開く。あまり読まない魔道書だ。とりあえずその本の中で一番難しい呪文を読む。

意味はだいたい把握できる。それでも、面倒くさがさが勝っていつ

も途中で逃げてしまう。他にもやり方があるし、そんなに難しいことをしなくてもやっていける。そう考えてしまうのだ。

だから成長しないのだ。自分がこの微妙な位置に留まっている理由は、たぶんそこにある。成長することを拒んでいるのだ。

今のままでも安定しているし、最低限何とかなると、そう根底で思っている。

机に肘をつき、前髪をぐしゃりと掴んだ。不甲斐ない自分に対して苛立ちが生まれる。

「何が安定だ、結局自分ひとり守れやしねえ。このままじゃ誰かが死んでくの、指くわえて見てるだけになるじゃねえか……」

だから、強くなれ。

今のままではどうしようもないということを、思い知ったではないか。

「誰が魔物なんかに、あいつらをくれてやるかよ」

失いたくないという気持ちだけ持って、自分は安全な場所へ逃げる道を選ぶのは卑怯だ。失いたくないのなら守れば良い。単純明快でいちばん面倒臭くない答えだ。

ヴィヴィアンは横目に窓の外を睨む。教会のとながり屋根やロジエの屋敷の土地や、牧場、畑、学校が見える。皆が暮らす、当たり前には平和な街の景色が、ここからなら毎日見えた。

屋根の剥がれ落ちた家や、崩壊した家屋が目立ってきている現在は異常だ。この街全体を守ろうなどという、大それたことは思わない。『街で一番』などという中途半端なプライドも要らない。自分の守りたい人たちを、完全に無傷で守れる強さがあればそれでいいのだ。

ヴィヴィアンは椅子からゆらりと立ち上がり、古びた魔道書から空中へと複雑な魔法陣を模写する。長い長い呪文を唱え、魔法陣に魔力を注ぎ込む。魔法陣から黒い炎が轟音を伴って噴き出した。自分自身の生み出した炎の熱が、肌を焦がしていくように思える。

まだ足りない、これは違う。そう唐突に思った。

炎がしだいに意味のある形を成していく。しかしそこで集中力が途切れ、張り詰めていた熱は全て急速に掻き消える。その場に膝をついて息を荒げ、ヴィヴィアンは俯いた。

無駄なことを考えなかつたら、この魔法は上手く行ったと思う。けれど、闇雲に強い魔法を発動するという行為が無意味だと気づいてしまった。

違うのだ。

強くなるというのは、単にこういう魔法が発動できるということではない。それならば、現にこうして初めて使う複雑な魔法を上手く制御できているヴィヴィアンが、あんな惨めな姿をさらすことなど無かつたはずだ。

集中すれば大体の呪文が一発で使えるというのは、自惚れではなく実際にヴィヴィアンが戦力にしていける潜在力だ。

理解力はある。それは解っている。だから魔道士として、この街で一番の『秀才』でいられた。

問題は別にあるのだ。型どおりの優等生が実戦で役に立たないことは、身をもってわかってきたはずだった。

どうやって訓練するのがいちばん賢く強くなれるのか、ヴィヴィアンは床に寝転がって考え込んだ。

戦術の立て方を鍛えるにはどうしたらいいか。動く敵に狙いを定めるにはどうしたらいいか。俊敏な反応が求められるのに、大事なところで集中力を切らす事が多いのもどうにかしなくてはならない。自分はたくさんの良い素質を持って生まれてきたはずだった。今でもそれらを持ち続けているはずだった。伸ばせばそれらはもっと光るはずなのだ。

「……あー」

こうして考え込むことそがいけないのだろうか。真に強い魔道士は本能的に全てを瞬時に判断し、的確な行動ができるものなのかもしれない。それでは一体、自分はどうしたらいいのか。ヴィヴィアンは考え込み、無意識に指先に炎を絡めながらため息をついた。

「そういうことならさ、ヴィヴィアン」

不意に声をかけられ、体を起こす。エストルの声だ。声は自分のすぐ近くからしているようだったが、彼と会話するための魔法陣は描いた覚えが無い。

「何だよ、急に話しかけてきて」

とりあえず返事をする、エストルは笑いを含んだ声で言った。

「お前があんまりにも殺気立ってるからさ」

「あー」

幼馴染の魔力ぐらい、同じ町にいればすぐに解る。エストルが魔法を使う感じは何度か捉えていたが、いちいち反応するのが面倒で意識の隅に流していた。向こうもそうだと思っていたが、少し事情が違うようだ。

こちらが不意に破壊力の高い難しい魔法を発動しかけたことで、エストルは驚いたらしい。そこから魔力の流れを追って、ヴィヴィアンが何をしようとしていたか探っていたのだろう。

彼なりに心配してくれているから、こうして魔法陣も描かずに声をかけてきたに違いない。魔法陣も呪文も使わないで会話をするなんて、かなり集中力の要ることなのだ。

「とりあえず何か追いつめられてるっぽいってことはわかった。どう？ エストル様が相手してやるけど」

互角の魔道士と戦うことほどいい練習方法はないだろう。そうは思ったものの、何故エストルが急に声をかけてきたのか理由がつかめない。

「どういう風の吹き回しだよ」

「だって暇なんだもん。姉貴も仕事で忙しいし。あとちょっとでダンスパーティーなのに、旅に出るのもなんかあって」

「はいはい。どうせそんなことだろうと思った」

向こうも暇なら利害が一致する。ヴィヴィアンは早速彼を呼ぶことにして会話を終わると、再び床に寝転がった。あまり遠くの町にいとエストルの気配も魔力も希薄にしか感じられなくなるが、近

くにいるとすぐに解る。

魔法陣も使わずに会話をしていたので、魔力を多く使って疲れた。それでなくとも自棄を起こして難しい魔法を使った後なのだ。ヴィヴィアンは天井を見上げたまま、暫く無心で体の力を抜いていた。

「ヴィヴィアン！」

「うわ」

いきなり大声と同時にドアが開き、すねに扉がぶち当たった。こ
うやってナタリアがノックもなしに扉を開けたことはこれが初めて
ではないが、今回はこちらが完全に油断していた。

思わず体を丸めて悶絶し、ヴィヴィアンはドアを開けた張本人に
苛立ちをぶつける。

「痛ってえ！ ノックくらいしろ馬鹿が、痣しばらく消えねえんだ
ぞ！」

「ごめんなさい、でも、お客さんよ。ていうか、あんた何してたの
よ」

床に寝転がるヴィヴィアンを不審げに見ながらナタリアは言った。
ヴィヴィアンは起き上がり、髪を手で適当に直しながら首を鳴らす。

「今日は休業だろ」

「そうなんだけど…… 話し相手になって欲しいんですって」

「は？」

ここを何屋だと思っているんだ、と言いかけたところで、自分が
何でも屋をやっていることを思い出した。しかし、何でも屋だから
といって話し相手になって欲しいなどという依頼をされたことは一
度も無い。

「いいじゃないあんた何でも屋なんだから。嫌ならあたしが引き受
けるわ」

「馬鹿言うなよ、お前は今あんまり外部の知らない人間と関わらな
いほうが良いんだから」

話好きなナタリアなのだ。本来なら喜んで引き受けてもらって、
自分は寝ていたかった。しかし今それをやってしまうと、犯罪者に

友人をくれてやることになりかねない。

「ていうか、もうユキノが半分引き受けてるわ」

その一言で、一気に肩が重くなった。

「おい」

「だってとてもフレンドリーな人なのよ。無下に追い返せないわ」

「……面倒くせ」

仕方ないので薬草の匂いが染み付いた服を着替えることにする。

気分は色々と良くないが、依頼の内容が特殊なので、勝手に引き受けてしまったユキノを責める気にはならなかった。

ボタンに手をかけると、ナタリアは笑みを浮かべて手を振った。

「じゃ、あたしは先に降りてるわね」

「おう」

楽しそうなナタリアを見送りつつ、ヴィヴィアンは大きなため息をついたのだった。

第四十五話 休業中の突飛な依頼

着替えを終えたヴィヴィアンは、客人の前に出ても恥ずかしくないような格好で部屋を出た。

階段の傍までくると、依頼主がソファでくつろいでいるのが見える。

「どうも」

声をかけると、彼が振り返った。灰色のオールバックに細面、全体的に細いという形容詞の似合う容姿。小柄で青白い、外国人の男だ。

印象が強かったし、最近の客だから覚えている。しかし、名前は何と言っただろうか。

「ああ、リリエンソールさん。休業中にわざわざすみませんねえ」

外見的には冷たそうだが、気さくで人の良さそうな感じのする喋り方をする男だ。彼は前に見たときと同じ、鮮やかな青の布で作られた東国風の服を着ている。ユキノとはまた違った雰囲気、東国らしい字を書く人だったことを思い出す。

「えっと…… ジーイエさん」

記憶の隅に引っかかっていた名前を思い出して呼んでみると、ジーイエは細面に柔らかく微笑を浮かべて首を横に振る。

「良いですよ、呼び捨てで。覚えていてくれたのですね」

「それで、今日は何の依頼ですか」

「ただお話がしたかったただけなんですよ。魔物のおかげで、私の家の近くもすっかり寂しくなっちゃった」

「あの辺はもともと人が少ないですからね」

「ヴィヴィアン、お茶は？」

ナタリアがそう言って、食器棚を開ける。ヴィヴィアンは首を横に振った。

「切らしてる。そんな高級品いつでも備わってるほどうちは潤って

ない」

「持参していますよ。どうですか、ティータイム」

そう言われてジーイエの方を見る。ジーイエは持っていた小さな包みの中から、ガラス製の洒落た容器を取り出した。中には三分の二ほど茶葉が詰まっている。

「それじゃあ、お湯沸かしてきます」

ユキノがそう言ってすぐに立ち上がり、ジーイエに微笑みかけてから台所へ向かう。そんな彼の背中に向かって、ヴィヴィアンは声をかける。

「ポットは三段目」

すると、ジーイエがさらに続けて声をかけた。

「見たところ、あなたはイリナギの方ですね。イリナギ流に淹れて下さいな」

「茶葉の種類はなんですか」

「ホアリーウェイの高原種です。淹れ方にとくにコツは要りませんよ。いい香りがします」

「そうですね、瓶あけたとたんに香りが漂ってきましたから」

同じ東国地方の出身同士、彼らはすぐに打ち解けたのかもしれない。ユキノもジーイエも会うのが二度目だとは思えないぐらいに普通に会話をしていた。

もともとユキノは社交的だし、ジーイエのことは完全に親しいご近所さん扱いなのだろう。長い旅をしてたどり着いた異国で、自分の故郷と近い国の人間に出会うことなど確かにあまりないと思う。

「すっげー懐かしい！ ヴィヴィアン、お茶！」

「はいはい」

様子からするとどうやら淹れ終わったらしい。適当に反応しておくと、ナタリアが軽く疑問の声をあげた。

「あら？ お茶ってふつうもう少し茶色っていうか、紅色に近いものよね」

「え？ ふつうこの色じゃない？」

また出た、東洋文化。

そう思いながらヴィヴィアンはユキノの方をちらりと見やる。ローザが盆（こんなものがうちにあったのかと思うような豪華な細工がしてあった。どうやらどこかに仕舞いこまれていたらしい）にポットとティーカップを載せて運んできながら微笑む。

「知ってる。これ、緑茶って言うんでしょ。まえに和物堂のお姉さんが言ってたよ」

「そっか、こっちだと紅茶が主流なんだ」

「聡明ですね、ユキノ。貴方は色々なものごとを知っていらっしやる」

「そんなことないですよ。人より書物に触れる機会が多かっただけです」

困ったように笑いながらユキノはソファの端のほうに腰を下ろす。ヴィヴィアンの座る二人掛けソファの右隣にはナタリアがいて、正面の広いソファの端にユキノ、真ん中にジーイエがいる。ローザは客人の隣に座ることに抵抗があるのか、少し戸惑っていた。

「ああ、すみません。お嬢さん」

ジーイエはそう言いながらユキノの方へ少しつめた。ローザはかなり困惑しているようだったが、空けられた席に素直に腰を下ろす。それでも袖が触れ合わないように、ソファからはみ出しそうな位置に彼女は座っていた。

あまり気にした様子もなく、ジーイエは会話を続ける。

「貴方のお店は面白い。いたるところに魔法のしかけがありますね」

「はあ、ありがとうございます」

「お庭も美しいですね」

「あれは友達が時々手入れしていくんです、植物が好きな奴がいて」
彼との会話を面倒くさいと思わないでもなかった。ヴィヴィアンはもともと人と会話をすることがそれほど好きなのではない。特に営業トークは疲れるし、相手に気を遣うのが面倒だ。別に会話が嫌いだというわけではないが、できれば必要最低限に留めたいと思

ってしまうのが本心だった。

ジーイェは楽しげに喋る。ユキノやナタリアがそんな彼に相槌をうち、会話を発展させていく。

「静かですよ、あの辺りは」

「静かすぎるんじゃないかしら。魔物も多いでしょ」

「私は平気ですよ。リリエンスールさんに家を直してもらいましたから」

「本当にあれだけで平気だったんですか。他にも色々直すべきところがあったような気がするんですが」

そもそもあんな場所に住むべきではないとやはり思う。無理にでも住むとしたら、あれは絶対に家を建て直した方がいいレベルだ。

ヴィヴィアンは足を組み、膝の上に肘を乗つけて頬杖をついた。ジーイェは相変わらず快活に笑いながら、顔の前で小さく手を振ってみせる。

「ええ、大丈夫です。小さい魔物なんてね、ハエたたきで撃退できるものだから。あの穴から入ってこられるような魔物となると話は別ですが」

「あはは、強いねジーイェ」

「お前ほんとに馴れ馴れしいな」

「いいんですよ、リリエンスールさん」

ナタリアは本当にすぐに他人と打ち解ける。彼女のフレンドリーさは他に類を見ない。出会ってたった十分足らずの相手をもう友達と同程度に扱っている辺り、この子はやはり無防備すぎるとヴィヴィアンは思う。

別に警戒しているわけではないが、万が一のことだってありえるではないか。ジーイェはストーカーと内通していて、客という立場を利用して堂々とナタリアの様子を探りにきているとか。

「お嬢さんのお名前は？」

「あたし？ ナタリア・アイランドよ」

ジーイェはとても穏やかな笑みを浮かべた。そんな表情を見てい

れば、最初に感じた神経質で冷たそうな印象はどんどんやわらいでいく。

「ナタリア。貴女は本当に美しい。リリエンスールさんが羨ましいですよ」

「なんで俺が羨ましいんですか」

ちらりと彼の方を見てみれば、ジーイエはにこやかな表情のままイタズラっぽく言う。

「え、だって貴方達、恋人同士じゃないんですか」

「違います」

九割予想できた問いだったので即答できた。ナタリアは不服そうにヴィヴィアンをちらりと見やり、ジーイエは声を上げて笑った。

「残念。美男美女の素敵なカップルだと思ったんですが。ということとは、私にもチャンスはあるということですね？」

「意外とそいつ、誰にも靡かないところありますよ。だってお前彼氏いたことあった？」

「ないわ、一度も」

笑顔で答えるナタリアに、ジーイエが意外そうな表情を見せる。

誰とでも話すフレンドリーな彼女がまだ誰とも恋仲になったことがないだなんて、ユキノも思わなかったらしい。彼もまた、驚いたような感心したような微妙な反応を見せていた。

「ナタリアらしいよ」

微笑みながらユキノが言った。ナタリアは綺麗な笑顔を浮かべて深く頷く。

「意外ですね。リリエンスールさんとは本当に仲が良さそうですから、てっきり付き合っているんだと思っていましたよ」

「ヴィヴィアンが彼氏だったら絶対ここに住み込んでるわ。だってこの人、放っておくと洗い物も洗濯物も溜まり放題なのよ」

「うっさい黙れ」

「あはは。良い奥さんじゃないですか」

「俺結婚とかしません。面倒くさいんで」

ちなみに、法律的には結婚は何歳からでもできる。両親の許諾さえあれば、生まれた瞬間から夫婦になることもできるのだ。役所に届け出る際に未成年なら親の許諾が必要だが、成人していれば本人達の合意のみで問題ない。親の同意すら得ずに結婚できるのだ。

「ジーイェは奥さんいないの？」

「いいえ、まだ一人身ですよ」

ナタリアは意外そうに頷きながら、ティーカップに口をつける。

「よく考えろよ、妻がいるのにさっきの発言はまずいだろ。チャンスはあるって」

「あはは、その通りです。私は一途ですよ、とてもね」

ジーイェはにこりと笑みを浮かべた。本当に人の良い笑みだ。

「いいことだわ！ 浮気性ってどうなのかしら。あたしなら許せないわ」

くるくる変わるナタリアの表情が本当に面白い。けれど、こんなに感情表現がストレートなのだから絶対に悩みなどないだろうと言っていると、彼女は決まって機嫌を悪くする。対照的にローザは考えたことを絶対に口に出さないし、女子の考えることは解らないとヴィヴィアンは常々思うのだった。

ジーイェはこんなにテンションの高いナタリアの話に全く疲れた様子も見せず、すするようにして茶を飲んでいる。初対面のくせに馴れ馴れしいナタリアを全く害とは思わないようで、むしろ関わりあうことに積極的だとすらいえた。神経質そうに見える外見からは想像がつかなかったが、心の広い人なのだろうとヴィヴィアンは思う。もしくは、女子の扱いが得意なのか。

「そういえば知っていますか。この街にも塩樽を持った王宮騎士団が来るそうですよ」

「ああ、噂には聞きました」

「俺も、ヴィヴィアンと別行動してるときに聞いた」

ユキノの耳にも入るぐらいなのだからかなりの噂なのだろう。そう思いながらナタリアの方をちらりと見ると、彼女は首を傾げた。

「何よそれ、聞いたことないわ」

意外といえば意外だが、あまりナタリアの興味を引きそうな話題でもないで知らない方が当たり前かもしれない。彼女は何をさせても両極端なので、興味を持たないときはとことん無関心のままなのだ。

ヴィヴィアンは首の後ろに髪をまとめ、服の中に入っていた髪を引っ張り出してからまた髪を下ろす。

「正味百キロの塩樽を持って、王宮騎士団が色んな街を徘徊してるらしい。エストルの姉貴が戻ってきたのもそのせいかな」

先ほどから少し蒸し暑い。魔法で部屋を冷やそうかとも思ったが、何となく面倒くさいのでやめた。

「忘れたの、ヴィヴィアン？ エミリアは毎年この時期になると戻ってくるじゃない。ダンスパーティーの前後の一週間ずつの間はここにいるわ」

「あー、全然覚えてねえ」

そう言いながらも、思えばダンスパーティーの前後に必ずあの放浪癖が街に戻ってくることを思い出した。おそらく姉が定期的にここに戻ってくるから、エストルもその時期を狙って帰ってくるのだろう。

「その塩樽、何に使うんですか？」

来ると言った割には遅いエストルの魔力をまだ遠くの方で感じながら、ヴィヴィアンはユキノの方を向く。ユキノは澄んだ青い目で、隣のジーイエをじっと見ていた。

「あれはですね、秤に使うんですよ。秤の片方に載せて、もう片方に人間を載せる」

「体重を量るにしては重すぎませんか？ 俺たちよりしつかりした体格の、エンカンタリア人を量って回るっていうのを差し引いても」

塩樽を越える体重の者など、東国には存在しないに違いないとヴィヴィアンは思った。エンカンタリアでも貧富の差が激しいために裕福な階級の者達以外は皆やせ細っているが、元々の体格がジーイ

エたちほど華奢ではない。

「だからですよ。塩樽一つを越える重さの人間を探し出すんです」

「……何故ですか」

思わず口を挟んでいた。美しいものばかりを好み、優雅なものを追い求める気障な騎士たちが何故巨漢を探し出すのだろう。騎士団にしているのは貧しい市民達の髪の色や体型をからかい、自分達は良い香りの整髪料でいつでも綺麗な髪形をキープしているような連中ばかりなのだ。

まさか探し出した塩樽並みの体重の者を、醜いという理由だけで処刑したりするのだろうか。奴らならやりかねないとヴィヴィアンは思う。

「あくまで全部噂ですがね。何でも騎士団の連中は、その塩樽より重たい人間を城に連れ帰り……魔物の餌にするそうです」

ジーイエは呟くように言った。ナタリアが悲鳴を飲み込むような声を出し、ローザが固まる。

想像とまったく違う言葉にヴィヴィアンは一瞬息をのんだ。ユキノがその青い目に嫌悪感のようなものを浮かべ、ジーイエをちらりと見やる。

「つまり、城で魔物を飼っているってことですか」

「ええ。酒場の連中がその話題で持ちきりでしたよ」

ジーイエは細い目をこちらに向けた。ヴィヴィアンはそうなんですかと適当に相槌を打ち、少し考えた。

城で魔物を飼う？ ついにエンカンタリア国王も頭がいかれたのか。

「怖いわ、それが本当だとしたら、王様は魔物をどうするつもりなのかしら」

「飼いならす事が可能だったら兵器にするのかもな」

思いつきで言ってみたが、そもそもそんな危険なことを王のいる城でできるはずがない。だとしたらやはり、塩樽を持って徘徊する理由は別にあるのだろう。

「何よそれ、残酷じゃない！」

「ああ、人の道に背いてるよ」

ナタリアの悲鳴に似た叫びに頷き、ユキノが憤慨したように呟く。
「ローザ？」

真っ青な顔のローザが少しふらつき、ソファの肘掛にしなだれかかる。ヴィヴィアンは咄嗟に立ち上がったが、ソファから崩れ落ちるように倒れたローザを抱きとめたのはユキノの方が早かった。

「ごめんなさい、ユキノさん……」

こちらには聞き取れないような声で、ローザはユキノの耳元に何か囁いた。ユキノは小さく頷くと、ローザを支えて立ち上がる。そのまま何処かへ行くこうとするので、ヴィヴィアンは彼に歩み寄り、呼び止めようとした。

「おい、ユキノ」

「ヴィヴィアン、ちょっと行ってくる。お客さんのおもてなしを続けていて」

ユキノに間髪いれずにそう言われ、なおかつローザが弱弱しい表情でこちらを一瞥するのでヴィヴィアンも頷くしかなかった。

「すみませんジイーエさん、少し体調が優れないようですから。失礼します」

やはり二の句を継がずさういうと、ユキノはローザの細い体をひょいと抱き上げて階段を上っていった。

「お大事に」

ユキノの背中に向かって、ジイーエが心配そうに呟いた。見上げれば、階段を上りきったユキノの緊迫した横顔がちらりと見えた。

「どうしたのかしら」

ナタリアがずっとソファに腰を降ろす。ヴィヴィアンが咄嗟に動いた時、ナタリアも席を立てていたらしい。ユキノの剣幕やぐつたりしたローザのおかげで周りが目に入っていなかった。

「おそらく、俺たちが無理させたせいだ。ここのところずっと心配かけてばかりだったし」

「夏風邪かもしれませんね。私の友人もかかってしまったと手紙をよこしました。数日で治るそうですが、栄養の多いものをたくさん摂らなければ良くなりません」

「そうなんですか」

「私もそろそろ帰ったほうがよいですね。あの優しいお嬢さんには、安静にしていたいただきたいですから」

ジーイェはソファから立ち上がり、鮮やかな青の衣類を少し整える。そして、ソファから離れて玄関の方へ向かっていく。

「すみません、何だか」

「いえいえ。お代です、楽しいひと時をありがとうございました」

「はあ、ありがとうございます」

ジーイェはヴィヴィアンの手銀貨を四枚握らせて、軽く手を振って去る。テーブルに置きっぱなしの茶葉の瓶も、彼は『あのお嬢さんに栄養をつけてあげて下さいな』などと言って置いて行った。

早足で背中を丸めるようにして歩いていく姿は、昼時の雑踏に紛れて消えていく。

ヴィヴィアンは途中まで送ろうかとも思ったが、見送るだけに留まった。まだナタリアのストーカー問題が片付いてないのだ。おまけにローザが不調で、ユキノは彼女につきっきりだ。もし何かあったら困る。

「ヴィヴィアン」

声をかけられて振り返ると、ユキノが少し離れたところに立っていた。

「ローザの具合は？」

「寝てるよ。今、ナタリアが様子を見に行ってる」

「どうしたんだよ、何か切羽詰った顔してたけど」

そう問いかければ、ユキノは少しくろたえた。

「そりゃ、だってローザ、死にそうな声で言うんだもん」

「なんだよ」

「とにかくお客さんから離れたい、ってさ」

思えば最初から、ローザはとても居心地が悪そうにしていた。相手があのジーエエなのだ。失礼な言い方だが、彼は人相が悪い。そのうえ見知らぬ外国人なのだから、人見知りの激しいローザは緊張しどおしだったに違いない。

「……あいつ本当にダメだな、知らない人」

「知らない人の前で倒れたりとか、ローザには耐えられなかったんだよ。不眠の疲れも溜まってただろうし、ゆっくり休ませてやろう」「そうだな。お前とナタリアがいれば安心だ。俺はエストルが来るまでここで待ってるよ」

「エストル来るの？」

「ああ。魔法の練習に付き合ってくれる」

何気なくそういうと、ユキノがにわかに関心を輝かせる。

「俺も一緒に練習したい！」

「だめだ、お前はまだ本調子じゃないだろ。まあ、それ言ったら俺もだけど」

「師匠」

取りすがってくるユキノに苦笑しながら、ヴィヴィアンは首を横に振る。

「倒れても運んでやらないし、魔力が枯れたら完全復帰までかなり時間かかるぞ。休んでろ」

ユキノはまだ何か言いたそうにしていたが、小さくため息をついてうなずいた。

「……わかった。じゃあ、窓から見学してる」

「そうしとけ。あ、飯よろしく」

「わかった」

ユキノは踵を返してキッチンへ向かい、ヴィヴィアンはソファにどざりと腰を下ろした。あの放浪癖は数分もしないうちにここにくるだろう。魔力で解る。

第四十六話 放浪癖の来訪

花の香りのする魔力が近づいてきたと思ったら、ノックもなしにドアが開く。基本的になにに人間が招き入れない限りは入ってこられない仕組みになっているが、友人ならば話は別だ。立ち上がって振り返る。

アイボリーの外套の薄い裾を軽やかになびかせ、颯爽と歩くエストルの姿が目に入った。嬉しそうなその青い瞳を見て、この男は本当に暇だったに違いないと確信する。

「いらっしやい、エステル。何か飲む？」

ユキノがキッチンの方からエステルに声をかける。水の音がするということは、洗い物でもしているのだろう。エステルは楽しげな表情のまま、頭の後ろで両手を組んでちらりとヴィヴィアンを見やる。

「あんの？ この家に飲み物とか」

からかうように言い、エステルはそのままヴィヴィアンの正面のソファに適当に座った。直後、ほどよく筋肉質だが重量感があまり感じられないその体躯が、行儀悪くソファに投げ出される。

「失礼な。水くらいある」

「お茶もあるよ、さっきジーイエさんがくれたから」

反論すればユキノからもそう声がかかり、エステルは意外そうな表情をしたあと口の端に薄く笑みを浮かべた。

「へー。ちょっと景気が上向いた感じか」

「おかげさまでな」

「主にユキノのおかげだろ、見た感じ」

「主にユキノのせいで俺は魔力の鍛えなおしを余儀なくされている訳なんだが」

エステルは軽く声を上げて笑う。本当に楽しそうだ。彼は今座っているソファをすっかり私物だと思っているらしく、飛び出た糸を

引っ張ったり縫い目をさりげなくいじって遊んだりしている。

じっと視線で咎めると、彼は白い歯を除かせて悪気のない笑みを浮かべた。

別にソファの糸をちぎられたところで生活に支障はないが、見栄えが悪くなると接客の時に問題が出てくる。

「ナタリアは？」

「いるよ、上。あいつ今ストーリーカーに狙われてるから、とりあえず俺の目の届くところに置いてる」

からかわれることも覚悟していた。しかしエステルは笑みを消し、目の上にかかる亜麻色の髪を払いのけながら虚空を見つめている。

「……ストーリーカー、ねえ」

「何だよ」

「いや、何でもない。直接関係ないだろうから」

この放浪癖が真剣に何か考えているとき、事態は必ず厄介な方向に向かうのだ。へらへらしているようで勘が鋭いエストルのことなのだ、何か悪い噂や情報を知っているに違いない。

「知りえる情報は全部知つときたい。言ってくれ」

口をつぐんだエステルはしばらく黙っていたが、やがて空色の眼をやや伏せるようにして話し出す。

「何となく気になってるんだよ、姉貴たちが何で急に忙しくなったのか。塩樽を持って徘徊して誰かを探し出そうとしていたり、街の詰め所に姉貴も含めて十人以上の騎士が配備されていたり、最近の騎士団は様子がおかしい」

「それは知らなかった。あっち方面は避けて通るようにしてるから」
通常一人か二人程度の騎士団が、まさか五倍以上に膨れ上がっているとは。それは流石に知らなかった。というか、外からの情報あまり入ってこない状態だったのだから無理もない。

「市場の監視が厳しくなった。ちよつとでもヤバイものを取り扱っている店主は拘留。あとは、浮浪者を次々に捕らえて街の地下牢に閉じ込めてるだとか、住民名簿にない人間を片っ端から探し出して

るとか…… そんなところか。ストーカーって聞いて、それじゃあ
そいつも騎士団の回収対象になるのかなって思った。なんでもここ
数日、この街じゃ軽犯罪でも地下牢行きらしいからな」

名簿。そうだ、自分の成人手続きのかたわら、ユキノの住民登録
をなんとかしなければ、彼も回収対象だ。そんなことを考えながら、
軽く頷く。

明日あたり役所に向かおう。このエンカンタリアでは異邦人への
待遇が周囲の諸国に比べて若干ゆるいため、『留学生』などとして
おけば何とかなるだろう。

「目的が不明瞭だな」

今の時点では、まったく見当がつかない。ただひとついえるのは、
国家ぐるみの大事に成り得る勢いの厄介ごとが、その辺に転がって
いるということだ。ヴィヴィアンは視線を斜め下に下ろす。

「全くだ。触れ書きが出たわけでもない」

「絶対何か良くないもんが近づいてるぞ」

「そうだろうな。何もなきやいいけど、とばっちり受けそうな気配
だと思わねえ？」

頷いて顔を上げると、エストルの顔にいつもの気楽な笑みは浮か
んでいなかった。ヴィヴィアンは右ひざの上で組んだ指に視線を落
とす。

「まったくだ…… 魔道士は一番に厄介がられる」

「そして魔道士も騎士団が一番厄介な連中だと思ってる。そうだ」
「なんだ？」

思い出したように手を打つエストルに、視線を送ってみる。彼は
膝の上にひじを立て、優雅な曲線を描く細いあごをその長い指の上
に乗せながら話し出す。

「王宮騎士団に魔導部隊を作る計画があるらしい。魔導大臣や国王
軍の魔導部隊とは別に、地方にも配備する大部隊を作りたいという
要望だ。国家のお偉いさんがそう言ったんだろいうな」

「ふうん。国王軍の魔導部隊って、あの少数精鋭の」

要はボディガードのようなものだ。強い魔導師は選りすぐられ、国王軍に入れられる。地方出身でもこの魔道部隊に入ることができ、圧倒的に首都出身のものが多くと聞く。

「軍ってというか、国王警護のための連中な」

エステルから訂正が入る。そのとおりだ。

主に国王のそばで働く人々だから、洗練された都会の人間にしか勤まらないというのが一般的な認識である。魔道部隊の入隊テストを受けてみないかという誘いが来たことは昔あったが、ヴィヴィアンは即答で断った。絶対面倒くさいに決まっているのだし。

「王のために結界張ったり魔よけしたり、四六時中そんなんばっかだろ。ご苦労だよな」

「けど待遇は大臣と一緒にだからな、給料にしても社会的地位にしても」

安定した楽な暮らしができることは間違いないのだ。けれど、昼夜ずっと王のそばで結界を張り続け、王のためだけに魔法を使う状況は考えられない。

「俺はそういうのパス。どうせなら楽しく魔法使いたいじゃん」

「面倒臭いのが嫌なんだろう。でも俺もパス。国家のために、とか王様がどうか、俺には関係ないし」

「お前の場合は放浪でできなくなったらアウトだしな」

「そ。誰にも縛られたくねえの。俺らむかないよな、公職」

エステルはにやりと笑った。ヴィヴィアンも軽く声を上げて笑う。

「公職どころかお前の場合には職についてねえし」

「さすらいながらちゃんと働いてるって。いつか永住できそうなところ見つけたら、そこで花屋でもやるよ。副業で美容室。いいんじゃない？ 俺らしくて」

「へえ。永住する気あんのか」

それは本当に意外だった。彼のことから一生どこにも根を張らず、お気に入りの種子だけ連れて放浪し続けるのだと思っていたのに。

「いつまでも旅ばかりじゃ疲れるしな。帰ってくるところって大事だよ」

「けど、女はとっかえひっかえだろ」

「俺は女の子に優しいの。好きになってくれたんなら、答えないと失礼だろ？」

「おめでたい思考だな、まったく。そういうの優しいとは言わないぞ」

「なんで」

この男は本気でそう問い返してくるから困る。期限を決めて付き合ったり、同時期に数人彼女がいたりした。ちなみにこれは浮気ではなく、一夫多妻制状態なのだとエステルは豪語する。

しかし、『多妻』という表現をする割には、結婚しようという言葉葉にはきっぱり首を横に振る。挙句、いやだと即答したりもした。あまりしつこい女性がいると、魔法を使って別の男を好きになるように仕向けたりする。

エステルの女性の扱いは、優しいどころか時として冷酷だ。確かにエステルと付き合っている女性は皆楽しそうだし大切にされているが、別れたあとの様子は酷くて見ていられない。女性陣はエステルをたとえタイプだと思ったとしても、観賞用に留めておかなければ痛い目を見るとヴィヴィアンは思っている。

「何人泣かせてんだよ、それで」

あまりにもむごい扱いではないのか。ずっと一緒にいる気がないのなら、最初から優しくなんてしないほうが相手にとっては親切だ。細やかに女性の要求や考え方を理解することができるくせに、彼はなぜ誰か一人を大事にするということを考えないのだろう。

女性関連の問題がこじれるとものすごく厄介だし、ヴィヴィアンにはエステルの考え方が一生涯理解できないと思う。

「お前は常にナタリアを泣かせてるじゃんか」

「常に泣いてるほどあいつは弱くねえよ」

思わずすぐ返答したが、エステルは不服そうに腕組みして小さく

ためいきをつく。

「お前鈍感だからな。知らないところで泣かせてんだよ」
ぐさつときた。

彼からの、女性の扱いに関する指摘は鋭い。常に的確なことを言われ、はっとさせられるのだ。彼はもしかしたら、女性以上に女心がわかる男なのかもしれない。

「……あー」

心配をかけまいとして強がりと言うナタリアの強張った表情が脳裏をよぎる。昔からそうだ。べったり甘えているように見えて、ナタリアは時々大事な本心をヴィヴィアンに言わない。

「思い当たる節ありまくりって顔だな」

エステルはにやりと笑みを浮かべ、優雅に足を組みかえる。

あたりまえだが、女性の扱いは格段にエステルの方が上手い。ヴィヴィアンは女の子の考え方が上手に理解できないし、いつも知らないうちに傷つけていて困ったことになる。

「ここ数日であいつの泣き顔何回見たかって思ってたさ」

「ぼやぼやしていると俺がさらっちゃうよ」

当然これも軽口だが、こういうからかい方をするのでエステルは面倒くさい。面倒くさすぎて思わずため息が出た。

ナタリアとエステルがくつつくことになるのが、自分には関係ない。しかし、大事な親友が大事な親友を悩ませ、泣かせ、傷つけるようなことにはなあってほしくないのが本心だ。

だが、そう言ってみたらからかわれるのは目に見えている。

「勝手にどうぞ、と言いたいところだが今はあいつに触れられないぞ」

「は？」

「魔よけ。俺が護符を作って持たせてる」

一瞬、虚を突かれたようにエステルは沈黙した。

「……それで、魔道士をはじくってことか？」

「そう」

やがてエステルが紡いだ慎重な言葉に、素っ気無く即答する。彼

は一体何を考えているのやら。

横目で様子を窺うと、なにやらにやにや笑う彼の姿が目に入る。

「なんだよ。お前にも立派に所有欲というものが」

「ねえよ。ストーリーカーが変態魔道士だったからだ」

間髪いれずに否定してやった。こういう方面のからかいは苦手だし面倒くさい。

何だつまらない。そう言いたそうなエステルが、おそらくそんな言葉を口にしようとした瞬間。

「きゃー！ エストルじゃなーいっ！」

不意に二階から声がした。次いで、ばたばたと階段を降りる足音。嫌な予感がする。

「げ！ おいナタリア、エステルに」

背後を振り返って『近づくな』と言いかけたところで、ナタリアは華麗にエストルの胸に飛び込む。途端にばちばちっ、と火花の散る音がした。

「うあっ！」

呻くエステルはソファに座っていたので、背後に何もないナタリアの方が弾かれて床に座り込むはめになった。

この護符は魔力を持った者との間に強力な壁をつくる。相手が強力な魔道士であればあるほど、壁は強固なものになる。しかも、ナタリアの護符に押し返された魔力の暴走で火花がおきたり熱が生じたりするのだ。

「えっ、どうしたのよエステル」

起き上がりながらおろおろするナタリアだが、エステルは胸に手をやってむせながら『こっちへ来るな』とジェスチャーする。

おそらく強力な壁に押しつぶされたおかげで苦しいのだろう。ナタリアはわけが解らないといった顔で、助けを求めるようにヴィヴィアンを見上げた。

「お前には魔よけを渡してあるだろ。忘れたのか？」

「ああ、そうだったわ」

「同じことユキノにやろうとすんなよ、あいつまだ万全じゃないから」

「そうね、気をつけなくちゃ」

ちらりと目をやると、ソファの背もたれに腕をひっかけ、エストルが体を引き起こす。

「っ、ヴィヴィアン。きいたぜ」

「ごめんなさい、エストル」

にやりと口許に笑みを浮かべるエストルに、ヴィヴィアンも苦笑を返す。エストルはナタリアに手を借りようとしかけ、思い出したように手を引っ込めて自力で体勢を整えた。

「不本意だが、これで魔道士に触れない事が立証されたわけだ」

「すごいわヴィヴィアン！」

エストルは乱れた亜麻色の髪に適当に手櫛をかけると、すっと立ち上がった。相変わらず口許に不敵な笑みを浮かべたままだ。決しいやらしい感じの笑みではなく、どこか少年を思わせるような笑みである。

「そんじゃ、そろそろ本題へ。庭かな、こういう時は」

「おう。それじゃユキノ、飯よろしく」

ユキノは頷き、保冷魔法のかかった箱から食材を取り出し始める。それを見届けたヴィヴィアンは、外套を羽織ろうとしてコート掛けを見て、そういえばまだ繕ってもらっている途中だということを思い出した。

仕方がないのでジャケットを肩に引っ掛けて庭へ出る。

第四十七話

憂鬱な魔導師VS奔放な魔導師

昼時の眩しい陽光に一瞬で視界をつぶされ、もわりと熱気が体中をつつみこんだ。遠くの景色は陽炎でゆらめいている。冷却効果のないジャケットは暑いだけだったが、怪我の防止には多少なりとも役に立つ。

「手加減したほうがいい？ さっき魔法使いまくってただろ」

思わず眼鏡を外して目蓋を押さえていたヴィヴィアンの肩をとんと叩きながら、エストルが言う。

視力は利かないが、魔力でエストルが庭の手入れをしているのがわかった。木々の伸びる気配。花開く香り、草が芽吹きだす感覚。

通常、こんなことは魔力だけでわかるものではない。今まで何度もエストルが目の前で植物を育てているところを目撃したので、魔力で何をやっているか大体わかるようになってしまったのだ。

エストルが魔法を使うとき、その魔法の強度や種類によってまちだが、彼の魔力は香りとなって現れる。会うたび違う花の香りがするのは、彼の気分やテンションによって魔力が若干変化するからだ。

「いや、いい。今回は遊んでるわけじゃないからな」

「ま、俺も手加減の仕方わかんねえし」

「なら言うな」

半眼を向けてやればエストルは飄々とした笑みを浮かべ、そよ風にふわりと身を預けて数メートル先につま先から着地する。

軽やかな身のこなし。風や草木と戯れる姿はまるで無垢な少年だ。しかし、知的で察しのいい彼は常に警戒すべき対象のことを頭に入れている。純粹な少年というイメージが彼と綺麗に結びつかないのは、そのせいだろうか。

「あれ。外套どうした？」

少し遠くからそう声をかけられ、ヴィヴィアンは一瞬自分の服に

視線を落とす。ジャケットの前は、やはりとめないでおこう。

「あのときボロボロになったからナタリアに直してもらってる」

「へえ、あえて魔法使わないのか」

「綺麗な外套着てたらきつとまた失敗するから」

「なるほど」

エステルは何を思ったか、七分袖の外套を庭に脱ぎ捨てた。

インナーには半袖のくたびれたシャツを着ていたが、だからといってエステルがださく見えることはない。くたびれているといっても過度ではないし、適度に締まった腕や腰が際立つような裁断のされ方だ。

「お前、『なるほど』で何で脱ぎだすんだよ」

何故かは薄々分かっていたが、一応そう聞いてみた。エステルは半袖を更にめくり、肩を出しながら笑う。

「条件を一緒にするんだよ。要はハンデってやつ？」

「……別に、着てれば」

「あちーんだよ」

嘘つけ、と心の中でつぶやく。そのアイボリーの外套にも、ヴィイアンのものと同じく温度調節機能をつけてあるではないか。

ヴィイヴィアンは適当にエステルから離れ、広い芝生の真ん中に立った。

「そんじゃ、行きますか」

エステルは得意げな笑みを浮かべて見せると、芝生の地面を蹴って大きく宙返りした。着地する先にはすでに若い樹木の枝が伸びており、彼がその枝に着地すると同時に庭が表情を変えた。

庭全体に襲われる、たとえるならそんな感覚。

庭中の生えた何千という植物が、ヴィイヴィアンを絡め取るために成長を始める。伸び行く樹木や植物が視界を阻み、エステルの亜麻色の髪や長い手足はすぐに見えなくなった。

ヴィイヴィアンも地面を蹴って飛び上がろうとし、外套がないことに気がついてすぐさま右に倒れこんだ。先ほどまでヴィイヴィアンが

いた場所を、すごい速さで伸びゆく草の大きな束が掠めていく。
「っ、呪文……」

軽く呪文を唱え、仕事用の靴に跳躍力を強化する魔法をかけた。
エストルの魔手となった植物の束を蹴り、ぐんと上の方まで飛び上がる。家の屋根が下の方に見えた。

そのままエストルが乗っている若枝の元である大木に火を放つ。
呪文を唱えない魔法などほぼ効果がないことを分かっていたが、エストルが火に気をとられているうちに屋根を蹴って逃げる。

冷静に状況を分析する。エストルがいるのは庭のほぼ中心で、何年前かに彼が植えた若木を魔法で成長させてそこに陣取っている。
芝生や細い雑草たちも驚異的な成長を遂げていて、それらは波のようにうねりながらヴィヴィアンのいる方向へと伸びつつあった。

この波に足をとられたら終わりだ。

この庭の中で、ヴィヴィアンが足をつくことができる場所は屋根の上やベランダだけだ。しかし、ベランダはすでに侵食されつつある。

「くそっ」

地の利がないなどと思っている場合ではない。足場がないなら増やすだけだ。

瞬間的に空気の塊を作り、それを足がかりにどんどん上の方へ駆け上がっていく。足場は作ったそばから消えるが、段階的に高さを変えて階段のように作っていけば、はるか上の方まで行くことができる。成長速度を増した植物はうごめきながらヴィヴィアンを追いつめた。

こんな風に植物の成長が速すぎて風が生まれるなどという現象に、今まで遭遇したことはない。この植物に絡めとられたら、一気に養分にされるだろう。知らず、冷や汗が背中を伝う。

上へ上へと逃げながら、ヴィヴィアンは長い呪文を唱え始めた。
空中に魔法陣が描けないので、自分の右手に描きながら足場を作って逃げる。

「ヴィ・ファルノウ・エク・フィリエ……」

狂ったようにうねる植物の束が、すごい速さで耳元をかすめる。一瞬だけ熱を感じたが、その直後から熱は痛みに変わった。即座に空気の塊を作り、真上へ避ける。

先ほどからヴィヴィアンの足元を的確に狙って、植物がつるを伸ばしてきている。生ぬるい粘性の液体が首筋を伝う。舌打ちでもしたい気分だが、呪文が終わらない。

「ウェロウ・ジェ・ヴェス・イエルラ・フィリオ……」

空気の塊を蹴って身を翻し、背後に迫ってきた植物を後方宙返りの要領で避ける。逆さまになった世界に、そこにはびこる太さのまぢまちな植物の束の間に、楽しそうなエストルの姿が見えた。

「……フィエス・ティス・ヴェスパイア・フィアス・リヴィエッタ」

最後の単語をつむぐと同時に、空気の塊をもう一度蹴って宙に浮かぶ。同時に庭に背中を向け、右の手のひらを背後に向かって突き出した。

激しい閃光が放たれ、熱風が身体をかすめる前に、庭に背を向けて目を閉じた。そうしている間にも落下していく自分の身体を止めるため、ある程度の高度からは落下速度を緩め、自宅の緑の屋根にそっと着地する。

肩越しに振り返ると、エストルの植物たちが庭先で無残に焼け焦げているのがわかった。焼け野原の真ん中に立った亜麻色の男は、わざとらしくため息をつくと、ゆっくり顔を上げた。

冷たく怒りを孕んだ、空色の瞳。彼の相棒たちは、立派に彼を守って炭と化したようだ。

「全滅かあー、やってくれるじゃん」

冷たい声色だ。いつもの軽さが感じられない。楽天的なエストルも、この仕打ちにとうとうキレたらしい。ヴィヴィアンは無言で耳元の生ぬるい血を拭いながら、相変わらず肩越しにエストルを見下ろしていた。

刹那、寒気のするような風が吹いた。冷たい風に乗り、エストル

はヴィヴィアンのいる屋根の上と同じ高さまであがってくる。後ろに飛びのき、左手で魔法陣を描く構えをとりながら彼の挙動をうかがった。

「あーあ」

言いながらエストルは早口で呪文を唱えた。とっさに右に避けると、左肩を掠めて空気の塊が飛んでいく。屋根からはかろうじてそれた攻撃だが、あたっていたら雨漏りでは済まなかっただろう。

「容赦しねえ」

彼の低い声が耳元で聞こえた。反射的に一言の呪文で防護壁を作る。とっさの防護壁は自分との間に適度な距離をとって作ることができなかったのも、鼻先に触れるか触れないかという距離を白くつめたい空気の塊が掠めていった。

後ろに飛びのくと、エストルが放った空気の塊は、剣の形に固められた彼の魔力だということが分かる。淡く白い光を放つその冷たい塊は、怒りのオーラに満ちていた。

植物相手に炎の魔法を使うと、必ず彼は怒った。燃やしてしまった植物は、当然ながら死んでしまう。今回の場合、長い呪文で大技を使い、植物を全滅させてしまったのがよくなかったのだろう。

屋根を蹴り、足場をつくらず地上を目指す。

「逃げんなよ」

エストルに道を阻まれ、再び屋根の上に舞い戻る。内心で舌打ちしながらも、ヴィヴィアンは頭の中で呪文を唱え始める。エストルは顔にかかる前髪を払いもせず、白い魔力の剣でヴィヴィアンを狙う。

騎士団の姉がいるエストルは、幼少の頃から剣の扱いが普通の人より上手かった。優雅に流れるような動きで、相手をやりこめる。体育の授業でエストルと組まれたときには、勝てたためしなかったのだ。

ひらりと飛び上がり、空気の塊を作ってまた上の方へ向かう。

「戦えって」

エストルも同じように足場を作り、的確にヴィヴィアンを狙って攻めてくる。安定しない足場の上で、どうしても軽やかなのだろうと関心するくらいにエストルは華麗だった。しかし、そんなことを思っている場合ではない。

中断しかけた呪文を、脳内で再び唱えなおす。魔力をこめた指先でエストルの剣を払い、彼と対峙したまま足場を蹴って後方に飛びのいた。

背中を下にして落下する感覚は、すこし怖い。けれど、計算はしてあるのだ。

「自滅か？」

エストルがこっちに向かって降ってきながら白い光を握り、ヴィヴィアンめがけて振り下ろそうとする。

それより一瞬早く、ヴィヴィアンは庭の噴水が流れ込む小さな池に背中から着水した。

着水の瞬間、小さな池の許容量をはるかに上回る大量の水が、ヴィヴィアンの背後からエストルに向かって叩きつける。水圧にはじかれたエストルが白い喉をさらして吹っ飛ばされていくのを見届けないうちに、ヴィヴィアンの身体も水底に沈んだ。

仰向けに沈み、思わず水を吸い込んだ。むせながら起き上がると、水深がヴィヴィアンのふくらはぎほどしかないような池の周りが一面水浸しになっていた。

「頭んなかで呪文唱えてみるっていうのも、案外効果あったな」

ひとつ学習できた。どっと疲れたので、すこし歩いて噴水の縁に腰掛けた。エストルは焼け焦げた庭の隅で、丸くなってむせている。長く形のいい腕には、地面に叩きつけられたときにこしらえたのであろう傷が見えた。

「あー、効いた」

緩慢な動作で家の壁に身体を預けながら、エストルはため息混じりにつぶやいた。彼が右腕を自分の左腕でさするのを見て、声をかける。

「折ったか？」

「いや、たいしたことない。とっさに受身とれなかっただけ」
そうか。なら良い。

いくら実戦向きの練習がしたいとはいえ、親友に大怪我はさせたくない。ほっとすると、日差しの熱が急に強く感じられた。

「疲れた……」

結局のところ、いつもとあまり変わっていない。

ヴィヴィアンは強くそう思った。

何か大きく機転を利かせられたわけでも、多数の敵を一網打尽にできそうな魔法を使えたわけでもなかった。

こうしてエステルと戦ってみて、変わろうとしたのに結局どこも変わっていない自分に気づき、あまりにいつもどおりで嫌気がさした。

「この程度じゃ疲れたとか言ってられないぞ、俺もお前も」

「まあな」

もっと頑張らなければいけない。適当に積んだ修練で力が手に入るなら、ヴィヴィアンは今こんなに悩んでいないはずだった。エステルは軽く微笑み、濡れて張り付いた服の胸元を掴んで広げて風を送っている。

「お前は家人ってろよ。俺は相棒や可愛い子ちゃんを労わるから」

「入ってろって、ここ俺んちだけど」

「細かいことに気にすんな」

すっかりいつもどおりの機嫌にもどった彼だが、彼から感じる魔力はまだ荒立っている。割と本気で相手をしてくれていたらしいが、ヴィヴィアンはといえば別段いつもと違う心がけをしていたわけでもない。

「なあエステル、総評くれ」

部屋にもどってからでも良かったが、戦った直後に聞いたほうがいいだろう。エステルはこちらに横目でちらりと視線を向ける。

「あ？ んー…… そうだなあ、いまひとつ」

エストルはこちらを向き直ると、空色の瞳でヴィヴィアンを見つめた。

「まだほかの事考えてる余裕があるだろ。戦いながら」

「……まあ、な」

さすが親友だ、見透かされている。

エストルは少し目を伏せると、びしょびしょに濡れた髪を指でかきあげながら、腕の傷に治癒呪文を唱えた。そして傷が治るか治らないかのうちに、もう一度ヴィヴィアンを見つめた。

「結構隙だらけだったぜ、あえて突っ込まなかっただけで」

「苦戦したよ、この程度で」

「まあ、戦い方が少し変わったのは分かった。相手に悟らせないような呪文の唱え方は効いたしな。あれだろ、あのでっかい魔物にやられてから考えついた戦法じゃないか？」

「ああ」

少しは成長していて安心した。けれど、この生暖かい安心感が良くないのだ。また気を抜く元になる。

親友が自分を本気で殺そうとするわけがないのだ。自分も親友を本気で殺そうと思えるはずがないのだ。

この訓練は、だからこそ余計に本気で取り組まないとまったく意味がない。むしろ中途半端にやれば、勝てると安心してしまっただけ逆効果なのではないか。

「分かっているだろうけど、俺がお前を殺す気で戦ってたら、この勝負は最初からお前に勝ち目がなかった。魔物だろうと変な魔導師だろうと、お前を殺しにくるってことを忘れないほうがいいぜ」

「おう」

エストルはそれきりヴィヴィアンの方を見ずに、地面に膝をついて何か呪文を唱えた。そしてそのまま、両手も地面につく。

焼け焦げた木々や雑草のところから、新たな緑が芽吹いていく。これはエストルなりの、戦いに使った植物への礼儀だ。自分が倒れるくらいの力で、彼は植物を極力元に戻そうとする。

元に戻すとはいえ、いったん死んでしまった植物たちは生き返らない。せめてその植物たちの子孫を育てることで、乱暴な扱いを詫びると前に聞いた。

邪魔をしてはいけないと思い、ヴィヴィアンは店の中にもどった。

第四十八話 戦士のまどろみ

屋内に入るなり、ユキノが駆け寄ってくる。

その懐いた子犬のようなアクションに、ヴィヴィアンは条件反射で足を止めた。

「すげえ、魔法の対決ってこんなにすげえんだな！ 全身痺れたよ

！ 壁があっても二人が見えるみたいだった」

疲れを感じさせない笑顔で彼は言い、はしゃいだ様子でヴィヴィアンを見上げる。

「飯できたんだな。さんきゅ」

「けどさ、エストルの木がすぐくて窓からほとんど見えなかったんだ。ヴィヴィアンが火を放って全部燃えたときは、家の中全然熱くなくてすごかったなあ。これも施錠魔法の効果？」

「庭は施錠範囲の中だ。魔力が外に漏れることはないが、施錠のもの……つまり家は破壊し放題だ。だから家を燃やさないように、避ける呪文を含めて唱えた」

自分の魔法で自分の家を燃やしたらそれは究極の馬鹿だと思う。植物を火で防げたとはいえ、エストルの魔力攻撃はかなり強いので、あれが当たったら本当に雨漏りする可能性はあった。いや、雨漏りではすまなかったに違いない。

家が壊れても、直すからいい。ただし、今この家の中には魔力をガードできない無防備な姉妹と見習いの魔導師しかいないのだ。

「最後の池のはびっくりした、落ちた瞬間池の水全部放出してるしさあ。でもあれ、どう考えても池の容積超えてたよね。どうやったの？」

ユキノは興味津々といった様子で、ヴィヴィアンに質問を重ねた。「いつも水の壁作ったり水降らせたりするだろ。何も無いところから水を出すこともできるんだよ。実際はどっか見えない地下水脈から吸い上げたり、空気中の水を集めたりしてるんだろぅけどさ。そ

の仕組みからいけば、近くに水があれば、水の魔法は増強しやすいだろう？」

彼はヴィヴィアンの説明を、少し考えて理解したようだった。彼は本当に飲み込みが早いと思う。

この分だと、発明家ロジエの奇想天外な思考回路にも楽々ついていけるのではないだろうか。

「そっか、そうなのか！　すげえ！　植物があんなに急成長するところなんて、初めて見たし」

「お前、昨日戦ったとき一緒にいたじゃねえか」

呆れながら言ってやれば、ユキノはううんと唸る。

「けどあの時、エストルの方を気にしてる余裕はなかったし。俺、戦ってる時はそれしか考えられないんだ。雑念があるとやられるから」

「あー、それもそうか」

明らかに『戦士』としては自分より経験者であるユキノのだから、その発言にも納得がいった。実際、とくに戦いの間における彼の集中力は尋常ではない。

ユキノはまだ興奮した様子で、軽やかな足取りのまま食事をテーブルに運び出す。ヴィヴィアンは手伝う気力もなくて、ソファに身を投げ出して丸くなった。疲れた。

上の方から階段を下りる音が聞こえてきたが、誰なのか確かめる気力も起きない。ナタリアならもう少しばたばた走るから、これはローザだと思う。

「ヴィヴィアン、寝てるの」

か細い声が聞こえた。顔を上げると、さかさまの視界に不安げな顔のローザが見えた。予想通りだ。

「ん、ローザ……　起きたのか」

「ナタリアは？」

「知らない。けど、家んなかにはいるはずだ」

そっか、と小さく呟いたときローザは黙った。ヴィヴィアンはじ

っと彼女の言葉を待つ。彼女を仰向いた状態でずっと見ていると、反った喉が痛いので起き上がる。そのタイミングで、ローザはヴィアンを見て口を開いた。

「あのね、ヴィヴィアン」

何か言いたげに口を開いたローザだったが、すぐに口をつぐんで俯いた。

「どうした？」

「ごめんね、急に」

小さく呟いて、彼女はヴィヴィアンを見下ろす。ヴィヴィアンは首を横に振って見せた。彼女はもともと弱そうな印象だ（いや、実際か弱い）し、今も少し顔色がよくないのでヴィヴィアンは心配になった。

「いや、それより平気なのか？ やっぱ不眠が祟ったんだろ」

「そうみたい。ユキノさんを手伝ってくるね」

小走りでユキノの元へ向かう彼女を見送り、ヴィヴィアンは軽く目を閉じた。そして、再び身を横たえて丸くなった。

ユキノとローザが話す声と、料理の良い匂いが漂ってくる。エストルはまだ戻ってこない。ナタリアは何をしているのだろう。

「エストル！ 何してるのよ、傷だらけじゃない！」

「ああナタリア、触らないでくれ。ごめんな、別にナタリアを避けたいわけじゃないってことは解ってくれよ……」

ああ、外にいるのか。護符のおかげで同極の磁石のようになったナタリアに、今の状態のエストルが触れたらどうなるかは想像に難くない。

耳だけで状況を把握しながら、ヴィヴィアンはソファの背もたれの方を向いて丸まった。しばらくすると、庭に向かう扉が開く音がした。

「ヴィヴィアン、そこにいたのね」

「おう」

「疲れきってるじゃない、二人とも」

「お嬢ちゃん、男の戦いつてのは甘くないんだぜ」

軽い口調でエストルが言うが、その声には明らかに疲労の色が濃く伺える。ナタリアが何か反論しかける気配があったが、それよりもはやくユキノの楽しげな声が聞こえた。

「じゃ、飯にしよう！ 体力つけたほうが回復も早いだろ」

それは自分にも向けられた明るい声色だが、ヴィヴィアンは一向に起き上がる気にならない。エストルが椅子を引き、座る音が聞こえる。エストルの足元はショートブーツなので、足音が他の人たちよりも軽やかで比較的聞きわけがつく。床をこするような足音はユキノだろう、彼はまだ歩き回っている。

ヒールの高い靴で歩く音が近づいてくる。ああ、起こされる。

「ヴィヴィアン、食べるわよ」

「え。俺を？」

咄嗟にぼけてみる。ナタリアの大きなため息が聞こえた。

「お好みとあらばそうしてもいいわ、馬鹿なこと言っただけで起きてちょうだい」

面倒くさい、と思っていると手を引かれ、上体を軽く持ち上げられる。ただしヴィヴィアンは重いらしく、ほんの少ししか上がらなかった。仕方ないので自力で身体を起こすと、ナタリアはにこりと微笑む。

「早くしないとエストルに全部食べられるわよ」

彼女に手を引っ張られて立ち上がると、少し立ちくらみでふらついていた。予想以上に魔力の消耗が激しいらしい。椅子に座ると、すでに食事を始めていたエストルが、ヴィヴィアンの正面でにやりと口角を上げた。

「なんだ、二人分いけると思ったのに」

「てめえ、人んちなのに遠慮なさすぎなんだよ」

「ユキノの料理うめえもん」

にべもなく言い切る彼に、ため息が漏れた。同時に、それもそうかと思ひ直す。この家の主はヴィヴィアンだが、料理を作っている

のはユキノだ。

「ユキノ、先食ってるぞ」

「どうぞ、召し上げれ」

スプーンを手に、まずはスープを飲む。冷たい。季節に合わせて冷製スープにしたらしい。そしておそらく、これは魔法を使って冷やしたのだろう。

「ユキノ、スープは魔法で冷やしたか」

「上手くいきそうになかったから、まずは水を半分にして濃いスープを作ったんだ。そこに、魔法で作った氷を入れた。けど」

「けど、なんだ」

彼に言われることは八割ぐらい予想がついた。大方、魔法の制御ができなくて台所が凍ったとかそういうことだろう。なんとなく台所から冷気を感じる。

「凍らせすぎて台所が大変なことになってるんだ…… もし俺がなんとかできなかったら、元に戻してください師匠」

「……わかった、飯終わったらな」

予想通りのことを言われたので、パンを咀嚼しながら頷いた。ローザはやはり元気がなさそうにしていたが、ナタリアに話しかけられて少しずつ笑顔を取り戻していった。

昼食を終えると、エストルは颯爽と（ちゃっかりデザートも平らげてから）帰っていった。

後片付けをするユキノの背後に立ち、凍りついた台所を解凍するとヴィヴィアンはジャケットを脱ぎ捨ててソファに飛び込んだ。

「ありがとうヴィヴィアン」

「気にすんな。お前も休んどけ」

洗い物の手を休め、ユキノはこちらを振り返る。

ローザは先ほどまで寝ていた二階の空き部屋で再び眠りにつき、ナタリアは暇をもてあまして被服製作に励んでいるので、居間には現在二人しかいない。

「やることないの？」

洗い物を再開しながらユキノは言う。流れる水の音を聞きながら、ヴィヴィアンは目を閉じる。

「あとは外国人登録と成人証明。面倒くさいから明日行く。たぶん、それが済んだらナタリアがダンスのレッスンを始めるような気がする」

「そっか。わかった」

「あ。やっぱ今夜ナタリアたち送った帰りにする」

「うん。明日にするほうが面倒くさいよ」

再開した洗い物はもう終わったらしく、ヴィヴィアンが目を開けてみるとユキノは水をとめて濡れた手を拭いていた。タオルをきちんと整えてから、ユキノは袖を止めていた平紐を解いて懷にしまう。「それじゃあ、ちょっと休む」

「ああ」

「部屋に行ったら？」

「面倒くさい」

「そう言うと思った」

笑いながら、ユキノは部屋の扉を開けて中に入っていた。ぱたんと軽く音を立てて扉が閉まり、それきり無音になる。壁を通してかすかに庭の噴水の音が聞こえる程度で、静かな部屋がまた睡眠魔を誘った。

第四十九話

お前は無防備すぎるんだよ

次に目を開けると、部屋の色調が暖色がかった。身体を起こしてみると、首筋や背中が痛くて思わず呻く。窓の外の景色はすっかり夕映えのオレンジ色で、家の前の通りを子供たちがはしゃぎながら帰っていく声が聞こえたりした。

家の中がとても静かだ。神経を集中させれば、ユキノの魔力を手繰ることができた。彼はどうやら寝ているようだ。その魔力は、今のところ風いだ海のように静かである。

しばらくぼんやりしていると、階段を降りる音がした。振り返ると、ナタリアがヴィヴィアンの外套を抱えてこちらに向かってきているところだった。

「直ったわ」

「ずっとそれやっててくれたのか」

「ええ。だって、あんた仕事に行くときあれじゃこまるでしょ」

温度調節機能のないジャケットを指差し、ナタリアは言った。まだ覚醒しきっていない頭を無理やり働かせて頷いて見せると、ナタリアはヴィヴィアンに外套を手渡した。

「広げてみてちょうだい、どうかしら」

たたんであった重たい外套を広げると、破れた左肩のところに見事な赤い花のような刺繍がしてあった。花というか、よく見れば炎のようでもある。繊細な糸使いで、破れていた形跡はほとんど見当たらなくなっている。これを数時間でやってのけるナタリアは、本当にこういう方面においては天才だと思う。

「相変わらずすごい出来だな。誕生日プレゼントとして受け取るよ」

「だめよ、そんなのプレゼントにするなんて！ あんたにはたくさん色んなことしてもらってるんだもの、もっといいものあげたいわ。このネックレスだってすごく嬉しかったもの」

「毎日のように飯つくらせて、部屋片付けさせて、最近じゃ怖い思

いもさせてるし…… そんなの全部チャラだ。あんまり無理すんな」
「もう、ヴィヴィアン…… 時々優しいんだから」

ナタリアはふわりと微笑んだ。不覚にもどきつとした。彼女は本当に可愛らしい。こういう笑い方をするナタリアは、とても女の子らしい感じがするので落ち着かない。

「何だよ時々って」

「普段は面倒くさがるくせに。まあいいわ、仕事はいつから始めるのかしら」

隣に座って首をかしげるナタリアを見下ろし、ヴィヴィアンは特に考えることもせず口を開く。

「明日は一日何もしない。俺もユキノもだ。お前はローザと一緒に、念のためにうちに来い。結界がある場所にいたほうが、何かと都合がいいからな」

気丈に振舞ってはいるが、ユキノのあの傷が一日で簡単に癒えるはずがないのだ。おそらく彼は、時折来ているはずの痛みを我慢している。施錠魔法のかかった空間では、比較的魔力や治癒力の回復が早いので、ゆっくり休むに越したことはない。

「ありがと、ヴィヴィアン。あんたって本当に頼りになるわ」

「とかいって、本当は家事手伝いの人員を増やしたいだけだったりして」

まだ眠気が抜けきらない。目を閉じて少し眠気に負けそうになるが、隣でナタリアがヴィヴィアンの髪を編み始めるので意識は保ったままでいた。

「いいわよそれでも。あんたの家は常に散らかってるから、片付けがあるわ」

楽しげだがちよつと失礼なナタリアに、ヴィヴィアンは顔を上げて反論する。同時に、軽く三つ編みにされかけた髪を離させた。

「失礼な言い方。時々片付いてるだろ」

「その時々ですら、あたしが片付けてるのよ」

「……おっしゃるとおりです」

本当にそのとおりだ。もう反論する余地も見当たらない。素直に引き下がると、ナタリアは不満げに眉根を寄せる。

「あ、面倒くさくなったわね」

「お前って本当頼りになるな」

棒読みで言ってみれば、ナタリアは腰に手をあててため息をつく。

「茶化さないの」

「ローザは？」

「さっき起きてきたわよ。部屋でおとなしくしてるみたい。ねえ、あの子どうしちゃったのかしら」

「不眠だろ。ストレスと緊張に極度に弱いし」

「ただの不眠ならいいんだけど…… しっかり寝たのに全然疲れが取れていないみたいなの」

「しっかり寝れてないんだろ、ローザは人んちで熟睡できるような子じゃないだろ？」

「まあ、それもそうね」

「どっかのガサツな女と違ってさ」

横目で見ながらにやりと笑ってやれば、ナタリアは満面の笑みを浮かべる。

「あら、誰のことかしら」

「目の前にいるじゃん」

「ヴィヴィアン？ このままあんたの胸の上に全体重で乗ってみたらどうなるかしらね？」

満面の笑みなのに目が笑っていない。

「うわ、勘弁してくれ。お前最近重くなったから」

「……嘘。それ早く言いなさいよ」

心持ちヴィヴィアンから距離をとると、ナタリアは俯いた。体重が増えたことを気にしているのだろうか？ 彼女の体型は相変わらず見事だし、増えたとしたらそれは豊かな胸の部分だとヴィヴィアンは思う。

「冗談だから。お前もともと重いもん」

「もう、失礼ね！」

「つーか、そんだけデカけりや重くても当然だろ。逆にそれでローザ並に軽かったら病気なんじゃねえの？」

ちらりと胸元に視線を向けてやれば、即座に顔面へとクッションがヒットした。眼鏡を直しながら彼女を見れば、顔を真っ赤にして口をぱくぱくさせている様子が目に入る。

「っへ、変態魔道士っ！」

久々にナタリアがこんなに恥ずかしがるところを見た。

クッションは効いたが、反応がちょっと面白いので言ってみてよかったと思う。彼女の中で、ヴィヴィアンの紳士ランクがガクンと落ちたことは間違いないのだが。

「よく言うよ、あれだけ人をむつつりとか言っというて。ていうか見たままの客観的事実を述べただけで俺は変態なのか？」

「その顔で変態発言をされるとどうも調子が狂うのよ。事実だろうがそうじゃなろうが、そもそもそういう話題に触れないのがあったでしょ」

「ひでえな、顔にまでケチつけんのか」

自分はそんなに変態さのにじみ出た顔立ちだっただろうか。ヴィヴィアンは少し考えるが、ナタリアは相変わらず頬が赤いままでなおも続ける。ヴィヴィアンは笑いそうになるのを堪えるのに必死だ。「かっこいい男の子は変な発言を慎むべきよ！ その流し目で、セクシーな口元で、どうして胸のサイズなの？ 紳士はそんなこと言わないわ。ユキノを見習いなさい、あの子ストイックで素敵だわ。だからローザも安心するのよ」

どうしてそこでユキノが出てくるんだ。ヴィヴィアンはそういいかけてやめ、持論を展開する。

「だから、客観的な事実だって。俺はただ、『胸デカいな』しか言っていないだろ。別に触りたいとか揉ませろとか言って……」

クッションがもうひとつ胸にヒット、

「ってえな。だから、俺はそういう個人的な意見は何ひとつ、」

「もう！ 知らない！」

ナタリアが足音を荒げて去っていかうとするので、引き止めるつもりでその背中に声をかける。

「お前さ、あんまり男にべたべたすんなよ」

「は？ 何言い出すのよ」

足を止めて振り返ったナタリアは、複雑な表情でヴィヴィアンを見やる。ヴィヴィアンはナタリアの視線を受け止め、少し真面目に話しかける。

「っていうか、男作ったらどうだ？ そうしたら少しは落ち着くんじゃないのか、その行動が」

「エステルやあんたに抱き付くこと？」

「それもそうだし、お前はいろいろな無防備なんだよ」

知らない人間と親しくなったり、誰にでも優しくしたりするのはナタリアのいいところだ。けれどそれは、時として彼女を危険に迫いやる要素でもある。面倒ごとを起こされては困るし、何より面倒ごとですまなかった場合のことなど考えたくもない。

「彼氏作ったらあんたの世話できないじゃない」

ナタリアはそう言って笑った。ちよつと待ってほしい。

「俺は要介護の老人かつ！」

「似たようなもんよ」

食事の支度すらまともにできない男なのだから、老人扱いでも仕方ないといえば仕方ない。けれど、あまりにも彼女を頼りすぎている自分に気づかされた気がして、軽くへこんだ。

「そこまでお荷物じゃねえよ。つうか、俺のせいで彼氏できないならなんか悪いし」

老人扱いのショックスを若干ひきずりつつも、ヴィヴィアンは床に落ちたクッションを拾い上げて意味もなく腕を乗っけてみる。ナタリアはいつもの調子で明るく笑い、ヴィヴィアンの髪をぐしゃぐしゃ撫でた。

「あんたのせいじゃないわ。だって彼氏作らなくてもカッコいい男

の子と一緒にいられるって最高じゃない！ わざわざ探さなくてもカッコいい子はすぐそばにいるのよ。あんたを含め現在三人。現状で満足なのよ」

本当に頭の痛くなる返答だ。ナタリアは根本的に何かを履き違えている。その考え方で言えば、三人ともナタリアの彼氏代理ということになるではないか。

「……それは、俺とエステルとユキノか？」

「そのとおりよ！」

ますます頭が痛い。なんとなくナタリアのタイプの男子が分かってきている自分に対しても呆れる。ナタリアとヴィヴィアンの共通の男友達なら他にもいるし、更にそのいところや親戚、兄弟等の知り合いもいる。学生時代から考えれば減ったものの、ナタリアの知り合いの男性は結構多いのだ。

「ロジェは？」

「あー、眼中にないわ」

その返答に、思わずくすりと笑いが漏れた。やはり聞くまでもない反応だった。（あー、ご愁傷さん）

「あいつそんなにまずくないと思うけど」

「顔は綺麗よ。でもほら、あの子もあたしが眼中にないから」

「まあな」

「とにかく、彼氏なんて必要がないの。恋なんてしたいときにするわ。そういうあんたはどうなのよ、彼女作らないの？」

ほしい気持ちはあるが、面倒くさいほうが勝っている。しかも、彼女には主に部屋の片づけを頼みたいなどと思ってしまったため、結局はヴィヴィアンだってナタリアのことを言えないということに気がついた。

「……面倒くさい」

「そう。もうしばらくは、あたしが世話焼いてあげてもよさそうね」
「頼むよ」

そう言いながら笑って見せれば、ナタリアは頷いて微笑んだ。

「日が沈む前に帰りましょ！ 明日も来るから道具はほとんど置いていくわ」

「わかった。ユキノ起こしてくる」

ユキノの部屋をノックする。返事がなかったのでドアを開けてみる。いつでも気を張っている彼にしては珍しく、熟睡しているようだった。

「ユキノ」

声をかけると、彼はしなやかな身のこなしでベッドから上体を起こした。軽く波打った黒髪が、するりと肩から滑り落ちる。彼は二枚ほど重なっていたはずの上衣のうち、一枚だけ脱いだ姿で寝ていたようだ。

まだ眠そうに目をしばたいているものの、動きは完全に覚醒していた。相変わらず凄い男だ。

「そろそろナタリアたちを送るぞ。家にいたいならいてもいいけど、ナタリアんちの両親がお前に会うの楽しみにしてる」

「もちろん一緒に行くよ。それにさ、護衛は多いほうがいいだろ」

「まあ、それもそうだな」

「着替えるから待ってて」

「おう」

ユキノは濃紺の着物を羽織ると、襟の合わせ目を正して帯を巻き始める。ヴィヴィアンは彼の部屋を出て行き、またリビングのソファに座った。暑くてやる気が起きなくて寝転がり、欠伸をしながら階段を見上げると姉妹が降りてくるところだった。ぼんやり彼女たちを見ていると、ユキノの部屋のドアが開く。

「お待たせ」

「おはようユキノ。起きたばかりなのに悪いわね」

ナタリアと会話しているユキノを見れば、例の両足が筒状に固定された動きづらそうな着物を着て、更に腰に新しい刀を携えている。「全然。気にしないで」

「ユキノさん、ありがとう」

「いいんだよ」

ユキノはローザに微笑んで見せると、明後日の方を向いて小さな欠伸をした。ヴィヴィアンは面倒くさいとおもいつつも起き上がり、ナタリアに直してもらった外套をさっと羽織った。

「うお、ヴィヴィアンそれすげえ！ 模様カッコいいな！ ナタリアがやったのか？ 器用だなあ…… 全然破れたように見えないや」

外套の肩部分を目にするなり、ユキノは目を輝かせる。近寄ってきてようやく破れたところを直したのだと納得してもなお、しげしげとヴィヴィアンの左肩を見つめている。

「こいつの腕は本当にすごいぞ。将来的に店を持つんだろ？」

「ええ、夢なの。でも今はお父さんの塾を手伝ったり、いろいろすることがあるし。成年したら考えようと思うの」

ナタリアほどしつかりした女の子でも、店を経営するとなると話は違ってくる。女の子一人では、治安の面から見て不安が大きいし、同様の理由で一人で暮らすのも賛成しかねる。

常にナタリアを守る男の従業員（なるべく強い魔道士が好ましい）がいたほうが安全だし、そうすると服を作ることができて、なおかつナタリア好みの美男というハイスペックな男性が必要になってくるだろう。それも複数。

断言しよう、不可能だ。

「この国じゃ、女性がひとりで店を経営するのなんて不可能に近いしな。一人暮らしの未婚女性なんてゼロだろ」

「そうね、怖いもの。それに資金が要るわ」

しかし、ナタリアの服作りの腕は本当にすばらしい。店を出せば瞬く間に流行を生むだろう。環境を整えてやれば、彼女の夢は必ず叶うと思う。

「……ナタリアさ、将来的にコイツがイリナギに帰って家事担当がいなくなったら、俺んち店舗を一部貸すから掃除手伝ってくれないか」

そうすればユキノがいなくなって散らかり放題になるだろうリリ

エンソール家も、店舗としてふさわしい状態を保てるし一石二鳥だ。我ながら名案だとヴィヴィアンは思う。

ナタリアは眉根を寄せ、わざとらしく大きなため息をついた。

「あんたねえ…… それじゃまるで、ユキノを家政婦だとは思っていないように聞こえるわよ」

「……あー」

そう言われても仕方のない扱いでユキノを弟子にしているため、返す言葉もない。更に追い討ちをかけるように、ローザも口を開く。「ユキノさんがいなくても一人でやっていかなきゃだめだよ。いつまでもナタリアを頼ってられないんだから」

たまに出るローザの発言は、的確でダメージが大きい。つくづくそう思う。ヴィヴィアンは頭をかきながら、軽く頷いてみせる。

「まあそうだよな。うん。面倒くさいから実際俺が一人になってから考える」

「あはは。旅立つ日まで頑張り続けるから、教育よろしくな」

満面の笑みを浮かべるこの東国人が、頑張って成長しようとしている姿はとても感心だ。面倒くさいが、引き受けてしまったのだから全力で彼を育てていかなければ。

そんなことを思いながら、ヴィヴィアンはアイアランド姉妹を送るために家を出た。

第五十話

シェイ

夕暮れの町は活気付いていたが、これも一時間後には全て収まるに違いない。魔物を警戒し、人々は夜間の外出を避けるはずだ。あれだけの被害の後だから、たとえ魔道士であってもあまり出歩きたがらないだろう。夜に備えて買出しをする婦人たちや、腰に剣を下げた男たち（騎士団ではなく一般市民だ）がたくさん見受けられた。さまざまな魔力がひしめく空気の中に、ふとエストルの花の香りを感じた。ここからは大分遠いようだが、彼も屋外に出ているらしい。

「賑やかだな、なんか空気までもわっとしてる」

「そのもわっとした感じが魔力だ。人によつては音だったり光だったり、匂いだったりする。温度や波動だっていう人もいるな。魔力の感じ方は人それぞれだし、魔力の発し方も魔道士によって様々だ」

「すげえ！ あれ、それじゃあもしかして、エストルからいつも花の匂いがするの？」

「あいつもともと香水つけるからな、お前が魔力か香水かどっちのこと言ってるか判断がつかない。けど、魔力の匂いと香水の匂いじや感じ方が微妙に違うんだ。俺には、あいつの魔力が花の香りを感じられる」

「今日のエストルの香水は、ハーブ系のだったわよ」

となりを歩くナタリアがさりとて言えば、ユキノは目を輝かせた。

「それじゃあ俺、エストルの魔力がわかったってことだな！ へえ、すげえ。なあなあヴィヴィアン、俺って何？ どんな感じ？」

「……鬱陶しい感じ」

「うわ、ひどいな！」

ユキノが眉根を寄せて不機嫌そうになると、ローザがそんな彼を見てくすくす笑った。今日のローザは色々と不調だが、それでもユキノと一緒にいると少しは和むらしい。なんとなく波長が合うのだ

ろう。

「ユキノさんは静かに強い感じだよ。上手くいえないけど」
「え？」

驚いたのは、言い当てられたユキノだけではなかった。

「ローザって魔力わかるんだったか？」

大問題だ、普通は魔道士でなければ魔力の波動なんてわかりっこない。ローザは微笑んで、軽く頷いた。その柔らかな表情に、野の花のように素朴な可愛らしさを感じる。

「最近気づいたの、もしかしてこれって魔力かなって。だって後ろに誰か立ったとき、ヴィヴィアンかユキノさんかエステルかすぐに解るの。足音や声が聞こえなくても」

「単に敏感なだけじゃなかったのね。すごいわ、ローザ」
「お前ら不思議だよな、魔道士でもないのに」

ヴィヴィアンの魔法陣限定でなら魔力を動かせるナタリア。魔道士ではないのに何となく魔力がわかってしまうローザ。この姉妹は本当に特殊だ。

これが多くの人に知れ渡ったら、多数の学者がこぞって研究テーマに取り上げるだろう。

「ヴィヴィアンは周りの人を魔法使いにする性質があるのかもしれないわね」

ナタリアはそういつて朗らかな笑い声を上げる。

「そんなもんあったらロジェも魔道士だろ」

ロジェからは魔力めいたものを一切感じないし、本人も魔道士を敬遠している節がある。

そんな彼とどうして長年つるんでいるのかは解らない。解らないが、ロジェはヴィヴィアンの狭い友好関係の中でも重要なポジションにいるほうだと思う。

「あの子はきつと、特殊装置で魔法を遠ざけているのよ」

「ありえるかも」

「あー」

そんな会話をしていると、視界の端に色の飛んだぼさぼさの髪がちらっと映る。ぱっとそちらを見やると、懸命ににやけるのを堪える（が、堪えきれずににやにやしている）ロジェがいた。黒衣を脱いだタンクトップ姿で、野菜やパンの入った紙袋を抱えている。どうやら買い物の帰りらしい。

「立ち聞きしちゃった……！　ローザが俺の話してる……！」

「おいどっから出てきた変態」

半眼でからかってやれば、ロジェはすごい勢いでローザを振り返って彼女の反応を気にする。

「ローザの前で変態とか言うなよ、俺の可憐で純情なお姫様なんだからさ」

その一言でローザが頬を染め、ユキノのゆったりした袖を軽く握る。そんな姿を見てロジェがショックを受けないはずもなく、彼は灰褐色の瞳で愕然とローザを見つめていた。

「あのさあ、ユキノ。ひとつ言ってもいいかな」

「何、ロジェ」

ロジェはユキノをまるで睨むかのような目で見据えると、深呼吸をひとつしてから言い放った。

「お前も男なら正々堂々戦え。隠し事はナシだ、いいだろ」

ヴィヴィアンは思わず吹き出しそうになった。ナタリアも同じように感じたらしく、彼女の場合は堪え切れずに背中を向けて笑っていた。

本当にロジェは可愛いやつだと思う。今まで何度もこんな場面に遭遇してきたが、殆どがロジェの狭くなった視野によって起こる勘違いだった。彼は持ち前の賢さを、恋愛においては一切使用できないらしい。

「隠し事も何も、俺はロジェのこと応援してるよ」

ユキノがそう言った瞬間、ローザが驚いたようにユキノを見上げた。彼女にとっては裏切られたような気分なのかもしれない。

「本当か？　本当かユキノっ」

経験上ユキノのこの切り返しは今までで初のパターンだったが、ロジェは実に単純な反応を見せた。

「勿論。やってることちょっと激しいけど、ロジェはいい人だと思うから」

「よっしゃ！ ローザと公認カップルになる日も近い！ ユキノ、これからも応援よろしくな」

はしぎだすロジェを前に、ローザは泣きそうな目で彼を見つめる。ユキノの背中少し隠れるようにして、彼女は呟いた。

「……ロジェの馬鹿」

とたんに凍りつくロジェだが、ナタリアはそんな彼に容赦のない言葉を浴びせる。

「あんたが公衆の面前で恥じらいもなくそういうこと言うからよ！ 少しは考えなさいっ、ヴィヴィアンに文句言える立場じゃないわ」

「ローザごめん、ごめんな？ 嫌がらせたくてこんなこと言ったんじゃないんだ、俺ほんと、ローザが……っ!？」

何やら言いかけた言葉を止めて目を見開いているロジェに対し、やれやれと思いつながらヴィヴィアンはため息をついた。

そして、視線をローザの方に移動する。

心臓が止まるかと思うぐらい驚いた。

ローザは可憐な顔をゆがませ、その赤らんだ頬に一粒の涙を伝わせていた。ユキノが心配そうにローザを見下ろし、ナタリアはヴィヴィアンと同じように固まっただけで、肝心のロジェは意味を成さない声を上げながら口をぱくぱくさせている。

「あ、……ごめ、ごめんっ」

「本当は気軽に好きって言われるの、辛いのに」
決定的な一言だった。

その呟くように紡がれたかすれた声に、場の空気が凍りついた。

「……へ」

愕然と立ちすくむロジェにさっと背を向けて、ローザはユキノの袖を引く。

「ユキノさん、行こ」

「いいの？」

「もういいの」

きっぱり言い切り、ローザはアイアランド家の方に向かって歩いていく。ユキノは困ったように何度もロジェやヴィヴィアンの方を振り返ったが、ローザがひどく傷ついているのを放っておけないのか、黙って彼女についていった。

ヴィヴィアンは黙ってロジェを見下ろした。ロジェは息を荒くし、震えていた。

「辛い、って、俺、ずっとローザに……」

「あのね。解釈は二通りあるわ、ロジェ」

ナタリアが重々しく口を開くと、ロジェは唇をきゅっと引き結んで俯いた。

「教えてよ。俺は原理を知らなくちゃならない」

「ひとつめ、あんたが無神経に調子乗るから傷ついちゃったっていう可能性」

これはきつい一撃だ。ナタリアも大事な妹を目の前で泣かされ、気が立っているのかもしれない。

「もう一つは、あんたの気持ちが解らなくて混乱してるっていう可能性」

「やっぱり、俺に言われたくない言葉だからなんじゃないのかな、好きだなんてさ……俺、ずっとローザのこと傷つけ続けてきたのかな。どうしよう」

ローザのあの一言はかなり深いところまで刺さっているらしく、ロジェは今にも泣きそうだった。彼のもともと小柄な体は、しょげて俯いているせいで余計に小さく見える。

「それは違うと思うぞ。いくらローザが我慢強い性格だからって、何年も言われ続けてきたことに今更爆発するってことはないだろ。嫌なら嫌って、最初から拒否反応するはずだ。俺やナタリアに相談するだろうし」

そう言ってやれば、ロジエは力なく笑ってみせる。ナタリアは小さくため息をつく、ロジエの背中をぽんぽんと叩いた。

「そうよ。ローザがあんたのこと嫌ってるようだったら、あたしがあんたをローザに近づけないもの。仲の良い人に嫌いって言われて嫌なら解るけど、好きだって言われて嫌ってことはないわ。あんたはずっとローザのこと守ってきてくれたし、あの子を笑顔にしようと必死だったじゃない」

一生懸命なロジエをナタリアも解っていて、だからこそ妹に強烈な求愛をすることを今まで否定しなかったのかもしれない。今なら、ナタリアがロジエとローザを応援するつもりであることがきっぱりわかる。

「ナタリア……」

「でも、だからこそ、あの子は傷ついてしまうのよ。その場のノリみたいに好きって言われたら、冗談みたいに思えるでしょ。あんたに弄ばれてる気分になるわ」

「そっか、原理は全然わかんないけど、なんとなくわかった気がする」

ロジエは大きくため息をつく、目を伏せる。ここまで暗い表情のロジエは初めて見たと思うぐらい、ロジエは落ち込んでいる様子だ。ナタリアは仕方ないなという風に微笑んで、ロジエの頭をくしやりと撫でた。

「ほら、うじうじしない。折角ここまで来たんだから。一緒にご飯食べましょう、ロジエ」

ナタリアなりに気を配って、ロジエとローザを仲直りする機会を作ろうとしているのはヴィヴィアンにもわかった。ロジエを見下ろして視線で促してみると、彼は少しでも明るい表情に戻って頷いた。

「ありがと」

「ちよつとは懲りなさい、愛してる攻撃！　ちよつとくらい落ち着きのある男の方が、頼りがいがあるのよ」

「勉強になるな、ヴィヴィアン」

明るい笑顔でロジェが話を振ってくるので、ヴィヴィアンはあからさまに眉をしかめて見せた。

「面倒くせえ」

しかしロジェはヴィヴィアンをスルーし、ナタリアの方を振り返る。

「その原理でいくと、落ち着きなく女をとつかえひつかえしてるエストルはもてないっていう仮説に行き着くけどどうなんだ？」

「あの子は別格よ。落ち着きないのは女の子の positioning がなくてこれだけで、エストルは本当にじっくり余裕で恋を楽しんでるわ。どんな女の子も受け止められる包容力があるの」

「あれって恋なのかよ」

思わず突っ込む。

「エストルにとってはみんな大切な可愛い子ちゃんだもの」

「理解できない、俺はローザしか愛せないもん」

「お前もお前で極端に視野が狭い、このままじゃストーカーだぞ」
三人でそんな会話をしながら、アイアランド家の門をくぐる。玄関を開けて中に入ると、アイアランド夫人が迎えてくれた。

「いらっしやい、よく来てくれたわね」

「お母さん、ローザは？」

「ユキノを連れて部屋に行っちゃったわ、何かあったのね？」

「けど、あいつが一緒ならすぐ連れてきてくれると思います」

おそらくロジェが返答に詰まるだろうから、ヴィヴィアンが先回りしてそう答えた。ナタリアは心配そうに階段の方を見て、小さなため息をついている。

「深くは聞かないけど、時間がたつほど辛くなるわよ」

ちらりとロジェを見やってそういうと、いたずらっぽく笑みを浮かべる夫人。彼女は何が起こったかを大体察しているらしい。女の勘というやつだろうか。

「さあ、ナタリア。あなたはディナーの用意を手伝ってちょうだい。ヴィヴィアンはテーブルを片付ける。ロジェ、あんたは上に行つて

二人を呼んできて！　すぐにでもユキノの手を借りたいのよ」

てきぱきと指示を飛ばすと、夫人はキッチンに向かう。ウィルフレッドはまだ塾で子供たちの相手をしているらしく、姿が見えなかった。

ロジェは気まずそうにうろたえていたが、よろめいた足取りで階段の方へ向かっていく。そんなロジェを見送ると、ナタリアは夫人に続いてキッチンへ向かった。残されたヴィヴィアンは、指示されたとおりにテーブルを片付ける。

もともと片付いているので拭くくらいで支度は済んだ。手持ち無沙汰でいると、ユキノが足音も立てずに駆け下りてきた。ヴィヴィアンと目が合うと、彼は意味深に笑った。どうやら仲直りは失敗せずにはすんだようだ。

「ユキノ！　手伝ってちょうだいっ」

軽やかにユキノに駆け寄りながら、ナタリアがその耳元で『どうだった？』とこっそり囁いたのをヴィヴィアンは聞き逃さなかった。ユキノはちらりとナタリアを見やり、見逃しそうなほど小さな動作で頷く。その動作でナタリアが、わかりやすくほっとした反応をした。

夫人とユキノが自己紹介をしあっているのを聞きながら、ヴィヴィアンは椅子に腰掛ける。自分だけ何もしていない状況は少し気まぐしいが、自分がキッチンに行っても邪魔なだけだ。

「ちょっと塾の方行ってもいいですか」

「いいわよ、ウィルにももうすぐ晩御飯だって伝えておいてくれるかしら」

「わかりました」

夕飯の支度をしてくれる三人を置いて、ヴィヴィアンは塾へ続くドアをそっと開けた。授業自体は終わっているようで、教室は少しにぎやかだ。一番前の教卓で、ウィルフレッドは生徒の質問に答えしている。

ヴィヴィアンの登場に気づいた子供たちが、数人駆け寄ってきた。

「ヴィヴィアンだ！ 久しぶりだね、ヴィヴィアン」

お下げの少女がにこにこ笑う。本当に機嫌がよさそうだ。隣にいる銀髪の少年は、その少女よりもひとつかふたつ年下だったと記憶している。

「お昼に一回来てくれたよ」

「えーっ、知らなかった」

「僕は魔法がわかるからね。ヴィヴィアンが近くにいるのなんて、すぐ解るのさ！」

得意げになっている銀髪の少年は、特にヴィヴィアンを慕っている。時々コモディンにも現れるが、遊んでやるのが面倒で居留守を使ったこともある。この少年が得意げに大声で喋るので、帰り支度をしていた子供たちもヴィヴィアンに注目した。

「あ！ ヴィヴィアンだ！ 遊んでー！」

「ねえねえ、さっき花丸もらったんだよ！」

「僕も苦手の掛け算ができて、先生に褒められたんだ」
すぐさま子供たちに飛びつかれたりテストを見せられたりする。

本当は少しウィルフレッドと話したかったのだが、暇つぶしに子供と遊んでやることにしよう。

「ヴィヴィアンの服かっこいい！ 模様が入ってる」

子供の一人がそういうので、彼らの目線に近くなるようにかがんでやる。

「これはナタリア姉ちゃんがやってくれたんだぞ。お前らもその辺でずっこけてズボン破けたら姉ちゃんにやってもらえ」

「はーいっ」

ちらりと視線をやると、ウィルフレッドの教卓がだいぶ空いて来ていた。ヴィヴィアンは立ち上がって彼に声をかける。

「ウィル先生、いまナタリアたちが食事を作り始めました」

「ああ、ありがとう。あと三十分をめどに仕事を切り上げるよ」

片手をひらひら振ると、ウィルフレッドは再び赤インクの万年筆を手にして子供と向き合った。そんな彼を見ていると、子供が脚に

抱きついてくる。

「ヴィヴィアン魔法見せてー」

「えー。面倒くさい」

といいつつも、魔法を発動したときの子供たちの笑顔は、見ていてちよつと嬉しくなるものがある。魔法使いのお兄さんとして慕われるのも、くすぐったいが嫌ではないのだ。

「見せて見せて！ 鳥さん出して」

「鳥さん出すのか？ んー、どうしよっかなあ」

「俺、でっかくて強い鷺がいい！」

「そんなの怖いよ、ちっちゃな小鳥がいい」

そうよそうよ、と小さい女の子たちが口々に自分たちよりも年上の少年をまくしたてる。喧嘩になってしまいう前に、この場をおさめようか。

「動物を出すのってすんごい難しいんだぞ。ほら」

言いながら、空中に青白く輝く手のひら大の円を描いた。小さく呪文を唱えると、淡く輝く小さな鳥たちが円からいっせいに飛び出す。

子供たちは大喜びで、鳥を追いかけてたり捕まえたりしようとした。「それ、取れないぞ。本物じゃなくて、魔法で作ったにせものだから。鷺はまた今度、男の子だけのときに見せてやるよ。女の子が怖がっちゃうからな」

魔力の形を鳥のようにしているだけであり、それは本物の生きた鳥ではない。しかし、さまざまな色の鳥が淡く輝きながら教室を舞っている光景は、我ながらわくわくするものであった。

「素敵ですねえ」

聞き覚えのある声に振り返ると、ジーイエがいた。子供たちは怪訝そうに彼を見上げ、何人かは怯えてヴィヴィアンの足元にすがった。当然だろう。ジーイエは決して人相がいいとは言えない。根は穏やかな人だが、顔立ちで損をしているタイプだ。

「ああ、失敬。怖がらせてしまったようですね」

「うちの塾に何の用かな？」

子供たちが怯えているのを感じ取ったのか、ウィルフレッドの口調は少しくつかった。

「表の張り紙を見ましたよ。私の弟たちが明日この街に引っ越してくるのですが、甥っ子に良い学習機関を探していたんです。おいで、シェイ」

きい、と扉がきしみ、教室に小柄な少年が入ってきた。五歳ぐらいいに見える、あからさまに人見知りが激しそうな少年だ。ジーイエの髪色に良く似ているが、やや青みがかかった灰色の髪。俯き加減なので、顔はしっかり確認できない。

「この子を明日から、この塾で勉強させてやってください」

少年の背後に立ち、その両肩に骨ばった手を乗せてジーイエは笑う。少年はぎこちなく顔を上げ、ウィルフレッドを見つめた。切れ長の目に引き結んだ口元。東国らしい顔立ちで、なんとなくその表情には憂いを感じ取れた。

しばらく黙っていた子供たちは、ジーイエとウィルフレッドが教科や授業料の相談をしだすや否や、わっとシェイ少年を取り囲んだ。シェイは戸惑っていたが、拒否することはしなかった。

「シェイ、っていうんだろ。不思議な名前」

「明日からここに来るの？ よろしくね！」

「君どこからきたの？ 見慣れない服だね」

子供たちは思い思いにシェイを仲間に引き入れようとし、シェイの硬かった表情もなんとなく柔らかくなった。

「シェイ、だけ。苗字はないんだ」

「へえ、変なの。けど苗字がなくなっちゃって困らないよ」

「そうだよ、シェイって呼べるもんね」

すっかり打ち解けた様子の子供たちを見ると、不意にシェイと目が合った。あの硬かった表情が嘘のように、シェイはこちらを向いて笑った。ちらりと覗く八重歯がとても子供らしい。

「シェイ、帰りますよ」

やがて、ウィルフレッドとの話を終えたジーイエが子供たちの輪の中に入ってきた。はしゃいでいた子供たちは、またおとなしくなった。シェイは戸惑いがちに、澄んだ瞳で何か訴えかけるようにジーイエを見上げた。

「僕、まだみんなと遊んでいたいんだ」

「いけません。暗くならないうちに、家に帰らなくては。食事をしなければなりませんからね」

心持ち強い調子でジーイエは言った。シェイは黙って唇を引き結んだ。そして、小さくうなだれておとなしくジーイエの手を握った。「皆さん、さようなら。明日からシェイをよろしくお願いしますね」ジーイエはシェイの頭をくしゃくしゃ撫でながらそういった。子供たちは元気よく「はい」と返事し、思い思いにシェイに別れの言葉をかけた。

「ばいばい、また明日」

少し元氣のない様子だが、シェイは新しい友達に笑顔で手を振っていた。素直でおとなしい子供だが、何となく子供らしくないというか、もう少し駄々をこねるなり嫌だといってみるなりすればいいのにとヴィヴィアンは思う。

大人の言いなりになっているように見えるのだ。

「さよなら、リリエンスールさん」

「お氣をつけて」

ジーイエは微笑むと、シェイの手を引いてドアから出て行った。子供たちはしばらくそれを見送っていたが、数人は鞆を手元氣良く手を振って帰っていった。どの家庭でも夕飯の時間だ。

「お前らもそろそろ帰れ。魔物が出る前に家に帰らないと大変なことになる」

そう言うと、更に数人が鞆を手にして帰って行った。家がそんなに近くない子供たちにとっては、この帰り道が不安だろう。

ヴィヴィアンを慕う銀髪の少年は、最後まで一人で残った。

「家は遠いんじゃないのか」

「だって僕、ヴィヴィアンとまだ遊びたい」

そんなことを言われても、送っていくような時間はない（し、面倒くさい）。けれどヴィヴィアンが来たことでこの少年の帰りが遅くなったのだ。もうあの配管工のような死者は絶対に出したくない。ヴィヴィアンは少年の目線までかんだ。少年は淡いグリーンの瞳でヴィヴィアンを寂しそうに見ている。

「お前は魔法が使えるんだったな。ほら、手を出せ」

おずおずと手を差し出す少年の頭を撫でてやると、彼の手の上に自分の手のひらをかぶせた。こうしてみると自分の手が案外大きいような気がする。神経を集中させ、空いている左手で四角い魔法陣を描く。細かな呪文や図形を描き入れ、少し長い呪文を唱えてから左手の人差し指で魔法陣に触れた。そのまま力を込めると魔法陣がするりと宙を滑るのが確認できたので、少年の手にかぶせたままの自分の右手に貼り付けた。

そこまでの一連の動作を、少年は息を止めたように見入っていた。「これはお前を守るためのものだ。強すぎる魔物には太刀打ち出来ない。だけど、弱い魔物ならこいつがやっつけてくれる。まっすぐに帰れ、寄り道をするところまで消えちまう。わかったか？」

少年は緊迫した面持ちで頷いた。すでに手の中に、『何か』がいることを感じ取っているのだ。ヴィヴィアンはゆっくりと手を外す。少年の手のひらの上に、程よく収まる大きさの羊がいた。

「……すげえ」

少年は手に羊を乗せたまま固まっている。

見た目はただの羊だが、そのふかふかした体毛がほんのわずかに光を発している。小さな目は燃えるような赤で、ヴィヴィアンを見上げて羊は小さく欠伸をしてみせる。

「魔物を食らって大きさを増す。大きさを増すと魔物はビビる。そいつはお前の魔力をほんの少しだけ借りて形を保つようになっていくから、お前から離れたたりお前を危険にさらすようなことはしない」
魔力に形を与えるのはとても高度な技術だが、ほんの少しだけ召

還も交えた。生物の元となる『要素』と呼ばれる精霊を召還し、それに魔力で形を与えると、簡単な動物の『ようなもの』が出来上がる。高度な召還術になると、『要素』以外のちゃんと形がある精霊も呼び出せる。

召還術はある種の契約で、精霊たちを使う代わりに対価を与え、契約期間も明確にしなければならないという多少面倒な魔法でもあるが、楽しいのでたまに使う。大概是面倒くさいという意識が先行して実行に至らないが、やる気があるときには精霊に家事を手伝わせたりもする。

「す、すごいよ。ちゃんと動いてる。もこもこしてる」

「地面におろしてやれ。ちゃんとお前の後を追っかけるから」

少年はおずおずと羊を床におろした。羊は少年の足元をぐるぐる駆け回り、半ズボンから伸びる細い足に頬を摺り寄せる。少年の目が輝いた。

「ありがとうヴィヴィアン！ ちゃんとまっすぐ帰るよ」

「お前の両親も魔法使いだろう。似たような魔法の使い方、教えてもらえ」

「うん！ じゃあね！」

少年は鞆を手に駆け出す。羊が飛ぶように軽やかな足取りでそんな少年の足元に寄り添う。教室のドアを開けるときに一度だけ振り返って大きく手を振ると、少年は足元の羊を気にしながら暗くなりかけた街に飛び出していった。

「相変わらず見事だよ」

背後から声をかけられる。すでに塾を閉める準備は整ったようで、本や書類の束を抱えて彼はこちらを見ていた。言外にそろそろ家に帰ろうといったらしい。ヴィヴィアンは教壇の方へ向かった。

「さっきの東国の男性だが、あれは知り合いかね」

彼が抱える書類の一番上には、見たことのある不思議な文字のサインが見えた。どうやら塾の契約書らしい。

「依頼人です。二回ほどうちの店に来ました。割と最近の客ですが」

「いや、大したことはないんだがね。変わった匂いがする人だと思っ
てな」

ウィルフレッドはネクタイを緩めながらそう言って、ぼんやりと窓の方を眺めた。夕暮れの色合いはますます強まり、沈みかけの夕陽は街をオレンジ色に照らしていた。先ほど見送った子供たちは、無事に帰ることができただろうか。

「匂い、ですか？」

「葉草に近いな。あの服を染めるための染料に問題があったのかも
しれないが、一瞬妙な感じがした」

そんな匂いがしただろうか。今日は自分の肩の葉草の臭いや昼食の匂い、エストルの花の香り以外に特徴的な香りを嗅いでいない気がする。

「気がつきませんでした。茶の香りかもしれませんね、今日差し入れしてくれましたから」

「ああ、緑茶か。それかもしれないな」

少し表情を和らげたウィルフレッドは、いったん塾を見回してから家への入り口に手をかけた。

「さあ、食事にしようか」

ドアを開ければ、漂ってくるのは食欲をそそる肉の匂い。これはもしかすると、菜摘孔雀だろうか？

ヴィヴィアンはすこし空腹を感じつつ、ドアをくぐって食卓へ向かった。

第五十一話　ひとやすみ

アイアランド母娘が作った夕食は相変わらずおいしかった。おいしい食事を作ることができるのは才能だと思うし、アイアランド姉妹は本当にどこに嫁に出しても恥ずかしくない女の子たちだとヴィヴィアンはつくづく思う。（いやいや。父親か俺は！）

「何かあったらつなげろよ、魔法陣。一応描きっぱなしにしとくから」

すっかり日の落ちた街を見渡しながら、ヴィヴィアンはアイアランド家の門の前にたたずんでいた。

「ええ、頼もしいわ。お守りがあるから平気だと思うけど、あんたと話せるの嬉しいからは是非そうしてちょうだい！」

ナタリアとそんな会話をしている傍ら、ロジェがローザをもの言いたげにじっと見ていた。

この二人は夕食の間に仲直りしたというか、いつものように戻っていた。しかしそれが嬉しいのか、ロジェは再びラブコールを浴びせようとしてナタリアに怒られていた。心配事が消滅した今のロジェは、とにかくダンスパーティーが楽しみで仕方ないようだ。

「ずっとつけてろよ、それ。風呂入る時も寝る時も」

護符を指して言うと、ナタリアは嬉しそうに笑んだ。

「言われなくなたってそのつもりだわ。ありがと、ヴィヴィアン」

「じゃあ、帰るから。ローザ、ゆっくり寝とけよ」

軽く手を振ると、ローザは頷いて微笑んだ。そんなローザに微笑み返し、ユキノが踵を返す。ロジェは名残惜しげにしていたが、ナタリアに挨拶してローザに手を振った。工具屋に用があるというので、ロジェとはそのまま門の前で別れた。

手のひらに林檎ほどの大きさの火の玉を出し、そのあたりを浮遊させてランタン代わりにしながら、ヴィヴィアンは何でも屋への帰路へついた。

結局あまり休んでいなかった。なんだか今頃疲れてきた。ヴィヴィアンは欠伸をしながらユキノの方を向き、その端正な横顔を見ながら呟いた。

「お前さ、疲れてないのか？」

「本調子じゃないよ。けど、寝たら治るから」

無邪気な笑みを浮かべてユキノは言う。日が落ちてもまだ蒸し暑いらしく、彼は着物の袖をたくし上げる。そういえばヴィヴィアンは外套を羽織っているので適温だ。

「そっか。安静にしとけ」

この魔法のかけ方をユキノにも教えようか。そんなことを思いながら、なんとなく上の空で声をかける。ユキノはくすくす笑いながら頷いた。

「ヴィヴィアンもだよ。いきなりあんな魔法対決とか始めるし、俺びっくりしたよ」

「あー。まあ、それはな。師匠という立場上。明日は一日休むよ、ナタリアたちが来たらダンスの練習だな」

面倒くさい。そう続けようとして、目の前に疲れた弟子がいることを思い出してやめた。ユキノは少し不安げな顔をして、軽く空を仰いだ。

空には低い月がおぼろげに見えている。雲に隠れそうで隠れない微妙な月は大して明るさをもっていないので、こんな夜は魔物が出やすそうだと思う。無意識に火の玉の火力を強化した。

「あと一週間ぐらいだっけ。俺、踊れるかな」

静寂を破ってユキノが言う。声色は明るく、振り返れば相変わらず無邪気な笑みを浮かべている。

「お前、なんとなくダンス上手そう」

「動きがかたいって言われるんじゃないかって心配なんだよ」

「いや、むしろ動きが俊敏すぎてダンスっぽくないかもしれないぞ。シュタツ！ シュタツ！ って」

ワルツをわざとキレのある動きでワンフレーズ踊って見せると、

ユキノは腹を抱えて笑った。

「あはは！　いくらなんでも、さすがにそこまで……！」

「安心しろ、ナタリアの手ほどきとお前の理解力があれば一日で基本はマスターできるだろうから」

そんな会話をしながら家にたどりついた。やはり酒場も花屋も閉まっていたし、人の気配も一切ない。静まり返った路地に立ち、施錠を解いて家に入る。特に異常な気配はないし、いつもどおりだ。外套を脱いだら蒸し暑いのが気になったので、窓を開けた。

「シャワー浴びて寝る」

「わかった。俺は洗濯物畳んでいようかな」

その家庭的な発言に思わず笑いが漏れるが、ユキノは気にした様子もなく着物の袖をたすきでまとめ、てきばきと準備を始めている。シャワーを終えて出てきてもユキノはまだせっせと働いていた。今度は本棚の本を分類していたらしい。

ヴィヴィアンは風呂場が空いたことだけ告げると、自室に入ってさっさとベッドに飛び込んだ。相変わらずシャワーの後はバスローブ一枚だが、湯上りだとそれすら暑く感じられる。肩まで脱いだ状態ではたばた風を送り込んだりし、湿気がとれてきたので引き出しからパンツを出してきて履いた。

ユキノの魔力の気配が、部屋の前を横切ってシャワールームに入っていくのを壁越しに感じ取る。眠い。

遠くで魔物の吠え声が聞こえた。またこの街の人間が犠牲にならなければいい、などと考えるつも目蓋が下がってくる。眼鏡を外して枕に顎を乗つけると、ヴィヴィアンはうつぶせのまま意識を手放した。

翌朝、人の気配がして目を覚ましたときには、うつ伏せだったはずの身体は横向きになっていた。寝違えたように首が痛かったが、ごろりと仰向けになって半目を開けて天井を見上げる。

眼鏡のない視界にもわかるほどの長く美しい金髪が、窓から差し込む朝日にきらめいていた。ああ、なんだ金髪かと思い再び目を閉

じると、何やらため息が聞こえた。

「ほら、ヴィヴィアン！ 起きなさい！」

「えー……」

起きろといわれても。まだ意識がはっきりしない。寝違えた首も痛いし、膝を動かしたら間接が軋む。昨日何かしたつけ、と思いなから穏やかに呼吸をしていると、石鹸のいい香りのする手がヴィヴィアンの頭を撫でた。なんだか心地良い。

「あれだけ疲れていたもの、無理もないわね」

何か疲れるようなことなどしただろうか。ユキノが美味しい昼食を作ってくれて、エストルがやってきて、ロジェが拗ねて、ナタリアとローザが怯えていて、ジーイエが話をしに来て…… いや、何か違う。

なんだか記憶が混濁しているようだ。考えなおすたびに昨日という一日がどんな様子だったかが微妙に入れ替わる。

ジーイエが依頼にきて、ユキノが時計を直して…… いや、それはもっと前の話だ。

「でも起きなさい、ヴィヴィアン。上から乗って圧死させるわよ」

「させてくれ、俺はもう疲れた」

というか、ここにいる金髪が――ナタリアが、上から乗ってきたとしても圧死はたぶんありえないと思う。たぶん。

「もう、何言ってるのよ」

その金髪も、ちょっと笑いながら言う声も彼女そのものだ。何よりここにこうしてやってくるのなんてナタリアだけだというのに、その名前を呼ぼうと思ひ至るまでに随分かかった。（なんだ金髪か、って何だよ）

微妙に意識が覚醒したが、再び眠くなる。

ほぼ意識がない状態で、ヴィヴィアンはうわごとのように呟く。

「子供たちがさ、喜んでるんだよ鳥で」

「はあ？」

「シェイはもう来てるんだろうか」

「ヴィヴィアン、寝ぼけてるのね？ シェイって誰のことかしら」
思い浮かぶことを次々言ってみると、ナタリアはくすくす笑いな
がら答えてくれる。彼女の反応が心地よくて、ヴィヴィアンは尚も
続ける。

「言っといったぞ、ナタリア姉ちゃんに直してもらえって」

「何のことよ？」

「俺の外套とって」

「ここにはないわ。外套着たいならベッドから降りなさい！ ここ
にいても蒸し暑いだけよ」

眠気はなかなか覚めない。冷却設備をつけていない部屋は蒸し暑
いが、時々是这样して魔法に頼らない環境を作っておかないと、魔
力が弱まって魔法が使えない時などに受けるダメージが大きくなる。
しかしひんやりした石でできた壁で緩和され、暑さはそこまで辛
くない。まだ朝方だからだというのもあるだろう。

「ユキノのダンスの相手は俺か？」

「マルグリッタに頼んだわ、男同士で踊らせたりなんてしないわよ」

「なあ、もう一回寝る」

「そんなことしたらエストルに目覚まし植物を頼むわよ」

ナタリアを無視して目を閉じると、頬をぷにぷにつつかれた。顔
を背けて身体を丸めると、ナタリアが腕を引っ張ってくる。

「こーらっ、起きなさい」

むにゃむにゃと返事をしようとする、突然下の階からすさまじ
い音量でロジェの声が響いた。

「ナタリアー！ とうとうコレの出番だー！！」

びっくりとして上体を起こす。あれは初めてユキノとふたりでロジ
エを迎えに行ったときに、ロジェが発明した悪趣味な発明品に違
い。

おかげで一気に目が覚めた。

「ダメよ、ヴィヴィアンが聴覚をおかしくするわ！」

「うっせえナタリア、お前の声もデカイ！」

ベッドから立ち上がると、派手な柄のパンツを履き、バスローブを雑に羽織っただけの姿だったことに気がついた。

「うわ。ナタリアのスケベ」

両腕で自分を抱きかかえるようにして言ってみれば、ナタリアの平手が背中中に飛んできた。

「いってえ」

「パンツコレクターに言われたくないわよ！ 早く着替えて降りてきなさいっ」

「はいはい」

足音も荒く出て行ったナタリアを見送り、少し笑いながら着替えをした。床に放置したバスローブを見られたらまた咎められるだろうが、面倒くさいのでそのまま部屋を出る。

朝食はまたユキノの郷土料理かと思いきや、いたって普通のエンカンタリアの朝食だった。

白い皿の上には、麦と雑穀と一緒に練って焼いたような安くて栄養価の高いパン。焼きたてのパンの上には、チーズと湖鶏（ごく一般的ナ水鳥）のベーコンが載っている。

「牧場主のおじさんがチーズをわけてくれたのよ。ありがたいわ」

「可愛い子にはサービスって言われたんだけど……」

嬉々としたナタリアのとなりで、ロジェがしょんぼりと肩を落としていた。ナタリアは本当に楽しそうに笑いながら、そんなロジェの背中をぼしぼし叩く。

ロジェがナタリアをよけようとローザの方に近寄るたび、彼女は頬を赤らめて身を反らしている。それでも、自然にロジェとローザの距離は縮まったように思う。

「何言ってるのよ、あんた可愛いじゃない！ ……背が」

「ひっでえ！ 気にしてんだぞ俺は、お前に負けていることにつ」

二人の漫才のようなやり取りを聞きながらユキノが笑い、温かなパンの上でとろけるチーズをしげしげと眺めながら二人をなだめる。「まあまあ。牛の乳にはこんな使い方があるんだな。すげえ」

「お前んとこじゃ牛乳も飲まないのか？」

ヴィヴィアンも食欲が沸いてきて、質問しながらユキノの隣であり、ナタリアの正面である席に座った。

「基本、魚ばかり食べてるから。牛は食用というより、荷物を引かせたり田畑を耕させたりする。俺の村では牛飼いなんでいなかったし、牛の乳は西の大陸に来るまで飲んだことがなかったな」

「へえ、食用っていうより道具なんだな」

「牛車はお偉いさんが移動に使ったりするよ。都にいけば馬車も人力車もあるし。でも馬はもっぱら軍馬だから、やっぱり人を乗せるのは牛がメインかも」

「何！ ユキノの国では人が人を車に乗せて引っ張るのか！」

「ああ、そうだよ。人力車の陣夫は疲れ知らずで、街を風のように飛び回ってる」

「すっげえー、イリナギの男は力持ちなんだな」

興奮した様子でロジェの質問攻めタイムが始まる。彼はいつもそうだ。そんな彼の好奇心の爆発は見ていて楽しい。

ユキノも知りたがりの彼に大分慣れてきたようで、毎回律儀に答えているからすごい。ヴィヴィアンなら絶対に途中で面倒くさくなるというのに。

「でも、体格じゃエンカンタリアの人たちのほうがどう考えても勝ってるよ」

「なんでだ？　なんでなんだ、原理が気になる！　ユキノ、俺をイリナギにつれていってくれ！　この目で確かめるまで気になって仕方ない！」

それまで普通に答えていたユキノだが、この言葉にだけは少しだけ困ったような色を含めてあいまいに頷いていた。

「いつかね。でも俺、故郷でそんなに気に入られてないから。俺が何か言われるならいいけど、ロジェやヴィヴィアンが悪く言われたら申し訳ないよ」

聞いた感じだと、イリナギの民はとても排他的だ。異邦人である

自分たちはまず受け入れてもらえないだろう。

そしてユキノも村人の全てから慕われているのであったら、こんな過酷な長旅を強いられることもなかったはずだ。嫌な見方をする、村の人々から厄介払いされたようにも受け取れる。

西洋人との混血で、姿が他人と違うからという至極どうでもいい理由で遠ざけられていた彼だが、そんな風に扱うにはもったいない男だと思う。

「そんな奴らのために頑張るってさあ、ユキノは偉いよ。俺だったら、俺のこと気に入らない奴のために一生懸命になれないかも」

「そうそう。気に入る奴にのめりこんでる分、周りが見えてないからな」

「うっさいヴィヴィアン」

ロジェは横目でこちらを見ながら、大きく口を開けてパンにかぶりついた。ローザはどんな反応をしていいか解らないのか、ロジェと目を合わさないようにパンをちびちび齧っている。

「あんたって本当に優しいのね」

ナタリアはビンに入った牛乳をロジェのグラスに注ぎながら、ユキノを見て言った。ロジェがももごと札を口にするので、彼女は呆れながら『飲み込んでから喋りなさい!』と一喝する。ユキノはくすくすと笑いながら、良い音を立ててパンをかじった。

「こう、俺に関わるなみたいな風潮は村全体にあるんだけど、それでも俺と話したそうにしてくれる人はいるんだ。ひっそり手合わせを願いにくる人とかさ」

ユキノは喋りながら、牛乳のグラスを手取る。ヴィヴィアンはパンを齧り、そのさくさくした触感を楽しみながらユキノをちらりと見て話の続きを促した。

「考えたらそれって、俺の亡くなった父さんが最高の剣士であり師範だったからで、父さんを慕う人がいまだにたくさんいるからなんだよ。そんな父さんが大事に思っていた村だから、俺も全力で守りたいんだ。その人たちが俺をどう思っているように、俺は村が好き

だから」

朝の光で店の中のコントラストがだいぶはつきりしてきているのを感じながら、ヴィヴィアンは言葉を出しあぐねていた。無言でパンを咀嚼していると、ナタリアが穏やかに呟いた。

「まっすぐね」

「ユキノさん、凄い」

ローザがそう呟くと、ロジェは大きくひとつ頷いた。その灰褐色の瞳は、好奇心と希望に満ちた光に染まっていた。

「決めた。俺、絶対ユキノの村に行くよ。ユキノが胸張って友達ですって誇ってくれるように、たっくさん発明品持ってさ」

微笑を崩さないまま食事を続けていたユキノは、ふと手を止めて真顔でロジェを見つめ返していた。そうね、とナタリアが口火を切ると、ユキノはゆっくりと彼女の方を見る。

「そのときはあたしも、イリナギの女の子たちにたくさん服を作っ
てあげるわ。ローザと一緒に料理もするし、お菓子も作らなくちゃ。
楽しみね、ヴィヴィアン」

ユキノはヴィヴィアンの方は見なかった。

弟子入りの日のように拒絶されるところだろうか？　こころなしかその青い瞳が沈んでいるように受け取れる。

生憎とヴィヴィアンは、いちど引き受けた弟子を軽々と手放せるような器用な精神は持っていない。厄介者であることには変わりないが、その厄介さを彼はちゃんと家事をしたりヴィヴィアンを気にかけることで埋めている。

友達とも家族とも違う、弟子というおかしな存在。一人前になるまでは自分が責任持って面倒を見るが、一人立ちする頃にはどうなっているのだろう。

少なくとも、もう用は済んだからなどと言って冷たく放り出すことは二度とないと思う。自分は思った以上に仲間に対して甘いよう
だ。

「そうだな」

ユキノの横顔をじつと見て、ヴィヴィアンはゆったり、そしてはつきりと言葉を紡いだ。

「俺も師匠として、ユキノのきた旅路を軽々と移動できるように魔法を強化しておかないといけないな。八ヶ月もかかるんじゃないか困る」
大きな目が二度ほど瞬きをしてから、驚いたようにこちらを見上げた。そうしてかわるがわるヴィヴィアンたちの顔を見やると、ユキノはようやく安心したように満面の笑みを浮かべた。本当に嬉しそうなのその笑顔に、一同が和む。

「ご飯が終わったら踊るわよヴィヴィアン！ ユキノ、あんたにはパートナーを紹介しなくちゃね」

パンを飲み込みながら頷くと、ユキノが軽く首をかしげながらナタリアにたずねた。

「その人もここに呼ぶのか？」

「ええ、朝食後に時計塔に呼び出してらわ。ヴィヴィアン、迎えに言ってあげて」

ナタリアは当然のように笑って、ローザの空になったグラスに牛乳を注いだ。ヴィヴィアンは頬杖をつきながらあからさまに面倒臭さをアピールすることにする。

「えー面倒くさいー。俺が離れたら施錠の効果薄れちゃうかもしれないーみんなが危険かもしれないぞー」

またローザから冷たい視線を受け取った。前にもこんなことがあった気がする。今度は萎縮せずに、ヴィヴィアンはわざと眉根を寄せて悲しげに俯いて瞬きを（上目遣いに高速で）してみた。すると、ローザは無邪気な笑みを浮かべて堪えきれずに小さく吹き出した。こんな彼女を見るのは久しぶりだ。そして、こんなふうにあからさまに人を笑わそうとしたのも。今日の自分はテンションがおかしいとヴィヴィアンは思う。

「少しなら平気なんでしょう？ ユキノを一人で行かせてもマルグリッタの顔がわからないじゃない」

それもそうだ。ロジェに迎えに行かせるという選択肢も考えたが、

彼女に猛反対されることは目に見えていた。

「だりい」

最後の反発を試みるが、ナタリアに半眼で睨まれた。

「ヴィヴィアン」

「……わかった。行ってくる。ユキノ、留守中何もないと思うけどよろしくな」

「うん、任せといて」

ユキノはヴィヴィアンの分の皿まで片付けながら頷いた。ヴィヴィアンは手に持っていた最後のひとかけのパンを口に放り込むと、外套をさっと羽織って外に出た。

第五十二話 助っ人は委員長

時計塔まで行くと、街の喧騒になんとか落ち着いた。近頃の魔物の被害のせいかな、ここに来るまでの間に普段ほど人をみかけなかった。

悪しき気配なども感じないが、魔力はいつもどおりの量を感じる。きっと魔法の使える魔法使いや魔道士たちは普段どおりに出歩いている、魔法の使えない一般市民が一気に家の中に入ってしまったのだろう。

なんとなく懐かしい魔力を感じて顔を上げると、時計塔の下に黒髪の少女が居るのが見えた。

涼やかな視線を斜め下にやり、時計塔に背を預けてじっと立っている。彼女がマルグリッタ・デュバート、ヴィヴィアンのクラスでずっと委員長をやっていた少女だ。

細身の少女で、軽くウェーブした真っ黒な髪と意思の強そうな青い瞳が印象的だ。円形のフレームの眼鏡をかけている。

ナタリアとローザの中間ぐらいの背丈で、彼女は学生時代から黒いフリルのついたワンピースを好んで着ていた。今でもその好みは健在らしく、塔の日陰にもたれる細い身体は黒いフリルがたくさんついた丈の短いワンピースに包まれていた。

ワンピースの上からふわりと羽織ったボレロに、温度調整の魔法がかけられているようだ。この炎天下の中でずっと待っていただろうに、彼女は汗ひとつ流さず日陰で腕時計を見ていた。

「マルグリッタ」

声をかけると、彼女がずっと顔を上げた。腰まである黒髪がさらに揺れ、知的な青い目がちらりとこちらを見る。

「久しぶりね、ヴィヴィアン」

日陰から出てくると、その白い肌はより一層眩しく見える。

彼女とは久しぶりに会うが、クラスではよく喋っていた。それ以

外ではあまり関わっていないが、彼女も一応友達だといえる。ナタリアたちほどの幼馴染ではないにしろ、長い学校生活のうちで数年は世話になっていた。

「悪いな、急にダンスの相手なんか頼んで」

「気にしないで」

彼女が長い黒髪を纏め上げてまた下ろすと、ふわりと花の香りが届いた。エストルの魔力のような華やかなバラ系の香りではなく、ユリやスイセンのような清楚な香りだ。彼女の使う香水だろう。

特にそれらしいやりとりもせず、ヴィヴィアンとマルグリッタは歩き始めた。歩きながらマルグリッタは、優しく微笑みながら呟く。「私の許婚は、一緒に踊れないのよ」

「許婚？ ああ、マルグリッタは家柄からしてエリートだったな。貴族も大変だな、親に結婚を決められるとか」

そういえば彼女は貴族の家系だった。何年間もずっと委員長を任されていたのも、彼女が成績優秀で魔法も使えるエリートで、更に貴族だったから優遇されていたということに尽きる。もともとの素質もいいが、やはり家柄は学校においても重視されるのが日常だ。

「よく覚えていたわね」

「取り巻きの女の子がたくさんいたからな」

「正直ウザい時もあったわ、トイレにまでついてくるんだもの」

くすくすと笑いながら、マルグリッタはヴィヴィアンを見上げた。無表情でいることの多いマルグリッタだが、会話するときには普通に豊かな表情を見せる。

こんな風にはつきりものごとを口にしてしまうところがとても良い。ナタリアと同じサバサバした感じを受ける。

「結婚相手もウザかったのか？」

からかうように聞いてみると、彼女は肩をすくめた。

「そうね、最初は。ある日突然『未来の旦那よ』って紹介されたのが、ひよろひよろした魔法使いよ。私はあからさまに嫌な顔をしたと思うわ。顔は整っていたけど、頼りなさそうっていうか。そもそ

も私、色恋沙汰には興味なかったし」

彼女が色恋沙汰に興味がなさそうだというのは、実は学生時代からヴィヴィアンも思っていた。

整った容姿と凛としたいでたちに惹かれ、彼女に興味を持つ男は少なくなかったが、彼女の方は全く相手にしていなかったのだ。だから男子たちからは影で『鉄壁』と呼ばれていたのだが、本人は知らなくてもいいだろう。

「お前、理想高そうだしな」

「よく言われるわ。実際その通りだと思う」

自分はどうかとふと考えた。面倒くさくない女がいいなどどうそぶいてはいるが、彼女がまったく欲しくないのかといえそうでもない。そこは健全な十八歳の若者だ、そろそろ久々に恋のひとつやふたつは経験したい。

ただ、やはり面倒くさい。そして弟子を引き受けた手前、脳内花畑でいるのは教育上よくない。というか、脳内花畑では彼女に気をとられてユキノに満足な教育ができない。

そんなことを考えながら、そういえば会話が止まっていることに気がついた。

「許婚って何してる人？」

尋ねてみると、マルグリッタは少し寂しそうにため息をついた。

「頭脳労働よ。役所づとめでダンスパーティーどころじゃないわ。頼りなさそうに見えるけど、あの人とても頭がいいの。だから、職場でも重宝されている」

「へえ、仲良いんだな」

思わず微笑んで言うと、マルグリッタは少し照れたように微笑み返してくれた。許婚のことを語る彼女は、寂しそうでいながらもやはり幸せそうだった。

「一度大喧嘩して、そこからよ。お互い、相手のことを全く知ろうとしていなかったことに気がついたの。今では彼は最高の恋人で、毎日彼のところに帰れるのが幸せなのよ」

「尚更悪いな、ダンスの相手」

「ちょっと彼も妬いてたわ。いらなくなった書類の束を魔法で無闇に燃やししながら、揺り椅子を高速で揺らしてるの。『いっておいで』って言ってるのに声が硬いし」

その光景を想像して少し笑ってしまった。マルグリッタもつられて笑いながら、小さくため息をついた。

「ダンスの夜はあまり遅くならないうちに抜けるわ。魔物も出るしヴィヴィアンとしても、彼女には早く帰ってもらって恋人との時間を過ごしてもらいたい。もともと突然無理な願いを申し出たのだから、あまり拘束したくなかった。

「ユキノに家まで送らせる。あいつは腕が立つから問題ない」

「もうそんなに育てたの？ 貴方の弟子」

「いや、あいつはもともと剣が使える」

「物理的攻撃では魔物は倒せないじゃない」

呆れたように言うマルグリッタだが、それはユキノの剣を知らないから言えることだとヴィヴィアンは思う。

「あいつの剣さばきを見ているとそうも言えないぞ。実戦で何度も活躍しているからな」

「ふうん。気になるわ、ユキノ」

彼女の場合はロジェと同じく、知的好奇心からユキノのことを気にしているのだろう。出会った奴が皆友達になりうるナタリアと違い、マルグリッタは人間関係にワンクッション置くタイプだ。何となくマスターに通じるところもあるかもしれない。

「礼儀正しくて主婦みたいな奴だぞ」

「ふふ、何よそれ。主婦って」

「色々あってだな……」

会話をしていると、何でも屋の前についていた。待ちくたびれたのか、ナタリアが玄関先に食卓の椅子を持ってきて座っていた。

風通しのいい店の入り口で、ナタリアは暑そうに服をつまみ上げ、ばたばたと胸元へ風を送り込んでいる。あまり品のいいしぐさとは

いえないので頭を抱えなくなった。

「あっヴィヴィアン！ 遅かったわね」

ああ、気がつかれた。むしろ気が疲れた。ヴィヴィアンは眉根を寄せ、何も言わずに小さくため息だけついて彼女の横をすり抜けた。家の中に入ってすぐに、淡く輝く魔法陣を描いて室温を下げる魔法をかけた。もちろん、これ以上彼女が人目につく玄関先で品のない行動をしないようにするためだ。

部屋の温度が下がったので外套を脱ぐと、マルグリッタとナタリアの会話が聞こえた。

「マリー！ よく来てくれたわ、ありがとう」

「すっかり若奥様ね、ナタリア」

まったくその通りだ。なぜ他人の家に友達を呼んでおいて、『よく来てくれた』なんて言葉が出てくるのだ。ここはヴィヴィアンの家だというのに。

「ヴィヴィアン！ おかえり」

そう言いながら階段から降りてきたユキノは、ナタリアと談笑するマルグリッタにすぐ気がついた。

朝見かけたときはいつもの足首まである着物だったが、ダンスに備えて彼は足を動かしやすいように短い上衣に着替え、七分丈の股引をはいていた。丈の短い上衣は、例のロングスカートに見えるズボンを着るときに着ていたものだ。

ユキノが隣に来るのを見計らって、ヴィヴィアンはマルグリッタに向き直った。

「紹介する。こいつがユキノⅡサクライ、イリナギから来た俺の弟子だ」

「よろしくお願いします」

ユキノは丁寧な礼をすると、マルグリッタに微笑みかけた。マルグリッタも丁寧にスカートのすそをつまんで礼をする。

「マルグリッタⅡデュバート。お会いできて光栄だわ、ユキノ。ようこそエンカンタリアへ」

「俺のダンスの相手になってくれると聞きました。ありがたいです」
人懐こい笑顔でユキノは礼を言い、再び軽く礼をした。マルグリッタは顔の前で手を振って見せ、知的な顔に和やかな微笑を浮かべた。

「堅苦しくしないでいいのよ。あなたの師匠とは学生時代からの友人なんだから。あなた、踊るのは好きかしら」

「あんまり踊ったことないんだ。特に西洋のは」

「そう、それじゃあ音楽を聴くところから始めましょう。ナタリア、もう始めていいわよね？」

「ロジェとローザがいないわ。呼んでくる」

そう言って駆け出そうとしたナタリアが一瞬躊躇したのに気がついたのか、ユキノが彼らの居場所をナタリアに告げた。

「二階で本を読んでいるはずだよ、ロジェが新しい研究について、意気込んでローザに話していたから」

「もう。そんな難しい話、ローザが退屈するじゃない」

ナタリアは仕方なさそうにぼやきながら軽やかに階段を駆け上がった。その背中を見送り、ヴィヴィアンはソファやテーブルを部屋の隅に避けて広いスペースを作った。ユキノも手伝ってくれたので作業はすぐに終わった。

「マルグリッタ、再生機は要るか」

動かしたソファを壁に完全にくっつけようと押しながら、肩越しに振り返って尋ねる。

「必要ないわ、持ってきたから」

マルグリッタはちらりとこちらを見て微笑むと、スカートのポケットに手を入れて小さな貝殻を取り出した。白い巻貝で、長さはマルグリッタの小指ほどしかない。さほど音質はよくないだろうなと思っていると、ユキノが隣で首をかしげた。

「貝殻？ 何に使うの？」

「この貝の中には、小さく呪文と魔法陣を描いてあるのよ。だからこうしてテーブルにおいて発動の呪文を使ったら、ほら」

マルグリッタはワンフレーズの短い呪文を囁く。次の瞬間、小さな巻貝からゆるやかなワルツが聞こえ始めた。

音量は控えめだが、増幅の呪文を加えれば練習中に聞こえなくなることもないだろう。思ったよりも綺麗な音に驚き、彼女の器用な手先に感心する。

こうして物体を媒体にして魔法を使うとき、何よりも問われるのが呪文や魔法陣の正確さと丁寧さだ。ヴィヴィアンは面倒臭がるので、こうやって永久的に使う物に呪文を書いたりする魔法はあまり好んで使わない。

「すげー……これって、カフェのマスターが使ってる魔法？」

「そうだ。記憶にある音を再び流す装置。もつともマスターの場合は、あの人が頭で思い出してる曲をそのまま流しているんだけどな。マルグリッタの場合、思い出さなくていいように貝殻に曲を縫い付けている。この方が安定するといえはするんだが、縫い付ける時にすさまじい集中力が必要」

解説してやると、マルグリッタは満足げに頷いた。彼女が言いたかったことは全て自分が代弁でいたようだ。

「だから巻貝なの。二枚貝じゃだめなのよ、音楽を溜めておける空間がないとね」

「すごいな、魔法って本当になんでもできる」

「そうよ、だって魔法だもの」

おかしそうに笑いながらユキノに微笑んで見せるマルグリッタの隣で、ヴィヴィアンは白い貝殻に手をかざした。小さく呪文を呟いて音を増幅させると、すぐそばにオーケストラがいて演奏してくれているような臨場感のある音楽が空間を満たした。音を大きくしたのに全く荒さは目立たず、つくづくマルグリッタの器用さに感心する。

ふと顔を上げると、ナタリアが無言で階段を降りてきた。いつものせわしない足音を極力殺したような足さばきで、まっすぐにヴィヴィアンのところまで走ってきて微笑む。

「どうした？」

「ドアが少し開いていて、隙間から二人が見えたのよ」

それでどうしたんだよ、と言いかけて納得する。二人が見えて、思わず微笑むような事態に発展していて、ナタリアは声をかけずに戻ってきたのだろう。

察しのいいユキノもその一言で理解したようで、少しだけ階段の方を見てからすぐに視線を前に戻した。

「始めましょ、マルグリッタ」

「いいのかしら、大事な妹を発明家にとられて」

「いくらお姉ちゃんだからって、妹の恋愛沙汰にまで首を突っ込むほどあたしは図太くないわ」

からかうようなマルグリッタに、ナタリアは微笑み返す。そしてヴィヴィアンの隣にきて優しくその左腕を絡めてくる。

「じゃあ、まずエスコートの仕方から」

隣ではじけるような笑顔を見せるナタリアに、ヴィヴィアンは少しため息をついた。

「あのな。さすがに俺でもエスコートくらいは出来る」

「違うわ、ヴィヴィアン。これはユキノに見せるためよ」

ユキノはきよんとする。ナタリアは彼に向かってやはり満面の笑みを浮かべる。こいつ、実はこの状況を楽しんでいるだけなのではないのか。

第五十三話 レッスンタイム

ナタリアはヴィヴィアンの腕を離さないままでユキノに話しかけた。マルグリッタは優雅に腕を組んでユキノとナタリアの挙動を伺っている。

「ねえユキノ、踊ったことがないのなら女の子をリードしてパーティに行ったこともないわよね」

「うん、そもそもパーティーなんてものはなかったよ。男が伴侶以外の女性に触れるなんてもってのほかだし、人目のあるところで寄り添うのも破廉恥だっていうのが常識だからね」

ヴィヴィアンは思わず渋い顔をしたと思う。なんてストイックな国なのだろう。

彼からしたら、ナタリアの過剰なスキンシップは確実に破廉恥の分類に入るに違いない。ヴィヴィアンだって恋人がいたら人並みにスキンシップを図るだろうが、それすら破廉恥だと思われるのなら何だか居たたまれない。好意を持った異性に触れたいのは自然な欲求だ。

「なるほど、女と腕組んで歩く習慣がないイリナギの人間にわかるようにってとこか？」

「そういうこと。それじゃ始めるわ。マリー、給仕役をおねがい」
「適当なタイミングで声をかけるわね」

音楽が切り替わる。弾むようなテンポの明るいワルツが流れる中、ヴィヴィアンはナタリアをエスコートしてゆったりと室内を歩いた。なるべく姿勢を正し、ナタリアに歩調を合わせ、彼女の表情を時々確認しながら進む。

「どうかしらユキノ。何か思うこと、挙げてみて」

歩きながらナタリアはそういってユキノを見た。その拍子に少し歩調が乱れ、彼女が転びそうになるのをとっさに支える。彼女は小さくありがとうと囁いて体勢を直した。ユキノが感動した様子で見

つめてくるので、居心地が悪くなって思わず眉根を寄せて目をそらす。

「ヴィヴィアンの雰囲気が違う…… 全然面倒臭そうじゃないし、自然だ」

そうきたか。

「……はあ。ダンスの主役は女性だ。男はそれを引き立たせるのが役目。だから面倒くさい。面倒くさいって思ったのを態度に出したら、相手の立場が潰れるからな」

「もう！ 本当は面倒臭いなんて今はナシ！ 楽しみなさいよ」

普段なら面倒くさいと斬り捨てるところだが、今は一応講師としてナタリアと腕を組んでいる。ヴィヴィアンは熱心に聞いているユキノに向かって、少し柔らかい語調で続けた。

「ナタリアもいうように、お互いに楽しまなきゃエスコートする意味がない。半歩先を歩いて、階段では男が先に下りて後から上る。離れすぎてもくつつきすぎてもだめだ」

「さすが師匠」

ユキノは深く頷いた。そんな彼の背後で、マルグリッタは食器を運ぶトレーを探し当てていた。どうやらちゃんと給仕をしてくれるらしい。

「いや、こういう方面に関してはエストルを師匠にしたほうが確実だ」

「でもあんたもずいぶん良くなってわよ、エスコート。今のところ満点だわ」

「これが、会場だと段取りが悪くて呆れられるんだ。ダンスの間は特定のペアと踊る規定はないから、一曲ごとに違う相手から声がかかる。それを切ってひたすら最初の相手と踊るもよし、毎回パートナーを変えてもよしっていう流れだ。それでダンスが終わったあと、俺は毎回ナタリアを見つけられない」

ユキノはくすりと笑った。きっとこれは、彼にも容易に想像できる事態に違いない。しかし、見つけられないとナタリアは本当にし

よげるし、それからへそを曲げる。

「基本的に、ダンスの後も男の子が迎えに行くべきなのよ。続けるわ」

ナタリアが歩き出すので、ヴィヴィアンもそれを支えるようにして歩き出す。歩いていると、マルグリッタが優雅な足取りでトレーを片手にやってくる。ヴィヴィアンとナタリアの近くまでくると、トレーの上にポンと可愛らしい音を立てて二つのシャンパングラスが現れた。ユキノが感嘆の声を上げ、ナタリアが楽しそうに笑い声を立てる。

ヴィヴィアンは給仕にそうするように、目線で礼をしてグラスを取ってナタリアに渡す。自分の分も取ると、小さく礼を口にして再び歩き始めた。

グラスの中の淡い黄色の液体は本当にアルコール入りらしく、ふわりと優雅な香りが漂った。しかし、マルグリッタの良い演出で徐々にその中身は消えていく。

「グラスを取るのまでエスコートしなくていいっていう女の子もいるわね」

「私は飲みたいときに勝手に取るわ」

マルグリッタはそう言いながら、再び歩いてヴィヴィアン側にやってくる。ヴィヴィアンは空になったグラスを返し、ナタリアの分もそっと受け取って返した。彼女の分のグラスをトレーに載せたところ、出現したときと同じようにポンと音を立ててグラスは消える。「女の子の空いている手のほうに給仕がいないときに、一言ことわってからグラスを取ってあげるといいわ。飲み終わったグラスも、女の子がもてあましていたら返してあげて」

「うん、勉強になる」

ユキノは頷いて、それから背後の壁の方をちらりと見た。

「そろそろ入れてあげてもいいんじゃない？ 二人」

困ったように笑いながらユキノが言った。つられてそちらを見ると、かなり離れたところからヴィヴィアンたちを見ているロジェと

ローザの姿があった。

「あら。いつからいたの？」

彼女の声が通常の三割り増しぐらいに楽しそうなのは気のせいではない。ロジェは覗かれていたことに気づいていないのか、いつもどおり彼女に接する。

「音楽が気になって降りてきんだけど…… ユキノが真剣に二人を見ているし、マルグリッタも手がふさがってるみたいで声がかげづらくて」

そう弁明しながら、彼はユキノの隣まで歩いてきた。その後ろを、ローザがちよこちよこについてくる。

「マルグリッタ、久しぶり」

「ローザ、あなた少し雰囲気がかわったわね。髪型かしら」

「最後にあつたのって一月前だったかな」

「それぐらいね」

二人が和やかに会話を始め、ロジェも久しぶりに会うマルグリッタに微笑みかけた。

「マルグリッタもずいぶん雰囲気変わったよ。なんていうか、丸くなった」

とたんに、ナタリアとローザが閉口した。ロジェは自分の失言に気づいていないようで、きょとんとしながらその場にいる人物の顔を順に見渡す。こういうときにフォローを入れるのが上手いユキノだが、デリケートな問題だけに口を挟みかねている様子だ。

「はあ。あなた、失礼ね……」

マルグリッタはロジェに冷たい視線を向ける。ロジェはようやく自分が何を言ったのかに気がついたらしく、あわてて胸の前で手を振って見せる。

そしてそっぽを向くマルグリッタに縋るように、彼女の正面へと走る。目をそらされるとまた走る。まるで犬のようだ。

「いやいや、違う！ 違うよ！ ごめん、体型の話じゃなくて雰囲気。前はもつととげとげしかったよ。何か心境の変化でもあった

」？

「……ふう。ローザ、あなたの苦勞が今ほんの少しだけわかったわ
そう言って、マルグリッタはくすくすと笑い出した。

「あなたに最後に会ったの、卒業式じゃなかったかしら？ 変わり
もするわよ」

「まあ、確かに」

「でもあなたは相変わらずね」

「全く変わってないってことはないだろ？」

「ほら、身長……」

わざとらしく悲しげな表情をつくり、マルグリッタは目を伏せた。
ヴィヴィアンの少し後ろではナタリアが笑いを堪えて震えている。
振動が腕を通して伝わってくる。

ロジェはわなわなと震えながら、ぱっと勢い良くこちらを振り返
った。

「……ヴィヴィアン。マルグリッタがいじめる！」

「天誅」

即答で言い返してやれば、今度はまた勢い良くローザの方に向か
う。

「ローザああ」

「ロジェ、ぜいたく言わないの。私よりは大きいでしょ」

駆け寄るロジェをひらりとかわし、ローザはそう言って微笑んだ。
ロジェは呆けた顔で黙り込むと、次第に満面に笑みを浮かべた。

「……そう！ 俺はそのままの、小さいローザが大好きだ！ ああ、
可愛い！ なんて可愛いんだっ、俺の天使いいい！」

ヴィヴィアンは思わず溜息をついた。ローザの手にかかればロジ
エの憂鬱要因は一瞬にして蒸発するが、そこからが問題だ。どうし
てこうも、恥ずかしい言葉を平気で言えるのだらう。彼はローザを
追いかける前に、なぜローザが逃げ回らなくてはならないのかを考
える必要がある。

案の定、今回もローザは頬を赤くしてユキノの後ろに隠れる。ロ

ジエはユキノを睨みつけて無言でローザをよこせという目をしているが、ユキノは青い大きな目を細めておおらかに笑っている。

「ローザが困ってるよ？」

その一言ではっとして、ロジエは一瞬で真顔に戻る。

「……ごめん、ローザ」

しばらくローザからの返答はなかったが、やがて彼女はユキノの後ろから顔だけひよこっと出して呟いた。

「ロジエ、恥ずかしい人」

予想外。ヴィヴィアンは思わず吹き出したが、ナタリアは同じタイミングで盛大に笑い出した。

「あはははは！」

「は、恥ずかしい人っ!？」

ロジエはへたり込み、頬を染めて髪を掻き回した。

「うわああ大ダメーじ、生きていけない、恥ずかしい人! 人格否定!」

「天誅ね。人格否定なんて大げさな」

マルグリッタも笑いながら、そっとユキノの手を取った。強引に今日の予定を開始するようだ。

「え、わ」

「ナタリア、ローザ、あなたたちも始めたら？」

慌てて姿勢を正すユキノの背中に手をかけ、マルグリッタは彼の腕を自分の背中へと運んだ。ナタリアが腕を引いてきたので、ヴィヴィアンも少し離れたところでダンスの基本姿勢をとる。

「これが基本のポーズよ。あなたの手は肩甲骨の下あたりに持ってきてくれればいいわ。ロジエみたいなのはやりすぎ、あれじゃローザがかわいそうよ」

マルグリッタの声に釣られてロジエとローザのペアを見る。ロジエはローザをがちりホールドし、頬が触れるかと思うような至近距離からローザを見つめていた。ローザは例によって頬を赤らめて俯いている。

「ちえ。なんだよ、マルグリッタの指摘がなかったらもう少しこうしていられたのに」

残念そうに少し距離をとり、ロジェはすっと姿勢を正した。さすが上流階級だ、立ち姿がずいぶん様になっている。彼らを見ていると、ナタリアがぐいっと引っ張ってきた。どうやら彼女をおざなりにしすぎていたようだ。

「ステップは覚えてるかしら。やってみて」

ナタリアに言われて、ワルツの踊れそうなフレーズを待ってヴィヴィアンは足を踏み出してみた。……ほとんど覚えていないことに気がついた。

「あれ。どうだっけ、右から？」

「あんたは左からよ。もう！ エスコートは上手だったからちょっと安心してたのに。初心者ユキノと一緒にじゃない」

「じきに初心者域を脱するだろうがな」

「口じゃなくて足を動かしなさい、また間違って！ 痛っ」

ステップを間違えて彼女の足を踏んづけてしまった。慌てて足をどかして彼女を覗き込む。

「悪い、平気か」

「本番で失敗したら泣くわよ」

そういうナタリアの目の端にはうっすら涙が滲んでいる。

「そりゃ、気合入れないとな」

それからは暫く、彼女と無言で踊っていた。本来は和やかに会話するものだが、何せヴィヴィアンは真剣なのでステップのことしか頭にない。そのうちナタリアがしびれを切らし、声をかけてきたが返事を適当にしていたら怒られた。

「会話しながらゆったり踊るの！ ヴィヴィアン、さっきから姿勢悪いわ」

「気がつかなかった」

「それに、下ばかりみないでちょうだい。上から覗き込まれるの恥ずかしいわ」

「あ」

今はいいとして、本番は胸元の開いたドレスなのだ。こうして下ばかりみながら踊っているのは、彼女に不快感を与えるだろう。それに、自分も落ち着かない。

「でも、その調子よ。感覚は戻ってきたようね」

「なんとか。この調子だったら本番でもいけるな」

「本番までに忘れないかしら？」

「忘れてたら思い出させてくれ」

そんな会話をしながら、だんだん慣れてきて余裕が出てきたのでユキノの方をちらりと見る。彼はマルグリッタに小声で助言をもらいながら、相変わらずきりっとした良い姿勢で踊り続けていた。かなり様になっている。

「やっぱりヴィヴィアンの言った通りね。つい昨日までワルツなんて聞いたこともなかったような子よ。信じられないわ」

ナタリアが驚いたようにそう言った。勿論ワルツは踊ったまま、手を取り合って揺れながらの会話だ。

「あいつ色々筋がよすぎる」

「追い越されちゃうのもすぐかもしれないわよ！」

冗談交じりに言われた言葉を受け流せなかった。まったくその通りだ。競争するのが面倒くさくて、魔道士仲間とも疎遠になったのである。彼らに会えば魔法対決や術の見せ合いなどで無駄にたくさん魔法を使わざるを得ない。

それで磨かれることは磨かれるのだが、ヴィヴィアンは今の地位に甘んじて強さを求めなかった結果なぜか弟子を取らされる羽目になった。ちょっと待ってほしい。

何故そこで、向上心を持って日々魔法の上達に励むほかの魔道士のところにユキノが行かなかったのだろう。それはやはり街で一番強いという地位があるからに違いないのだが、こんなにやる気のない魔道士を見てどうして彼は弟子入りを志願したのだろう。

「あー面倒くせえ！」

思考回路が絡まってきた。突然大声を上げたヴィヴィアンにナタリアが驚き、開きかけた口を止めて固まっている。

「悪い。考え事」

「……時々思うけど、あんたって面倒くさいが口癖の割には面倒ごとを断らないわよね」

「大分前から気づいてただろ。俺はお人よしらしい」

「いいのよそれで。だから面倒臭がって連絡を取らなくても、ちゃんと協力してくれる人脈があるんじゃない」

ちらりとマルグリッタを見る。マルグリッタとユキノはぴったりと息のあった動きでワルツを踊っていた。早くも完璧なスタイルだ。ユキノの飲み込みが早いのも勿論だが、マルグリッタの教え方も上手い。

彼女の方が師匠に向いているのではないかと思ったが、その考えを振り払った。一度受けた依頼や面倒ごとからは、逃げないのがヴィヴィアンのスタンスだ。

「ナタリア、俺うまく踊れてる？」

「今のところ問題ないわ。この調子でリードしてちょうだいね」

「了解」

ヴィヴィアンは微笑を浮かべると、姿勢を正した。終わったら昼食にしよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5213e/>

エンカンタリア

2011年3月18日05時10分発行